山岳



Vol.85/1990



エーデルワイス・マークの

好日山莊。

全日本登山とスキー用品専門店協会加盟

■東京銀座店 東京都中央区銀座3-5-7〒104 ☎03(561)3600・スキーショップ☎03(561)0966 ■大阪店 大阪市北区曾根崎1-2-8〒530 ☎06(364)0933代 ■谷町店 大阪市南区谷町6-10-26〒542 ☎06(364)4206代 ■福岡店 福岡市博多区須崎町1-1〒812 ☎092(281)3440・(291)6211

Щ

岳

一九九〇年



山岳 一九九〇年 目次

ファブラン (六一七二m) 東壁の記録 関	ディラン北稜(七二四二m)高	バギラティI北稜初登頂記会 決	エヴェレスト南東稜(秋季)――タクティクスを中心として	還暦男二人、八千米峰に登るの記中	ロシアの山と探検の本田	一橋大学山岳部の歩み吉沢一郎・望月達夫・山本健一郎	北アルプス南部の石室について	AC晩餐会のメニューに書かれた署名について望	山岳会の自然保護の方向と問題点――環境元年に登山者として考えたことなど関自然保護の諸問題―――山に看るものの立場からのひとつの抗言	える〉
本	橋	津山	沢	島	村	郎・倉知	刈	月	塚平	艺
史		岳		道	俊	知	貞	達	貞]	E
郎 … 93	堅···· 88	会····· 82	健·····79	郎 : : 72	介······60	敬 ···· 53	雄38	夫····· 28	亨 尹 … 15 7	ē

〈編集	『ヒマ	W ・ ウ	寒冷に	会 支部が		追		図 書 紹 介
後記	ラヤ	エフ	よる	告より		悼		齐
編集後記〉	ヒマラヤ山岳誌』ノート(第三回)馬	w・ウェストン年譜その4(大正五年一九一六~昭和十五年一九四○)	寒冷による脳機能障害とその予防法	<u></u>	*	会報『山』追悼文一覧浏 勝郎氏(織内信彦・山本朋三郎・山野井武夫) 田中清兵衛氏(若林啓之助)、小原 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	*	会報『山』図書紹介一覧10 会報『山」図書紹介一覧10 (本本徳夫)、M・ウォード、J・ミレッジ、J・ウエスト『高所医
	場	江井村	沢藤					
	勝	安嘉	あ ず ^克					
	嘉	宣雄宏	み昭 : A 21					
卷末	嘉 :: A 89	宣雄宏 :: A 37	: A	i i 136 129		112		

表紙挿絵 柏 秀樹



自然保護の諸問題

――山に登るものの立場からのひとつの提言―

藤平正夫

自然保護と環境汚染は 近年急速に論議されるようになった問題であり、心情に訴える面も強い。 対象等についての恣意的な使用や解釈が論議の混乱の一因となっているとおもうので、ここ ただ用

ることなく、ひとつの原理でわりきろうとするところに、いかにも無理な感じがしてならないのである。 で簡単に整理しておくほうが、論議を進めるうえで必要であろう。大は地球的規模から身近な鎮守の森までを区別す

身近な自然

国立公園協会理事長大井道夫氏は

優れた自然

地球的規模の自然

の三区分をもちいておられる。こまかくすればキリがないだろうが、すくなくともこの大区分が最少必要な前提で

あろう。

ている。 「環境」は英語で ENVIRONMENT、独語では UMWELT、生物の生活に関与する外界の諸要因を含めていうとなっ 前記の自然をすべて含むが、一般的には地球的規模の自然をいうことが多い。

「保護」と「保全」については、 然保護 いろんな経緯が積み重ねられて、今日では消極的な手段が ――であり、積極的に改善保有する場合には「保全」といわれている。 「保護」—

るかということを理解し、この知識をもちいて自然にさからうことなく自然とともに、われわれがはたらくことを助 「保全とは保護(PROTECTION or PRESERVATION)以上のことを行うものである。保全には自然がいかに作用す

けることが含まれる。」——THE NATURE CONSERVANCY、1966 私のとらえかたはこれで一応焦点が絞りやすくなったとおもうが、論議する視点あるいは哲学が、ほとんどふれら

れていないのが現状である。これもまた混乱の一因であろう。

「保護か開発か」といういいかたが、 よくつかわれているが、こんな単純なわりきりかたでは両者の溝を深めるだ けで、時流にのったほうが優勢という結果しかでてこない。もっと高い次

元、異った次元からの判断、すなわち文化の観点から、そしてそれぞれ固有の文化のなかでの位置付けを忘れている

ようである。

でに会員諸氏はお読みになっておられ、くどいようだが、ふたたび引用する。 わかりやすい事例をあげよう。これは会報「山」に一部引用されたもので、地元新聞紙に寄稿したものである。す まず文化とのかかわりを考えてみよう。文化とは、伝統、生活、習慣と考えていただきたい。

(あすのリゾート) ――平成元・五・三一――

る気にもならなかったが、よく読むと政治と行政もかかわっているようで、一場の笑い話にすますことができなくな 「先日、新聞に立山を夜間照明しようとするプランのあることがのっていた。幼稚きわまりない発想で、まともにと

町村にもいえる。どこかの町がゴルフ場を計画すると、『カモの総だち』よろしくゴルフ場が計画される。十年先の 以前発表された県の大規模リゾート開発案と同じたぐいの発想である。こうした全国同じ金太郎飴的発想は県内市 ておく。

なのである。これは日本経済のなかだけでなく、世界経済全体のなかで考えねばならぬ重大事である。 はこんな思いつきで救えるものではない。世界の先進国はすべて同じことで、工業化社会への急激な構造変化 ンバーの独自性をうたがわざるをえない。また、こうした場合必ずでるのは山村振興である。しかし、 地域の特性をいかす発想のない人がやると、ほかのまねをするしかないのだろう。行政や協議会の Ш 村の過疎化

理が支配していることを忘れてはならない。荒廃した自然とゴースト・タウンが残る愚行をさけねばならぬ。 ん』『第三セクターは許認可をうけるためのかくれみのです』……。もともと水ものの事業である。 先発の大リゾート開発会社の担当課長からきいたことがある。『地元業者はレベルが低すぎるので、 冷酷な資本 利 用

山県民の心と立山のかかわりを的確にしめしている。 皇太子のときに詠まれたお歌が つまでも私たちの心を支えるものである。『立山の空に聳ゆる雄々しさにならえとぞおもう御代の姿も』 川である。立山は富山の人にとっては、思いつきの子供じみた開発のオモチャではない。 とりあえず二つの問題を提起したい。一つは自然と精神のかかわりであり、一つは急速な老齢化である。 故郷(ふるさと)とは、自分をはぐくんでくれた山や川である。校歌でうたい、書き初めに必ず入っていた立山 (戦前・戦中、県下の小学校の校歌のかわりにこの歌が毎朝の朝礼でうたわれた) 故郷のシンボルで

に『自然との共生』へと進んでいるではない 立山を時代おくれ の経済成長至上主義者の手にゆだねてはならない。 か。 フロンや地球温暖化の問題 など、 世界はすで

次に急速な老齢化のことである。これからつかう数字は 『四全総』 にでているものであることを、 初 お

リカ、 本の六十五 カナダ、オーストラリアは現在の日本なみである。ただし老齢化の速度ははるかに遅く、 六十五歳以上は実に四人に一人となる。ドイツ、イギリス、スウェーデンはすでに一五%をこしている。 歳以上の人口構成は一○・三%である。二○○○年には一六・三%、 二〇一五年には 日本は世界最高 匹 「 % の 予想で アメ

均年齢だけに老齢化のスピードも最高である。この予測よりももっと早くなるであろう。

う民宿ネットが発達し、イギリスにはいわゆるアメリカ流のリゾート地はない。スウェーデンは高層建物なし、 大規模リゾートは世界の大リゾート地であるスイス、イタリア、フランス、カナダ、アメリカ、オーストラリアに 西ドイツ、イギリス、北欧は皆無にひとしい。西ドイツはB&B(ベッド・アンド・ブレックファスト)とい 湖沼

リゾート地となってくるのではなかろうか。 とは無関係である。キャビンや改造民家で結構である。こうした環境と文化を組みあわせたものが、これからの真の ているものは、 と森林の間にログ・キャビンがあるだけである。いかにも老齢国にふさわしいものである。 した安価な滞在を楽しめ、自然と共生することにやすらぎをうることではなかろうか。数千万円の会員制リゾート地 スキー、テニス、水泳などを中心とした若者時代は十年で終ることは目にみえている。六十五歳以上の人々の求め いま流行のキンキラキンのリゾート地ではない。し残したこと、やりたかったことをやれ、ゆっくり

もなく飛びついて、悔いを千載に残すことのないよう、じっくりと想を練るべきではないか。」 ハードに金をかけ、大切な自然を切り売りすることはない。ソフトがもっとも必要なのである。 ものに考え

歩くモデルと同じにするのか。県知事や環境庁長官は辞職、首相は頭のさげっぱなしになるだろう。 いくつか捕足しよう。 仮に富士山をライト・アップするとしよう。いうまでもなく恥を世界にさらすことになるだ ろう。日本人の心のシンボルである富士山をコスチューム・ショウの花道を腰をくねらせて

と将来展望を欠き、現実を冷静に客観的にみていない計画が、経済採算としてなりたたぬことに焦点をおいたつもり が、お気付のことだろうが、いわゆる自然保護論はほとんど展開していない。ライト・アップが雷鳥などにあたえる 影響はもちろん大切なことだが、私は文化の問題としてとりあげたつもりである。またリゾートについては、 さけんだ。いいようもない大きな感動にうたれたことをいあわせた人からきいたことがある。ながい引用で恐縮だ 校歌については盲学校の校歌にも立山がはいっている。生徒が立山の頂上で「すばらしい景色だ!!: と異口同音に

「ライト・アップなんかやめさせてくれませんか」「あんなことを黙ってやらせるんですか」である。 この発表前に自宅に会社に見知らぬ人々から電話があり、街のなかで呼びとめられたことがしばしばあった。

である。

公園協会の調査報告書がだされ、そのなかで世界にも貴重な自然でこれ以上の開発は不可との結論であった。 い希求と、それを汚そうとする粗雑な精神に対する怒りであったとおもう。ちなみに立山の大リゾート計画は、 会」のレポートで、大規模リゾートにのりおくれたことは、さいわいであったと結論づけた。 月のある会合で知事が大規模リゾート開発をしないことを断言した。ひきつづき富山経済同友会の なみにライト・アップの電源について室堂のホテルの社長は、 こうした多くの人々からの支持は消極的な意味での自然保護よりも、 一、三日後の議会で、業者から計画をもちこまれたが、県としては認めるつもりはないことを知事が言明した。 当社の電源は絶対使用させないと言明してい 県民としての心のシンボルを守ろうとする強 地域開発委員 本年四 国立 ち

反発の声が表面にでていないだけである。 たいのである。心情的な素朴な保護論はともすれば逆に反発をまねいているのが現実である。ただ時 なにも手柄話をするつもりではない。こうした視点が従来の「開発か保護か」という論議に欠落していたことをい かたや開発至上主義の失敗ははっきりしており、 もはや時代おくれの考え 流におされて

つぎに文明とのかかわりについて 考えてみたい。文明とは文化そのものをも包みこみ、 も原子力も新幹線も含んだものを意味してい すべての社会生活、 飛行機

いに耕作をはじめ農業革命がおきた。密林を切り開き、あふれる河川を治め、 牛 |物としての人類は荒れ放題の大自然のなかでほそぼそと生きつづけてきた。気の遠くなるような年月ののち、 農耕が可能になり、 食料が安定的で多

量にえられるようになって、はじめて人類の生存が確立した。 自然はみずからを破壊するものである。そのなかで人類が生存を主張するには、 自然の改造(一種の破壊であるか

もしれない)がなされねばならなかった。それなくして今日の文明はなりたちえなかった。

国際的問題となっているのは当然である。 期間には不可能であろう。科学はそれほど万能ではない。だがこれらの環境変化の進んでいることは事実で、対策が の問題がクローズ・アップされてきている。これらについて科学的に正確に原因を決定することは、すくなくとも短 最近とくに認識されるようになってきている。温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨、CO2 等々いろいろ環境全体として しかし文明は無制限に発展させてよいものだろうか。ある種の破壊である以上必ずひずみをともなうものであり、

治水が、いま求められているのである。 たしかに治山治水は国家経営の大本である。人類の歴史はまさにそれを立証している。しかし、本当の意味の治山

純なことではない。大気汚染の問題を例にとってみよう。 経済発展とのかかわりは微妙で、クロときめつける論議が往々にしてなされているが、一方的論議ですむような単

らの経済成長がどうしても必要である。 は許されるものではない。また未開発国がエネルギー源として薪炭や質の悪い石炭を使用するのを改善するには、 く、燃料供給は不可能であろうし、地球上の酸素はなくなるという試算もある。といって中国を現状に固定すること 中国十二億人が日本なみの経済成長をすれば、中国の自動車は5億台となる。これは現在の全世界の総数にちか

現実なのである。「開発か保護か」でわりきることの無責任さと非現実性をおもうべきである。 んとうに村おこしになっているのだろうか。経済的に効果のある有効策をなんとかして考えざるをえないのが山村の まり村おこしの成功例として喧伝されている。しかし演劇祭は三六五日のなかの、たった四、五日である。これでほ ないということひとつでも効果的な対策はない。飛越国境の利賀村は最近「国際演劇祭」をもよおして知名度がたか もっと身ぢかな例としては、山村過疎の問題がある。現実には非常に深刻な状況で、四十歳になっても嫁がもらえ 本山岳会はもともと自由な意見を尊重してきている。

会報

「山」五四〇号の松方氏と黒田氏の大正池

13

ての

私たち山に登るものは 自然を愛しながら、 一方では破壊したり、 破壊に手をかしている矛盾した立場にたたされて

いる。

ではなかろうか ることは、かえって解決を長期化させるだけになりがちである。少しずつでも可能なことからやりはじめればよいの 小屋の汚水問題ひとつとりあげても大きな努力を要するだろう。こうしたことは、はじめからパーフェクトをもとめ ある。山に登るものとしては、こうした具体的問題の解決に眼をむけ、その実行にのりだすべきではなかろうか。山 持ちをつちかう機会なのである。すぐれた自然の保護と総合的な保全を適切にコントロールしなければならないので い。これらは一部の登山者の聖域とすべきではなく、多くの人々に共通の感動をあじわってもらい、自然を愛する気 ばらしい 山々、すぐれた自然を紹介すればするほど道が整備され、多くの人々がくるのをこばむことはできな

きるわけでもない。大きな環境問題や直接山登りにかかわらないような問題は、もちろん大きな関心は払うにして たように一方では自然破壊について加担もしている。情緒的心情を理解するにしても、それによってすべてが解決で 日本山岳会としての統 それは原則として会員個々人の考え方や行動にゆだねるべきであろう。 一的見解はきまっていないが、日本山岳会は専門の自然研究会や保護団体でもない。

むべきなのではなかろうか。山の清掃をよびかけ全国的な運動の展開もできるのではなかろうか に登るものの立場にたって山岳会としては、たとえば前述の山小屋や登山道のこと、 山岳環境の美化などに 取 組

たまたまわたしも席上にいたので、あざやかに思いおこすことができる。がんらいそうした論議がわだかま 当山岳会の伝統であり、 それがすぐれた雰囲気をつくってきたのだとおもう。

されたことはないが会員個々の意見としてなんども耳にしている。はじめの部分でふれたように、もっと異った視点 この場合にみられるように現状もまた、山岳会内部において自然保護についていろいろな意見がある。 公式に議論

をまじえる必要を提唱して、混乱した論議を整理し、ともすれば感情的になりがちな状況にブレーキをかけ、冷静か

つ客観的な論議にひきもどしたいのである。

具体的に有効な実行をつみかさねることではなかろうか。 この際、そうした意味でなさねばならぬのは、身近な自然、すぐれた自然の保護、保全を山に登るものの立場から

をおそれるのである。論議をいくらしても山頂には登れない。一歩一歩確実に大地をふみしめてこそ頂上にたどりつ わたしの考え方は現実妥協あるいは問題回避ととられるかもしれないが、わたしは出口のない議論にはまりこむの

もちろんこれらの所論はあくまで一会員としての個人見解であることは、おことわりするまでもない。



山岳会の自然保護の方向と問題点

---環境元年に登山者として考えたことなど-

利害を超えて、環境の危機回避に第一歩を踏み出した。「フロンな キュ月二十九日ロンドンの会議で、先進国と開発途上国は、それぞれの エー九九〇年は地球環境元年と呼ぶのにふさわしい年となった。六 系保

の削減、酸性雨対策、熱帯雨林の復元などエコロジーの諸問題も、また、この成功によって、地球温暖化の原因とされる二酸化炭素とともに、地球の危機回避の両輪をなすものと考えられる。ので、この成功は南北問題解決の前奏曲であって、東西冷戦の終結

どオゾン層破壊物質を二○○○年までに全廃する」ことを決めたも

庁の独立採算制見直し氣運と、知床など国有林十二カ所の森林生態画の休止、(3)白神山地のブナ林保護と青秋林道の建設中止、(4)林野野冬期五輪招致計画の裏岩菅山開発断念、(2)屋久島ロープウェイ計動にも、順風が吹き始めたかに見える。最近の出来事をみても(1)長期決にむかう希望が生まれてきた。

系保護地域指定、などは、その現れといえる。

関

塚

貞

しかし、一方で地域振興、過疎対策の名のもとに、ゴルフ場、ストー場などの開発による山岳および森林破壊が日本中で進められている。日米構造協議で、政府は十年間に四百三十兆円の公共投資をいる。日米構造協議で、政府は十年間に四百三十兆円の公共投資をいる。

て受け継がれてきたものといえよう。

止のための活動、青少年への自然保護教育など対外活動、である。との意味で自然保護委員会の責任は大きい。ところが、大方の会にのための活動、青少年への自然保護はどうあるべきかは、委員会創設以来、永遠のテーマであり、また杓子定規に決められて、動きがとれないようになっても困め、また杓子定規に決められて、動きがとれないようになっても困然保護はどうあるべきかは、委員会創設以来、永遠のテーマである。それは(1会員の自然保護委員会の活動および、その目指す方言ない。ところが、大方の会にのための活動、青少年への自然保護教育など対外活動、である。との意味で自然保護委員会の責任は大きい。ところが、大方の会にのための活動、青少年への自然保護教育など対外活動、である。

である。 (1環境保全に対する世界の流れ、(2尾瀬間いただく意味もあって、(1環境保全に対する世界の流れ、(2尾瀬間いただく意味もあって、(1環境保全に対する世界の流れ、(2尾瀬間いただく意味もあって、(1環境保全に対する世界の流れ、(2尾瀬間いただく意味もあって、(1環境保全に対する世界の流れ、(2尾瀬間

持った。

そこで会員に「山岳会の自然保護の方向」を委員会とともに考えて

いる問題などは断片的な報告だけでは判り難いことも事実である。

「会報」で報告しているが、山岳会の自然保護活動の流れ、抱えて

然保護活動であろう。委員会では、対外活動を中心に、その都度このうち当会会員が委員会に期待するものは、主として対外的な自

員でもある沼田

「山岳」八十三年(一九八八年)に、自然保護協会会長で山岳会会

真氏が「今日の自然保護の諸問題」と題し、

優れ

自然保護の歴史と基本的な問題、

解決の方向については、

史的な経緯については重複を避けながら書いた。た論文を発表している。その論旨に全く同感である。

世界宗教としての自然保護

情が遠のいたとき、世界は改めてエコロジーの危機を考える余裕を 中間半で一周する。宇宙から見る地球は、小さく、か弱 地球を一時間半で一周する。宇宙から見る地球は、小さく、か弱 地球を一時間半で一周する。宇宙から見る地球は、小さく、か弱 世界の人々は、この言葉を聞き、テレビ、映画、写真で宇宙から の地球の姿を見た。そして限られたスペースシップとしての地球号 を実感したに違いない。当然、超大国の政治家たちも見た。そして 世界の人々は、この言葉を聞き、テレビ、映画、写真で宇宙から の地球の姿を見た。そして限られたスペースシップとしての地球号 を実感したに違いない。当然、超大国の政治家たちも見た。そして を実感したに違いない。そして宇宙からみた地球が東西 しさを改めて実感したに違いない。そして宇宙からみた地球が東西 の冷戦を終らせる引き金となったと考えられる。そして核戦争の恐 特が遠のいたとき、世界は改めてエコロジーの危機を考える余裕を

は人間の生活に深く刻みこまれているものであろう。そのクリスマ人は、永い間クリスマスは雪の中で祝ってきた。宗教行事と季節感ている人人以上に深刻に受けとめられた。また中部ヨーロッパの人る。したがってオゾンホールへの恐怖は、恵まれた太陽の下で暮しる。したがってオゾンホールへの恐怖は、恵まれた太陽の形は貴重であ北部および中部ヨーロッパの人人にとって、太陽の光は貴重であ

したがって歴

欧米と比較しても、

日本には環境危機に関する情報は溢

れてい

る

再生紙使用や割箸廃

止運

などがあ

実感に乏しい感じがある。

みは、ヨーロッパが主導しているのも当然のように思える。したとしても不思議ではあるまい。いま世界の環境問題への取り組スに雪がない年が続いたとき、人人はキリスト教のいう終末を予感

災である。 発禁止を打ち出した。 統領はカリフォルニアおよびメキシコ湾における新規海底 年三月アラスカ南岸沖で座礁した大型タンカー「エクソン・バルデ 魃と穀物の不作、 が環境問題を、 ラブを持つ国である。 ィス」による大量の原油流出と、 大きさ、 アメリカの場合、 二隻の大型タンカー事故が引き金となって、 さらに今年一九九〇年のメキシコ湾におけるタンカー火 より深刻に考えるようになったのは一九八八年の早 イェローストーン公園の山火事。 世界で最初に国立公園を指定した国、 昔から環境問題への関心は深い。 アラスカ水域の広汎な汚染と災害 また昨一九八九 ブッシュ大 しかし人人 シェラク 油 田 の開

ネルギーコストの上昇はプラスに作用することとなる。風力発電、超電導などの技術は発展する。環境危機の面でみるとエろう。原油が一気四○%を超えたとき、消エネ技術と、太陽発電やるので、近い将来、かならず三度目の石油価格高騰を招くことになるので、近い将来、かならず三度目の石油価格高騰を招くことになるの政策は、相対的に中東産原油の重要度を引きあげることにな

○億人を突破する、という計算が成り立つという。

「一〇億人以上、そのまま増え続ければ二○五○年にならないうちに一○五十億人以上になっていたといわれ、予測では二○○○年に六十二名。世界の人口は一九七五年に四十一億人だったが一九八七年には環境問題で無視できないのは、人口の増大による自然破壊であ

壊が進むと考えるとき、人類滅亡前に、解決の方向が見つかることは思えない。それにしても、人口増加の過程では、砂漠化や森林破が拡がっていく筈である。人間は飢餓状態でも人口が増え続けると計算上はともかく、人口が増えていく過程で、多くの地域で飢餓

を祈るばかりである。

るという予感を人人が持ち始めているように思える。迎え、二十一世紀には、環境の危機を解決して新しい文明が生まれを求め続けた二十世紀の文明は、エコロジーの危機のなかで終末をともあれ世紀末を迎え、大量の資源を消費しながら、物の豊かさ

P 間 匹敵する世界宗教が生まれてくる氣配は見当たらない。 を迎えようとしているとき、 害を超えて、 人人は いる」といっている。 環 や宗教の違いによる紛争が激化しているように思える。 トインビーは「文明が衰退するとき、偉大な世界宗教が生 境 「自然保護という新しい世界宗教」を信じて、 の危機という人類滅亡につながりかねない 和解にむけて取組むことになるのであろうか……。 いま豊かさを求めて発展してきた文明が終末 キリスト教、 イスラム教、 問題 それぞれ 仏教などに むしろ民族 人口 まれ

える。それでも、日本のことだから方向転換は早いとは思うがなど、エネルギー多消費型の社会は、そのまま進んでいるように見るものの、ビル、個人住宅のオートメーション化、自動車の大型化

自然保護活動のジレンマ

干のやりとりがあって、黒田さんは激怒して退場した。このためも ダムが出来ても本質的に変わらない――と強硬に異議を唱えた。若 ということである。 りで突っ走り、 あって、松方さんは山岳会の与論をまとめるのを諦めて、殆んど独 は周囲から推積物があって、そこに出来た沖積地形だから、 会長が、この計画の阻止を訴えたところ、黒田正夫さんが、 ダムを造る計画がもち上った。その年の年次晩餐会の席上、 要約すると「昭和三十一年に上高地に高さ四十五年のロックフィル 筆者に失礼だがニューアンスや、 自然保護委員の松丸秀夫氏が「上高地ダム」について書いている。 九九〇年六月発行の会報山五四〇号の 国立公園協会などと協力、ダム計画は阻止された」 文章の綾を無視して、その内容を 「自然保護随想」 松方副 欄に、 人工の 上高地

が多い。意見の一致を待っていたのではタイミングを失するという難ということが度度ある。しかも自然保護の問題は急を要することは賛成だが、各論に入ると正反対の意見もあって、取りまとめが困ドベンチュアーの精髄でもある。自然保護の問題は、いまでも総論山岳会は強烈な個性の持ち主の集まりでもあり、この強烈さがア

今後の自然保護活動の一つの方向を示唆するものであるかも知れな員会が抱える問題でもある。この意味で松方さんのとった手段は、上高地ダムをめぐる松方、黒田両氏の齟齬は、現在の自然保護委

こともある

で、歴史に学び将来を見極めて、的確に判断しなければならないりりで突っ走っても、松方さんは日本山岳会を背負わされていたわけの活動が実効の中心であったように思われる」と書いている。ひと園協会との協力もあったが、日本山岳会の名で行なわれた松方さんしかし、松丸さんも随想の最後に「(ダム計画の阻止は)国立公

自然保護教室としての尾瀬

ーダーの責任は重大である。

田岳会と尾瀬との関わりは深い。明治二十二年(一八八九年)平山岳会と尾瀬との関わりは深い。明治二十二年(一九四八年)の巨大ダ物採集旅行で入山。それより二年前の明治三十六年、初めて尾瀬を深い関わりを持った武田久吉は、明治三十八年(一九四八年)の巨大ダ東水電が尾瀬取水権を取得。昭和二十三年(一九四八年)の巨大ダ東水電が尾瀬取水権を取得。昭和二十三年(一九四八年)関原に水力発電ダム計画が発表された。大正十一年(一九〇五年)関原に水力発電ダム計画が発表された。大正十一年(一九八九年)関原に水力発電ダム計画が発表された。大正十一年(一八八九年)関東水電が初めて燧ヶ岳に登る。同じ年に木暮理太郎は初めて尾瀬を野長蔵が初めて燧ヶ岳による強烈な反対運動が展示を開きまた。

る。ともあれ、先人の努力によって尾瀬は水没を免れたが、今日でが、スイスの登山鉄道の例を引いて愚行の中止をアピールしてい尾瀬は国宝的存在」と位置づけ、両計画を痛烈に批判し、松方三郎尾瀬は国宝的存在」と位置づけ、両計画を痛烈に批判し、松方三郎とくに昭和十年十月発行の会報五○号は「富士山ケーブルと尾瀬

となったのも皮肉である。となったのも皮肉である。となった。子孫に残せそうもない「美しい自然」の第一候補が尾瀬となった。子孫に残せそうもない「美しい自然」の第一候補が尾瀬となったのも皮肉である。

ければなるまい 護教室として、 入った人を何人も知っている。山岳会としては、このような自然保 訪れた人人が、 者として言うのだが、尾瀬はやっぱり美しい。 境の昔にかえった尾瀬と、 けれど、同じように人がほとんどいなかった第二次大戦の末期、 まさら言うまでもないが、 かけ 尾瀬の自然のただずまいに感動し、 がえのない尾瀬を守っていくことを基本としな 最近の混雑する尾瀬の両方を知っている 明治、 大正の 秘境の時代は 混雑する中で初めて 自然保護活動に 知らない 秘

では、尾瀬に一年間にどのくらいの人が入山しているのか、環境では、尾瀬に一年間にどのくらいの人が入山しているのか、環境に対しては、尾瀬に一年間にどのくらいの人が入山しているのか、環境では、尾瀬に一年間にどのくらいの人が入山しているのか、環境でが一九八九年の登山シーズンの入山者を調べた数字がある。五月にが一九八九年の登山シーズンの入山者を調べた数字がある。五月にが一番少ないという結果である。

冬期などの入山者を加えても、年間四十七万人前後というのが、環尾瀬入山口は、三カ所以外に御池、富士見峠があるが、この二つと二百十一人。紅葉期は五千四百五十九人というのが最高であった。で、六月四日(日)が一万四千八百二人だった。夏は最高でも八千で、六月四日(日)が一万四千八百二人だった。夏は最高でも八千また一日の入山数が一番多かったのは水芭蕉のシーズンの週末

境庁の推定した入山者数である。

入山者のうち尾瀬域内に宿泊する人は年間十五万人前後と推定されている。尾瀬域内の山小屋は十六軒、容積の合計は二千三百畳でれている。尾瀬域内の山小屋は十六軒、容積の合計は二千三百畳では一応、浄化槽を備えているが、氣温が低いためにバクテリアによは一応、浄化槽を備えているが、氣温が低いためにバクテリアによる分解と浄化が十分に働かないまま地中に浸透、結果的にはたれ流る分解と浄化が十分に働かないまま地で、海道が、海域内の山小屋は十六軒、容積の合計は二千三百畳でれている。尾瀬域内に宿泊する人は年間十五万人前後と推定されている。

二万本分の汚水が、沼や湿原に流れ込む計算になる。十立方は前後だという。年間十五万人の宿泊を見込むと、ドラム缶また、ある山小屋の調査によると、雑排水の量は、客一人当り三

外に移すことが望ましい、 水域内の宿泊施設とビジターセンターは、 別保護地区を拡大する、 を禁止する、(5)湿原上に敷設されている木道を外縁部に移す、 与えないよう対策を講ずる、 水、 倉、 人二千円、小人千円程度を入山者が納入する、 内容は「当面の緊急対策」として、(1)定期路線バス以外の車は、 懇話会」が環境庁に対し、 昨一九八九年五月、 大清水、 汚物を域外に排除するため、最大の努力をし、 御池、津奈木、富士見下で止める、 大石武一氏を代表世話人とする など。また「近い将来の対策」として、 保護対策について提言を行なっ などである。 (4)集水域内のキャンプ、スキーツアー できるだけ早い機会に域 (3)集水域に生ずる汚 (2)保全料として大 生態系に影響を 「尾瀬を守る 集 戸

山料に対しては勤労者山岳連盟が反対を表明した。山岳会の自然保環境庁も、これを受けて入山料徴収構想を打ち出した。しかし入

金で浄化施設を整備し、 反対意見があって承認はむずかしい。妥協案として「早急に公的資 護委員会では、 入山料に対して賛成するものがやや多いが、 維持費は受益者負担の原則で有料トイレ 強硬な

れている。湿原の外と内では、自然にふれる感動の違いが大きすぎ ー以外は禁止の必要はない、 ないまま融雪として下流に流出するので、観光業者による団体ツア 議が多い。4は、冬期、屎尿は分解せず、したがって栄養分になら スキーツアー禁止と5の木道の移動および 化」という構想で固まりつつある。このほかでは、懇話会提言の(4) (5)は、いまの木道の下の湿原は破壊さ 「近い将来の対策」に異

とが基本でなければなるまい。 要するに、観光地化している尾瀬を、本来の山行の尾瀬に戻すこ

呼びそうである。

上高地の公衆トイレは有料化を検討中といわれている。今後論議を

小屋が尾瀬保護に果す役割り、を忘れている、などが理由である。 る。自然保護教室としての価値が落ちる。近い将来の問題では、山

転用できる道路がはりめぐらされていることを忘れてはなるまい。 ム計画が浮上することがないとは言えまい。尾瀬の周辺には御池、 す氣配はない。近い将来、再びエネルギー危機が到来して、巨大ダ 建設計画が消えてしまったわけではない。東京電力は水利権を手離 ま尾瀬はオーバーユースによる汚染問題でゆれているが、ダム 鳩待峠、奥鬼怒スーパー林道など、いつでもダム工事用に

小屋の屎尿、

どによる発電設備をそなえたハイテク小屋が、山岳会科学研究委員 アルプスの穂高岳山荘や丹沢の尊仏山荘など、風力、太陽光な

> の屎尿・雑排水の処理となると、これからの問題であって、 会のT教授らの協力もあって、各所に増えつつある。しかし山 小屋

ほとんどされていないといわざるを得ない。

屋、 下旬以降の、それぞれ二~三週間に、やや問題があるようだ。また 初旬までであるが、低温で浄化効率の悪い五月中旬までと十月中~ 研究所も同じ方式である。使用期間は山開きの四月下旬から十一月 をはじめ多くの山小屋の問題である。 い。交通網の発達で登り易くなり、登山人口の増えた南北アルプス 山小屋の屎尿・雑排水による汚染問題は、 ホテルは浄化槽式の水洗トイレである。 だけではない。例えば上高地では、河童橋から大正池までの 山岳会が所有する山 尾瀬だけの問題ではな

穂高岳山荘で「便壷にビニール袋をいれて、一杯になったら取り出 ユースによるタレ流しが問題となりそうに思える。ユニークなのは 北アルプスの山小屋は、ほとんどが水源地近くにあり、 オーバ 1

し、天日に干して水分を蒸発させ、乾燥したら燃やす」という。

ないとしても、屎尿はともかく、生活雑排水まで浄化しているとこ のではないか。尾瀬ヶ原のように貧栄養に保つ必要のある小屋は少 式で処理している」などが、今後の屎尿処理のモデルケースとなる そのほかでは、千畳敷カールの小屋は「石油バーナーで燃やす方

ンプ場であろう。有料トイレを増設しても、 山小屋の屎尿処理以上に問題なのが、穂高の涸沢などの大型キャ 利用してくれなければ

今後の検討課題であろう。

ろはないようである。

費をふくめて誰が負担することになるのであろうか。 汚染は拡がるし、無料で浄化装置つきのトイレを設置しても、 維持

を出す小屋まで出てきた。これでは山の浄化は遠のくばかりであ 沢になって、北アルプスでは展望台のようなレストランでステーキ ターで下界へ下ろす方式が通常のようである。登山は、いよいよ贅 廃棄物といえば、空缶などの燃えないゴミは、つぶしてヘリコプ

長野冬期五輪、岩菅開発断念の教訓

山地区の新規開発を断念、既存コースを改修して実行することを正 記念体育会館で会合、 日本山岳会、 長野冬期五輪招致委員会は一九九〇年五月十一日、東京渋谷の岸 自然保護協会、 滑降、 男子用コースは白馬村・八方尾根のパ スーパー大回転コースについて、 生態学会など多くの団 体が、 自然保 岩菅

護の立場から反対したため、 ノラマコースを一部改修し、女子は志賀高原の東館山とすることを

リンピック精神に反する。既設コースで実施していただきたい」 る地区である。この貴重な自然を破壊するスキーコースの新設はオ いうものであった。(要望書の全文は会報五三五号に掲載 JOC会長、招致委員会会長(長野県知事)あてに出されてお その内容は 岳会の要望は一九八九年十一月九日付で文部大臣、 「岩菅山地区は志賀高原で僅かに自然が残されてい 環境庁長 Ł

> とであった。一九七二年の札幌五輪の自然保護について、 い。以下その経緯を簡単に書く。 会は故伊藤秀五郎氏(名誉会員)の活動に感謝しなければならな における恵庭岳復元までの経緯を知っていれば、当然予想できたこ 以上にわたる努力は無駄になったわけだが、 岩菅山、 裏岩菅山のスキーコース開設断念で、 当事者が札幌冬期五輪 招致委員会の二年 日本山岳

幌の五輪当事者は自然保護への配慮は考えてもいなかった。 転した札幌の惠庭岳コースも支笏洞爺国立公園内にある。 い」とする自然保護団体の反対であったことが判った。ところが逆 ンフ国立公園の美しい自然が五輪開催で破壊されるのは好ましくな 転勝利といわれた。あとになって逆転の原因は「子孫に残すべきバ OC総会で決定した。それまで最有力だったバンフから札幌への逆 一九七二年の冬期五輪の札幌開催は、一九六六年四月のローマⅠ

理事の立場で、同志とともに、恵庭岳復元のために運動した。 ンサスを得ることをあきらめ、支部長を辞任。 後の惠庭岳復元を考えた当時の伊藤北海道支部長は、支部のコンセ 海道支部には当然五輪関係者も在籍していたと思われる。 北海道は五輪招致に湧き、自然保護の声は小さかった。 北海道自然保護協会 山岳会北 五輪終了

が IOC元会長のお陰である。 がもどっているのは、故伊藤秀五郎氏と、その同志、ブランデージ 深く、JOCに善処を要望した。 幸いなことに当時のIOC会長ブランデージ氏は自然保護に理解 今日、 曲りなりにも恵庭岳に緑

しながら「貴重な自然を破壊したことを残念に思う」と述べたと伝 ブランデージ会長は、札幌大会の挨拶で「大成功だった」と称替

は山麓で草鞋を昇降ともに更めさせて上下の土砂の混るのを防いだ いけないし、下界のものも長く山へ置いてもいけない。 く下界に下すまいという考えがあった。 山のものを下界へ下すのは 山によって

ところもあるくらいである

自然破壊を伴う計画をたててはならない。 年の国体登山も続けなければならないものならば、 に特別地区に指定すべきだ。第三は、オリンピックだけでなく、毎 別保護地区の志賀山と同じような自然が残っているのだから、 ない。第二は、岩菅山は稜線部を除いて普通地区となっている。特 の教訓は三つある。第一は、オリンピックは自然を破壊してはなら コース新設など 早急

ければならないとはおそろしいことだ」と語っているが、長野五輪 本で冬期オリンピックを招致するたびに、新しいコースを開設しな えられる。

長野五輪の岩菅山開発について山岳会の山田会長も「日

出来るはずである。 で、山小屋の造り方にしても、 変だ。また山を敬う念さえあれば、食事や焚火の跡片付けは当然 草木は山神の衣である。みだりに拉ちさって山を赤裸裸にしては大 校などで、高山植物の採集を奨勵するのも賛成できない。 てたなどというのは言語道断で、学術の進歩に害となる。 る。某青年団のごとく白馬山で植物を採り、 になりすまして、山の草木岩石を手当り次第採集するのは滑稽であ ◇近頃は、日ごろ自然科学に興味を持たない者までも、 私は山がこれ以上荒れないために「山岳保護」 設備の仕方が山を大切にするように 重荷に耐えず帰途に棄 山の岩石 研究家 中学

岳会の自然保護の流 n

梅澤氏自身が書いているもので、見出しは「机上談山」とつつまし された『山岳』第十三年第三号の雑報欄にある。いまなら巻頭言に したいような内容だが、三九六頁から四〇二頁まで七頁にわたって 記録が残っている。その記録は大正八年(一九一九年)十月に発行 に横浜の山岳愛好者に「山岳保護」を訴える素晴らしい講演をした 内容を要約すると、 岳会創立の発起人の一人で、早逝した梅澤親光氏が、大正八年

を訴えたい。

が、 ることを教えてくれているように思う。 切にする造作など一顧だにされていない。この講演は改めて登山 今日、梅澤氏の危惧したとおり、山は荒れ山小屋の造作も山を大 山を敬いながら登るという、 祖先の知恵に多くを学ぶ必要があ

者が多かったことの裏返しでもあったであろう。 たわれていることからも想像できる。そのことはまた、 る。その証拠は『山岳』 何 ところで会報が発行されるようになった昭和初期、 .時も「山岳保護」を念頭に置いて登山をしていたように思われ 山岳会の創立以来、 明治、 のいたるところに「山岳保護」 大正期の会員は、 梅澤氏だけでなく、 戦後の復 山を荒らす の思想がう

祖先には山を崇み、敬い、山中の一木一草は勿論、砂一粒も、故な

この砂もどりの話は、富士以外に諸方の山にもある。我我の祖先は

中の砂一粒でも山を去るのを惜しむためだと考えていた。

かしその砂は一夜のうちに全部もとに帰るという言い伝えがある。 ◇富士登山者が、砂走を降りる際に多少の砂が伴われて落ちる。

L

Ш

霊が山

方さん、伊藤秀五郎氏の例のように、個人としての活動が中心であ 士山ケー って、またそれを誇るような人人でなかったことによるように思 高度成長期の、 ブルと尾 瀬発電計画反対特集号」は別格として、 自然保護の記録は多くない。会報五○号の 前述の松

能 ブルと連峰スカイラインまで)と題して書いている。 護委員長だった渡辺公平氏が「日本山岳と自然保護」(富士山 た。その悪戦苦闘ぶりは、とくに『山岳』 ムの計画が相次いで、 の時代であった。各所にスカイライン、縦貫道路、 戦後の復 興期から高度成長期にかけては、 山岳会としても応接にいとまないほどであっ 六十九年に当時、 経済優先、 、ケーブル、ダ 地域 振興万 自然保 ケー

画

その中には、

富士山ケーブルから、屋久杉の保護、

黒部川

発電

中

大雪山縦貫道路、

連峰スカイラインなどにふれている

が特筆されよう。委員の構成メンバーがすごい。 長として、 公園部長などに提出された。さらに翌年の二月には松方会長を委員 穂高ロープウェイに対する反対」が決議され、 が、とくに昭和三十八年十月に上高地で開かれた支部長会議で「西 初めて自然保護委員会が組織されたことにふれているの 要望書が厚生省国立

委員長 松方三郎

武田久吉 村井米子 神谷恭 足立 武 源 藤島敏男 郎 他各支部 千家哲麿 日高信六郎 福 井 江吉 深田久弥 渡辺公 H

15 ーでも反対は通らなかったようにみえる。 しかし、 西穂高ロープウェイは、現在できている。 しかし会報二四三号で この豪華メン

> 点を上高地から見えないところまで下げるように運動 になりそうだ。このロープウェイ反対運動は、村井委員が中心とな えている。その狙いは成功したというわけである。 って活動していたようで、全面反対は無理とみて、 故村井米子氏が書いているのをみると、 半分成功だったということ ロープウェイ終 の方向を切替

パー も、その活動があってのこととも考えられよう。 るわけであって、大滝山車道計画が、 委員とコンビを組んで運動するなど、山岳会もあじなことをして と、松本市の旧家出身の故折井健一氏(当時は常務理事)が、村井 の悪戦苦闘ぶりがうかがえる。そのなかで、例えば上高地の問題 山地の横断道 までの車道計画、 (2)富士山の山梨、静岡の各五合目から頂上までの地下ケー 昭和四十年代当時の山岳関係開発計画をみると、 仙人平 (3)西穂高ロー -林道、 (仙人岱?) までのケーブルと睡蓮沼までの 7連峰スカイライン、 路計画、 (5) 立山 プウェイ、 などが目白押しに並んでおり、 黒四ダム、大町連絡ルート、 4松本~大滝山稜線~ (8)大雪、 上高地まで入れなかったの 日高、 知床など北海道 徳本峠~上 (1) 自然保護運動 八甲 (6) 車 道開設 ブル計 ·田大岳 高地 ス

が、 が、 く就任している。 公平氏ら副会長経験者が、委員も後に名誉会員になる長老たちが多 い。杉浦担当理事の後任は加藤泰安氏だった。 杉浦燿子自然保護担当理事、 松方会長を委員長とする自然保護委員会に続いて、 村井氏以後は担 その苦闘の時代を長老たちが頑張っていたわけである。 高度成長時代は、 一当評議員という制度がなくなったの 村井米子 自然保護の苦難時代であ 担当評議員が就任して 歴代委員長も故渡辺 昭 和 四 一十年に な る

回目を迎えたが、 る。 П 開い 全国集会は、 第一回は一九七六年 ている自然保護全国集会は、一九九〇年で十五 当時の渡辺公平委員長が、 (昭和五十一年)に上高地で 担当理事

然保護への関心の高さを示した。岳沢谷の清掃では、 熊本支部 登山隊の隊長や支部長となる中堅会員が多数参加して、 回大会は百人近い大集会となり、後に会長となるS氏や、 坂一郎氏ら十数人とともに、 に続けられたが、とくに第二回大会は、三田幸夫名誉会員が、 全国集会は、第九回まで毎年、 ぶ三角形内をクリーンエリア」とする穂高宣言が出された。 組に伴う第一 に自然保護専門委員を委嘱する現在の仕組みに改組した。 員会に改組、 のY氏とはかつて、委員会活性化のため、若手委員を中心とする委 のコル近くまで出かけて、大きなゴミ袋を担いで下りてきた のK氏ら若手会員の姿が、 同時に従来、 回上高地大会では 支部長が委員になっていたのを、 徳本峠を越えて参加された。この第二 岳沢谷を中心にゴミ蒐集作業ととも 「前穂高、 いまでも印象に残っている。 岳沢谷、 天狗のコルを結 ブッシュの中 山岳会の自 ヒマラヤ 上高地 この改 各支部 故金

きた京都の にまで拡げた越後支部の猪俣信一氏」「猪俣氏を陰で支えた斎藤平 文二氏」「新潟ゴミ会議を主宰し、やがてゴミ持ち帰りを全国組織 い。「白神、 人で記憶に残る支部会員を思い出すままにあげてご冥福を祈りた 「のU氏とともに支援していただいた野口秋人氏」らである。 前越後支部長」「毎年知床でキャンプを開設し保護を訴え続けて 在でも支部自然保護委員には、熱心な会員が多いが、ここに故 吉村 青秋林道、 健次郎 氏 森吉山開発反対で奮闘した秋田支部の福 「第十二回 全国 集会の別 府開催を現支部 合 田

長

◇リゾート法と観光開

地対策、 ことにならなければよいと思う。 来、リゾートが欧米なみの長期滞在型にならないとも限らない。 長期滞在型計画なら大丈夫だろうが、 際競争力がない計画が多いのも問題だ。 ような計画が多い。二~三泊で数十万円などというものもある。 ならばマリーン施設、 1 ゾート計画は、若者、 発計画が多すぎて、過当競争による共倒れが心配される。 計画が多い。山ならばゴルフ場、スキー場、 1 環境問題への関心が高まるなかで、 開発計画が出されている。 地方振興は必要なことであろうが、 それに豪華ホテルをセットにした金太郎飴 壮年者を対象とした短期滞在型の高級リ 都市への人口集中を防ぐための過疎 倒産して自然破壊だけが残る 日本中のいたるところでリ 高齢化社会を見通した安 同じようなリ テニスコート、 ゾート まの

大な利潤を生むという現状が一 でも規制がない点であろう。 て、 番 ゴルフ場の経営維持は難しいが、 の問題は、ゴルフ場の建設計画が目白押しで、 高額の会員権が財テクの対 番の問題であろう。 建設して会員権を売れ Ш 象となっ 間の水源

◇屋久島ケーブル問題と登山者のモラル

各支部は 久島の縄文杉ケーブル 期につかみ、 などで問題が起きれば協力して活動している。 地方の自然保護問題は、 致して自然 致して反対した場合、 保護活動に熱心で、 計画の中 その他方の山岳会支部が的確な情報を早 止は、 成果があがることが多 典型的な例となった。 祖 母、 屋久島ケー 傾の 原生 ブルで 九州

再生はピンチだとい

一百

五億膳。

国産六〇%、

輸入四〇%の割合いだが、

輸入品の安値

は、 いるとき、 惨澹たるありさまである。 は心ない登山者によって、樹皮をはがされ、名前を刻まれるなど、 環境庁も強い態度で臨んでくれたので中止となったが、 登山者のモラルも問題というべきだ。 登山そのものが自然の破壊につながって 縄文杉

樺、

シナなど、

輸入品はポプラ、松、

カバ、

ゴムなどだが、

攻勢が激しく逆転しそうだという。一番安い割箸は国産は松、

◇双六谷と黒部 双六谷は北陸電力が水利権を持ってい 剱大滝を保護区域

る。

黒部と剱大滝は関西電

動

思える 剱大滝などの特別保護地区への編入」を要望する必要がありそうに 流地域の特別保護地区への編入を要望しているが、さらに されている。 れて当然の水源部分が、 力が水利権を持っている。このため本来なら特別保護地区に編入さ 山岳会も富山支部と岐阜支部の協力を得て、双六谷源 いずれも不自然な線引きで保護地区から外 「黒部、

◇再 1生紙使用と割箸運動につい T

るのがチリ紙交換などの故紙回収業者だ。ところが故紙相場が下っ て一日中走りまわっても五千円になるか、どうかで廃業するものが で資源のリサイクル運動がさかんだ。この紙の再生を陰で支えてい プだったという。 一九八八年の日本の故紙再生比率は四○%を上回って世界でトッ 最近は地方官庁などもコピーに再生紙を使うなど

紙の使用で世界一を自慢しようではありませんか……。 くって、 政府も故紙相場が下ったときは市場調整金でも支出する制度をつ 箸運 資源保護に協力する姿勢を示してもらいたい。そして再生 動は複雑である。 林野庁の推定では割箸の年間使用 料は約

> よると「建築資材やパルプにむかない下級材や廃材を使って ョン」などは濡れ衣だという。 資源の浪費は誤解だ」という。 熱帯雨林を消滅させる「箸コネクシ

らいたい。職人の伝統技術を残すためにも、 げ)、夫婦利久という両端を細めに削った高級割箸だけは残しても りで出る杉やひのきの廃材を利用した手造りの箸、 箸の使用量も大幅に減少しよう。しかし昔からあるおけや、たる作 ◇森林保護の提言と林野庁の変身 日本文化の一つであって、 の輸入禁止ぐらいは打ち出したほうがよいかも知れない。箸持参運 を推進するむきも、 それでも「李下に冠を正さず」という諺もあることだから、 美しい携帯箸など文化にまで高まれば、 資源の無駄使いではないからである。 また、 これらの割箸は 天削 (てんそ

た。(会報「山」五一二号に全文を掲 独立採算制の廃止、 時は白神、 護全国集会を開き、 護全国集会でまとめられた「森林保護への提言」となって 出す必要を認めた。 九八六年十月、 知床などの自然林伐採も問題となっており、 祖母、 東九州支部の協力を得て別府で第十二 これが翌 国有林の権限の一本化など抜本的な改革を打ち 傾山系の自然林伐採の非道さを見た。 一九八七年十月東京で開かれた自然保 林野行政 一回自然 保

て森林保護政策を打ち出す必要を認めたようだ。そして一九八九年 身してきた。とくに最近の環境問題に対する関心の高まりを反映 野庁も知床伐採の強行に対する世論の反発に驚き、 少しずつ 25

四 月に林野庁長官通達として次の十二地域が 「森林生態系保護 地

(4)域」に指定され、 葛根田川・玉川源流部 (1)知床横断道路周辺以東の半島部 (7)白山周辺 細部をつめることになった。 (8)大台ヶ原周辺 (5)利根川源流部、 (2)白神山 9 石鎚山周辺 燧ヶ岳周辺 地 (3)飯豊山 (6)大井川 周辺

源流部

傾山周辺

(11)屋久島、

永田岳・宮之浦岳・黒味岳周辺

(12) 西表島、 (10)祖母山

浦内川

上流部

は、 しい思考をする人たちが育っていることも含め、林野行政は前進し 検討が続けられ、 つつあるといえよう。 この森林生態系保護地域は、さらに設定地域の細部や面積などの 指定範囲や面積が狭いなどの不満が残っているが、林野庁に新 保存地区、 保全利用地区などが固まった。 一九九〇年四月に(1)(2)(5)(6)(7)(9)(1)の七地域の総面 それぞれの地区に

載を避けた。自然保護で活躍中の現役は多くて掲載しきれないため (註) 本項では三田幸夫名誉会員を別格として、 故人以外は実名掲

海外登山の汚染と国際協力

排せつ物が、 態だった。チョモランマは、 登頂したという。昨一九八九年も、ほとんど同じようなラッシュ状 ネパール側から百二十人が頂上を目指し、そのうち四十二人が 九九〇年プレモンスーン、チョモランマには中国側から四十五 大変な量になっている。また過去の百数十隊が残して いまや登頂者たちが落していくゴミや

> 年間数万人を下らない人々がヒマラヤ地区に入ってくる。 いる。それに登山者だけでなく、 Vi ったボンベ、空缶などのゴミ類も厖大で、環境悪化が心配され ネパール側のトレッ カーだけでも

燃料も、 な入山許可をするのも、汚染を加速させている。ネパールの住民の 人数隊だけならともかく、外貨がほしいから、ラッシュになるよう マキだけでも大変だ。 ネパール政府も中国政府も、 昔のようにヤクの糞というわけにはいかなくなっている。 昔のように春、 秋各一隊、 それも小

いる。 麓の緑を回復させるため、植林する」ことを提唱していると報じて 年間の閉鎖と閉鎖中のヒマラヤ地区の清掃、 新聞によればヒラリー卿は「(エベレストまたはヒマラヤ?) マキの採集で失った山 五

マキ採集で山麓の緑も失われるばかりだ。

になる。 ドベンチュア・トラストの主要議題も、 る。一九九一年秋に日本で開催することに決まったヒマラヤン・ア 失業対策が問題だが、日本の都市と過疎地の対立の 外貨収入を観光と登山にたよっているネパ ヒマラヤの環境改善が中心 ルル 政 府やシェルパの 世界版でも

提案をしたらどうだろう。 燃料は石油、 うから「小規模遠征隊を中心に、 面からみても、 0) 日本も国際協力による清掃隊の組織と、 雇用による大清掃事業と植林を提唱する。また、 ガス類に限定、 今後は大規模遠征隊を送るような時代ではなかろ 1 レッ シェルパ、ポーターの分も含めて カー隊も同じとする」ぐらいの 多くのシェ 環境汚染防止 ル ポータ

0 1

う。 、使用も禁止するぐらいの措置が必要となってきたように思採集も、使用も禁止するぐらいの措置が必要となってきたように取りはパール国内でケロシンやガス・ボンベを手当てできるように取りはがール国内でケロシンやガス・ボンベを手当てできるように取りはずい、インドとの通商条約も復活したようだし、トレッカーもネ

しのつかない失敗をすることもありうる。心すべきことである。保護に対する考え方に大きな差があることを理解しないと、とり返いずれにしても、国際協力では、宗教、文化の違いによって自然



AC晩餐会のメニューに書かれた署名について

望月達

夫

らしい、且つ貴重なものである。

学々たる登山家二十余名の署名があり、現在振り返るとまことに珍葉が、本会へ寄贈された。それにはAC会員で当時のイギリスの来が、本会へ寄贈された。それにはAC会員で当時のイギリスの先ごろ関西在住の古い会員、富田健一さんから、約七十年前にア

にそれを試みることとした。 はその適任者とは毫も思わないが、自分なり説の依頼を受けた。私はその適任者とは毫も思わないが、自分なりの人がどういう人物であったかを解明する必要があるため、解読解手続き中のようだが、何はさておいても、そこに書かれた署名とそれを試みることとした。

ーナル』(以下AJと略す)によってその年代の会務報告を調べるであることが一目瞭然としている。そこで早速『アルパイン・ジャ日附は一九一九年五月六日、場所は Oddenino's Imperial Restaurant とすこの晩餐会から説明しなくてはなるまい。メニューによると

毎月一回ほぼ決まった曜日に行なわれていて、冬季は午後八時半

その頃 (一九一八一二)年位の間を調べたが

また会員集会は、

Mex BW Koundy IP taner (President AG (land A marelonal. a. L. Mumm. g. Withon Yours. Godfrey a. Solly Felix Schuster Lydney Spenar an times in Bartles 7. r. / Xude Hockbarn, Stort Rander. Walled Leaf Just Pavage Uped . J. Topham.

Moore (1841-1887) の私家版少部数の The Alps in 1864 を、

偶々決算報告が承認された集会でもあったから、晩餐会が催されたれていたかどうかは、何も記録がないから不明である。この日はあった。ただし、集会のあとで、五月六日と同様な晩餐会が毎回もあった。ただし、集会のあとで、五月六日と同様な晩餐会が毎回もあった。ただし、集会のあとで、五月六日と同様な晩餐会が毎回もあった。ただし、集会の内容は、会員や著名なガ夏季は午後九時に開始されている。集会の内容は、会員や著名なガ夏季は午後九時に開始されている。集会の内容は、会員や著名なガ

ものであろうか。

ギリスの受けた影響も少なくなかった筈だが、さすがこれでともなずリスの受けた影響も少なくなかった筈だが、さすがこれでいて、二〇〇名以上の会員とゲストが出席した記録別に明記されていて、二〇〇名以上の会員とゲストが出席した記録別に明記されていて、二〇〇名以上の会員とゲストが出席した記録別に明記されていて、二〇〇名以上の会員とゲストが出席した記録は、通常は十二月に開催されるアニュアル・ディナーの記事は

自若としていたさまが窺われる。
ると、戦争中から引続いて毎月一回の会員集会を開いていて、泰然おリスの受けた影響も少なくなかった筈だが、さすがにACともなギリスの受けた影響も少なくなかった筈だが、さすがにACともなー九一九年といえば、第一次世界大戦が終結した直後であり、イ

らとしよう。それでは二十余名の署名のあるメニューから解読解説を始めるこ

最初の署名は Alex. B. W. Kennedy (Alexander Blackie——) 最初の署名は Alex. B. W. Kennedy (Alexander Blackie——) 最初の署名は Alex. B. W. Kennedy (Alexander Blackie——)

ヶ年を費やし、四百数十頁の大著として改版したことで知られていっ年を費やし、四百数十頁の大著として改版したことで知られている。それがムーアの The Alps in 1864, A private journal by A. W. Moore. Edited by Alex. B. W. Kennedy (Edinburgh, 1902) である。Sir の称号をもつ。

上ている。なかでも、一八九三年八月にプレンヴァ氷河からエギーしている。なかでも、一八九三年八月にプレンヴァ氷河からエギーしている。なかでも、十二代会長のHorace Walker に似ている。Alpine Club Register (以下ACRと略す) ■に八頁に亘ってアルプスでの足跡が記されているように、欧州アルプスは隈なく登り尽くれの足跡が記されているように、欧州アルプスは隈なく登り尽くしている。なかでも、一八九三年八月にプレンヴァ氷河からエギーしている。なかでも、一八九三年八月にプレンヴァ氷河からエギーしている。なかでも、一八九三年八月にプレンヴァ氷河からエギーしている。なかでも、一八九三年八月にプレンヴァ氷河からエギーしている。なかでも、一八九三年八月にプレンヴァ氷河からエギーしている。なかでも、一八九三年八月にプレンヴァ氷河からエギーしている。なかでも、一八九三年八月にプレンヴァ氷河からエギー

ACでの経歴は一九〇九―一一年副会長。一九一七―一九年会長。更に一九〇九―一九年は George Yeld(一九二〇年名誉会員)長。更に一九〇九―一九年は George Yeld(一九二〇年名誉会員)

トによる初登攀後僅か十一日目)は永く記憶されている。

ールマイユールを経てモンブランに達した記録(P・ギュスフェルユ・ブランシュ・ドゥ・プトレイに登攀し、モンブラン・ドゥ・ク

名誉会員)の書いたものに次のような興味のある叙述があったこと記事のなかに多分 Assis. Secretary の T. S. Blakeney(一九六九年私が個人的に思い出すことは、曽て十年位前であろうか、AJの

D' Oliver Williamson (d son of the Prof. williams in of Universe! Collen London) rend a paper on ascents of the Hotherstorn 1- the Steekneder from the two north summets of the "nadel frat" in the Sand Grat of which the Dom + the Taschhorn are the chief summits -(all on the East side of the Zermatt Joseph more

である。

メイスンが後年著した名著『ヒマラヤ』を見ると、メイスン自身招いた。偵察遠征であるから工峰周辺の地形図作製も重要な仕事の一いた。偵察遠征であるから工峰周辺の地形図作製も重要な仕事の一いた。偵察遠征であるから工峰周辺の地形図作製も重要な仕事の一いた。信察遠征であるから工峰周辺の地形図作製も重要な仕事の一いた。信察遠征であるから工峰周辺の地形図作製も重要な仕事の一いた。信察遠征であるから工峰周辺の地形図作製も重要な仕事の一いた。信察遠征であるから工峰間辺の地形図作製も重要な仕事の一いた。信察遠征であるから選出で、そのになった。 メイスンが後年著した名著『ヒマラヤ』を見ると、メイスン自身招いた。 サイスンが後年著した名著『ヒマラヤ』を見ると、メイスン自身招いた。 サイスンが後年著した名著『ヒマラヤ』を見ると、メイスン自身招いた。

ルー○年にAC名誉会員となっていたから、ウィーラーは父子でそれ一○年にAC名誉会員となっていたから、ウィーラーは父子でそれた。一方、ウィーラーも立派な仕事を残しSir に列せられ一九二れた。一方、ウィーラーも立派な仕事を残しSir に列せられ一九二れた。一方、ウィーラーも立派な仕事を残しSir に列せられ一九五れた。一方、ウィーラーも立派な仕事を残しSir に列せられ一九二れた。一方、ウィーラーも立派な仕事を残しSir に列せられ一九五れた。一方、ウィーラーも立派な仕事を残しSir に列せられ一九五れた。一方、ウィーラーも立派な仕事を残しSir に列せられ一九五れた。一方、ウィーラーも登会員となっていたから、ウィーラーは父子でそれた。一方、ウィーラーも登会員となっていたから、ウィーラーは父子でそれた。一方、ウィーラーも全人ではない。

かなり詳細に記述がある。 ファーラーについては『山岳』四八年八頁及び九五頁の「註」に

ある。長命だったらしく一九四九年に名誉会員に推された。 ■一九○頁以下に登山歴が載っているが、十九世紀末葉にアルプスーAugustus――)で、一八五九年生れだから当時六十歳。ACR―次にやはり雄渾な筆蹟の見られるのが Claude A. Macdonald(一次にやはり雄渾な筆蹟の見られるのが Claude A. Macdonald(一次にやはり雄渾な筆蹟の見られるのが Claude A. Macdonald(一次にやはり雄渾な筆蹟の見られるのが Claude A. Macdonald(一

次行の左は J. N. Collie (John Norman――) で解り易い筆蹟である。アルプスではママリーや William Cecil Slingsby の僚友として知らディフィカルト・ヴァリエーション・ルートを登攀したことで知らだいるから説明の要はあるまい。ロングスタッフの『わが山の生涯』四〇八頁に、コリーのことが書かれているが、スカイ島のクールンの山に関連して、頭にうかぶ傑出した登山家で、優れた個性のリンの山に関連して、頭にうかぶ傑出した登山家で、優れた個性のリンの山に関連して、頭にうかぶ傑出した登山家で、優れた個性のリンの山に関連して、頭にうかが集出した登山家で、優れた個性のリンの山に関連して、頭にうかが書かれているが、スカイ島のクー海がある。

旨の記述がある (同書二〇五頁)。

致を受けたが、任務を離れることができなくて参加できず落胆した

著書にはヒマラヤの古典ともいうべき Climbing on the Himalaya and other Mountain Ranges (1902) があり、大島亮吉『山―研究と随想』中の「山への想片」にはコリーの思想の紹介がある。 A C 歴としては一九一〇一二二年副会長、ファーラーのあと一九〇〇一二二年会長(第二十二代)となった。

コリーの右の同様にやや小さい署名が G. Winthrop Young

の栄誉を得た極めて珍らしい例と言えよう。)

アル まる一九一四年までが、ヤングにとってのアルプスでの活躍の時代 ガイドとして加わってい 父宮がアルプスを登られた際も槙有恒さんや松方三郎さんの要請で アマチュアと最高のプロのペア」と称せられた。 で、その登攀の多くは名著 On High Hills(1922)に収められ ルパイン・ファミリー。一九○○年AC入会。第一 よく知られた名であろう。 名ガイドの Josef Knubel と組んだ登攀が多く「登山史上最高の プスの銀の時代を代表するガイドの一人であり、一九二六年秩 一八六五年ユングフラウに初登攀のルートを開いた程 一) (1876―1958) で、ヤングの名は日本の登山 当時四十三歳。 父の Sir George も クヌーベルは所謂 次世界大戦 者にも てい の始 のア A

である。 あとさき」中にも少なからず読みごたえある文章が綴られている。 前者はほぼ十歳年下のジョージ・マロリーを加えた登攀の記述が主

も、よく活写されており、八一頁以下二○頁に亘り、また「大戦の

ヤングについては島田巽さんの好著『遙かなりエヴェレスト』に

出されれば、 次大戦後になって Mountain with a difference の一 ったが、不幸にも大戦で負傷し左脚を膝の上から切断せざるを得な イギリス登山者として第一級であったから、 ヤングには一九二〇年に Mountain Craft の技術書もあり、 エヴェレストは放棄したものの義足で登攀を続け、 当然まっ先に隊員候補に挙げられて然るべき人物であ エヴェレスト登山 書をのこした。 当時 隊が 0

大戦後初めて渡欧された松方さんが、

私が思い出すのは、

一九五一年ロイター百年祭の機に今次

ACを訪ねられて戦争中舶載

ラー は強く頭に残ったが、 (Nov. 1943) の巻頭に掲げられたヤングの「山の豫言者」なる一文 れらをどんなに貪るように読んだことであろう。 されなかった何冊かのAJを持ち帰られたことである。 会報』一五九号一〇頁に述べたことがある の影響力の大きかったことに言及している。 その中でヤングはコリーをほめ、 その一 それらのことを またファー 当時私 冊 vol. LIV

には、 ングを知るには好個の文献である て詳しく述べられ、 ろう。また『マウンテン・ワールド』十三巻(一九六〇-イアン(ライアン=ロッホマッター=ルートに名を残す)に就 なる風変りな登攀者で一級のクライマーでもあったV・J 『マウンテン・ワー 詳しい記述がある。 また後年スイス山岳財団によって刊行され、 ヤングの追悼記がアーノルド・ランによって二十一 ルド』 ポートレートは ライアンに就いての数少ない纏った記載であ 四巻(一九四九年)には、 勿論原稿の写真版もあって、 近年 ヤングの筆に 邦 訳 もされ 一頁に亘 + ラ た

0

挙されている。 副会長、一九四 ヤングは一九一九年当時コミッティーの 四三年会長をつとめ、 一九五七年名誉会員 員、 九三八 一三九

年

で、

て出 やり、 岳会の人々」(『山の風流使者』 度か手紙の往 九 コリーの署名の下が 席していたと思う。 ―一九二一年AC副会長だったから、 その当時日本山岳会が創設されたので、 復もあり、 A. L. Mumm (Arnold Louis-マムは先に一九〇一一〇五年に名誉書記を 小島さんの思い出は「登山家マムと日本山 所収)として残っているので、 この時は恰度 小島烏水さんらと何 副会長とし

史のこと」(『山・人・本』所収) のあることを付け加えておこう。 によって知っていただきたい。島田巽さんにも「マムのこと・登山 また私が本稿執筆に際し最も参考としたACRのⅠⅡはマムが精

ている Five Months in the Himalaya(1909)(邦訳=丹部節雄訳『ヒ 魂を傾けて編述した著作であり、他には既にヒマラヤの古典とされ マラヤの五か月』)のあることも記しておきたい。

Stutfield, Lieut. L. G. Shadbolt, H. R. Dent 等の知名の士が行なって Godley が書いている。 相当な人物であったことが窺える。その追悼記はAJXXにA.D. Savage 等と共にディスカスを行なっている一人で、これでみても Conway, N. Collie, A. L. Mumm, Sir A. Kennedy, E. A. Broome, G. の同集会でも H. E. M. Stutfield の講演のあとで A. D. Godley, Sir M. いるが、その一人にカー教授の名を見出し、また同年六月四日開催 が、その後のディスカッションは F. S. Goggs, G. P. Baker, H. E. M. 会員集会での講演はN・コリー教授の「スカイ島について」だった 入会であろう。AJXI記載の会務報告中一九一八年三月五日開催の 扱っているが、この中にカーはまだ載っていないので、それ以後の 間を要した。ACRⅢは一八七七一九〇年間に入会したAC会員を マムの左下は W. P. Ker と読めるが、この人物の解明には些か時

長だった。早くからシャモニの針峰群にも登り、岩登りの経験は豊 年に副会長をつとめたとあるから、恰度日本山岳会創立当時の副会 う。ウィックスは一八九三─九六年に名誉書記を、一九○四 富だった。この会のあと間もなく七月三十一日に六十七歳で死去し カーの右の小さい署名は J. H. Wicks (John Herbert---) であろ 一〇六

> 年生。一八八九―九二年名誉書記、一八九九―一九〇一年副会長を もグレッチャー・ヴォルフという渾名があったと思う)の追悼記を た。有名なガイド Peter Bohren(たしか松方さんの書かれたものに でも数多くの登攀を行なっている。『先蹤者』四六頁を参照 カサス、一九〇九年にはカナディアン・ロッキーズへ行き、英国内 間でアルプスを広く登ったばかりでなく、一八九三、九四年にコー 会長をつとめた。著名なセシル・スリングスビーや E. Carr が山 たが、AJXXに載っている親友だったクロード・ウィルソン(第二 つとめた。一八七六年以降九四年ごろ迄アルプスで多くの登攀をし 八年生。一八九七―一九〇〇年コミッティー、一九二一―二三年 ─Allan──)で、この人も亦大物と言ってはばからない。一八五 "Bâton Wicks" on the Charmoz と題する写真も載っている 十五代会長)の追悼記には、ウィックスのポートレートの他に、 その下が Felix Schuster(Sir——Otto——)と読める。一八五四 その次にやや大きな字で書かれているのが Godrey A. Solly (-

る。一九三八年名誉会員に推挙されている。 たロンスデール叢書 Mountaineering の編著者としても記憶されてい ムのやり残したACRⅢを完成した編者として知られているが、ま をやったため、会への貢献も大きかった。われわれには何よりもマ ―三六年副会長。山岳写真もよくし筆もたって、九年間も名誉書記 次が Sydney Spencer で、一九二三—三四年名誉書記、

次行の左は解読に苦労したが C. H. R. Wollaston (Charles Henry

Schuster とは同姓異人である。

AJNに書いている。なお一九三八年二十八代会長となった Claud

人であろう。 とは冒頭にも述べた通りだが、ACとは切っても切れぬ縁のあった に貢献したことを、会長のファーラーが讃辞を添えて述べているこ ラストンが名誉書記を兼務したとある。ACのため第一次大戦中特 長として出席した。しかも当時の名誉書記の George Ernest Gask を、一九一八一二〇年に副会長をつとめたとあるので、当夜は副会 Regnolds-(大佐) が軍務のため一九一七一一九年間不在であったため、 一)と読むことができた。一九一二―一六年に名誉書記 ウー

が、以上のことだけで並々の人物ではなかったと想像される。

次のやや解りにくい署名が Edward Broome

H. R. は一八四九年生、 従来ウォラストンとかな書きされていたが、 夫々調べてみたが、特に係累関係があるとは出ていなかった。 あるようにウーラストンが正しい。) ダルを受けている。一八七五年生、 とここに出てくる C. H. R. と何か関係があるかと、AJの追悼欄を 呼び且つ尊敬の辞を呈している (『わが山の生涯』十二頁)。この人 異人の人物がいる。ロングスタッフがサンディー・ウーラストンと R G S なお第一回 A. F. の名誉書記もやり一九二五年にはRGSのパトロンのメ R. はAlexander Fredrick Richmond でイギリス地学協会 工峰遠征隊の隊員中に A. F. R. Wollaston とい 一九二六年殁、 一九三〇年歿。(Wollaston は 銀行の役員などをした。 島田巽さんの前掲書に う同姓 _ 0

> に特記されたほどの登山歴をもつ Thomas Middlemore の筆になるAJの追悼記から見てみよう。 CRⅢにはなく、親しい登山仲間の H. J. Mothersill と E. 八六六年生だから当時五十三歳ぐらい。AC入会は一八九六年でA れている。 解されよう。ACではコミッティーを一九〇〇―― と、どうにか読むことができた。一八四六年生とあるから冒 た。追悼はファーラーがAJMに書いているが、 を一九一二―一四年の間つとめている。七十四歳までスイス・アル の登山歴が述べられているので、 ニディーより一歳位年上の七十三歳。ACRⅢには四頁に亘って彼 プスに出かけているが、一九二〇年七月にツェルマットで亡くなっ その下は Arthur M. Bartleet である。(---Middlemore---) | その内容も豊富であったことが ファーラーによってAJ 写真も数点収めら 〇二年、

三七年歿 1923) (『先蹤者』二五三頁にこの名がある) の甥にあたるので、 ラッドビー、 モン・ブランのブレンヴァ側を試みたりした。親しい に登ったばかりでなく、十九世紀末葉から今世紀のはじめにか 山はその影響だろうとも言われている。アルプスの多くの ュウスター、 グラン・シャルモ、 ロールストン、 1) 1, グレポン、ジェアンなどの ストラット等の著名な登山家がいた。 クロード・ウィルソン、 登攀を行 クロード・シ Ш 仲間にはブ 著名な山

その下が H. V. Reade で、 リード もACRⅢにはまだ現われてい

いてはACRⅢにもまだ載ってないので、その登攀を調べていない

九三二一三四年には第二十六代の会長をつとめた。

ウィザー

また一 ・ズにつ

一九〇九——一年名誉書記を、一九二五—二六年副会長を、

と思う。

後述の E.

A. Broome と親しい山仲間だったらしく、

ウーラストンの右の綺麗な署名が John J. Withers (――James―

て、

Topham とはよく登った仲間でAJMにトプハムと共同で執筆した ファーラーと共に登っている記録があり、後述の A. G.

"The Dents des Bouquetins"の登山記を残している その左下のやや判読しにくいのが H. Cockburn (Henry---)と

思われる。一八四八年生、コミッティー一八九四一〇七年、ライブ の大きかった人物とACRⅢに書いてある。 ラリアン一八九四―一九〇六年とある。図書担当役員として貢献度

で、ACRⅢにも二頁に亘って出ているが、生れは一八五六年、 コックバーンのすぐ下が Geo. P. Baker (George Percival---)

八九四―九七年コミッティー。アルプスは勿論、一八九七年カナ

七年、 ウォーカーなどの錚々たる仲間と親しく、よく長命を保って一九四 ダ、一九○○年ノルウェーで登山し、スリングスビー、ゾーリー、 九十歳を超えてからアメリカ登山界の耆宿 Dr. M. Thoring

13

で記憶されている方もあるかと思う(同書一○頁)。出典は 田さんが、リーフについて松方さん好みの人物と書いておられるの tonと同時期にAC名誉会員に推挙されている。 イカーの右が Walter Leaf である。最近の『山岳』八四年に島 『遠き

フは、 いが、 ことから筆をおこし、登山家のリーフについては殆んど触れていな を担いながら、『イリアッド』の英訳者で古典学会々長でもあった んはその随筆の終りの方に「……彼は優れた登山家でもあったか 松方さんは、リーフがウェストミンスター銀行の頭取という重責 AC会員中でも重きをなした人と見て差し支えない。 一九〇二一〇三年と一九〇五年にACの副会長になったリー 松方さ

ら。」とほんの二行書き加えている。こうした書き方が実は松方流

なのだと私には思われる。

副会長、また一九〇八一〇九年には Alpine Ski Club の副会長も かと思われる。一八八四一八七年コミッティー、一八九六一九八年 年生れだから当時七十七歳で、この署名のなかでは最年長者だった リーフの下が Geo. H. Savage で後年 Sir に列せられた。一八 四

とめた。ACRⅢに約二頁記載されているが、一八八○年にガーベ ルホルンの南面に新ルートで登攀した記録などがある。

たとき記憶にある名であり、 歳位で亡くなっている。ロングスタッフの『わが山の生涯』を訳 一九一〇―一二年コミッティー、一九二〇年死去とあるので、五八 最後が Alfred G. Topham(——George——)で一八六二年 同書三〇頁の「注2」を参照された

は大阪府東成郡住吉村帝塚山となっている。 月一日現在)によると、 違いない。『山岳』一六年二号添付の古い会員名簿(大正十年十二 餐会に出席し以上の署名を貰った加藤栄さんの署名であることは間 0 署名が斜めに見られる。この人は当時日本山岳会々員で、 なお Baker の署名の最後の個所に重なって S. Kato という日本人 会員番号五一〇、 大正六年二月入会、

Conway とある。 られた自署と比べたところ、コンウェイ自身のものにほぼ間違いな 逆様になって書かれている文字は読み易く、 次に二葉目のメニューに書かれた内容について説明しておこう。 私の旧蔵していたW・M・コンウェイの This is Sir Martin

説明の方がやや詳

:細に亘っている。

一文と全く符合することに、読者は気づかれる筈で、

コンウェイの

右は本稿の初めの部分で五月六日の会員集会の記録を述べた中の

いことが確認された。(巻末写真参照

コンウェイについては縷説の要はないが(『山岳』三二年二号の 高橋文太郎さんの一文参照)、アルプス、ヒマラヤ、スピッツベル ゲン、アンデスの広い山域に足跡を残した高名な登山家で一八五六 年生、一八九三―九五年副会長、一八九四年―九五年AJ編集者、 一九〇二年会長をつとめ一九三五年には名誉会員に推挙された。多 くの著書をのこしたが、そのなかでも Ctimbing and Exploration in the Karakoram-Himalaya、1894 (London) は逸することのできぬカラ コラムの古典であり、吉沢一郎さん訳の『カラコルムの夜明け』が コラムの古典であり、吉沢一郎さん訳の『カラコルムの夜明け』が

また、右の署名に続いて十行程書かれている。 の筆蹟に違いなく、Oliver Williamson 博士(ロンドン、ユニヴァーシティ・カレッジの故ウィリアムソン教授の息子)が、Hohberg. ームとテーシュホルン(共にツェルマット渓谷の東側にある)が主ームとテーシュホルン(共にツェルマット渓谷の東側にある)が主ームとテーシュホルン(共にツェルマット渓谷の東側にある)が主いた。この二峰は、ドームとテーシュホルン(共にツェルマット渓谷の東側にある)が主いた。この著名に続いて十行程書かれているのは同じコンウェイまた、右の署名に続いて十行程書かれている。

る。私の読み誤り、或いは解説の誤りがあったらご教示を賜りた以上が二葉のメニューに書かれた署名、その他の大略の解説であ

64

略述しておく。

略述しておく。

略述しておく。

ものと想像される。 ものと想像される。

一年ごろの高野、 いるので、 瑣になり、 写も会へ寄せられてきているが、その詳細を述べるのもあまりに煩 紙と共にこのメニューも戴いてきたという。 藤さんが転居されてからで、 富 田さんが戦争直後、 また会報『山』 以上をもって稿を終えることとしたい。 藤島敏男、 加藤さんを訪問したのは京都市北白 五三八号十一頁以下にも概要が記され そこでファーラーやウェ 加藤さんらの本件に関係のある書簡 富田さんから ストン 昭 和二十 川に 師 の手

(一九九〇年五月)

から小屋まで三~四時間、と読める。ソン自身がメモした、右の登攀の時間記録ではないだろうか。ソン自身がメモした、右の登攀の時間記録ではないだろうか。

北 アルプス南部の石室

であったから、登山そのものがまさに探検といっても過言ではなか 内書もなく、山それ自体の位置・名稱さえはっきりしていない時代 労の多いものであった。登山道・山小屋などなく、完全な地図 近代登山がはじまった頃の登山は、今では想像もできないほど苦 ·案

が利用していた石室などを使っていた。また何もない場所では、ハ ず案内人として雇って入山した。そして泊まる小屋は杣小屋かある を防いだのである。 イ松の中にもぐり込み、その上に油紙をかけるなどして寒気、 いは木を組み合わせて造る粗末な掘っ立て小屋か、 当時の登山者は、その附近の山に詳しい地元の猟師、 猟師や薬草取り 杣などを必 雨露

人が書き残した「信州鎗嶽畧縁起」には、

かあり、

山中の石室

にも二百年前に建設されていたといわれる。北アルプス南部でも乗 鞍岳に明治の初期に建設されているが、各地に自然の石室がいくつ 石室は約八百年前、 初期の登山者によく利用されていた。槍ヶ岳開山の播隆上 既に富士山の八合目附近に、 また立山の室堂

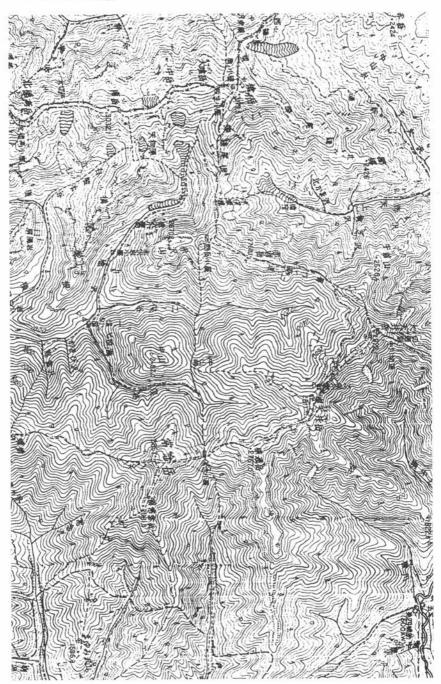
穂

苅

貞

雄

ず。もし余が露命消しなば、後に有力の衆、営造したまわんことを 庶冀す」とあるように、播隆上人がたびたび利用したので後年、坊 諸人参籠通夜の室にせんと欲すれども、力微にしていまだ成就せ れらはウェストン、 主の岩小屋といわれるようになったが、その下方の赤沢の岩小屋と 「此頂上(槍ヶ岳)より十二三丁下りて岩窟あり(三間)修造して 初期の槍ヶ岳登山者にはなくてはならないものであった。 小島烏水はじめ初期の槍ヶ岳登山者の多くの



者達にとっては何よりの宿泊の場所でもあった。 など簡単なものを入れると、数えきれない程沢山あり、 られているが、各地に自然の石室があり、また大岩の蔭を利用する 人々が利用しているのである。その他涸沢、 横尾の岩小屋もよく知 当時の登山

二の俣小屋

二の俣小屋はよく利用されていたのである。 を越えて梓川本流に出て槍沢を槍ヶ岳へ登ったので、その道中この 利用されていた。喜作新道がまだできない頃は、中房から入ると、 特に二の俣小屋といわれた石室は、槍をめざす昔の登山者によく 大天井岳を越え、東天井岳附近から二俣谷を下り、 中山の鞍部

りと見ることができる 現在この登山道は廃道となっているが、その道跡の一部をはっき

岩の石柱が二つに折れて轉がっている。よく見ると、次の文字がか 大きさは殆んど同じであるが、 で囲まれた石室跡が二個所ならんでいるのを見た方があろう。その ろうじて読めるのである。 大天井岳より東天井岳へ向う時、 常念岳寄りの石垣の中に、白い花崗 右側の二重山稜の窪地に、 石垣

本会ノ石室建設ノ企ニ賛シ豊科町丸山盛一氏ハコノ建設費全部ヲ

きく、しかも文字が深く刻まれているのではっきりと読めるのであ にあることを私は以前から 寄付セラル これと全く同じ文字が刻まれた黒い石柱が槍沢のテント場の片隅 南安教育会 知っている。 これは二の俣の石柱より大

> たびたび雪崩で壊され、また火災に遭ったりしたので、 ついて昔案内人をやった人や槍沢ロッヂで働いたことのある人達に ロッヂと名称を変えて下方の森林帯に移されている。石室の所在に が主謀者となりアルプス旅館という小さい山小屋が立てられ る。 槍沢のテント場はその昔、 馬場ノ平といわれ、大正六年私の

尋ねたが誰も知らないと云う。

また或時、私は写真撮影に出かけた時、

坊主の岩小屋の北東わず

査はなかなかはかどらなかった。 てみようと決意したのである。そして二の俣の二つの石室の建設時 俣の二つの石室跡に再会して、一念発起これらの経過につい かけていた。一昨年秋、久し振りで槍から常念へ縦走した時、 槍ヶ岳を往復するので、そのたびに槍沢テント場の石柱を眺め気に はわからずじまいであった。私は一年のうち何回となく槍沢を登り ないかなどと疑問を抱き、昔歩荷をやった人達にも尋ねたが、真相 るいは槍沢テント場の石柱は誰かがここから背負い下ろしたのでは はいない。南安教育会が槍沢に造った石室とはこれを云うの ったのである。この石室跡についても、いつ誰が造ったかを知る人 にあり、登山道からはよく見えないので、 ントが使われているのである。これは大きな岩がころがっている中 つけてびっくりした。二の俣のものと同じように石垣の一部にセメ か二十メートルの所に、二の俣の石室跡と全く同じ造りのものを見 槍沢の石室の所在、さらにその建設費全額を寄付した奇特 丸山盛一のことなど調べることにしたのである。 長い間全く気がつかなか しかしその調

長野県十ヶ所の石室を建設

る日、 取り出して読んでいるうちに、 決定したとの報告を見つけた。それによると、 ところが偶然のことからこれらの疑問が解けてきたのである。 父の遺した蔵書の中から日本山岳会の古い会報(「山岳」)を 長野県が県内の山岳地に十ヶ所の石室建設の位置を 大正八年六月十日附の信濃毎日新聞 あ

「本県に於て臨時県会の決議を経て、 山室の位置は十ヶ処を 今回新に築城せんとする高山

白馬(頂上より下り八丁在来の位置

鑓ヶ岳(頂上より下一里岳の湯

大黒岳 (八方降路

四 二ノ俣 (中房より槍ヶ岳 の通路、 大天井の南

Ŧ, 槍ヶ岳 (坊主の小屋附近

(頂上附近

東駒ヶ岳(頂上より西に下る十丁 (大小路より東下り

赤石岳 乗鞍岳

十町、

駿洲地

岩菅山 (頂上附近

八ツ岳 (赤岩頂上の 北側

に対し特選受負の形式に依りて助力せられんこと……」 決定し九日学務課より山の処在町村若くは教育会特志団体

内面

屋根其間隙はセメントを填充し屋根は木造にて厚さ一寸板 大は四間に一 一間四尺、 小は三間に二間四尺にて四面石積と

> 登山が盛んになってきたので長野県当局も漸く山 クレオソートを塗布し別に便所をも附設する計

を抱くようになったのである。 このうち鑓ヶ岳のものは後に祖父岳冷池に変更されたが (四)

(五)

た石垣も所々壊れているが、間口、四・八メートル、奥行七・〇メ である。現在は何れも屋根は朽ち果ててなく、セメントのつめられ ある通り二ノ俣・坊主の小屋附近には、この時石室が建設されたの ートルで大きい石室の部に入るものである。そして二つの石室と乗

二の俣の石室は燕山荘の創始者、 鞍のものを含めて南安教育会が請負い、それぞれ業者に委託した。 赤沼千尋氏が責任者となり実際の

工事をしたという (赤沼淳夫氏談)。 以上のように、坊主の小屋附近の石室は大正八年の建設であるの

して同じく南安教育会が石室を建設したのは何故か、 で、大正六年建設の槍沢の石室は別の所にあるはずである また二ノ俣には、大正六年、八年と僅か二年の間に、しかも隣接 大いに疑問と

石室建設の適地が他に見当らないなどが考えられる。 けでは不十分になっていたのではないか、第二には、 するところである。第一には当時急激に登山者がふえ一つの石室だ この 附近には

たが、その附近に常念小屋、 県知事名で大正八年七月に松本営林署より正式に借地し、 が建設されたので、その使命は終ったのである。 十月十九日に返地している。その間十年、多くの登山者に利用され なお大正八年に建設された二の俣、坊主小屋附近の石室は、 殺生小屋、 大槍小屋など民営の山 昭 和

猟師小屋(?)だった二の俣小屋

のが存在していたのである。 二の俣には二つの石室が建設される以前に既に二の俣小屋なるも

小島鳥水の「燕岳及大天井岳に登る記」によれば、明治三十九年のこと、「偃松の間に石壁があって、その石壁で風を遏めるやうにあた「山岳」第三年第三号(明治四十一年十月二十五日発行)の河また「山岳」第三年第三号(明治四十一年十月二十五日発行)の河また「山岳」第三年第三号(明治四十一年十月二十五日発行)の河また「山岳」第三年第三号(明治四十一年十月二十五日発行)の河また「山岳」第八年第三号の「一高山岳会団体旅行概況」によれば、円張一大山分損じ屋根は破れて殆其の用をなさない……」とある。更に大山分損じ屋根は破れて殆其の用をなさない……」とある。更に大山分損じ屋根は破れて殆其の用をなさない……」とある。

山者により荒らされていることを嘆いている。
またウェストンは大正三年八月、中房温泉から燕・大天井・二の俣・上高地へ縦走した時、途中二の俣小屋に一泊して「八月二十一俣・上高地へ縦走した時、途中二の俣小屋に一泊して「八月二十一日がで散らかったお土産で。日本の二流人はなぜいつも散らかるの不潔で散らかったお土産で。日本の二流人はなぜいつも散らかも家をひどくするか。」(三井嘉雄訳)とその日記に二の俣小屋が登れる。

山、牛首・中山・大天井岳などで行われた時、二の俣小屋を利用しまた陸地測量部員による三角測量が明治三十九年よりこの附近の

あると語ったと云う。二の俣小屋は、はじめは猟師小屋であったとやカモシカがよく出没するので、二の俣小屋から猟に通ったもので表られたものではないかと述べている。大正八年、交が猟師の小林之られたものではないかと述べている。大正八年、交が猟師の小林之られたものではないかと述べている。大正八年、交が猟師の小林之られたものではないかと述べている。私の父三寿雄の「山想雑代から既に存在していたことがわかる。私の父三寿雄の「山想雑代から既に存在していたことがわかる。私の父三寿雄の「山想雑代から既に存在していたことがわかる。私の父三寿雄の「山想雑代から既に存在しているのである。以上のように二の俣小屋と云われた石室は明治年でいるのである。以上のように二の俣小屋と云われた石室は明治年でいるのである。以上のように二の俣小屋と云われた石室は明治年

槍沢の石室

思われるのである。

館之方は十数人の大工、石室の方は八九の土工を入れて何れも二年一月発行の「山岳」第十二年第一号の雑録には、「鎗ヶ岳下の大年一月発行の「山岳」第十二年第一号の雑録には、「鎗ヶ岳下の大旅館」の題名で次の一文がある。
には裕に四十人或は夫以上の客を泊せしむるに足る普通の木造旅には裕に四十人或は夫以上の客を泊せしむるに足る普通の木造旅が。
「……夫れは鎗ヶ岳の下赤沢小屋岩の上、馬場之平に来るシーズン旅館」の題名で次の一文がある。

とあり、石室の場所が具体的に示されていた。剛馬」

前右側小林中に既に地を開きあり……

大正六年十月廿

する処、馬場之平に到り見候に下より登る時は河原に出る半町手の俣に於て木組其他夫々準備中……石室は南安曇郡教育会の建設



大正6年建設の二の俣の石室 白い花崗岩の石柱が立てかけてある(丸山盛一の寄附で建設された)。

山の様子が詳細に書かれていた。 など貴重な文献を幸運にも入手したのである。それには大正時代の 正年代に行った北アルプス方面の地質調査並に動植物調査の旅行記 上旬にもう一度調べようと思いつつ下山した直後、南安教育会が大 を調べたが遂に見つからなかった。まだ所々に残雪があるので七月 の従業員達と二日間にわたり馬場ノ平の上方及び下方の森林の中 本年六月中旬、 槍沢テント場附近の残雪が消えたので、私は山小

記の中、 大正七年度の常念岳・槍ヶ岳・燕岳地方で行われた地質調査旅行 八月二日の記事に

る

「……上ること十町にして崖錐より成る谿底の平地に出づ、之れを 石室に宿る。 馬場平とす。山中に相應はしからぬアルプス旅館なるものあり。 吾隊は此の前を通過して、すぐ傍なる本郡教育会の建設に係る

盈治の「日本アルプスと林間学校」の中にも、大正九年七月の某日 録より更に具体的に記されている。更にまた大正十二年発行の鵜飼 石室の位置はアルプス旅館のすぐ隣りであると森剛馬の記

「槍沢の小屋は、ホテルと稱へる設備が一つ、又直ぐ隣りに真正の 石室が一つ、何れでも好きなま、に宿泊することが出来る。」

利になったと喜ばれ、槍ヶ岳の登山者が次第に増加した。前記の地 ものだと一部の岳人から非難されたというが、一般登山者からは便 明白である。アルプス旅館の建設当時、それは山の俗化につながる 以上のことから槍沢の石室はアルプス旅館に隣接していたことは

質調査旅行記によれば

「(大正七年八月二日)アルプス旅館には槍ヶ岳登山の海兵の生 す。 しものを合せば優に千に達すべし。山岳登山者の多きに一驚 しもの、本日にて八百四十余名に及びたり、宿泊せずして登山せ 十余名在り。此夜同旅館にて調べしに本年槍ヶ岳登山の客の泊 徒

用狀況を知る記録が大正八年度動植物調査旅行報告に記載されてい とあるように、山小屋の利用者は増加したのである。一方石室の利

「(七月十日) 途中数度の休憩後旅館に入りタルハ午後五時 二隣スル爲メカ、何レニシテモ切角設備セシコトナレバ尚多数人 ズ。之此小屋ノ廣ク未ダ紹介セラレザルニヨルカ、又余リニ旅館 人ニテ教員、学生、青年会員多数ヲ占ム。合計シテ百人ニ充タ ザリテ屋中月ヲ見ルベク、雨漏リテ敷物用フベカラズ。又備品モ 不足シアリ。宿泊人名簿ヲ見レバ宿者ノ多クハ本県人又ハ新潟県 利用ヲ望ムコト切ナリ。 荷物ヲオロシテ教育会建設ノ石室ヲ見ル。室の屋根ノ峯板イ ナリ

h その後の調査の時も殆んどアルプス旅館を利用している。折角石室 と記されているようにあまり利用者はいなかったのである。 ったようで、昭和十四年その経営を放棄することが常任委員会によ は建設されたものの、その維持管理は教育会にとり相当な負担とな 建設してから僅か二年にして雨漏りするようになり、南安教育会の 正式に決議されている。 しかも

石室のその後については、松本営林署の古い記録に何もないので



槍沢のテント場にある石柱 (長さ80cm、周囲50cm)



坊主の岩小屋附近の石室 (大正8年 長野県で建設)

よくわからないが、恐らく槍沢小屋の増改築の際、 地に組みこまれたのではないだろうか。 石室跡はその敷

うに感じる次第である。 きた私にとっては何とも云えない侘しい結末で一度に気が抜けたよ 断せざるを得ないのである。長年石室のことを気にかけて調査して 室跡を調査したが、その場所が判明しなかったので以上のように判 昔から丸山盛一の石柱が槍沢小屋跡にあり、 しかも今迄何回も石

すがえすも残念である。 それにしても父の生前昔のことを聞いておくべきだったと、かえ

前常念の石室

七年に行われた南安教育会の地質調査旅行記によれば ているものもある。その代表的なものは前常念の石室である。 があり、 北アルプス南部に於ては、各地に初期の登山者に利用された石室 あるものは壊れてなくなったが、 現在も引き続き利用され 大正

n 前常念には数人に容る、に足る大岩塊の間の自然の小屋 の計画あり。 然も数ヶ所存す。 近く実現せんと準備中なれば 尚堀金小学校常念嶽研究会にて 登山者は 一層の便を 石室建設 (窟) あ

と記せられてい

く清く美しく生きるように教えていたので、 山容に魅せられ、 この石室は飯山市出身の佐藤嘉市の熱意により建設されたのであ 大正五年堀金小学校長として赴任した佐藤は、 常に生徒達に「常念を見よ」と云い、 世間から常念校長と呼 常念岳の秀麗な あの姿の如

> 額を掲げていたという。 ばれるようになった。自ら常念山人と名のり、 家には常念窟という

彼は堀金小学校を中心として大正七年六月、 登山道の開拓、 指導標の設置と共に、前常念の山頂附近に石室 常念岳研究会を結

成

の建設を企て、村内から協賛金を集めたのである

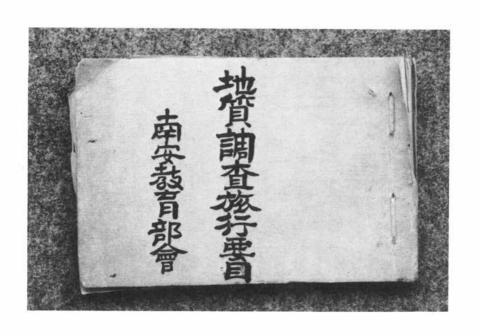
タン葺き、中央に土間があり、 完成させたのである。 そして大正八年工事費金四百円で、 石室の周囲は一方が天然の石積みの壁、 自在鍵をつるすという立派な石室を 広さ間口二間半、 上はたる木、 奥行 屋根はト 間

難小屋として利用されているが、 ル、高さ三・〇六メートルの立派な石室である。 たのである。現在の規模は間口五・一メートル、奥行二・七メート してしまった。昭和二十年代には基礎の石積の型だけが残るという ていたが、 行い、後には県内外の各地からも大勢の登山者があったという。 話が発端となり、 有様であったが、昭和四十四年六月、堀金村の山の会による再建の 暫くの間は堀金小学校を中心に、登山道・石室などの手入れをし そしてその直後には堀金小学校、村民などで四十人の集団登山 昭和十五・六年頃の台風で屋根が壊され、 会員の血と汗により工事費金三十万円で再建され 今後末長く存續するよう心から 現在も登山者の ついには倒壊

南安教育会の活動

っている。

けるようになった。明治二十一年、 登山の気風が盛んになると、 教育界も北アルプスにその関心を向 信濃教育会の支会として発足



ている。

行うようになったのである。 た南安教育会は、郡下の北アルプスの地質・動植物調査を積極的に

ったので調査は難渋したという。 ら同十年にわたって行われたが、登山道・山小屋などが未整備であ地質調査は大正五年から同十五年まで、動植物調査は大正七年か

の調査は勿論のこと、前述した如く当時の山の様子が詳細に語られの調査は勿論のこと、前述した如く当時の山の様子が詳細に語られて日から八月三日の四日間、当時の長野高等女学校の八木貞助を講地質についての実地踏査は大正六年から九年にかけて、北アルプ地質についての実地踏査は大正六年から九年にかけて、北アルプ

新しい登山道についても「此処(常念乗越)は一ノ沢より登る乗載しにして西方一ノ俣に下り、中山を越して馬場ノ平へ連するを得とあり、此の道を通れば豊科より一日にして馬場ノ平へ達するを得とあり、此の道を通れば豊科より一日にして馬場ノ平へ達するを得とあら、此の道を通れば豊科より一日にして馬場ノ平へ達するを得とあり、此の道を通れば豊科より一日にして馬場ノ平へ通ずる間道越しにして西方一ノ俣に下り、中山を越して馬場ノ平へ通ずる間道を蔵す。

ついても詳細にわたり記されている。

人外套を持ち之れを強力に背負はしむ。」と前述の二ノ俣の石室に成し不便なし。登山者は唯防寒具を用意すれば足る。我が一行は各筋、嬉しさ限りなし。小屋は本郡教育会の建設に係り、炊事道具をり、嬉しさ限りなし。小屋は本郡教育会の建設に係り、炊事道具をり、嬉しさ限りなし。小屋は本郡教育会の建設に係り、炊事道具を

俊岳燕岳地方 地名

大石七日度

り上高地清水屋泊り、第四日目は上高地より徳本峠を越えて岩魚留岳山頂・一ノ俣、槍沢アルプス旅館泊り、第三日目は槍ヶ岳頂上よ アリ。本年堀金小学校内常念研究会ノ石室建築ニツキ石室ノ仮小屋 述べた槍沢の石室の他にも、「喬木帯ヲ出デ偃松帯ニ入ル所ニ鞍部 理にも相当な日数を費しているのである。この旅行記の中には先に 目は烏川橋より須砂渡・三俣小屋・常念小屋泊り、第二日目は常念 ヲ此所ニ造レルアリ。」と前常念の石室にもふれている。

行われた。大正八年には七月九日から十三日までの五日間 また動植物調査は、松本女子師範学校長矢沢米三郎の指導により 第五日目は島々へ出て解散しているが、その資料の調査、整 第一日

便を考えて、南安教育会は二ノ俣・槍沢などに石室を造ったもので 泉の百瀬彦一郎が次のように報告をよせている。 ある。なおこの石室について「山岳」第十三年第一号には、 このように北アルプスの実地踏査のためにあるいは一般登山者の

「(北アルプス巡回路は) 中房から燕岳、大天井岳、 股、槍沢等を経て上高地に到る所謂常念山脈の縦走路です。 もので、其の営造費も可なりの額に達してゐるが、是には篤志家 濃教育会、南安曇郡会などの団体で即ち前記の常念山脈中、 の小屋は登山者のために天国であるが、此楽しい小屋の開祖は信 槍の二峰に営まれつつある。此二個所の小屋は極めて完全な 常念、 Ш 中



です。そこで此小屋は既に見事に出来上って、二の股小屋は中房 温泉の持主である百瀬亥三松氏、 毛色の変った此山中の楽園を作るべく建築費の一切を寄附したの があるのです。その篤志家というのは神戸の紳商である丸山盛 (南安曇郡豊科町出身) のことです。氏は世間の成金とは一寸 槍の小屋は上高地温泉主が管理

する事になってゐます。……」

とある。

人々から全く忘れられていたのである。 丸山盛一は当時相当な話題になったものと思われるが、 その後

篤志家 丸山盛一

のことからわかってきた。 丸山盛一については本当に長い間尋ねあぐねていたが、 最近偶然

り、その概要が判明した。

ところがこのたび豊科町役場を通じてその親族を知ることとな

耳であると云われた。 れた。しかし北アルプスの山中に石室の建設費を寄附したことは初 年前に彼のことは「広報とよしな」に掲載したことがあると教えら 余談として豊科町出身の丸山盛一を知らないかと尋ねたところ、二 起人の一人として、豊科町の委員会にたびたび出席したが、ある時 山岳写真家の田渕行男記念館の建設をすすめる会の発

附で建設され、 正八年九月に建設、 現在の武道館は木造平屋建て瓦葺、 「広報とよしな」には、「取り壊される現在の武道館」 大正十一年郡役所廃止により町公会堂となり、 郡公会堂として当町本村出身の丸山盛一氏の寄 昭和四〇年十月南安自治会館新築に伴 五三六・三平方メートルで大 の題名で、 昭和

二二年九月町公民館となる。

つものなり。」とあり、その寄附金を現在の金額に換算すれば何億 り、これ等すべて豊科町出身神戸市在住丸山盛一氏の特志寄附に俟 賓室其他の附属建物を合せて建築費總計 **曇郡誌によれば「本館は間口八間、奥行十二間、木造平屋建にて貴** してきた。」と記されていたのである。更に大正十二年発行の い現在地に曳引移転して昭和四二年十一月から町武道館として利用 一萬二千九百十二円を要せ 南安

によれば当時の金額で六百円である。こうした事業に深い理解のあ る丸山盛一は、ただ単なる実業家ではなかったはずであるが、その 後については全く不明であった。 一方南安教育会の石室に寄附した金額は、 「南安曇教育百年誌 の大金にもなるものである。

言った。若い頃上京して慶応義塾で学び、明治二十八年、二十一歳 広大な農地を持つ豪農で、本棟造りの住宅の周囲が堀で囲まれて 豊科に残して上京した。その後神戸に移り海運業をはじめたとい の時結婚して一女をもうけたが、夫婦生活はうまくいかず、妻子を たので、屋号を「内堀」あるいは「堀の丸山」、または 長男として出生した。当時の丸山家は現在の南豊科駅の西側一帯に 盛一は明治七年、豊科町本村に丸山七郎、むつ夫妻の四男一女の 「山七」と

材にも手を広げ、四国で伐採したものを関西・関東方面へも運んだ た。主に中国との貿易で、その取扱品は雑貨が中心であったが、木 商売は順調に伸び、業務を拡大して五興商会という会社組織にし

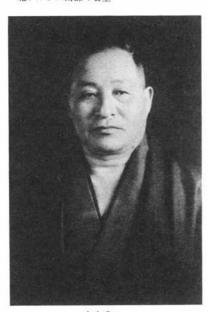
が五人、その間に子供が十六人も生まれている。しかしその絶頂期ので花柳界の女性には大変もてたとのことである。そのためか愛妾身長五尺五寸(約一メートル七十)くらい。小ぶとりの色白の好男男長五尺五寸(約一メートル七十)くらい。小ぶとりの色白の好男四年に協議離婚、翌十五年には神戸の女性と再婚している。盛一は四年に協議離婚、翌十五年には神戸の女性と再婚している。盛一は四年に協議離婚、翌十五年には神戸の女性と再婚している。盛一は四年に協議を持ている。前述の大金を寄附したのはこの頃であった。

欧州大戦がはじまると、

海運業は急速に発展したそうであ

弟が東京で実業家として成功していたので、彼を頼って上京、その裸同然になってしまった。そこで盛一が昔、いろいろと面倒をみた昭和二年からはじまった世界大恐慌により大打撃を受けて倒産。

はそう長くは続かなかった。



丸山盛一

n, とができたのである れて上京した。このたび私はこの龍子から直接詳しいことを聞くこ 活も困窮していた。 活はできたが、盛一の事業が倒産してからは農地は売られ、 科には盛一の残した広大な農地があり、 たのだが、養子は事情があって出奔して行方不明になってい との間に一人娘があり、 婚後も住んでいた先妻に孫のいることを思い出した。 しの出前をするなどして、何とかその商売も軌道に乗るようにな である。それから弟の口ききで丸ノ内の三菱ビルの事務所などへす 援助を受けることになった。 の片隅を借りて「浮世」という店名で「しるこ」 人手が必要となったのである。そこで豊科町の盛一の生家に離 ただ弟の庇護に頼ってばかりにはいかない。まず麴町 昭和七年、 彼女に養子を迎えその間に四人の子供が しかし多人数の家族を抱えて何もせ 孫の龍子が十五歳の時、 年貢が入ったので何とか生 屋をはじめたそう 先妻には誠 のビル街 その生

れ以来祖父とは会っていないと言う。 ていた。龍子は 恨みに思うどころか、 る情愛の深い祖父であったと龍子は述懐している。 いたが、蔭ではやさしい言葉をかけてくれ、 苦労をしたという。 いつも肩身の狭い思いをし、 龍子の東京での生活は、 祖母とは離婚し自分達の家族を苦しめた人ではあったが、 「浮世」で三年間手伝いをして豊科へ帰ったが、 しかし盛 非情な運命に翻弄されて気の毒に思うと語 何かと派手な都会の大人達の中にあって しかも召使同然の扱いを受けて大変に は人前では、 よそよそしく振舞って 何かと面倒をみてくれ また盛一につい

は聞いたという。
は聞いたという。
は聞いたという。
は聞いたという。
は聞いたという。

の墓の所在すら確認できないとのことである。であった。東京で簡単な葬儀が行われ、遺骨は神戸の寺に埋葬されであった。東京で簡単な葬儀が行われ、遺骨は神戸の寺に埋葬されての墓の所在すら確認できないとのことである。

盛一の生涯は太く、華々しく、まさに波瀾万丈である。それは人盛一の生涯は太く、華々しく、まさに波瀾万丈である。それは人盛一の生涯は太く、華々しく、まさに波瀾万丈である。それは人

歴史の一齣としてこの小文を記した次第である。の中に忘れ去られることは何としてもしのびがたい。北アルプスのんどである。古い時代のことを語り継ぐ人がなくなり、すべてが聞ず、その横を通過する登山者はその存在さえ気がつかない人がほとず、その横を通過する登山者はその存在さえ気がつかない人がほとしかし今やその建物は壊されてなく、石室も壊れて今や使用され

日本山岳会会報「山岳」

参考文献

「南安曇教育会百年誌」山崎安治著

南安餐郡誌」

示頂き心から感謝申し上げます。 特に三井嘉雄氏、赤羽根嘉矩氏、堀金村教育委員会には種々ご教育安教育会 大正八年度輸充品方面動植物採集旅行報告南安教育会 大正七年度輸充量無常公告地質調査旅行記



本健一

郎さんほかの皆様がたにお話をい

と題して、吉沢一郎さん、望月達夫さん、

司会

(山本良三)

橋大学山岳部の歩み

したものです。

18

回山岳史懇談会」の内容を整理

望月達夫氏の校閲をへて収録

九九〇年三月二十

四日 0 第

橋大学山岳部の歩み

出席者 沢

郎

Ш 本 月 達 郎 夫

したが、一つ上に近藤恒雄さんという方が 一番古い方です。今年八十七歳になられま

おられます。卒業年が逆で、吉沢さんは昭 ろに大学を出られた時代だと記憶しており 活躍なさった方たちが昭和二、三、 ります。登山史では、日本の大学山岳部で 私は十三年ですからちょうど十年先輩にな 和三年卒業で、 近藤さんは四年卒業です。 四年ご

> が、 べく戦前のことをお伺いしたいと思いま 彼は僕と同期です。吉沢さんにはなる

-創期のころ―他大学と交流

吉沢 ターがやたらと貼ってあった。 下さったことを覚えています。募集のポ がきてくれて、夢みたいな甘美な話をして その関係で五月の山岳部の発会式に慎さん さんの従弟の中川孫一さんがおりまして、 予科に入りました。先輩に慶応の早川種三 大正十一年、 震災の前の年に一 橋 ス

6. やほやで先輩だって山を知らないんだか れ はうるさいし、ぶん殴られたりこきつか 好まないんですよ。ほかの部に入ると規 頭したわけです。人と競争するのはあまり ースでもって楽しめるのは山だけだと思 に首を突っ込んでいましたが、結局マイペ 中川孫一さんともう一人おりましたか。 めて行ったんです。先輩の金田近二さんと 私は最初テニスとか柔道とかいろんな部 その年に四、五人で、日本アルプスへ初 たりするけども、 ほかのものは全部やめちゃって山に没 山岳部はできたての

望月 ただきたいと思います。

吉沢一郎さんが我々の仲間としては

的になった小谷部全助というのがおります

活躍の時代があり、

戦前ではいささか伝説

ますが、一橋では吉沢さんのころに最初の

53

六年間を過ごしました。イペースで楽しんだので、十分に満足してら。その時は十二、三人入ったんです。マ

倉商業にいた大正八年の富士山です。私が最初に山らしい山に登ったのは、大六年間を過ごしました。

ついこの間、関西支部の五十年史に水野

しかったよと文句を言ってましたね。かったらしいんですね、後であの時はくやかったらしいんですが、水野君は行きた

よ。機会があれば講演会を聞きに行ったり当時の他の大学の山男はみな先輩です

して、間接的に彼らから教えてもらいまし

など主だった連中とはみんな付き合いがあ八、鈴木勇、藤田信道、慶応の本郷常幸氏八、鈴木勇、藤田信道、慶応の本郷常幸氏た。法政大学の田中菅雄、城南山岳会の田

れましたよ。六十年振りに行ってみましたい五色温泉から一切経へ行った時、微温湯に五色温泉から一切経へ行った時、微温湯に五色温泉から一切経へ行った時、微温湯に五色温泉から一切経へ行った時、微温湯に五色温泉から一切経へ行った時、微温湯に五色温泉から一切経へ行った時、微温湯に五色による。

ここへ来ました。槍まで行くんです」と言前を聞いたら、「水野祥太郎です、一人で一スを歩いているもんだから、私がリーダースを歩いているもんだから、私がリーダーですよ。烏帽子の下の不動沢の付近で名ーですよ。烏帽子の下の不動沢の付近で名のコースで、彼が十五歳の時に会っているんコースで、彼が十五歳の時に会っているんコースで、彼が十五歳の時に会っているんコースで、彼が十五歳の時に会っているんコースで、彼が十五歳の時に会っているんです。

おましたよっ十年振りに行ってみましたが、すぐそばまで県道が来ていることを除が、すぐそばまで県道が来ていることを除が、すぐそばまで県道が来ていることを除が、すぐそばまで県道が来ていることを除が、すぐそばまで

たよ。

昼間にお汁粉屋が出るくらいのものでね。 我々はすぐに上に登って、毛無山でよくや れですが、スキーをゲタのようにして山登 のですが、スキーをゲタのようにして山登

まっていたが、山想会の方が早いんじゃと思っていたが、山想会の方が早いんじゃと思っていたが、山想会の方が早いんじゃないかとまっていたが、山想会の方が早いんじゃまっていかと思います。

谷が好きでよく歩いていたが、あの頃は 経雪期の未踏の山というのがあって、記録 にも出ていないような所を選んで登ってい にも出ていないような所を選んで登ってい た。東北の朝日へ行ったとき、頂上から下 を見たらテントが張ってあって煙が出てる んで、あそこへ行けば紅茶が飲めると思っ たで、あそこへ行けば紅茶が飲めると思っ と見たらテントが張ってあって煙が出てる がで、あそこへ行けば紅茶が飲めると思っ と見たらテントが張ってあって煙が出てる と見たらテントが張ってあって煙が出てる を見たらテントが張ってあって煙が出てる と見たらテントが張ってあって煙が出てる と見たらテントが張ってあって煙が出てる と思っています。

木谷の出口の所に雪崩の跡があって、氷み月、逆に大町から富山に出た。その時針ノを越えて、平の小屋、針ノ木谷から針ノ木峠越えて、平の小屋、針ノ木谷から針ノ木峠

んですが、スキー設備はお粗末なもので、が初めてだそうです。宿は非常によかった

ドが押すまいぞ押すまいぞと言って歩かな れて行ったんですが、怖い所へいくとガイ 学習院の連中がたむろしていた。 経て室堂の小屋に下りたら、 肝を冷やしてた。その後、 ここを通ったんだぞって言ったら、 たいになってたが、昨日か一昨日おまえら ったことは確かだ。でもあれは行かなくて 尾根を登ったが、東大谷の方から剣岳に入 て、いま小屋が建っているところから早月 結局奥まで行かずに、途中から左へ上っ いんですね。奥の左俣を登りたかったが、 東大谷へ行った時は、上市のガイドを連 立山、 田中薫さんや 一の越を みんな

どっちがほんとうかって聞くから、 具合の好い時に下りたもんです。雪の中か たらしい。平蔵谷は雪がちょうどよくて、 付けたが、今は割れて半分落っこっちゃっ っていたんで、「カニのハサミ」って名を サミみたいな岩があって、通れるようにな に登り、平蔵谷を下りたんだが、 んづまりの所でテントを張って次の日に剣 5 ないであんな垂直なガラガラの所を登った らいどっちだっていいじゃないか を山崎安治が見付けてね、 では昭和四年で年表が五年と書いてあるの らカモシカが出てきた、雪崩で落とされた 転がっても落ちないですぐとまっちゃう、 って言ってたんですがね。 んだな、 頭をやられていただろう。池ノ谷のど 角だけ持って帰った。これは記事 吉沢さんあれは カニのハ 一年く

を描いてね。後輩が針葉樹って誰が名づけで刷ったんだが、百部か二百部ぐらいしかで刷ったんだが、百部か二百部ぐらいしかのらなかったですね。それを持っている人は殆どいない。マッターホルンか何かの絵はったが、第一号の前にプ

ずがないって思っているんだね。(笑い)って言ったら、いやこんないい名(笑い)って言ったら、いやこんないい名

よかったと思う、ヘルメットもなにも被ら

トのようになっていて、一般には配らなか ういうところから『針葉樹』ってつけた。 それが印象深く頭にこびりついていた、そ で縦走しましてね。 な恰好をしてたんでこう呼ぶんだけど、そ とか村尾ペン公(金二)、ペンギンみたい から秩父の山に親しんでいた。 が書いてあるか忘れてしまったもんです いろ新しい記録が出てくる、私もそれに何 いて出てこない。これが見つかると、 っているはずだが、ごちゃごちゃになって 摘してくれたのは望月達夫君でね。私は持 った。一号と二号の間が欠落していると指 の三人で十日か十二日間で雲取から金峰 って出てくるし、それに僕らは東京者です 早稲田の年報を見ていると所々に針 最初の号は印刷してあるが、 針葉樹が多いでしょ、 近 パンフレッ

長の許可をとるのが大変だった。その時のアンデスに行ったのは電通にいる頃で社

なくなったけど、許可してくれた。 に説教したらしい。結局給料はずいぶん少 はまだ文化というものを知らないんだと逆 けど、松方さんはそんなもんじゃない、君 ていくほど山が面白いのかと言ったらしい と。社長は、五か月も仕事を放ったらかし がアンデスへ行くから許可してやってくれ んを尊敬していた。その松方さんが、 は友達付き合いというより、社長が松方さ 吉沢

た。

関係の深い人でしてね、社長の吉田さんと

ACの会長が松方三郎さんで、電通とは

だから私の一生は山歩きだったと白状して 終わります。 さえも一か月もいましたが歩き専門です。 僕の山登りは山歩きだったんです。 K 2

昭和十年前後— 意欲的な登攀

の時の二十七、八というのは大先輩に感じ 輩でありまして、私が十七、八ですからそ うに私と吉沢さんは十年ちがうもんですか 望月 のことをお話します。先にも申しましたよ 私が山岳部に入ったときはすでに大先 私からは昭和十年前後の一橋の山岳部 草創期のことをお話いただきました

> 三年ですが、その頃ちょっと岩っぽい所と おられた方とは、山でよくお目にかかっ った。だからあの頃大学の山岳部でやって か行きにくい所は限られた人しか行かなか らいです。昭和七年に入って、出たのが十 をおっしゃる方ですから、こんなおっかな い先輩がいるところで務まるかと思ったく られます。吉沢さんは歯に衣をきせずに物

ジナリティに富んでおりまして、岩登りに のことをよく知っていました。非常にオリ 谷口現吉さんの後輩にあたり谷口さんも彼 な登攀をしていたのがいました。八中では 私の同期に小谷部全助という大変意欲的

くなった。その死にかたというのが実にド 君は徴兵検査でひっかかって、戻されたあ ったりもしていたが、 してこれで練習しろと。残念ながら小谷部 ですが、そのそばに器械体操の鉄棒を設置 棟の小屋を大学に内緒で建てたのがあるん ので、部室、これは先輩がお金を出して別 は腕っぷしが強くなくちゃいけないという 上高地なんかに遊びに行っちゃ山に登 富士見の療養所で亡

> 問をもたれましたが、私は二十二年の暮れ すが、それを見て半日たらずで息をひきと ら具合が悪い状態になっていたらしいんで られたもので、かぜをひいて発熱してしま 見を訪ねたらしんです。寒い満員電車に揺 った。一時、心中をしたんではないかと疑 にそこで息をひきとった。小谷部君は前か った。それがもとで森川君は十二月十三日 知ったらしく、羊羹とかバターとか手に入 小谷部君がだいぶ具合が悪いということを 昭和二十年の秋が深まった頃に、森川君は 千葉の海岸のほうで療養をしていました。 る養分のあるものをリュックに入れて富士 レスとか鹿島槍の荒沢奥壁を登ったんです に気があって、よく組んで冬の北岳 、両君とも肺病になりまして。森川君は 小谷部君は一年下の森川真三郎君と非 バッ

ったことを聞きました。 お姉さんから、偶然に同じ日に息をひきと わりであった洲崎いささんという小谷部 に復員して二十三年の一月か二月に、親

に降りてくる時、 が非常に強かった。五竜に登って唐松小 かにもエピソードの多い男でして、酒 小屋にいた某先輩が小谷 屋

ラマチックというか

がかかって「マッチ箱」の下に取り付いた 付いたところが、逆層で非常に悪く、 さんと私の三人で第四尾根の真下から取 また、すぐれたアイディアもある男でし キーで八方尾根を下りて行った、 と言って、 部が降りてくるんじゃ酒を飲まれてしまう 登られた翌年で記録がまだ活字になってな いいのが残ったという珍談もあるのです。 クの下に隠して、上に安物を置いておい 北岳バットレスの第四尾根を、 オッとばかりその安物を一本空けてス 十一月の初めに小林重吉と村尾金二 いいウイスキーはリュックサッ おかげで 立教が 時 間

第十八回 山岳史懇談 一橋大学山在郭のサ

> かったということでした。 く雪で隠れていて、はしごもなにもいらな 63 っていって、そこではしごを作るつもりで 丈夫な木を材木のまま「マッチ箱」まで持 17 ようかと小谷部に相談したら、 いところだが、厳冬期にやるときはどうし トンを打つくらいです。 ことはないんですが、その頃はせいぜ 登ったんですが、今なら道具もあるし何て なのです。私たちは巻く手はないからって 教は「マッチ箱」の右手を巻いているよう 時はもうかなりおそかったと思います。 た。結局その時はスラブのところはうま ればいいじゃないかということで、 あそこはしょっぱ はしごをか V

テックスというような薄いゴムが入手しに で開けずに行った。 までガロン缶のまま上げざるを得なかっ 背中から灯油を浴びちゃうから一定の高さ あけるとかつぐときポチャンポチャンして くくなっていて、ご婦人の生理帯に使って ー」というのが具合がよかった。でも一旦 冬のテントでは灯油を使っていたんです 北岳へ行ったときは第一テントの池ま ガロン缶にトラの印がついた「タイガ 開けたあとはふさぐラ

> とラッシュで登られたんですが、 業です。 磯野さんは、 た磯野計蔵さんがおられて、 ラリーに本を寄贈した、 まく縛着して担い いるゴムがいいと小谷部が買ってきて、 私と吉沢さんの中間には、 堀田弥一さんが昭和五年十二月に人夫 冬の鹿島槍がまだ登られていな 有明の だという話もあります。 明治屋 昭和六年の 本会のライブ の社長だっ 月

と燃料が炭だったからガス中毒者がでた。 容れて稜線の小屋から られた。 岳部で稜線にテントを張るということを 線の小屋が使えないことと、使おうとする きていくというのが一つの方法だっ 登山は、 島槍に登っている。 荷物を上 種池の小屋が使えると聞いて、 たという記録はあまりありませんから、 番早く解決に手をつけたのが、 磯野さんたちは中山彦一の意見を 一時そういう所から大きな山を登 麓から星を戴いて午前 げて扇沢から登って爺小屋から鹿 戦前の学生の初期冬山 ガイドの中山 鹿島槍を登ったんで 秋のうちに 慶応の山 彦一から

れは意義のある企画だったと思います。

のことは山崎安治君とも話したことがある

なりました。 が、彼はそういう点を書き残さないで亡く

早稲田からも薄い『リュックサック』が出 ている、そういう時代だったんでしょう。 ものをと考えてのことだったと思います。 るのも負担だったので、薄くても質の高い くなっています。これは経済的にも執筆す いような分厚いのを出されたが、その後薄 『登高行』が記録と本文を別々にしてもい 復活しています。八号を出した頃慶応の にした。これが行き過ぎだというので後年 大きめにして、八号まであった中扉や雑 われています。倹約をするために、組みを 編集しましたが、とくに需要があったとい したのは七ー九号。九号は殆ど私の独力で 十一号までは同じスタイルです。私が関係 は吉沢さんが発行人になっている。五から の間がじつは欠落している。あと二、三号 ら『針葉樹』という名前がついていて、こ 科大学山岳部年報」といっている。二号か んです。一号と称していますが、「東京商 版ですが、針葉樹とはどこにも書いてない 「針葉樹」のことで。ここにあるのは復刻 山小屋欄などを取って本文と記録だけ

> は多くても二十五~三十人、少ない時は二 ても多くないから、山岳部員は私の記憶で 一百人ぐらい、予科三年、本科三年合わせ 橋はもともと学生が少ない、一学年で

す。一人でも生きておればここに来てもら えたんですが、みんな亡くなりました。戦 うな登山に傾斜していた。根本大君までの 田亮三が一つの流れであったように思いま 戦前の時代は、小谷部、森川、大塚武、山 のように社会人山岳会がやっておられたよ 極地法などは無理でした。逆に小谷部全助

ようです。

ぐらいまではわりあい活発に行われていた

後のことは山本健一郎君にバトンタッチし 十人前後でした。 ろうという力はなくて、当時流行していた 戦前は全体がまとまって大きいことをや

戦後―戦前を凌駕し海外へ

ます。

六年のブランクがある。私は昭和三十二年 ていて、十一号が昭和三十年ですから、十 になっていますが、十号が随分薄くて紙質 山本 実感がします。これは昭和十四年に出され も悪く苦しい時代に出されたものだという 『針葉樹』は一橋の心の支えのよう

> んが滝谷の第四尾根を登ったとか、十六年 と、昭和十四年十二月に大塚さんと山田さ 下さっています。改めて読みかえしてみる さんとかがそれぞれの時代を簡略に書いて 海道支部長だった大塚武さんとか山田亮三 渡しとしてお願いした。その中に本会の北 あったので、主な先輩に原稿をその間 めての号が出た。十号との間に長い期間 に卒業したものですから、在学中に戦後

によく行けたもんだと思います。 たことに十九年二月に奥又白で合宿をして りどころではなかったようです。ただ驚い Aフェースなんかを登っている。あの時期 昭和十七年ぐらいになるとさすがに山登

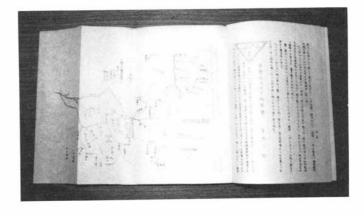
谷部さんにあこがれて入ってきたのもい 制高校の山岳部である程度やっていて、小 備もよくなった。それに集まった連中が新 費の八割ぐらいをいただいていたので、装 をなしてきた、部員は三十名くらいに増え えて、昭和二十八年ぐらいから山岳部の体 て、OB会からは年間十万円近く、OB会 その後他の山岳部と同じように少し途絶

たり、 てきました。 ら戦前の水準に戻ったろうという感じがし ブ尾根や畳岩、翌年には鹿島槍をやった 出があります。二十九年の三月ごろにはコ るとかいろいろ楽しいというか傑作な思い 穴をあけて、濃い塩水を入れて長持ちさせ せられた。あるいは尽きてしまった電池に っていためたものと飯盒の飯で岩登りをさ たたいてセミを落として、羽根と足をむし 農家から米を分けてもらってから山に入っ 分の一ぐらいの人間が富山に行って郊外の していた。その頃は合宿の二、三日前に三 宿に参加したが、隣で日大なんかも合宿を めた、私はその年に新入生として剣沢の合 た。その頃から山登りらしい山登りをはじ 北岳のバットレスを目指したりどうや おかずが無くなると、朝ハイマツを

昭和三十一、二年ごろからOBや現役の昭和三十一、二年ごろからOBや現役の中から海外の山登りを目指そうという動きが、そのあ戦前の水準に戻そうという動きが、そのあとは海外へと二つの段階にわかれて活動がとは海外へと二つの段階にわかれて活動がなされた時期だと思います。

倉地 一橋のアンデスとヒンズークシュの 二つの遠征に行ったのは私だけで、運がよ かったと思っています。我々の時代はかな り人数の多い時期でしたが、個人的に打ち 込んでいるものがあれば勝手にやるという 自由な雰囲気で、団体登山よりも個人登山 自由な雰囲気で、でいるというであるという可象があります。

ヒンズークシュの遠征は一九六七年です ヒンズークシュの遠征は一九六七年です おき、それを中心にまわるという形になっ てきて、いまでは山岳部を廃止すべきか否 かという問題もおこり、へたをすると一橋かというところまできています。(後註・その いうところまできています。(後注・その 後特に若手の O B の 努力で廃部という心配 後特に若手の O B の 努力で廃部という心配 しょうすれつつある。)



ロシアの山と探検の本

田 村 俊 介

について、少しお話しさせていただきま りに整理してきました。そのあたりのこと き写しまして、探検関係と山の本を自分な どういう本を持っているか、ノートにも書 会からご依頼がありました。私も、 いうことで話してくれないかと、 ロシア・ソビエトの探検および山の本と 図書委員 自分が

探検の歴史的背景

がロシアの探検の大きなグラウンドになり 探検については、ソ連の領土だけではな 中国の東トゥルケスタンという地域

き、中央アジアには十九世紀の中ごろにど されて、シベリアにも十六世紀末に出てい てみますと、ロシアの領土はどんどん拡張 その前に、帝政ロシア時代の探検を考え

ろ調べていく。

ソビエト政権に入って、そ

日本でも訳本があまり出なかったこともあ

あります。 らが非常に得意としている北極海の探検が ケスタンの探検なのですが、もう一つは彼 こを探検していった。 の探検は今の西トゥルケスタン、東トゥル もう一つ違う分類をしてみると、内陸部

一という広大な領土になっていますが、そ の国土の六十一倍、全世界の陸地の六分の んどん南下していった。ソ連の領土は日本

ます。

ントを張り、氷の流れに身を任せていろい 氷の小さな島に飛行機で飛んでいって、テ のがあります。船ではない、浮遊している シア語でスタンチヤ・ナ・リドゥというも わけです。たとえば氷上ステーション、ロ 西と東を結ぼうと、ものすごい努力をする りまして、彼らは北極海の航路を見つけて これも非常にたくさんの本が書かれてお

> って日本のほうにやってくるという、広大 たり、逆にアフリカ、大西洋と太平洋を回 です。かつてのペテルブルグから船で出て ういうことをかなり精力を注いでやりま いって、インド洋を渡って日本にやってき 大きくあります。 す。そういう北極海の探検が、 もう一つは十九世紀前半の世界 別の分野で 一周

則がありまして、古本屋で買っても持ち出 本しか外に持ち出してはいけないという規 のはソ連には、一九四二年以降出版された 本も自由に買えなかったわけです。という 較的知られていません。訳本も少ないし、 わらず、ロシアの中央アジアの探検家は比 のロシアの探検家が出てきます。にもかか 検史をお書きになって、その中にも二、三 れていて、深田久弥先生も中央アジアの探 っている人の中でも多くの方が関心を持た 検ですが、中央アジアというのは、山をや さて、最初に言いました中央アジアの探

中央アジアの探検は、一八五六、七年、

黒船が日本にやってくるころから始まりま

洋への入口を確保しようとするけれども、 タン、ウズベキスタン、トルクメニスタン が西トゥルケスタン、今でいうとカザフス した。それと時を一にして、 に遅れじと出ていたわけです。 ころ、イギリスは未開の地を獲得しようと ていって、領土の拡張政策をとった。 をえず体制の整っていない中央アジアに出 れども、列強がいて出してくれない。やむ フランス、イギリス、トルコにかなりダメ って争うわけです。ロシア帝国はそこで外 などにどんどん南下していきます。 して躍起になって出ていき、 ジを与えられる。ヨーロッパに出たいけ ロッパ勢とロシアが黒海の領有権をめぐ その少し前にクリミア戦争があって、 ロシアもそれ ロシアの軍隊 その 3

セミョーノフと門下たち

を出た人で、その人が最初に南に下がって ーノフという貴族出のペテルブルグ大学 その最初の探検家は、 ピョー トル・セミ

> がら、 たようで、彼が最初の人といってもいいと とシベリア中央部が合するところにある町 わけです。 者として動植物、鉱石などの調査もやりな ていきましたが、 思います。二、三の仲間、画家なども連れ そのころは探検といってもほとんどなかっ るアルマアタという大きな町に着きます。 してきて、 ですが、ほとんどの探検家はそこから南下 衛星を打ち上げているカザフ共和国の北端 セミパラチンスクという町に行く。 ので、タランタスという箱馬車に乗って、 すごいもので、もちろん汽車はありません いくわけです。そのルートは今から思えば 今の天山の中心部に分け入っていく 今のカザフスタンの中心地であ ほとんど独力で、 博物学 今宇宙

が訳して『天山紀行』という題でベースボ Œ されます。日本では、 として『天山の旅』というタイトルで出版 が、その第二巻に彼が行った探検について 録を書きます。それは全部で四巻あります 教会の神父につきロシア語を勉強した人 いています。 彼は晩年、『メモワール』といって回想 それが戦後、 樹下節というロシヤ 天山 の紀行本

> には、 この本がロシアの探検の一つの大きな根幹 ルダン=セミョーノフ著、ベースボールマ になるのです。また、セミョーノフの伝記 ガジン社)があります。 ルマガジン社から出版されております。 私の翻訳した『遥かなる天山』(ア

1

ます。 その人たちに金銭的な援助を与えたり、 そののち地理学協会でいろいろな貢献をし テルブルグに連れてきて学校に入れたりし 検家がいるんですが、非常に貧乏なので、 シベリアの人でボターニンというすごい 人も輩出しておりますが、彼が庇護を与 が出ていったわけです。 して、セミョーノフの下からすごい探検家 最大の中央アジア探検家もいました。こう の中にプルジェヴァリスキーというロシア て、いろいろ面倒をみてやるわけです。 え、金銭的な援助もしています。たとえば 彼は若くして天山の探検を二回やっ 地理学協会はロシア人の探検家を何 て 1 探

ケスタンにありました。それを全部ロシア コーカンド汗国という三大汗国が西トゥ その前に、今はソビエト領になってい かってはブハラ汗国、 ヒヴァ汗国

探検して、『トゥルケスタン地方の旅』とかヴァリハーノフといった人たちがいましかヴァリハーノフといった人たちがいましていきます。その中にはセヴェルツェフとに併合しますが、併合と同時に探検隊が出

向こうで手に入れることができました。いう分厚い本を書いています。これは私も

それから、ポターニンという人は北西モンゴル、昔の外モンゴルにおけるフォークンゴル、大類学的な研究をやって本を出していって全部で四巻ありますが、日本でも一をだけ『西北蒙古の童話と伝説』という題巻だけ『西北蒙古の童話と伝説』という題巻だけ『西北蒙古の童話と伝説』という題をはないかと思って、いろんな人に話を聞いたんですが、第一巻は訳書として出なかったようです。水野勉さんも「田村君、あったようです。水野勉さんも「田村君、あったようです。水野勉さんも「田村君、あったようです。水野勉さんも「田村君、あったようです。水野勉さんも「田村君、あったようです。水野勉さんも「田村君、あったようです。水野勉さんも「田村君、あったようです。水野勉さんも「田村君、あったようです。水野勉さんも「田村君、あったようです。水野勉さんも「田村君、あったようです。水野勉さんも「田村君、あったようです。

見ておりません。

プルジェヴァリスキーの四つの旅

その次にくるのはプルジェヴァリスキーは今の人よりです。プルジェヴァリスキーは今の人よりです。アルジェヴァリスキーは今の人よりです。という強い願望がありまして、できうればという強い願望がありまして、できうればという強い願望がありまして、できうればという強い願望がありまして、できうればという強い原理がありまして、できうればという強い原理がありまして、できうればをあげてから中央アジアに出ていってもいのではないかというアドバイスがありまいのではないかというアドバイスがありまいのではないかというアドバイスがありまいのではないかというアドバイスがありまして、ウスリー江を遡る探検をやるわけでして、ウスリー江を遡る探検をやるわけでして、ウスリー江を遡る探検をやるわけで

の『ウスリー地方の旅』という本をご主人 をしているうちに、プルジェヴァリスキー シア語を教えに来ていまして、いろいろ話 という方で、主人の国にぜひ行きたいとい になって行方不明になったそうです。 この探検に入っていたのです。その本の訳 が訳されたという話を聞きました。私もそ てきたのです。この方が偶然私の会社にロ うことで、女の子を二人連れて日本にやっ 満鉄の調査部におられて、戦後ソ連の捕虜 んという方が訳しておられます。この方は スリー地方の旅』という題で、姉川盤根さ は出ていまして、大連日々新聞社から『ウ その前にすでにプルジェヴァリスキーがそ 海にはさまれた地域を探検するんですが この人の奥さんがオリガ・アネガワさん

語講座を受け持ておられます。おられるんですが、一人はNHKのロシアおられるんですが、一人はNHKのロシア

たので、非常に驚きました。

の時プルジェヴァリスキーを訳していまし

す。

『デルス・ウザーラ』という映画がありま

れについては『モンゴルとタングート人のャフタからチベットに下がってくる旅、こプルジェヴァリスキーの第一回の旅はキ

京からチベットまで探検して、そのときもいんじゃないかという気がします。彼は北探検家なので、もう少し紹介されたら面白ていました。ポターニンというのはすごい

アルセーニエフは今の沿海州とオホーツクいう人が書いた本を映画化したものです。したが、それは革命後にアルセーニエフと

いた銅版画が何枚もつけてあります。

私

ています。という単で二冊本で出生活社という出版社がありましたが、そこと活社という出版社がありましたが、そこ国』という本があります。この本は、昔、

プルジェヴァリスキー

0

第二回

0

旅

がの本

ジェヴァリスキーの間でロプノー 論争といって、スヴェン・ヘディンとプル が第二回の旅でした。そして、ロプノール トゥルケスタンから天山を越えてロ は、『天山からロプノールへ』 が違って非常に論争になります。 ロプノールの位置を同定しますが、その旅 ルへの旅のことが書いてあります。 白水社から出ています。これはロシ パ人では最初にプルジェヴァリスキー という題で ル ープノー 0 3 アの西 位置 1 が U

一の弟子であるロボロフスキーという人が第三回の旅がいちばんすごい旅でザイサン湖というのがありますが、そこから南下して中国のハミまで下ってきて、黄河の下して中国のハミまで下ってきて、黄河の下して中国のバミオで、中に彼の第書は非常にすばらしい本で、中に彼の第一の弟子であるロボロフスキーという人が

も五年ぐらい前に「この一本展」で山岳会の晩餐会に出したことがあるんですが、あまり出して汚されるのも嫌だなと思いまして、それ以後はあまり外へ持って出てないんです。その本は一八八三年に出された本んです。その本は一八八三年に出された本です。

0 す。ところが、中国の地図でも、 る、 ところは昔からおれたちはよく知ってい た。 源 ジェヴァリスキーは、 たが、あそこに最初に入るわけです。 す。このあいだ、 ノール、ジャリンノールに出ていかれまし 第四回の旅は黄河源流を突き止める旅で オリンノールとジャリンノールの位置 流を突き止めたと学会で発表をしまし しかし、中国人に言わ 古い文献もいっぱいあるというので 日本山岳会からもオリン おれが最初に黄河の せると、 黄河源流 あんな プル から

反対になっていたりしているわけです。 ブルジェヴァリスキーは黄河源流で現地 大か殺したりしたのですが、その川にラズ 大んです。すると中国は非常に怒って、ど たんです。すると中国は非常に怒って、ど たんです。すると中国は非常に怒って、ど

翻訳した『中央アジアの探検』です。
翻訳した『中央アジアの探検』です。

パミール・天山・蒙古・チベット

ど真ん中に、 まで測るかで長さもかなり違うらしいんで 方がいろいろあるらしくて、 世界最大の山岳氷河というけ 検家の名前をその氷河に付けたわけです。 しますけれども、 ンコ氷河はもっと長いとロシアの人は自慢 アチェン氷河は七十二キロで、 ムの中にあると言われていたんですが 氷河はシアチェン氷河といって、 に大きな氷河があります。世界最 たフェドチェンコがいます。 次に、ロシアからパミール 全長が七十七キロとい フェトチェンコとい 今パ に探検に入っ 枝氷河のどこ フェトチ カラコル ミール 大の Ш I 0

はないかと言われています。応フェトチェンコが世界最長の山岳氷河で応フェトチェンコが世界最長の山岳氷河です。だから、シアチェンかフェトチェンコす。だから、シアチェンかフェトチェンコ

フェトチェンコは『トゥルケスタンの旅』という本を書いています。パミールのレーニン峰を見るわけです。そのころ、中央アジン峰を見るわけです。そのころ、中央アジン峰を見るわけです。そのころ、中央アジン峰を見るわけです。そのころ、中央アジン峰を見るわけです。そのころ、中央アジン峰を見るわけです。そのころ、中央アジン峰を見るわけです。その後レーニン峰と名前が変わったした。その後レーニン峰と名前が変わったした。その後レーニン峰と名前が変わったした。その後レーニン峰と名前が変わったした。その後レーニン峰と名前が変わったんですが、今はペレストロイカでレーニン・は、という本を書いています。

ノスチとペレストロイカでその領域までど言うことはできなかったけれども、グラスニンでした。そういうことは今までだれもニンでした。そういうことは今までだれものときの大殺戮、ロシア皇帝をはじめとかでした。そういうことは何事なでした。そういうことは何事ながあれていては悪いことは何今までレーニンについては悪いことは何

もはたしていつまで今の座に座っていられもはたしていつまで今の座に座っていられは、レーニン峰もひょっとしたら何年かすると名前が変えられるかもわからないということです。

その後、博物学者や地理学者が、

パミー

ル、天山、今のソ連領の西トゥルケスタンル、天山、今のソ連領の西トゥルケスタンだとこへ行くかというと東トゥルケスタンだということで、ロシアの国境を越えてどんどん出ていきました。プルジェヴァリスキーの弟子のロボロフスキーは、天山から青海を通ってチベットに出ていきます。それは私が『天山から青海へ』(白水社)という私が『天山から青海へ』(白水社)という類で訳しています。

日本人はシルクロードというと、タクラマカン砂漠の北と南の道、それに天山の北側の道しかなかったような感じでどんどん行かれていますが、天山山脈のど真ん中に非常にすばらしい土地があります。それはエルドゥス盆地と言われていまして、そこから昔の突厥、今のトルコ族が出てきたとから音の突厥、今のトルコ族が出てきたとから音の突厥、今のトルコ族が出てきたというと、タクラ

す ルカラというところに、ハンテングリとかと 私も去年、天山に行きました。天山のカれ 辺には遊牧民がかなり住んでいます。 中で、そこに細い川が流れていて、川の周

で、自分がみたこともないところを非常に に書かれているんです。中国の文献だけ 驚きました。 正確に描写されているので、ほくは非常に ら類推されているわけですが、 方たちですので、中国語で書かれた文献 究』という本でされています。中国学者 究されて、白鳥博士は道の考察を『西域 われた非常にいい馬や民族学的なものを研 豊八博士、松田壽男博士などが、天馬と言 あるんです。かっては白鳥庫吉博士、藤 ら見たら、ものすごく広大な高原、 ポベーダという天山でいちばん高い山に入 す。私もソ連領だけですがヘリコプター ん中に、天山の山あいを縫って道がありま 天山北路、天山南路と言われている道の真 るためのヘリポートがつくられています。 ルカラというところに、ハンテングリとか 非常に正確 草 か

が豊かに生活しているところに入られたますが、北路と南路の間の高原上の遊牧民これから中国に行かれる方も多いと思い

ら、非常に面白いのではないかと思いまら、非常に面白いのではないかと思いまら、非常に面白いのではないかと思いまら、非常に面白いのではないかと思いまら、非常に面白いのではないかと思いま

その後に出てくるのがコズロフという人ですが、この人の本は白水社から『蒙古とですが、この人の本は白水社から『蒙古と青海』という題で出ています。コズロフはまでも今の中国領の東トゥルケスタンを自身でも今の中国領の東トゥルケスタンを

わけです。

す。 を継いだ探検家たちも、何とかそこに入 ですない。結局、ヤングハズバンドが軍隊 ですない。結局、ヤングハズバンドが軍隊

ŧ, グの自分が属している参謀本部に報告する だけれども、そのことについてペテルブル す。そして彼はチベットまで下りていくん す。それは本当に偶然だったらしいんで ていくときに、偶然に城を発見するわけで モンゴルの南端の河を通って中国領に下り 国だったんですが、エッチンゴルという外 す。あそこはタングートたちがいた西夏の が、死の町・カラホト、 ロフは、このあいだもNHKでやりました 引くことになります。それが幸いしてコズ うことで、ラサを目指す探検から少し身を 7 ラサは英国人にやられてしまったとい ズロフもラサに行きたかったけれど 黒水城を発見しま

という命令が来ます。それで、チベットかだ、すぐ引き返して城をよく調査してみろら、お前が見つけたのはすごいことなんら、お前が見つけたのはすごいことなん

ながらそこに到達できないわけです。その

つけるわけです。ど、かつて栄えて滅びた西夏王国の城を見と、かつて栄えて滅びた西夏王国の城を見し、そこで茶碗のかけらとか経典、絨緞なら慌てて引き返して、カラホトの城を発掘

テレビを見ていて非常に感動しました。 の廃墟の大きなストゥーパでした。それを の廃墟の大きなストゥーパでした。それを で、最初に画面に出てきたのが、カラホト で、最初に画面に出てきたのが、カラホト で、最初に画面に出てきたのが、カラホト

です。 に解明されています。 のも入っていたので、 奴の王の墳墓の中からいっぱい出てきまし 同時に考古学上で非常な業績をあげるわけ てチベットをものすごく望んだんですが、 匈奴の墳墓も見つけます。彼は探検家とし 西のノインウラというところで、 ッパとの交流もあったということが た。そして、その中にはヨーロッパ的 コズロフはその後、ウランバートルの北 匈奴たちが持っていた持ち物が、 かって匈奴はヨー かつての 匈 U

革命後にニコライ・レーリヒという人まだ何人か探検家はいますが、もう一

の演劇関係の装置の絵を描いていた人な ですが、翻訳はしない、これはこのままいます。この人は最初は画家で、フラン 子さんが翻訳出版する権利を持っている

れなかったんですが、今は再評価されていた人なですが、インドにたいへん関心を持って、その後インドに移り住みました。彼はで、その後インドに移り住みました。彼は哲学者でもあり、画家でもあり、詩人でもあり、探検家でもあります。ロシアでは今あり、探検家でもあります。ロシアでは今あり、探検家でもあり、画家でもあり、詩人でもない。人の演劇関係の装置の絵を描いていた人なスの演劇関係の装置の絵を描いていた人なスの演劇関係の装置の絵を描いていた人な

を下りて、インドに帰っていく旅をしましるで出ていきます。そこから息子と奥さんを連れ、もちろんラクダ、馬、ロバを連れて、一九二五~んどん北上し、アルタイ山脈を通り、シベルアの南端を通って、バイカル湖のところと、まで出ていきます。そこからまたモンゴルを下りて、インドに帰っていく旅をしまし

的な絵で、すばらしいものです。これは息のでお見せしますが、非常に瞑想的な東洋いています。ここに画集を持ってきましたいています。ここに画集を持ってきました。

した。

とが多くなって、

内容も複雑になってきまる要素、事物を研究するこ

素よりも学術的な要素、

合出版から上下二巻で出版されています。合出版から上下二巻で出版されています。探検は、一応、一九一七年のロシア革命で終検は、一応、一九一七年のロシア革命で終わりを告げると言っていいと思います。探わりを占めていて、参謀本部の少尉から大性分を占めていて、参謀本部の少尉から大性ぐらいまでの人が、コザックの兵隊を連れて探検に出ていっていました。しかし、れて探検に出ていっていました。しかし、本様に出ていっていました。といいます。

ソ連の近代アルピニズム

が、 入るわけです。主にオーストリア、ドイツ 帰ってきて、近代アルピニズムがロシアに ていくわけで、 えつけていったということです て帰ってきて、ソ連に登山というも のババリア地方の岩山を登っていた連中 ロッパのアルプスに登っていたロシア人が のも革命後です。ロシア革命の後に、ヨー そうなると、 ヨーロッパの近代アルピニズムを持 ソ連のアルピニズムとい わ れ われは山のほうに入っ のを植

そもそもソ連の登山というのは、GTO たいいまして、労働と国家防衛のための体力づくりという大きな眼目があって、すべてのスポーツが体力づくりということで、てのスポーツが体力づくりということで、てのスポーツが体力づくりということで、大衆登山を有名な登山家がカフカスの面白い本を書いていますが、大衆登山といった見地を書いていますが、大衆登山といった見地を書いていますが、大衆登山といったのではないかと思います。大衆登山のからは、そういう本が比較的書かれにくかからは、そういう本が比較的書かれにくかからは、そういう本が比較的書かれにくかからは、そういう本が比較的書かれにくかからは、そういう本が出来登山というのは、GTO

になったんですが、ヴィタリー・アバラー が、そういうのはほとんどありません。 のように、 ニズムを盛んにした人でもあり、 立者と言うこともできるし、 アバラーコフは、 コフのサイン入りの本です。 ときにヴィタリー・アバラーコフにお会い の登頂年代記を持ってきてくださいまし た『ピーク・レーニナ』というレーニン峰 ょうは織内信彦さんが、ベレツキーの書い んだロマンチックな山の本があるんです はジャン・コストの『アルピニ 家でした。 織内さんがモスクワにいらっしゃった 連の山の本といっても、 われわれが若いころ熱中して読 ソ連のアルピニズムの創 ソ連のアルピ 310 ヴィタリー・ ストの心』 最強の登 2 18 き 13

エウゲーニィ・アバラー

・コフは

『ソ連の

外国の登山家が年に二百人ぐらい入るそうがいました。弟のほうがヴィタリーよりもがいました。弟のほうがヴィタリーよりもがいました。弟のほうがヴィタリーよりもがったりた。弟のほうがヴィタリーよりものでは強かったらしいです。エウザーニィ・アバラーコフはコムニズム峰に最初に登った人です。今はオープンされて

ですが、当時はスターリン峰と呼ばれていーリンの名前を冠すべきだろうとスターリーリンの名前を冠すべきだろうとスターリーリンの名前を冠すべきだろうとスターリーリンの名前を冠すべきだろうとスターリーリンの名前を冠すべきだろうといて、後すぐに、一時ソ連邦峰とか言っていて、後すぐに、一時ソ連邦峰とか言っていて、その後コムニズム峰となりました。その次に高い山がレーニン峰ですが、レーニンのに高い山がレーニン峰ですが、レーニンの大きな音ができた。

常に力を入れるようになります。

ホー ス峰、 を 峰 関心も非常に低かったんです。コムニズム はソ連の山はオープンされていませんで、 はその本の翻訳を『岳人』に抜粋で十二回 がありますが、その登頂記、 ぐらい連載したことがあります。そのころ 高山にて』という厚い本を書いていて、 書いています。 レーニン峰、 ル峰、トゥルケスタン山脈のことなど エンゲルス峰という岩峰のすごい山 あとはワハン谷にマル それからパト 私 7

ます。望月文庫の中にもあるんですが、 ドイツの連中がパミールに入ってきて アバラーコフの少し前、一九三〇年ごろ

15

Vi

もロシア革命の革命家で立派な人です いものだったらしいのですね。 ちもそれを免れなかったというぐらいすご ころで、いろんな組織の はスターリンの血の粛清が猛威を振るった によって殺されます。一九三七年というの 訳して白水社から出版したんですが、 す。私もこの人の本『未踏のパミール』は のソ連側の大将がクリレンコという人で パミールに入った時のことです。そのとき とソ連の科学アカデミーが合同で、 ります。ドイツ・オーストリア学術振興会 『アライ・アライ』とい ア出身ですが。同郷のグルジア出 端から殺されました。スターリンはグルジ 一九三七年、私が生まれた年にスターリン レンコは最後は検事総長までなったのに、 ・リックマースという人が書いた本が 頭に立つ人が片 ・う題 0 クリレンコ リッ 身の人た クリ ク が あ

本は、ザトロフスキーという人が書いたり、コムニズム、レーニン、コジェネフスリ、コムニズム、レーニン、コジェネフスリ、コムニズム、レーニン、コジェネフスを書かれていますが、その第一のタネーをできない。深田さんがソ連の山のことを

九三七年に殺られてしまいます

「中央アジアの山と氷河」という本です。 吉沢さんが訳さ

れており、そういう本で日本の登山家は情 ら、かなり古い本ですが、 ドイツ語の訳があり一九四八年の本ですか

報を得ていたということです。

天山というのは欧米の山の本よりも面白み トルの山はないということで、パミール、 常に華麗で派手なヨーロッパ・アルプスの というとヒマラヤとかカラコルムとか、 が少ないのではないかという気もします。 高さもヒマラヤに比べて劣って、八千メー 岩登りの本などを読み慣れていますから、 ぼくらは山の本 非

ソ連登山界の現状

ですが、その後体育スポーツ委員会という 下に登山部があって、 のができます。これは農業省などの省と同 行くようにということでやっていたわけ 大衆登山のころは、ソビエト旅行協会の 大衆ができるだけ山

はガラッと様相を変えるわけです。 連盟が組織され、それとともにソ連の登山 格の委員会ですが、その中にアルピニズム 登山と

険なスポーツである、ハイキングのような 調子で登っていると事故が増えるのではな いうのはスポーツである、しかも非常に危

ツマンとして心技体そろった登山家をつく ても恥ずかしくない優秀な登山家、 一方にあって、もう一方では、世界に出し スポー

の遭難をなくさなければいけない。それが

いか、カリキュラムをきちんとつくって山

かったです。というのは、

かポリャコフという人が何冊か山の本を書

していた山の好きな小説家、

シーモノフと

あと、私もモスクワにいるころに仲良く

いているんですが、あまり面白い本ではな

ニスト、三級アルピニスト、初心者という りだすことを考えるわけです。 そして、一級アルピニスト、二級アルピ

ーにはなれないわけです。

国際級のスポーツマスターと、登山家を実 ポーツマスター候補、スポーツマスター、 段階があって、一級アルピニストの上はス 力によって分けました。この時点では、ソ

なる規定も決まっていました。 ポーツマスター候補がスポーツマスターに 六級まで分けていたんですが、たとえばス 連の山を困難度によって一級から最困難な

す。一つは技術登攀で、 連の山 岳競技は四つに分類されていま 五千五百メートル

> 以 以上の難しい岩壁を登る。メンバーも つ目は高所技術登攀で、 で、六千五百メートル以上の山に登る。 以下の岩壁を登る。二つ目は縦走で、二 上の山を縦走する。三つ目は高所登攀 五千五百メートル 何人 四

れかの基準を満たさないとスポーツマスタ という規定もありますが、この四つの分野 もしくは六級の登攀を二度やる、 なって、最困難な六級の登攀を一度やる、 位に二度なる、もしくは二位か三位に一度 のどれかで一位になる。もしくは二位か三 このいず

たしてはじめて国際級スポーツマスターと 本で二位か三位になる。こういう基準を満 登る。一本は初登攀である。あと一本は山 変わったらしいですが、この当時は六級の いう、競技者として最高のランクに入るわ 岳競技で一位になるか、もしくはあとの二 山を四本登る。そのうち一本は隊長として マスターというのがあります。 スポーツマスターの上に国際級スポ 今は規定が リツ

連の四つの七千メートル峰の登攀ルート ここに本を持ってきたんですが、これ かい

これはカフカスで、 のルート図があります。 って全部で五冊ですが、ここに全部の岩場 と概説です。(さらに別の本を取り出 カフカスはあと二冊あ

ます。 の高峰のほとんど全部のルートがリストア 稜とか南壁、北西稜を経て南壁とか、 ウンドになっているわけですが、山の名 四山岳地域がコンペティションの対象グラ をアルピニズム連盟が出しました。 コーカサス、天山、パミール、アルタイの ットを各登山団体に配っていたらしいんで のどの等級に入るかというのは、 プされています。そこには五Aとか五 今まではそのルートが一級から六級まで 一Aとか二Bなど困難度が書いてあり 高度、その山のルート、たとえば北西 今度こういうもの(本を取り出し) 登山シーズンは原則的に夏ですが、 パンフレ ソ連の ソ連

> と思います。そういうクラスの人が優に五 十人はいるわけです。 P だと思いますが、日本の登山 ごい登山家たちです。ぼくらは見ていてこ のにはならない。日本の最高級の登山 ミールに行った方も多いので皆さんご存じ れが本当の登山家だろうなと思います。パ そうやって登っているものですから、 対抗できる人はごくわずかではないか 家とは比べも 家で す

てトレーニングをしているわけです。 日だったのですが友達に電話したら、奥さ 0 言っていました。土曜、 んですが、今トレーニングに行っていると んが出てきて、彼はぼくと同じ五十三歳な 自分たちでもトレーニングしています。こ あいだもレニングラードに行って、 こういう厳しい制度の下で鍛えられ 日曜は走ったりし ソ連 日曜 て、

す。

と違うと思います。 が持っている登山家のイメージとはちょっ のルートを登るんです。だから、われわれ ぐらいかけて、七千メートルの岩壁や氷 しまうわけです。そこからたっぷり二十日 いきなり壁の下のベースキャンプに行って ヘリコプターですから、アプロ ーチか

部

いて、出るとすぐ西稜の稜線に出るわけで 八千二百メートルぐらいの最終キャンプに す。日本人は絶対にやらないと思います。 稜に登ったとき彼らは夜間でも登ってい いですが、一九八二年にエベレストの南 理ではないかという感じを持っていたらし 用するか、カフカスの難しい岩壁の技術 八千メートルで通用するか、一 七千メートルの技術が八千メートルで通 部 の人は ŧ

丈夫だと、月明りで懐中電灯を照らしてエ ら登りに行くんです。風が収まったから大 ろになって風が収まったというと、 です。そして夕方、日が暮れそうな五時ご 帰ってきて、風が収まるのを待っているん と、体が吹き飛ばされそうで帰ってくる。 記録を読むと、朝早く起きて稜線に出

すごいトレーニングをやっているので、ち ニストとして現役で留まっている以上は、 では一度引退したら終わりですが、アル

ょっと程度が違うなという感じがします。

18

語ですがご覧になったら面白いと思いま ングが完成したんでしょうか。 出するわけです。これは今年の本ですか 邦の山岳ルートの困難度表』 今年でソ連全山全ルートのグレーディ 標題は ロシア

とにかくやり方がすごいですね。彼らは全

ミールに行っても、天山に行っても、

登ったらその記録をアルピニズム連盟に提

69

ベレストの頂上を目指す。それも岩壁で

りていくんです。ベルショフというのはウ というぼくも知っている男などは、その晩 稜を登っていって下りてくる。ベルショフ す。途中まではフィックスがあるんです てきて、そのまま寝ないで下のC四まで下 全然寝ないで登って、最終キャンプに下り が、その上はフィックスなしで、難しい西 クライナの男で、今度カンチェンジュンガ

ないという批判もあります。 着したようです。ソ連では早くからやって 批判的な考えの方もおられますが、今や定 いとは思いますが、岩壁登攀の技術を習得 いますが、ソ連の中でもあれは山登りでは 山登りではな

も縦走しました。 日本で岩登り大会というのがあります。

す。そのベルショフというエベレスト夜間 技会ということで呼んだので、彼も競技会 した。そこに非常に難しい岩場をつくり競 て、ぼくらも学生時代によくそこへ通いま の宝塚の奥に道場という岩場がありまし 登攀をした男を日本に呼んだんです。関西 するには絶対に必要ではないかと思いま

に出るつもりでトレーニングしてやってき

たわけです。

るよというので、彼がさっさっさっと登っ てしまったんです。かなり難しいルートを 人は遠慮して登らない、それならおれが登

最初に日本人が登るかと思ったら、日本

どみなく登ってしまった。確か、日本人が 大会で二等になった男ですから、非常によ つくっていたんですが、彼もソ連の岩登り

い、賞品もくれないのかと、ブツブツ文句 ったら、つけないので、何位かもわからな 十二、三分かかるところを三分ぐらいで登 ってしまった。あとで順位をつけるかと思

勝負にならないんだから、模範競技を見せ を言っていました。そんなことを言っても てくれたということにしてくれということ

にしました。

そういう連中が今度カンチェンジュンガ

中峰を通って、またその逆を縦走している から西峰まで、西峰から南峰まで、主峰と んです。本当かなと思ったんですが、南峰 れが延べ人数で八十五回頂上に立っている に行きました。登攀隊員は三十二人で、そ

すでに四十峰の上に立っているわけです。

八千メートルに三つ登っていて、ロシア人 にやってきましたが、その中のワリエフは 今年の二月、カザフの登山家たちが日本

の中では最初に八千メートルに三つ登った

チェンジュンガに行ったけれども、風邪を という男です。その男いわく、おれはいち ラスは三十人は優にいるだろう。彼もカン ばん強い登山家ではない、おれぐらいの

連中が話をしたんですが、考え方が少し違 ていました。 ひいて主峰しか登れなかったという話をし そのときに日本の山岳会から行った若

のは当たり前のことになっている。ただ、 うわけです。向こうの連中は無酸素で登る 素がないとしんどいという話でした。縦走 八千メートルの難しい岩場を登るのは、

は要らない、ただ、八千メートルに数日滞 ンチの縦走はそんなに難しいとは思わなか はうまくいかなかったんですが、連中はカ はどうだったかという話をしていて、日本 ったと言っていました。登るだけなら酸素

うかどうかが検討されるんじゃないかとい 在するとか特殊な条件のときに、 酸素を使

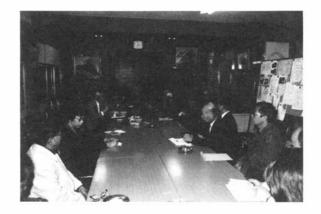
わけです。四峰あって、西と南から五人ず

つで十人ですから、それで八千メートルの

間のあつれきがあって、人間の弱いところ 本の中にはほとんど出てこないんです。山 ないわけです。登れなかったら、 が出てきたりして人間関係が面白いといっ れが面白いとか、登山に入っていけば、 ではするけれども、 岩登りが好きだが、 慣の話は喜んで話します。また、あいつは ないやつはダメだということらしいです。 も百メートル走るのと一緒で、うまく走れ ダメだということになってしまう。山登り 頑張って荷物を上げるとかいう問題は全然 が当たり前になっているので、何人が下で 嘩もしていますが、全員が登るということ に上に登るのかというようなときに多少喧 いざこざはほとんどないんです。だれが先 す。しかし、彼らにそういう話を聞くと、 の本も非常に興味を持って読んだもので で現地人とのいざこざがあったりして、 つは強情だとか、そういう話は隊員同士 でも、話していると、ネパールの風俗習 島田さんがお訳しになったエベレスト そういうことは彼らの おれは嫌いだとか、あ あいつは 人

> きてもよいのではないかと思います。 きます。長時間ありがとうございました。 にそれましたが、これで失礼させていただ 山の本」という話題からは、いろいろ横道 ときには、違う視点における山岳書が出て ょう。だが、スポーツ登山としてとらえた んでも面白くないということになるのでし 岳図書はそういうものが出てこないと、 時間もきましたので、「ロシアの探検と 関をへて掲載しました。 催された第二一回「山岳図書を語る夕」の講 九九〇年四月二十日、 「山岳」 編集担当が整理し、 日本山岳会ルームで 田村氏の校

ヒマラヤの山の本というと、アプローチ



還暦男二人、八千米峰に登る の記

島道郎

中

たい。関心ある方々のご参考になれば幸いである。 告は、いずれ別になされる予定なので、ここでは非公式に、二人はいかにして頂上に立てたか、について報告してみ 帰って来られた、ということはお目出たいことではあるので、有難く祝福して頂いている。そこで、この隊の公式報 た、というだけのもので、自慢できるようなものとは違うが、でもまあ、この年で、しかも二人とも、無事に登って して頂いた。これは京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊にお供して行ったら、ついでに運良く頂上まで登らせてもらえ 二年五月二一日、揃って八〇二七ばのシシャパンマ峰に登頂したというので、実に多くの皆さんから祝福 あと四ヵ月で六○歳になる筆者と、今六○歳(同じくあと四ヵ月で六一歳)の斎藤惇生君の二人が、平成

登頂主義の看板はまだ降ろしていない証拠として、雲南の梅里雪山にも学術登山隊を派遣しており、なかなか大変で て、医学研究のための登山隊を組織することになったのがこのシシャパンマ峰登山隊である。しかしその一方で、初 現在、以後はもう一つの旗印であるところの、学術研究主義の道を進むしかない、という認識から、その手始めとし 京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊 京都大学学士山岳会(AACK)の初登頂主義については皆さんよくご存じのこ とと思うが、名のある未踏峰が、もはやナムチャ・バルワだけになってしまった

て

隊員一名を含む)の大所帯であった。 シシャパンマ隊の構成は、 高知 医 科大学助手、 総隊長 登攀隊長 学問的に出来上がった人が多かったので、 戸部隆吉・京都大学教授、 松沢哲郎 ・京都大学助教授などのほか合わせて総勢三三名 副総隊長 斎藤惇生・ 全体の平均年齢は三八歳、 新河端病院長と筆者、 (中国女性 Ŧī.

ある。

Ŀ

の六名を除い

ても三四歳と、

かなり高かった。

謝 として参加した。 定である 医学実験は、 血液検査等、 合計約五〇〇ミリリットル程度にもなった。これには、 脳波、 これらから得られたデー 多彩で、 カラードップラー心臓超音波、 例えば、 検査のため抜き取られた血液は、 ・タは、 国内の学会はもちろん、 眼底カメラ、 胃力 特別顧問を含め六○歳をこえた者も、 一人平均 メラ、 カナダやスイスでの国際学会に発表する予 一五回、 肺 機 能 工 ルゴ 回当たり三〇ミリリッ メー ター 全員被 よる トル

トメルー 結、 地点のBCに四 二 旦 休息の後、 C3六九二〇以、 細は別稿に 隊員五名がシェルパ三名の支援を得て、合計二二名が登頂を果したのである。 譲るが、 一二日登山 月一五日到着、 C4七四三〇\\\およびC5七七〇〇\\\とキャンプを進め、 登山 再開、 の概要は次の如くである。 エポカンジャロ 一七日、 隊員一〇名、 氷河に沿って、 本隊は四月三日に出発 シェルパ二名、 ABC五六四〇於、C1五八五〇於、 一九日、 (先発隊は三月一八日)、 隊員 五月八日、 名 シ 旦、 I ル 全員 18 C2六三 5 五〇二〇片 几 ABCに集

度計は三五八〇㍍を示していた。 を繰り返した。 急性高山 病 員 低地でのデータ採取の被験者になった。ホテルのスイートルームとかロビーが即 筆者はラサで軽い急性 そして四月七日、 同 練習も 兼ねて、 空港で仕事をしていた兵隊サン達が、 海抜五〇〇年の成都から約2時間でラサ空港に着いた。 登攀隊員にも検査を分担してもらったりして、 高山病を経験した。すなわち、 四月三日大阪出発、 全員真新 採血に、 V 軍服だったのが強く印象に残 途中、 午後一 # 北京、 理 席の臨床 時一 検 査に、 五 成 分。 検査室に 都 何 筆者の高 お 回も検査 て

その夜は夕食抜き。バファリンを2錠飲んで、多少ましかな、と感じつつ、うつらうつらで八日の朝を迎えた。頭痛 しも楽にならないので、さらにダイアモックスを1錠飲んでみたところ、症状たちまち改善、一一時には種々の医学 が取れないので午前九時半、鎮痛剤ロキソニンを3錠一度に飲む(普通量は1回1錠、3錠は1日量)。一○時、少 るうちに、七時ごろからだんだん体が怪しくなって来た。ラサ到着後、丁度六時間目である。頭痛、倦怠、そして食 検査に参加出来、 欲全く無し。いよいよお出でなさったか、と悟ってベッドに横になったら、もう、立ち上がれなくなってしまった。 ている。午後四時、バスで西蔵賓館に着いた。若い人達と同じように、荷物を部屋に運び込んだり整理したりしてい 午後一時には昼食が普通に食べられた。そして、そのあと約二カ月に亙る登山期間中、このような

になって、それから後はもうずっとどうもなかった。 キャンプに泊まった翌朝、同じ症状が出た。直ちに四五○○≦まで下ったら、サッと、まるで夕立が上がるように楽 た症状を経験している。この時は、翌朝自然によくなり、薬は要らなかった。それまでに何日も歩いて、高い峠を幾 つも越えて来たのにも拘らず、三五○○≦付近で症状が出たのであった。また、高所順応の目的で初めて五○○○≦ 二〇年前のJACエヴェレスト登山隊において、ナムチェ・バザールに着いたその晩、今回と非常によく似

症状が再発することはなかった。

間違いない。ただし、重症高山病であるところの高所肺水腫、高所脳浮腫は事情が違うが、それでもおよそ六〇〇〇 出現する高度は案外低い。早い場合は二七〇〇㍍あたりから出現し、上は精々五〇〇〇㍍あたりまで、 則」といって、高所登山の常識であるが、自分の経験に照らして、全くそのとおりである。もう一つ、 ま泊まってしまうのはいけない、必ず一旦下り、その次登って泊まるべし、とされている。これは 経験しておけば後は繰り返さない。それが順応である。また、比較的低所で早い時期に出現したからといって、その 人は高所に弱い、とはいえない。一般に、一日の行動高度差が五○○≦以上の場合、その高度に初めて上ってそのま 急性高山病とはこういうもので、人により、また事情によって、現れ方が一様でない。ただ、一度こういう状態を を痛めてかえって有害だからである。

ど付近までのようである。 ではないか。 年齢的には、 むしろ高齢者には少ないようである。 それはおそらく余り速く登れない

なるのであろう。そのように考えてみれば、 は 気があるので、 気圧低下の幅とその変化度によるのである。 つまりそれはこういうことなのであろう。 高度差が問題であって、 速いスピードで高度を稼ぐ傾向にあり、 反対に、 高い所とか、 それがある限界を越えると出現する。 高齢者では、どうしても行動がゆっくりになるから、 至極当然の話に思われる。 換言すれば、 急性高山病の出現は、 時間あたりの高度差も一日の総高度差も大きくなり、 登るスピード、 だから、 その場の気圧の低さそのものによるのではなく、 すなわち時間あたりの高度差と、 低い 所では、 あるいは若い人は 高山病の出現は少なく 高 まだ元 の総 Ш 病

行 遠征 時 出 間 発前のトレーニング 的 余裕がなかったので、 二人とも常々、 C京都支部長として、週末の支部山行にはほとんど参加するようにしてい 毎日出来るだけ足を使うようにと心掛けた。なるべく、通勤電車では座らない、 体力温存のための方途を種々工夫・実践していた。 例えば、 斎藤は 筆者は J Ш A

して無理はしなかった。その心掛けが少なからず役に立ったのではあるまいか。 |間は歩く、エレベーター・エスカレーターには乗らず、階段は歩いて昇るようにした。ただし、 発の二ヵ月前になって、筆者は本格的なトレーニングを開始した。すなわち、 自宅の裏山 海抜 体調を見て、 0011 あ る神

宅の前で縄跳び千回を加えた。非常に苦しいトレーニングであったが、これに耐え得たということは、 社まで、 に自信をつけてくれた。 上りは走って登ったが、 耐えられたのだから、 毎晩走って上がった。 今も大丈夫、 低い山でも、 下りは決して走らなかった。下りに走っても何のトレーニングにもならないばかりか、 初めは一五分かかったが、やがて一一分台になった。そこでさらに、 と思いながら登り続けているうちに、 これを走って上がる時の息苦しさは、 気が付いたらそこが 高い山での息苦しさと変わらない 頂 Ш Ш から降りて自 の上での行 あ 膝

かつて村井葵氏は 「高所登山における自己管理法」を非常に熱心に説いた。医学的におかしな点があった

お荷物はお荷物だったろうが、かなり軽いお荷物たり得たと思っている。 イアモックスを服用した。もっとも、そのような事態は、全期間中そんなに多くはなかった。どんなに気をつけても らに鏡で自分の顔を観察することにも気をつけた。尿量が減少したり、顔に浮腫が現れたりしたときは、躊躇なくダ 子を点検していった。また、栄養と、特に水分の補給には留意した。だから、毎日の尿量の点検は大切であった。さ 日の尿の回数および総尿量、息こらえ時間、自覚症状などを記入することによって、その日その日の自分の身体の調 出来るだけ熱心に記入した。起床時と就寝前には、心拍数、呼吸数、体温、指先脈波酸素濃度、血圧を測定し、その した。しかし、決して無理はせずに、若い隊員たちにしてもらうべきところは素直におまかせした。『体調日誌』は たちのお荷物になってはならなかった。常に「マイペース」を保ちながら、自分で出来ることは自分でしようと努力 自分の命は自分で守らなくてはならない。かくて、二人とも自己管理に努めた。何よりもまず、我々は若い隊員 ので、当時筆者はかなり辛辣に批判したが、彼が主張せんとしたところは全く正しい。とにかく、高所で

今回我々が登頂し得たわけ では八千景峰には登れない。我々にそれが出来た理由は別にある。以下、それについて 前々章、前章に述べてきたところは、我々がそう努力した点を挙げただけで、それだけ

論じてみたいと思う。

理由の第一は、山が良かった。技術や体力を要せず、比較的登りやすい山であった。

第二は、天気が良かった。運である。

惑がったり、敬遠したりすること全くなく、ごく自然に、対等に扱いながら、二人が登っていくのに対し快く協力し 第三は、隊員が良かった。実に気持ちのよい連中揃いで、全員が、こんな老人(と見ていたに違いない)二人を迷

第四にはタクティクスが良かった。医学研究の必要上、古典的な登山方法を採用したが、松沢登攀隊長の指揮

たろう。 は大変優れていて、 り方がやはり本筋ではないだろうか。ヒマラヤもいよいよ多様価値化の時代に入ったと思うものである。 タイルが盛んで、 ヒマラヤにおいて、「より困難なる登攀」を目指すマンメリーイズムは崇高であるが、「安全第 古典的な「極地法」は廃れ気味であるが、 登山 一計画に無理がなく、 時間的、 物質的に余裕があった。 しかし、 アルパインでは二人の登頂はとても 此頃のヒマラヤ登山はアルパイン・ 主義 理であ の登 ス

う。 えるならば、「無酸素」かどうかで登山の質を論ずるのはもはや時代おくれである。今ヒマラヤで酸素は、 うことを許されたのは我々だけだった。そのおかげで我々の登攀時間は明らかに短縮された。 高 クスザイルにユマールを利用するのと同じである。ただし、それにしても、 れはあたかも、 ンプにおける睡眠を保証し、 登頂されてしまってから後、 優れた登山であるかのように受け止められたことがあった。 価で贅沢すぎる。 第五に、 で行動することは出来た。 我々は酸素を積極的に使用した、ということが挙げられよう。一時期、 Ш 麓のキャンプをより高く設営するためにジープを使ったり、 我が隊でも、 衰退を防ぎ、登攀速度を速め、もって登頂の可能性を高めてくれる「道具」である。 彼を真似てエヴェレストに登頂した人たちの半数は帰ってこなかったという現実を見据 アタックの前夜には全員が4時間だけ酸素を吸って眠ったが、 しかし、その場合は 「時間切れ」 しかし、メスナーによってエヴェレストが で登頂出来なかった公算が非常に大きかったろ 登山用酸素は、 急斜面の氷壁を登攀するのに、 いわゆる「無酸素」 運搬の費用まで考えると あの時、 行動中にも酸素を吸 登山 我 々でも フィッ より

を踏んだことがない、 怖心を持っていなかったことが大きいと思う。さらに斎藤には、 はまだ三回目ながら、 つに挙げられ得ると思う。 最後になるが、 我々は二人とも十分ヒマラヤ慣れをしていたし、 長年、 という思いがあり、 斎藤はこれで七回目のヒマラヤだから、 日 本登山 医学研究会その他におけるヒマラヤ研究活動を通して、 筆者のほうも、 三二年前のチ 六回もヒマラヤ経験がありながらまだ一度も八 慣れていて当然だが、 その上ヤル気満々であったということも理 3 ゴリザで、 頂上直下まで達していながら、 筆者のほうも、 高所に対する余計な恐 実際 0 由 体 験

その本懐を遂げさせて頂いたということになる。いかなる理由にせよ、登山隊に加わっていながら登頂できないこと りたくなかった。だから、最後に我々の出番が回ってきたということは、まことに幸運であったと感謝している。 ほど残念なことはない。それを味わってきているだけに、その理由は我々が出しゃばったからだ、ということにはな 登頂させてもらえなかったという口惜しさが、この年になるまでその胸の中に凝り固まっていたわけで、今回やっと

られた幸運の賜物である。しかしそれは、そこに偶然を必然たらしめて下さった、実に多くの関係者があったお蔭で ある。そのことは、二人とも一生肝に銘じて忘れないつもりでいる。 このたび、我々は八〇二七㍍のシシャパンマ峰の頂上に立った。それは、そうしようと努力してきた結果 が報いられたのではなく、たまたま稀有な偶然が積み重なって、まるで天から落ちてきたかの如くに与え



時に一九八九年秋のエヴェレストも申請し

幸い三名が日本人として初めて頂上に 名のメンバーで登ったチョ・オュー

I ヴェレスト南東稜 (秋季)

タクティクスを中心として一

金 沢 健

立った。私自身は、クラブ結成以前より、シ

のチョ・オューの許可申請をしたとき、同 文集が、メンバーを結び付けている。 れる「カトマンズ通信」と名付けられた駄 ブの最初のイベントとして、一九八五年秋 天風呂めぐりと多岐に渡る。隔月に発行さ ヌー、パラパウント、ゴルフ、スキー、 在住者も多い。活動は登山のみならず、 海外遠征組が中心メンバーで、カトマンズ の集まりである。カトマンズで知り合った 成された、登山を中心とした野外活動好き クラ 露 カ

我々カトマンズ・クラブは一九八四年結

は、パミール三山、マナスル、ディランな 前大学山岳部〇Bを中心としたメンバー 部OBの三名は、三国合同隊に参加し、 ざるを得なかった。前年より明治大学山岳 十五名程度を予定した。しかし、 を作るという事で、南東稜二十五名、南壁 可の取りにくい山に、多くの登山者に機会 きた。今回のエヴェレストに限っては、許 ウラギリ 1峰(八一六七年)等に成功して 七点)、ガネッシュ■峰(七一一〇二)、ダ 好んで組織し、クスム・カングル(六三六 いては実力あるメンバーが集まらず中止せ I ルパにほとんど頼らない少人数の遠征を 南壁につ

準備・キャラバン

を願っていた。

登る三名を含め出来れば十五名以上の登頂 寄せ集めの隊の不安は無かった。無酸素で

でベース・キャンプに集結したのは八月二 歩いた者、 る。石油、プロパンを除くほとんどの隊荷 ーン中であっても、ルクラ・フライトがあ ガス等も入手出来た。ここ二年ほどモンス 在住メンバーのおかげで、石油、 送りこんだ。高価ではあったがカトマンズ によるネパールの経済封鎖を恐れ、 が無かったが、今回は贅沢しようという事 十六日であった。 に運んだ。 海路でマニラ、その後は空路カトマンズに 別送品を送るような大遠征はやったこと レギュラー便、チャーター便でルクラ かなりの荷を日本から運んだ。 各自が自分に合った高所順応法 ジリから歩いた者、ルクラから プロパン インド

タクティクス

どでトレーニング山行をおこなった。隊員

は十回前後の遠征経験者が多かったので、

(六〇五〇以)間のアイスフォー ベース・キャンプ (五三五〇計) ル

雪壁でのルート工作では、 スド・ロープをベタ張りにした。簡単な水 が)間は各二日間のルート工作でフィック 五〇江)間は の崩壊で十本追加した。CⅠ・CⅡ(六四 十本のラダーを使用した。 ト工作は、 間と〇川 二日間の悪天を含め六日間、 c IV 一日、○□・○□ (七三)○○ (サウスコル七九○六 その後のル 次の様にしてス 1 四

ピードをかせいだ。

むしろ自覚的に、

自分の体力の七~八割程

る にも出来るだけたくさんの登攀具をデポし ト工作の間に追い付く。その日の最高地点 からのルート工作に向い、 デポして下る。二日目、 日数ピッチ用のロープ、スノーアンカーを 日二日で三~四十ピッチの工作が可能であ 空荷で登る二人と後続に別れて登る。 て下り、次の日に備える。三日目も同様に プ十本程度の工作を行い、 方法なら、キャンプ入りした日プラス工作 新キャンプ設営の日に、 ほとんど空荷で、すみやかに最高地点 トップとセカンド まず五〇だロー 最高地点に次の 後続はそのルー この

いう考えに基づき、隊員は二日間の上部行高所順応は疲労が少ないほど早く進むと

はその半分

程

度に抑えたかったからでもある。

初日

Ⅱ~○Ⅲは十二キロ、

□□一□□は六キロ

ば

荷上げ

重量はBC~CⅡは十五キロ、C

反応が強く現われだした時であって、 は、 る。 の登高スピードが落ちてきたら下るべきだ には少々遅くなっても、なるべく下のキャ ージを受けたその時では無いからである。 という理論は、 ンプまで下らせた。一般にいわれる、 一後二日間休養を原則とした。 すでに高度のダメージを受けた身体の 登高スピードが落ちた時点というの 正確にいうと間違いであ 行動最 ダメ 自分 終日

b 重 キロ足らずの寝袋であっても、その全移動 なるべく寝袋の移動が無いようにした。一 用のシーツを持って、他人の寝袋にも寝て たものは下ろさないようにした。 度順応に失敗すると一週間のロスとなる。 1 度の力で登高できる内に下る方が順応スピ 疲労せずに高所順応を行うことを考えれ 量は何百キロにもなるからである。 ドはあがる。がんばってはいけない。 全員二~三本の寝袋を用意し、 各自寝袋 一度上げ あま

> した。後半CIは使用せず全員BCよりダ った。この行動では二日荷上げ一日休養と アップ後CⅣに上げたCⅡに下る作戦をと 分の荷をCⅢに集めた時点で、 CI間の逆ボッカに集中した。隊員が大部 ート工作荷上げを行い、シェルパはCⅡ Ⅱまでの順応が出来ると、すぐCⅢ 方が生活環境が良いからである。 ているシェルパにとって、四〇〇ぱ高くて 逆ボッカによって行った。 た。メスナーが の一部はCⅡよりダイレクトにCⅣ入りし イレクトにCⅡ入り、シェルパ全員と隊 CⅡより空荷で出かけ、荷をCⅢでピック は隊員はCIより、シェルパはCⅡより C1までの荷の集積後、 雪面上のCIよりモレーン上のCⅡ 「四時間で行ける」と彼 高度順応の出 CⅡへの荷上げ シェルパは 隊員はC への

十六名がアタックした。体重三十キロ代の崩の常態で登頂者は少なかったが、延べ二名中四十歳以上の五名は登頂を遠慮するこ名中四十歳以上の五名は登頂を遠慮するこ名中四十歳以上の五名は登頂を遠慮することとした。

本に書いてあるBC~CⅡ間で三時間を切

る隊員もいた。

員も、 理でも五、 で登れる。 ば普通の体力の者でも八千点までは無酸素 た日程で、 さんいるように。 や サウスコルまで登った。 生れて初めてアイゼンを付けた隊 六時間かければ走れる人がたく 同じマラソンで、二時間台は無 疲労しないように高所順応すれ ゆっくりし

働いてもらったが、サウスコル上の雪崩ま ネパール隊長だったパル・テンバをサー 合非常に有用だった。三国合同隊の北側の テリー 皆非常によく動いてくれた。 の電源で使用したが、大遠征隊の場 十六名のクライミングシェルパに 4

わりに

コ ル 何とか隊員三名 八二〇〇だでの二度の パ二名が登頂できた。 首まで埋ったり、 ーツェ・フェ 韓国隊各一名の登頂も手助けでき 1 スの連日のチリ雪崩や 酷い目にあったが、 雪崩 同日登ったメキシ 大西、 で、 山本) 流され シェ た

涼子30歳 В Ш

・ヒマネ

ジ

ャー=金沢明子

43

成

H

高

ながら、 側 戦で、やっと登頂できたのは、 ている。 頂できなかった隊員には申し訳けなく思っ たかもしれない。酸素食料共十二分に残し いである。 ンスのなかった三谷統一郎君が五度目の挑 五 一隊の 同シーズンの中国側十四隊、 実力がありながら、 四次隊で中止してしまったが、 内 唯一 登頂できたのは幸運 なかなかチャ 何よりの救 ネパ リル 登

令記録概

ソナル・コンピューターをソーラー・

15

" 1 賃

金の支払い等に、

ラップ・トッ

プ型のパ

今回は隊員の行動予定、

荷物の管理、

西保46歳 隊員=黒滝淳二36歳 柳原武彦28歳 安藤昌之32歳 信秀44歳 隊の構成 ト登山隊一九八九 隊の名称 橋堅31歳 本篤26歳 尾馨44歳 カトマンス・クラブエヴェレス 登攀隊長=三谷統 隊長=金沢健43歳 後藤健二42 西平 中西紀夫31 堤信夫36 吉村哲明27歳 二俣勇司 恵子36 塩田純 歳 歳 歳 32 中村譲 歳 八橋秀規 榎井克明 38歳 郎 32 歳 副 堀弘32 西宏26歳 二39歳 長 29歳 36 桑原 二大 歳

高

行動概要

九月 八月二七日BC開き 二日CI到達 (六〇五〇 五三五〇

三日

建設

日 " 建設

四日CⅡ到達

(六四

五〇

十一日CⅢ到達 (七三〇〇

十四日悪天の為BC

十七日CⅢ建設

十九日サウスコル到

二五日登頂体制完了

十月 二日CⅢ~Ⅳ切れたフィックスの張 一八~三〇日悪天のためB C停滞

h 直し

十二日三次隊二名八二〇〇までル 五日 七日二次隊六名八二〇〇で雪崩 一次隊六名八二〇〇で雪崩 1

偵察

で八五〇〇で敗退 ルパ二名)二名は八六〇〇まで 十五日四次隊七名 十三日三次隊七名中五名登頂 十九日BC撤収

バギラティⅠ峰北稜初登頂記

会津山岳会

究を進め、その中からバギラティI峰の未ラヤのガンゴトリ山群に地域をしぼり、研征から七年、二度目の遠征は、インドヒマ征からで年、二度日の遠では、インドヒマ

を出発した。

登の北稜が浮かび上ってきた。

に、気ごころの知れたメンバーと、普段のの事情により、最終的に六名の隊員に落ちの事情により、最終的に六名の隊員に落ちの事情により、最終的に六名の隊員に落ちの事情により、最終的に六名の財画も、諸々当初十二名で始まったこの計画も、諸々

の機体は大きく揺れながら、からくも成田している暴風雨の中を、エアーインディアーでいる暴風雨の中を、エアーインディアーが、気持いで、気持は充実していた。

山行の延長線上にヒマラヤ遠征が実現でき

た。

を建設して、本格的な登山活動を開始し ニューデリーで諸手続きを済ませ、二日 間チャーターバスに揺られて八月十日ヒン 発って九日目の八月十五日、秀峰シブリン を正面に望み、美しい高山植物が咲くナン ダンバンにBCを建設した。更にチャトラ グンバンにBCを建設した。更にチャトラ がバスキ氷河との出合付近、バギラティ し、バスキ氷河との出合付近、バギラティ し、バスキ氷河との出合付近、バギラティ し、バスキ氷河との出合付近、バギラティ と建設して、本格的な登山活動を開始し

の基部の雪の切れた五三○○≦の台地へCンまで一○○≦程登り、氷河に沿ってガレンまで一○○≦程登り、氷河に沿ってガレーの基部の場合のでは、水スキ氷河のサイドモレーの基部の雪の切れた五三○○≦の台地へC

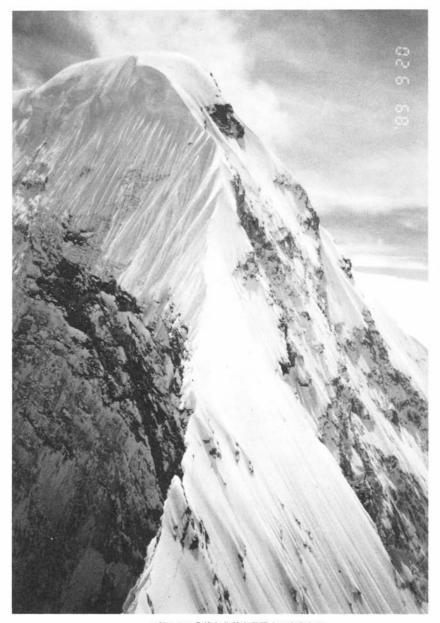
った。

に六〇〇〇ばの楽園ともいうべき地点であ の頂上と共に北稜の概要が見渡せる、 しく眺められると同時に、正面には、 がれのテレイサガールとメルーが非常に美 とバギラティⅢ峰とのコルから、 皆無、そしてなにより、シュパルツピーク この稜線上のC2は、雪崩、落石の心配は 建設したのは九月五日になってしまった。 スがすっかり雪に埋もれてしまい、C2を 日、二日とC1で降雪に見舞われ、トレー 点へ荷物をデポする。しかし、翌九月一 イックスを張り、八月三十一日C2予定地 の斜面を雪崩を心配しながら四ピッチのフ プラトーから傾斜が増し、六十度程の軟雪 即身仏が静かに横たわっていた。 西壁を眺め、山の幸せを祈るかのように ーと比較的ゆるやかな雪面が続くが、第二 C1からは、第一プラトー、第二プラト 遠くあこ

をのばし、翌七日に四ピッチルート工作、峰といったスノーリッジを八ピッチルート、九月六日、C2から、まさに剣岳の八ッ

三分の二地点には、バスキパルバッドの大

1を建設する。この氷河と沿ったガレ場の



バギラティ I 峰と北稜を登攀中の斉藤と栄

カラコルム山脈 K_2 中国 マラヤ山脈 パキスタ ウックルプラデ バングラ ガンジス川 カルカッタ しまという ベンガル湾 アラビヤ海 スリ ランカ ガンゴトリ(3,000) BHAGILATHI-GROUP ボジュバサ (3,606)

たき込み、 経を使う水平トラバ きや、このピークが両側に鋭く切れた二十 ジを三ピッチで安定したピークへ、 ピークまでますますきつくなるナイ た後を引き継ぎ、 五点の水平のピ した後も極めてバランスを必要とする。 の支点を二本、 フィ ーークで、 " 今までになくしっ 斎藤・大竹でシ クスするが、 ースをして、 更にバランスと神 フィ 1 ス と思 かり ・フリ ノー " ク ル ス た 15 "

であり、

のC3から先が、

北稜の

氷が現われてシュルンドが開き、

チである。

しか

ここまでは余裕 この

うようになる。

また最後のピッチ

í V やら

部に

雪も相変わらず柔らかく不安定で神経を使

次第に両サイドが切れてきて、

六四〇〇公

地点の第

ブラ 1

> に建設す C35

C3への

ル 1 四

は徐

々に傾斜が増

八日には荷上げをして、

九月九日、

C3から佐藤が二ピッチ、

ル

1

上工

当のその厳しい姿を現わすことになる。

をいただいた埼玉のチー 落 0 1 ビックスピークと命名 こから最後のピー -ラバー ボロ ミリザイルで五十二下降し、 石を起こしてしまう。 ボロの岩壁であり、 ・スぎみに下降するが、 クの無名峰 とのコルまで、 ム名をとり 足をつくたびに (資料の スレ 更に四十 ボ 提 1 状

全休養する。 九月十日に C4のメドをつけ、 下り、 アタックに備えて一 日 全 員で 間 A

В

C



84

ABC (4800m) からのバギラティ I 。右に落ちるのが北稜

翌十八日は体調がすぐれず、

C4で休養

る。

九日、

ボンビックスピークからの

そして十

雪面 のナ

違い、 崩れ、 はなんとかぶり気味にさえ見えていた。 十度はあろうか、そして左のバスキ氷河側 見て予想していたとはいえ、今更ながらに の最後のナイフリッジの鋭さには、 ボンビックスピークへ立って眺めた本峰へ 目は七十度程の十五点の氷壁が現われた ンゴトリ氷河側をルート工作するが、 スピークまで六ピッチ、 チ半目をリードしている時、 九月十七日、 そして六ピッチのルート工作を終え、 それまでのフカフカの不安定な軟雪と ダブルアックスで快適に通過でき あやうく落ちそうになる。一ピッチ 右のガンゴトリ氷河側は六十~ 斎藤がトップでボンビ リッジに沿ってガ 写真を

なる。

斎藤がC4へ入り、

栄はC3からの往復と

がやっとで、三十四は空中となり、

大竹

うやく張るが、

二人が横になれるスペース

C4は三人用のテントを雪面を削ってよ

十六日に C 4を建設するが、

予想どお

九月十五日、

栄・大竹・斎藤でC3へ入

下 イフリッジを二ピッチで第一岩峰に達 降で下った所はガリガリの六十度の氷 ここを五旨程右上し、 ハーケンを打ち込んで七點の懸垂 更に四十六トラ

を削って小休止する。ここからS字状 ミリザイルを二十五点で基部に達 イフリッジの二ピッチの下降、

> タックにすべてをかける。 作をここで終え、 ースして第二岩峰直下、 いよいよ九月二十 最後のル トトエ 日

出発し、 で、パ トにまわるということで、 ィックスロープの最終地点の第二岩峰直 ツピークに顔を出し、三人で朝の挨拶。 あたりで、 天候の中をC4を出発。二ピッチ程登っ 午前七時、 ートナーの栄を待つ。 ボンビックスピークに姿を確認す C3から出発した栄がシュバ 絹雲がかかるが、 C4をゆっくり 大竹はサポ まずまず た フ ル 0

をよぎったりもする。 本当に効いているのか、 わらずのフカフカの軟雪で、 リッジの最底鞍部。 てカンテの露岩にハーケンを打ち、 プを行き、 氷河側をリッジに沿って四ピッ クバンドを十二程トラバースしてスノー 私がフィックスロープ二本を背負 第二岩峰の六十五度程の雪壁を右上し 栄が四本背負ってセカンドに ここからは、 と一抹の不安が頭 ス ノーバ チ、 ガンゴト

から悪くなり始め、 朝から気がかりだった天候が、 また、フィックスロ このあた

n



た時は、 ずめ、この窪地は、バギラティー峰のへそ だろうか、素朴な疑問を持ちながら、 竹が待つボンビックスピークのこちら側の こでヘッドライトを点灯し、サポートの大 みが気にかかり、急いで下降を開始する。 る十七時五十分、ようやく北稜からの頂上 であろうか。 かに高い対岸へ行くと、果してそこが最も 安全圏のフィックスの終了点にたどり着 へ立つことができた。寒さと迫りくる暗や すでに辺りは暗くなっていて、こ 頂上であった。そうすると、さし 間もなく夕やみが迫ろうとす わず

> けた。 H 私が二十一時、 ボーイ、そして佐々木隊長の厚い歓迎を受 ABCに集結し、ハイポーター、 日に第二次アタックにのぞむが、 かわり佐藤・長谷川がC4へ入り、 らいそして、長い長い一夜をすごす。 基部の一点四方の雪を削ったビバーク地 翌二十一日、三人はC3へもどり、 すべてのキャンプを撤収して、 第一岩峰より引き返し、 栄が二十二時に到着し、 記 九月二 斎藤憲一) キッ 時間切れ 全員が 入れ 0

斎藤憲一 佐々木健臣 佐藤由紀 栄利文 長谷川典子 大竹幹 衛 らかな雪面を二〇〇以程行くと、

縦二十

傾斜がゆるんでロープをはずし、

あった。なぜこのような雪の窪地があるの

メンバー

隊長

横五十紀、深さ七紀程の大きな窪地が

が入る。

結局この急雪壁を五ピッチで登

にルートを取るが、左側も同じように急傾

更に傾斜が増してきたため、リッジの真上 スタカットで前進する。一ピッチ登ると、 なるというのに。この残った最後の一本で

後の核心部である六十五度程の急雪壁と プも残り一本になってしまい、これ

から

斜であり、思わずアックスをにぎる手に力

ディラン北稜(七二五七m)

九八九年弘前大学ディラン登山隊

隊長 高 橋 堅

ディラン(DIRAN)はパキスタンカディラン(DIRAN)はパキスタンカリアは、 で有名であるが、初にイギリス隊によって初めて試みられた。一九六五年の京都府岳連隊の遠征はた。一九六五年の京都府岳連隊の遠征はた。一九六八年ハンス・シェル隊長らオーストリア隊の三名である。その後四隊が登頂している一方、パキスタン陸軍隊(回登頂している一方、パキスタン陸軍隊(回登頂している一方、パキスタン陸軍隊(回数不明)を除いても七隊が登頂を逃している一方、パキスタンカーストリア隊の三名である。その後四隊が

一年にアルクトス杉並山の会隊が五七四○ だまで達し、一九八六年には関西学院大隊 が六三○○旨まで達しながら隊員一名が行 方不明となり登山を中止している。また、 パキスタンの岳人、ナジールサビル氏によ れば、一九八五年のオーストリア隊の二名 がノーマルルートから登頂し、北稜を下降 したとのことである。

ク帯あり、氷壁あり、稜線上にギャップを るミナピン氷河左岸のタガファリから見る と頂上から左にすっきりと伸びた単なる雪 と頂上から左にすっきりと伸びた単なる雪 と頂上から左にすっきりと伸びた単なる雪 はあったが、岩とのミックスあり、セラッ

さ、雪崩の危険などからと思われる。

登頂

ルートはいずれもミナピン

M I N A P I

稜をたどるものである。

れわれが今回目指した北稜は、一九八

形造るクレバスありと変化に富んだルート

N)氷河から西稜へのフェースを登り、

西

雪崩、悪天により我々以外は全て登頂を断 雪崩、悪天により我々以外は全て登頂を断 雪崩、悪天により我々以外は全て登頂を断 のなお今シーズンは、パキスタンでの初の なお今シーズンは、パキスタンでの初の なお今シーズンは、パキスタンでの初の なったのも事実だが。)

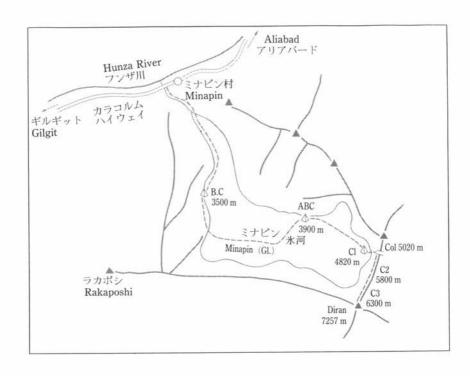
BCから深雪の氷河をC1へ

うかがわれる。

念した。このことからも天候の不安定さが

五日から本格的に荷上げを開始。スキ

であった。北稜のポイントとなるのは適確



崩の 隊のC1があった平坦なクレバス帯は、 隊及びノー ラウンドと化していた。 ら上へと上がって行くと、 ABCの一段上の台地に雪崩があっ 離れた尾根上にエーデルワイス隊の赤 ントらしきものが点になって見えている。 BCでの停滞中、 六月十二日に登山再開、 掃でクレバスのクの字も見えぬ大グ マルルートを目指してい 頂上直下の北西壁から 対岸の三〇〇以程

エー 翌日

デル

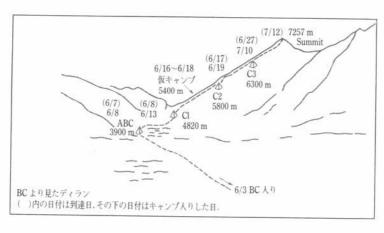
ス

た韓国 ワイ ABCか たら ブックエンドにC2建設

翌日から北稜上にルートを伸ばす。 堤、 高橋、 安藤で十三日にC1に入り、

思天で皆BCにいたことだけが何よりであ

員で仮ABCに入るも、 りてくる。七日、入れ替わりに我々六名全 ピッチロープをフィックスしてBC たエーデルワイス隊は、 れぞれであった。 定地へ荷上げしただけでBCへと下る。 ソリを利用し、 コル上を偵察し、 既に登攀活動に入ってい 欲張ったが効率は人そ コル 翌々日から天候が 北稜のコルまで五 直下のC1 へと降



0 抜ける。 日に全員でBCへと下る。 届かぬうちに天気いよいよ悪くなり、 設するも、 n 迷 ク地形で、 ○○旨から上は尾根上だというのにセラッ にC2となる)までルートを延ばす。 帰国の途につく。 背 間を見ては当たりをつけ、 路のようなところである。 ・ターと言われた鈴木は、 十二日、 六日に安藤・高橋で五四〇〇ぱにリレ (関学大隊が一九八五年に命名) ンプを作り、 十九日、 核心部と目されていた。ゴジラ 氷の段差あり、 ミニブルドー 堤・堀・安藤でC2を建 翌日ブックエンド サー クレ 時間切れとな 時々訪れる晴 日でうまく 付きコンピ バスありの = 五四 (後

そして核心は越えるも……

0

n

がBCで悪天をやり過ごしている

4

上で雪崩に埋められ、 た韓国ウルサン隊の二名が、 ル 間、 で 同隊は数日後帰路についた。 0) 登 1 一頂を最後の手段として目指して 7 ル ル ートからアルパインスタ 遺体発見もかなわ 北西フェー ス

ブもどんどん上へ上げて使う。

で、ずっとフィックスを張りながら上へ

エーデルワイス隊のフィックス用

口

1

進

ッジだが、

降雪時は雪崩の可能性大なの

四〇〇にまではただただ雪が深いだけの 稜上に雪のついた数ピッチを過ぎると、

1) Ŧī.

ンドの間の雪にすっぽり埋まったC2に入 二十五日、 安藤・高橋・吉村でブッ 確実な支点がとれないのが 五十に四ピッチ強のト その上に新雪が載 糖のような雪が氷 クエ

る。

とも予定ではあと一週間しかない。

くつもりでBCを出る。

もはや日数、

二十三日、

我々は今回こそは頂上まで行

す。



ディラン北稜 (左の稜線)

空腹のBC停滞、そして登頂 BCでは米も統制品となり、七日間雨が BCでは米も統制品となり、七日間雨が 我々のC1地点にC1を移動していたエ ボッワイス隊の三名が、小雪崩で埋めら にが、幸いテントを切って何かと這出し

時間に渡るC1発掘作業。そして積もりにかう。今度は晴天が続きそうだ。翌日は六七月七日、やっと好天となりABCへ向

までとするという。

メージは大きく、エーデルワイス隊はこれ

雪の積もった六十度位の斜面が続く。いたる。ここは毎年地形が変わっていると思わる。ここは毎年地形が変わっていると思われる。ここは毎年地形が変わっていると思われる。ここは荷をデポして2に戻る。(後の推定正こに荷をデポして2に戻る。)公前後)登頂体制は一応整っでは六三○○公前後)登頂体制は一応整っては六三○○公前後)登頂体制は一応整っていた。

もやBCへと下る。
を半からシンシンと雪が降り積もり、また
でが翌日は小雪がチラつき、二十九日は

積もった雪の中をラッセルし、C2を建て 隊の名称

一九八九年弘前大学ディラン登山隊

行動概要

こをC3とする。雲一つない快晴だが、C

5/30 6 2 ミナピン村よりキャラバ イスラマバード発 ン開始

00m)

3

タガファリ着 BC建設 (三五

ABC建設 (三九〇〇m

13 C1建設 (四八二〇m

19 C2 (五八〇〇m)

22 鈴木隊員帰国の途につく

7/3 12 C3建設(六三〇〇m

/ 15 BC撤収

の登頂は無理とみてC3に引き返す。 てからのラッセルに次ぐラッセルで今日中 る。しかし、最後のスノーキャップに入っ ながら一時まで行動し、六九○○☆に達す

十二日五時に出発。前日のトレースを辿 十時過ぎに安藤・吉村が登頂、

隊の構成

隊長 高橋 30 副隊長 安藤昌

次いで

之 33 33

隊員 信夫(38)、鈴木孝男(38)、連絡官 弘 (31)、吉村哲明

タージ・モハマッド・カーン大尉

と向かった。

える北稜をブックエンドへ、また、C1へ 下山を開始する。C3を撤収し、夕日に映 この山での死者の冥福を祈り、十二時半に 上であった。周りの山々をながめ、そして 堤・高橋・堀と全員登頂する。のどかな頂

8

がら横断は中止し、北稜往復となる。 いう計画をどうするかであったが、残念な 崩の危険のある北西フェースを下降すると シーバーなしでは話もできない。問題は雪 3は吹きっさらしで隣のテントとはトラン

し、その後皆で所々ロープをフィックスし

十一日、堀・堤がルート工作のため先発

登頂(七二五七m

ファブラン(六一七二m)東壁の記録

関本史郎

り第一次登頂 ・ 南東稜(東京電機大ルート)よ

八月一日。ABC建設。

四一五〇次。

高

氷河の末端。 Cから岩場を越えてモレーンを上った所。 以月二日。CⅠ建設。四八○○㍍。AB 山植物の咲き乱れる羊の放牧地。

から氷河を登ったスノープラトー。 八月五日。CⅡ建設。五二五○ム』。CⅠ

の最低コル。
○最低コル。
○最後がシリパルバットに続く稜線でラン南東稜がシリパルバットに続く稜線である。ファ

す。

十分四名全員が狭いピークに交代で立っに本峰までは細い雪稜が続いた。十二時四トは岩稜から雪壁を登り南峰に達する。更人月八日。七時三十分CⅢを出発。ルー

この第一次登頂は、最終目標である東壁かた。一時間ほど頂上にとどまり、写真をとた。一時間ほど頂上にとどまり、写真をとた。一時間ほど頂上にとどまり、写真をと

2. 東壁より第二次登頂

からの登頂に備えて、下降ルートの確保と

高度順化を目的としたものであった。

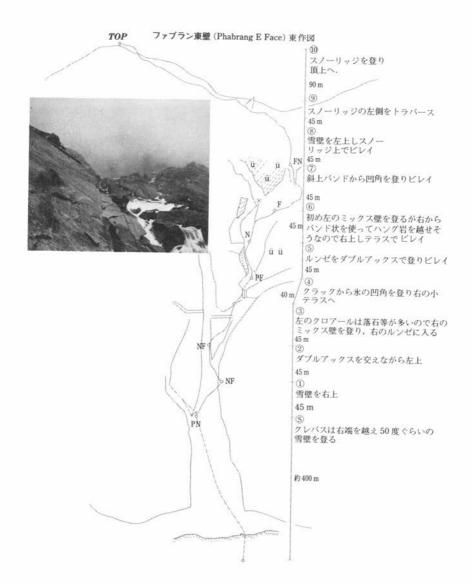
八月九日。CⅢを東壁の下の氷河に移

つき、精神的な面でも東壁にアタックをか入るが、天候が悪化し、雪崩の危険もあるため、CⅡに退がって停滞する。 ○ □の食料もそろそろ底をが、天候が悪化し、雪崩の危険もある

はず。 分起床。午前三時三十分CⅢに到着し登攀 ける最後のチャンスとみた。午前○時三十

込み、 ケルとアイスバイルを交互に打ち込み、一 ばほど上部岩壁へとつき上げている。ピッ と五十度の雪壁がルンゼとなって、 横切るクレバスが不気味な黒い口をあけて く。氷河をおおった雪がやわらかく、膝ま って歩き始めた。一人また一人と後に続 と出発の準備をしている。一人が東壁に向 体につけていく。誰も口をきかない。黙々 を締め、登攀用具を一つ一つ確認しながら ちる。不安が胸をしめつける。安全ベル いる。幅の狭い所を選んでピッケルを打ち でもぐる。夜が明けてきた。東壁の下端を 無くヘッドランプの光の中を粉雪が舞い 暗闇の中でちらっと空を見上げる。 ソーット体を引き上げる。見上げる 四〇〇 星 1 落

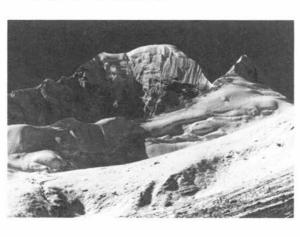
ている。天気は回復に向っているようだ。と氷河上にC買がボツンと小さな点に近いだて見える。もう高度は五七○○紅に近いだて見える。もう高度は五七○○紅に近いだろうか。空気は薄く息が切れる。苦しい。あり返ると雲が切れて、朝焼けの中を流れるのであると雲が切れて、朝焼けの中を流れる。



されて、東がトップにたつ。トップがピッ 小畑と榎本はユマーリングで後続する。ル チを登りきったところでザイルを固定し、 かるあの岩場を突破するルートが見つかる ートはしだいに急峻になる。頭上にのしか 達したところでザイルを結ぶ。関本に確保

成功を確信する。雪壁を登りきり、

岩場に



くと、一気に二〇〇〇は切れ落ちてカルパ 角形の頂点へと高まっている。 を上げて力をふりしぼる。ついに頂上稜線 ドをもとめて、体をひき上げる。うめき声 増す。氷にピッケルを打込み、岩にホール だろうか。不安な眼で見上げる。東は落石 る。午後二時四十分登頂。 に達した。細い雪稜が美しい弧を描いて三 の岩場にルートをとり右上していく。 の危険のある急なクーロアールを避け、 ット氷河が望まれる。一歩一歩慎重に登 ト図参照)高度が上るにつれて苦しさも 遠征の最終目標 反対側を覗 ル

CⅢを撤収して、CⅡに帰着したのは、夜 に下る。 東稜を懸垂下降をまじえて、 に移らなければならない。勝手知ったる南 ガスがまわりを包み始めた。いそいで下降 感の中に、ほんやりと感慨がわいてくる。 を全員で完登することができた。 も八時をまわってからであった。 ードでとばし、午後五時十分C□に着く。 氷河に降り立ったところから尻セ スピーディー 深い疲労

> はもう終わったのだ。 くみ、パンパンに腫れて眼もよくあかな るお花畑の中で、私はまだ夢の続きを見て える。ベースキャンプに下り、咲きみだれ ヨーロッパ・アルプスの登攀や、アンデス ら私の胸にくすぶり続けてきた夢だった。 心ははや懐しい日本にとんでいる。ドラマ い。それでも幸せな気持でいる。 いるような気がする。高度の影響で顔がむ への遠征も、 は特別な響きを持つ。それは、学生時代か ヒマラヤへの道程だったと言 しかし、

隊の構成

隊長

関本史郎

(四十九

歳

涉外、 医薬、 会計係 小畑和人 (三十八

榎本郁和 (三十七

歳

食料係

装備係

東 秀訓 (二十八

3 エピローグ

「ヒマラヤ」。山に登る者にとって、

図書紹命

読賣新聞社編

『チョモランマ・サガルマター九八八』

ジ 五一五〇円 一九八九年五月刊 一六二ペー

三国友好登山報告の集大成

(チョモランマ)とネパール (サガルマタ)の国境に位置する世界である。事業と位置づけられた登山であった。すなわち中国は承知していないが、日本隊事務局が協力して編集され、読売新聞は承知していないが、日本隊事務局が協力して編集され、読売新聞は承知していないが、日本隊事務局が協力して編集され、読売新聞は承知していないが、日本隊事務局が協力して編集され、読売新聞はその成立のいきさつからして全く性格のちがったものである。日本側はとにかくとして、中国とネパール両国においては夫々の国の本側はとにかくとして、中国とネパール両国においては夫々の国の本側はとにかくとして、中国とネパール両国においては夫々の国の本側はとにかくとして、中国とネパール両国においては夫々の国の本側はとにかくとして、中国とネパール両国においては夫々の国の本側はとにかくとして、中国とネパール両国においては夫々の国のが発出され、

ら登頂し交差縦走することを目標とする。」(議定書前文より)と明の原則で編成され、条件がよい場合には、三国の代表が南北両側かそれによって組織、運営される登山隊である。「登山隊は三国平等

記した合意を土台とした登山計画である。

本書の目次を見ると、一あいさつ、二写真編、三記録編、四資料といえる各国の総顧問の人が夫々に今回の登山の意義を述べ、成功を讃えている。日本隊の総顧問役の桜内義雄氏が「三国の隊員が力を合わせて大きな仕事を成し遂げたことは、登山の世界だけにとどまらず、これからのアジアの国民の団結と協力をますます促進し、別ますものになろうと存じます。アジアの友情が、今後、世界最高端よりも高くそびえ、ヒマラヤの雪のように万古変わらないものであることを念願する次第です。」と述べているが、この言葉が今回の三国友好登山成功の国際社会的意味を端的に表現しているといえよう。

いるが、見事なできである。

一本にまとめた貴重な世界初の報告である。特に中国科学院の飛て一本にまとめた貴重な世界初の報告である。特に中国科学院の飛いるが、見事なできである。南北両側から最高峯の多様な姿を捉えいるが、見事なできである。南北両側から最高峯の多様な姿を捉えいるが、見事なできである。

最高峯へ、中・ネ両国と日本の間で公式の「議定書」を作成し、

を代表して、 されていたかがよく判る。 の見事なテレビ放映の成功の前に、 行はおそらく空前絶後といってよいであろうが、 ビの放送を行うことを登山目的の一つにあげて計画されたヒマラヤ な文章である。 ン・プルバ(ネパール・南隊) の記録が南隊 でも三国平等の原則が守られ、 このところを詳細に読んでいくとこの隊の行動が要領よく判 登頂予定日を出発前に決め、 ツェリン・ドルジ そして報道隊とテレビ隊との報告がつづく。 (ネパール側)と北隊 日記のあとに登頂、 の手記があるが夫々個性的で爽やか (中国・北隊)、 しかもその日に頂上から実況テレ 日本側は最先端の諸技術と施設を 如何に多くの人々の努力が結集 (中国側) 縦走に成功した隊員 山田昇 と別々に載ってい 一昨年の五月五日 (北隊)、ア 報道活

く一言で表現している。

ついで一九八八年二月~五月の期間

の日記

競、

と推察される。 苦労であったろう 験者であったか わけだが、 動員して協力した 境ではたいへんな テレビ関係の人々 大半は登山未経 ヒマラヤの環 録編の最後 報道、

> で、 とネパールの両国がヒマラヤという自然資源を国内にもっていなが と実施の姿が我々第三者にもよく判る。とくに、「最高峯の頂きを あって、ここを熟読すると、三国友好登山なるもの特異な登山計 ふりかえって」となっている。 の日本隊の北・南登山隊長であって、タイトルは とができる。 う。そしてこの登山計画の成功の報告書を通じて、 ら、二つの国の人々と「山」との関わり合いのちがい、そして外国 目指して、三国の人々が協力する」という登山目的を果した一つの 題の九項目であるが、 の成果、 道と放映では知りえない、今回の登山のもった意味を我々は伺うこ 登山という大事業を介して、参加した三国の人々が体感したであろ 人である日本人のヒマラヤ観との大きなちがいを、 つではなくて、多様であることが読者に理解されよう。とくに中国 人間活動の事実の広い意味での評価が、各国、 南側の登山、 大塚博美、 計画の発端、 ハルカ・グルンの各国副総隊長と橋本清、 北側の登山 非常にコンパクトに整理された座談会記事で 準備、 隊員の選考、ベースキャンプ建 登頂の成功、 語られるテーマの小見出しは、 成功の原因と今後の課 各自の間で決して一 「三国友好登山 今回の三国友好 あわただしい報 渡辺兵力 設 主

座談会記録が 参加者は許

薬師義美著・撮影

探検史』『雲の中のチベット― ートレッキングと

小学館 一九八九年一〇月一〇日刊 四〇五ページ 六八〇〇円 A 5版

チベット高原探検史として永久に残る名著

検についてのそれである。本書の著者、薬師義美氏(あとは薬師さ んと呼ばせてもらう)は、その極めて小数の登山家の一人であろ 道の専門家や研究者を指しているのではない。ある地域の登山や探 た小数の人となる。ここでいう「良く学ぶ」というのは、単にその とずっと少なくなる。さらに「良く学ぶ」登山家となる極く限られ 「良く登る」登山家は多いが、「良く読み良く書く」登山家となる

ある 録」(白水社、 に整理し、さらに埋もれた資料まで探索しなければならない。先人 ほかはない。薬師さんの文献読破力の実力は、「ヒマラヤ文献目 わざである。これをやってのけたのが薬師さんであって、敬服する のルートを地図上で一つ一つ確認しながら読み進めることは至難の 献や図書を熟読し、十分に理解した内容を蓄積し、歴史的・地理的 登山史や探検史をまとめることは、きわめて難かしい。過去の文 一九八四年)の大著からみても、おして知るべしで

ちなみに日本で出版された登山史や探検史の秀でた書としては、



水社、 年)、深田久弥氏 の「中央アジア探 日本登山史」(白 安治氏の「新稿 い。例えば、山崎 数えるほどしかな

一九八六

チベットの探検――その歴史と資料である。 げることを、万人がみとめるであろう。今後チベット探検に関して もって読んだのは、第Ⅰ部第五章のチベット探検小史と、第Ⅳ部の の内容と文献目録の名著として、本書は永久に残るであろう。 本書の内容は、Ⅳ部から構成されているが、私がもっとも興味を 検史」(白水社、 一九七一年)をあ

なる旅行紀、紀行だけではなく、必要な文献内容の紹介とともに、 リ、シェカル、カンツォ・ラ (五二二〇メートル)、シガツェ、ギ ル友好道路をたどった。これを主題にしたのが第一部であるが、単 ラム、ヤールシュン・ラ(ラは峠、約四九八○メートル)、ティン ャンツェ、カロ・ラ (五〇四二メートル)、ラサへの中国=ネパー 速この年の八月ネパールのカトマンズから、チベットに入り、ニャ トとネパール間の国境越えができるようになった。薬師さんは、 近ずきがたいチベットであった。一九八五年になって、中国チベッ し、経費も高く、山岳も限られたこともあり、一般の人にとっては チベットでの登山は一九七九年から受け入れられている。しか

に述べられている。 薬師さん自身の歴史的、 今日のチベットの道路、ネパールとチベットの歴史的な関係、 高山病についてなどである。 例えばチベットの近代史、 地理的、 民俗的な考察や科学的観察が随所 古代のラサへのルー

が、きわめて解りやすく、くわしく述べられている。さらにこの先 ト探検の初期の一七~一八世紀のキリスト教イエズス会の活躍、一 さんならではのことである。 に示されている。こがまた本書の特筆すべき点の一つであり、薬師 人たちのルートが、第3図から第8図までの、折込みのカラー地図 偵としてチベットに送りこんだインド人の総称)による探検、 九世紀の西欧人によるチベット探検とパンディット(イギリスが密 ット入りを果たした日本人について記されている。これらの探検史 第1部第5章にチベット探検小史が組み入れられている。 チベ 、チベ "

丹冬雪山に向けての登山行動中であった。この折西寧、 検家の足跡を調べたのであるが、詳細に検討し地図上にルートを示 整の苦労がしのばれるし、 すことは至難のわざであることを痛感した。それだけにルート図作 師さんがチベット入りした丁度その頃、 唐古拉山口、 ラサへと青蔵高原を縦断した。その折過去の探 その根気に感心させられる。 私は楊子江源流の各拉 青海湖、

示されている。 、イットによるそれをそれぞれ年代順に示してある。ここで貴重な 第Ⅳ部ではチベット探検に関係して、参考文献と年表が示され 中印国境問題、 文献では邦文図書が、総説 年表では、 探検、 一九五三年までのチベット探検と、 紀行、 登山と、 (歴史・文化・宗 参考地図に分類されて 教

> のは、 り、番号で照合できるようにしてある さらに主要な探検の足跡は、 年表で年代、 概略、参考文献が整理されていることである。 前述の折込みカラー地図に示されてお

次々に立ちはだかる難問を解決しつつ計画したことがあるので、 淡々としたためている。一九六〇年代、 の転進と初登頂、そしてティリツォは終ったとして、 画から踏査隊のこと、グルジャ・ヒマール がことのように読んでしまった。 一三四メートル)の一九六四年からの一五年間のこと、 第Ⅱ部では、 薬師さん自身が見付けたティリツォ・ヒ 私もヒマラヤ遠征を考え、 (七一九三メートル)へ その経過を すなわち計 マール 我

紀行としてまとめている。 第Ⅲ部では、一九七九年のネパール、 タコーラのトレッキングを

ウィグル自治区、 海省とチベット自治区の全域が含まれ、さらに四川省の西部 ン山脈、 青と西蔵(チベット)の蔵をとった名称である。 チベット高原は、現在中国で青蔵高原と呼ばれている。 ルに境され、 本書はこの大高原の探検と文献に関して最良の図書である。 南はヒマラヤ、 地球上で最も山岳に恵まれた地域である。 甘粛省、 カラコラム山脈、 雲南省の一部にまで広がる。 東は横断山 その名の通り、 脈 北はコンロ 西はパミ とも 海省 0

れ

A ・アルヴァレズ著、 井上謙治訳

Ш の肖像 男にみる生き方の研究 あるクライ

新潮社 1 九九〇年一 五〇〇円 月刊 В 6判 一八七

1

いう信条をつらぬき通すクライマーの人生と登山を語る 山登りはスポーツではなくて気晴らしであり命を賭けるべきものでないと

彼をモーと呼ぶ。そのモー・アントワーヌが本書の主人公である。 ジュリアン・アントワーヌだが、人は幼少の頃からの愛称を使って タイぎらいで、もじゃもじゃの髪をした小柄な男。その男の名前は などを作っている。 さな会社があってヘルメット、ピッケル、テント、 継母から邪険に扱われていたモー少年は、 イギリスのウェールズにある小さな町。そこに社員二十数人の小 経営者は町から二マイル離れた村に住む、 ボーイスカウトのキャ スポーツウェア ネク

によってはモー

らいならむしろ安定した経営をする方を選びたいというわけだ。 あるわけではないから、遊休設備をかかえるような冒険をおかすく

の伝記を企業経営の参考書として読むことができる

ントなど、つぎつぎに新製品を考案した。体験を活かしたアイディ る企業をいっしょにやろうという友人の呼び掛けに従った。ヘルメ ちたい一心で学校教師になろうとするが、安全ヘルメットを製造す でヒッチハイクしてニュージーランドまで行った。山に行く暇を持 で野営するようになった。これが山登りへと発展した。友人と二人 ンプを体験して以来、 ノリュ 製造が成功した。それからというもの、チタン製のアイス・ス 軽 便で丈夫なテントであるリンペット、 週末になるとリュックサックをかついで一人 不時露営用のテ

ガー

山男に き方の研究 A·アルヴァレス

E

量注文をことわる。なまじ規模を拡大しても注文がいつもたくさん あるクライマーの肖像 ただひたすら山に登り続けるのも 肩射はらぬ生活信条のなかに失われつつある 人間本来の生き方を探る。 新郷社園 るのを好まないか むやみと大きくす しも押されぬ さりとて " 会社の規模を 日本からの大 用品会社に

才 は だろう。 ポンサー付きで新聞報道で名前を売り本を売って名声を保たなくて 登る行為を楽しむのが彼の登山のすべてであることを証明する。 つづきであることを意味するのではなく、 マラヤに遠征したにしては登頂が少ない。これはモーの登山が失敗 哲学であるはずだ。本書の核心もそこにある。 として人生の一部に取り込んでいる人々に興味深いのはモーの登山 ならない登山家になる気は毛頭ない。 の考え方は、 規模を拡大しない、野心に取りつかれないようにしようというモ 峰に登ったとき登頂を実質的に成功させ負傷者を助け下ろ 彼の山登りにもそっくりあてはまる。 一九七七年にカラコルムの 良き友たちとともに山に 十四年も連続してヒ 山登りを趣

スポ

アが彼の会社を押

ラフ・ハヴェル」としているが、一九八九年秋に脚光を浴びてチェ

コ大統領になったほどのヴァツラフ・ハヴェルの名を正確に表記で

ーだと信じるからだ。

・だと信じるからだ。

・だと信じるからだ。

・だと信じるからだ。

し、岩登りをつきあいもした。モーに人間的な魅力を感じた。そし家として活躍する著者は登山を趣味に持ち、モーと親しく交際したと考えを伝えようとしたのがアルヴァレズだ。評論家、詩人、小説を名行為に関しては無欲であって本を書きそうにないモーの人生

てこの小さくはあるが友情に満ちた評伝が誕生した。

頂上に達することを最上の目的と考えない登山家のアマチュアリ 頂上に達することを最上の目的と考えない登山家のアマチュアリスティックな文筆に手慣れた筆者は軽快な筆致い、そんなアルピニストの評伝として、本書は興味深い内容を持っている。ジャーナリスティックな文筆に手慣れた筆者は軽快な筆致い、そんなアルピニストの評伝として、本書は興味深い内容を持っている。

モアをチェコの作家ハヴェルのそれと比較する箇所で訳者は「ワク大ページ)の「対角線」を私はどうにも理解できない。モーのユーうことで、ルートの大部分は対角線を描くようになっていた。スコットは比較的問題なくアブザイレンして下りることができた」(七ットは比較的問題なくアブザイレンして下りることができた」(七水ページ)の「対角線」を私はどうにも理解できない。モーのユー大ページ)の「対角線」を私はどうにも理解できない。モーのユー大ページ)の「対角線」を私はどうにも関係でいるというによっている。

当な態度だろうと思う。 (宮下啓三)疑われても仕方がないだろう。改訂版を待って推薦するのが私の正きないようであってはジャーナリストの著書の翻訳としての価値を

増永迪男

『福井の山 150』

5変型版 三二七ページ 三〇〇〇円 ナカニシヤ出版 一九八九年十一月刊 A-

ヤブ山登山の醍醐味を教えてくれる

増永さんとは、もう二十年以上も前からの友人である。私たちは 一九六八年に中部ヒンズークシュのピークX (登頂後、シャー・ イ・アンジュマンと命名)へ山登りに出かけた。当時はまだ、アフ イ・アンジュマンと命名)へ山登りに出かけた。当時はまだ、アフ でその前年、氏に率いられた広島大学山岳部がピークY (登頂後、 ヤジュン峯と命名)に初登した時の記録や情報は貴重だった。何度 ヤジュン峯と命名)に初登した時の記録や情報は貴重だった。何度 も初歩的な質問を重ねたが、その度ごとに痒いところへ手のとどく ような親切な回答を頂戴したことに今も感謝している。 ような親切な回答を頂戴したことに今も感謝している。 ような親切な回答を頂戴したことに今も感謝している。

郷の山に残してきた足跡を集大成して『福井の山 15』を出版されたのも増永さんである。その増永さんがアフガン以降、今日まで故の山をいくつか登った。その時、毎回ご案内の労をとっていただい



林の山々へと志向 る白雪の峰々に憧 深くに静まりかえ というか氏も評者 を変えていった。 た後、 不思議なえにし あの砂漠の奥 緑濃き樹

旋律となっているのである もこの本に限ったことではない。既著の『霧の谷Ⅰ・Ⅱ』『日本海 む者をしてひきつけて止まないのではないか。 緑林と碧渓をワンダーリングするものの哀歓が行間に秘められ の見える山』『取立山・しらやま考』などの諸著作でも底流する主 コンプレックスが秘奥に蔵されているせいかもしれない。それ故に こうして同じ軌跡を辿ったのは、 原体験としてのアフガンの山への しかし、それはなに

ずることもあるだろう。 思わぬ滝に出合う楽しみなどが現われて、 けて頂上に立った時の喜びは、木々に遮られて眺めが得られない時 の木峠を境として福井県を南北に分ける。 沢を詰めて頂上を目指すのが一番の早道となる嶺北 へと延びているけれども、 忘れられないものになる〉(本書、 地図を読みながら方向を確かめ、 山道が開かれている少数派を除いては、 概説より)に尽きるので 山登りらしい手応えを感 評者注) の山やまでは、 (木の芽峠、 ヤブを分

今日のヤブ山登山の楽しみは

〈現在は各地で林道が谷の奥

ある。

うした一見なんでもないような記述の中にも氏の経験の奥深さと 残雪の線となって、現れていたのだった〉(本書、 なって、長く残っている。そうした山道の名残が、 歩かなくなって木々がその上に茂っても、山肌に刻まれた細い線と 見えてきて、「おやおや」と思ったことがあった。 子が見えてくる。それと同時に正面の山の尾根に、 を鋭くする。 する山を登っている時とは異質の緊張感が、五感を鋭敏にし観察! そして、こうした山を志す限りは、登山道があって指導標が完備 〈雪の斜面で一息入れていると、やがて周囲 飯盛山より)。こ 斜めに長い道が 山の道は、 春の山に一条の の山

こめて)見つめてきた、と断言できるから、どんな小さな山にも、 本の山の大方がそうであるように、ヤブ山こそが登山のハイマート り)と胸を張って言い切ることができるのである。 すべて良い個性があることは、よく承知している〉 であると主張する。だから〈私は県下の山やまを注意深く(愛情を いずれにせよ、本書はアルプス登山が登山のすべてではなく、 (本書、

力の確かさを知ることができるはずだ。

てしまっては、ヤブ山登山の楽しみを全然失ってしまう。すなわち 志す限りはガイド・ブックを頼りにした、 美濃の山をひと括りにして美濃北陸と仰言っていたが、この山域を 本書はいわゆるガイド・ブックではない。今西さんはこの福井と奥 べておきたい。以上でも大方はお分かりいただけたものと思うが 道もない、 蛇足ではあるが、あえて付言することをお許し願うとして申し述 指導標もない、 ガイド・ブックにも出てこない山にた ただの検証的登山をやっ

Ш

を顧みて/ひとつの山を終わりけり/なんの俘ぞわが心/早くも急 こそがヤブ山登山の醍醐味のすべてなのである。 ち向かう時の不確かさから来る不安、登る途中で絶えず迫られてく あることを本書は教えてくれているのである。 かるる次の山」とあるが、 る右せんか左せんかの決断、そしてこれを登り終えたときの満足感 、県の大聖寺には深田久弥さんの文学碑がある。 ヤブ山登山の喜びもまた、 この福井に近 碑 面には すべてここに (高木泰夫) の茜 11 石

7 イクル ウエスト著 ・ウオ 1 1, ジ I 1 4 ス . 111 V " ジ、 3 3 1

高所医学・生理学』

M. P. Ward, J. S. Milledge and J. B. West, High Altitude Medicine and Physiology • Chapman and Hall Medical, London, 1989.

医師向きか、

というと、

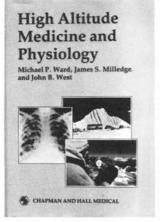
応高所医学の素養のある医師にとっては

くない一般登山家には非常に難しいのではないかと思う。それなら

高所医学のすべてを網羅した手引き書

会の機関誌 文献を渉猟しており、 0 揃った人は、 六名中十五名に眼底出血を観察した、という名古屋の浅野さんの 本である。さすがによく書かれている。 中の三人が共著で、 流の医学者にして一流の登山家、 『登山医学』 世界広しといえども非常に少ない。 驚かされる。 冊 で私が英文で紹介した、 の登山医学の教科書を書いた。 例えば、 しかも一流の文筆家と三拍子 あらゆる分野にわたって わが日本登山医学研究 パミール峰 その数少ない存在 登山

> 山家にも読まれることを願って書いたようであるが、 略を承知してそこからさらに原著について詳しいことは探って ざるをえない。だからこの本は「手引き書」というか、 網羅しているので、 り揃いで、彼らが知っている限りの、 されて、世界中に認知されることになるのはまことに喜ばしい く、という種類のものと考えたほうがよい。著者らは本書が に一四○頁を当てているにすぎない。 に対し、 約五〇〇頁のうち、 お仕事が収録されているのである。 本書はどちらかというと生理学の方に重点が置かれていて 取り上げられて当然であるが、それがこのような教科書に記 低圧・低温障害とその対策については、その半分のわずか 高所環境生理学に約三〇〇頁を費やしているの つの事柄につい この成績は驚くべき事実なの ての記載が非常に簡潔になら ありとあらゆる事柄について しかも著者たちは大変な物 医学素養の全 この本で概 全巻 般登



既知の内容が殆ど なので、読んで目 なので、読んで目 なのである箇所はあ にかく書いてある にかく書いてある ことが通り一ぺん なのである。しか

また、前述したように、ある項目についてその出典を引くために文識を整理しておきたい、と希望する人には向いていると思われる。いる人とか、少しは承知している積もりだが、この際、系統的に知あり、これから高所医学を一通りサラっと勉強してみたいと考えて

お

いた。読者の中で、やってみよう、という人がもしあれば大歓迎

献を調べるのには便利な本である

ここに、目から鱗が落ちるようなことはあまりない、と書いた 下ライアイスが本来の温度(マイナス八○度)にまで暖まるのに一 という章であるが、高所医学の教科書でこの点に触れた本は 実際』という章であるが、高所医学の教科書でこの点に触れた本は 実際』という章であるが、高所医学の教科書でこの点に触れた本は 書通採集した標本は液体窒素で凍らせて持ち帰 が紹介されている。普通採集した標本は液体窒素で凍らせて持ち帰 がのに一二日、液体窒素の温度(マイナス一九五度)に冷やされた なのに一二日、液体窒素の温度(マイナス八〇度)にまで暖まるのに一

本書の日本語版が出てもその運命は推して知るべし、と思うからで 者はチャールズ・ハウストンの『高みを目指せ』を訳したことがあ 医学の概論を勉強しようと思う人は、少々難しくても、 あるが、見果てぬ夢に終りそうである。であるならば、 か、原著としての『登山医学』 本語版は日本でしか売れない。それが問題である。評者は何時 は勿論ないが、とにかく英語の本は世界中で売れる。 ある。英語を読む人たちは、 せ』の方がはるかに取り組みやすい。それがこの始末であるから、 である。分かり易さ、読み易さ、の点からいうと、『高みを目指 う広くないだろう、という出版社の状況判断に従ってしまったせ った。『岩と雪』に連載されたけれども、 であるが、 た。それは評者の責任ではあろうが、おそらく日本語版の市場はそ 出版は先づ無理ではあるまいか。というのも、 誰でも本書の内容が理解出来るわけで の教科書を書くことを夢見るもので 結局本にはならなか それに反し日 本書あたり 日本で高所

しら? という質問である。それは多分悲観的だろうと返事して先日ミレッジから手紙を貰った。この本の日本語訳は出ないもの

研究を志している人にはぜひ試みてみて頂きたいものである。た。これは非常に優れたアイデアと思うので、これからフィー

のであったが、

出発直前にここのところを読んで、何とかならないか、と努力したマ峰医学学術登山隊に参加してこのほど帰国したばかりであるが、凍出来た、というのである。実は、評者は先日京都大学シシャパン五日、さらにドライアイスが無くなるまでに四二日、合計六九日冷

を原書のままで読むのもまた仕方ないかも知れない。

(中島道郎

残念ながら、この方法を真似することが出来なかっ

ルド

スイス山岳研究財団編・近藤等、福田宏年、望月達

大、薬師義美、吉沢一郎監修

『マウンテン・ワールド』

小学館 一九八七~一九八九年 B5判

全

写真をとらなければならなくなった。

海外の山々の身近な歴史を知る好著

る。 を出してみると、原書のカバーは本文のエベレストの項にあるアイを出してみると、原書のカバーは本文のエベレストの項にあるアイを出してみると、原書のカバーは本文のエベレストの項にあるアイで好感が持てる。カバーの写真に見おぼえがないのでスイスの原書によれま、一九五四年版を手にしてみたが、重厚な本は品があったまたま、一九五四年版を手にしてみたが、重厚な本は品があった。

て、非常にいいでき栄えにあがっている。
て、非常にいいでき栄えにあがっている。
と思えば、「氷河における地震調査」中の一枚の写真は左右が逆にと思えば、「氷河における地震調査」中の一枚の写真は左右が逆にと思えば、「氷河における地震調査」中の一枚の写真は左右が逆にと思えば、「氷河における地震調査」中の一枚の写真は左右が逆にて、非常にいいでき栄えにあがっている。

達りにも対象的だ。

トを経た大遠征隊と、

現地食に頼る小遠征隊のあり方の違

真がそれである。それ以後登頂者は是が非でも頂上からのパノラマ写真がそれを救った。一九五四年版に出ているピッケルの写った写がパルバートのブールの単独登頂も疑問視されたが、たった一枚の高峰の登頂に疑問を抱く動きが出てきたのもこの頃だった。ナン

も、読者諸氏に遂行すべき任務の偉大さを知っていただくため」とることを目標に掲げている。わが財団がこの山岳年鑑を発行するの任務がそれで終ったのではない。……スイス山岳研究財団は、地の任務がそれで終ったのではない。……スイス山岳研究財団は、地の任務がそれで終ったのではない。……スイス山岳研究財団は、地の任務がそれで終ったの時代は過去のものとなった。しかし登山家れている。バイオニアの時代は過去のものとなった。しかし登山家れている。バイオニアの時代は過去のものとなった。とごとく踏破さ「ヨーロッパの中央に位置すると知っていただくため」と

何だったのだろう。

一九四七年の第二巻にはスイスのガルワル遠征隊の報告が語られている。それは昭和二十二年であり、敗戦の混乱にあえぐ日本とはている。それは昭和二十二年であり、敗戦の混乱にあえぐ日本とはている。それは昭和二十二年であり、敗戦の混乱にあえぐ日本とは一九四七年の第二巻にはスイスのガルワル遠征隊の報告が語られ

述べている。

地での登山史と、それにかかわった人々の紹介といえよう。が、一言にしていえば、スイス人によるアルプス以外の地球上の各一九四八年第三巻は本シリーズ中の最大の巻として五八七頁ある

山の様子が描かれている。山が違うとはいえ、装備にも十分なテスィッヒーのチョー・オユーの初登頂。この二つの対象的な八千米登一九五五年版を開いてみると、そこにはイタリー隊のK2と、テ

る。またチューリヒ学士山岳会の南米の記録によって、私達に南米 がある。彼等がアボッタバードから焼けつくようなカガン谷をたど って到着したギルギットに、今では飛行機で容易に行くことができ 九四九年第四巻には英国、スイス合同のカラコルム遠征の記録

にこんな素晴らしい山があることを知らせてくれたのだった。

いる。マルセル・クルツのヒマラヤ編年誌が掲載されるようになっ いいだしてできたヒマラヤ遠征隊がカンチェンジュンガを一周して 九五〇年第五巻。一人の女性が夏にはヒマラヤへでも行こうと

ン」 1/15万図、ローガン頂上からのパノラマ写真が付録となって ーランド南部」のカムカルテ、「ペルー南部」概念図、「アビ・ガミ にできたのは、寒い国に育った利点だろう。この版には「ニュージ 子が述べられているが、今でこそ珍らしくないこんな登り方が当時 横を通って、七千米でシュラフだけのビバークの末、初登頂した様 ェルンベリが一つ下のキャンプから上のキャンプで食事中の連中の 一九五一年第六巻。ティリチ・ミールの報告では、脚の長いクヴ

ったか。この巻のアルノルト・ファンクの「氷山の生成と消滅」 が倒れていった画面を想い出すが、あれはファンクの映画ではなか いるだろうか。かすれたような傾斜していく音楽をバックに、 一九五二年第七巻。「SOS氷山」という題の古い映画を知って 古い記憶が呼び起された。 氷山

征服」が、その後の暴風圏の山々の登攀に火をつけることになり、 八千米峰より魅惑的というリオネル・テレイの 「フィツ・ロイの

> ンの対照的な報告もある。 エベレストのクーンブ氷河ルートについてのハウストンとティルマ 数年前の電気ドリルによるボルト打ち事件にまで発展していった。

を発見しての登路の決定。そして三回にわたる個人的な無許可の密 許可を得ての地図の作成と、試行錯誤の三ヶ月後に東ロンプク氷河 て以来、一九○五年に始まる三回の遠征計画。一九二一年に始めて レスト百年史」。一八五二年に世界の最高峰であることが確認され レ・エベレスト特集の観がある。マルセル・クルツによる「エヴェ 一九五三年第八巻。この版は翌年のエベレスト初登に対して、

かな行動も述べられている

ーンブ氷河に道を開き、スイス隊はそれをたどることになったのだ 間の後、やっとそれが実現する前の一九五一年にシプトン隊が西ク まり、一九四一年を目標にしたものだった。戦争待ちともいえる時 と受取っていたのだが、実際にはスイスの計画は一九三九年から始 時、 装備と組織的な行動の不備といえるであろう。 った。人類最初のサウスコルを踏んでから頂上へのルートは、 一九五二年春のスイスによるエベレスト遠征の記録がある。 事情にうとい東方の私達は、英国を出し抜いてのスイスの行動

とシェルパの事故が重なって敗退せざるをえなかった。 ている。 一方、南米のボリビアやペルーでの数々の尖峰が登られ紹介され この年の秋、スイスは再びエベレストを目ざしたが、

ーの地図の作られた経緯と、地図の一部がのせられている。記録に 九五六/五七年第十一巻。 ウォッシュバーンによるマッキンリ 九六二/六三年第十四巻。

世界の

山々が登られている最中に、

一九六二年二月四日

ターホルン北壁の冬季初登攀が行われた。

るローツェとエベレストの同時登頂のいずれも輝かしいものばかり はカンチェンジュンガとマカル ーの初登、一九五六年のスイスによ

だが、なぜかひっそりと納められている感じがする。

生死が未確認のまま救助活動の打切られた遭難と、そしてアイガー 最 庇を踏み抜いて墜死した様子が出ている。そして一九五六年、 の初登記録の中に、 北壁の遭 初の八千米峰マナスルの記録がある。 一九五八/五九年第十二巻。 地域調査としてクーンブ氷河の地図が掲載されてい 難の歴史と登攀年表が発表されている。カラコルム山域 ヘルマン・ブールが霧のチョゴリザの尾根で雪 一九五七年にモンブランで起った、 るが、 スイス 日本 0

n Ш 0 深さを感じる。 岳研究財団の長年に 登山のみでなく、 その地域の研究が着々と進められている背景 わたるヒマラヤ地域での科学調査の一環であ

密が語られており、 セル・アダムスを思わせるものがあるが、その素晴らしい写真の秘 1 ォード・ウォッシュバーンの発表する写真はその鮮明さの点でアン キンリー%万の美しい地図が付録され プ・ヤングの追悼をアーノルド・ランが書いている。ブラッドフ 九六〇/六一年第十三巻。 巻末にはウォッシュバーンの主催で作成したマ 偉大な教養人でもあったウィンスロ てい

には雪男は熊であるだろうが、として 物か四足獣かの疑問をウィス・デュナンが ネパール、 カラコルム、 南極の山々登頂記録の外、 投げ かけている。 雪男は直立動 結論的

キム、

ガンサーのブー

・アルメンの二人。 ・後三時半頂上に立ったのは パウル・ エッ ターとヒ ルティ・フォ

午

>

年までの十五年間に、七六粁の通路を測量し科学的 ミューレンで国際バルーン・スポーツ大会が開催され 八九八年十月が最初で、やがて軽気球時代となり、 ていく様子が紹介されている。 スイスの中央部にある「地獄の洞穴」探検は一九四五年から六三 一方、気球によるアルプス越えは 一九六二年八月 へと拡が

の体の状況が思わしくなく、この版からアンデル らさず、 ル続きの報告があり、 は、アマダブラムの無許可登頂後、 る、 クーンブ地方のミンボー谷に作られた「シルバー・ハット」 今まで続けられたマルセル・クルツによるヒマラヤ編年誌は、 ヒラリーの率いた学術調査と登山遠征隊の半年にわたる記録で 衰退するのみであるという失敗の事例の発表がある。 長時間の高所生活は低地の人間に順応をもた マカルーでの高所衰退でトラブ ス・ボリンダーが によ 氏

報告も多く、ビルカバンパの地図も付録され、 さに脚光を浴びた形でヒンズークシ山群が現れてきている。 がある。アジアではヒマラヤ、 れにまつわる当時の手紙や新聞による批判、論争や時代背景の紹介 一九六四/六五年第十五巻。百年前のマッターホ タン等興味深い報告が多い カラコルム山域から時代は移り、 オルシャー ル 初 クの 登 頂 ま

代ってヒマラヤ登山年表としてまとめている。

登登攀 「アイガー直登」。このときジョン・ハーリンが墜死した。 九六六八六七年第十六卷。 是か否か?」の中で「ディレッティシマを登山の発展の ドゥガール・ハストンによる一 一月の

の後退の一歩と見るか、時を得てこの分野に広がりをもたらすものの後退の一歩と見るか、時を得てこの分野に広がりをもたらすものの後退の一歩と見るか、時を得てこの分野に広がりをもたらすものの後退の一歩と見るか、時を得てこの分野に広がりをもたらすものの後退の一歩と見るか、時を得てこの分野に広がりをもたらすものの後退の一歩と見るか、時を得てこの分野に広がりをもたらすものの後退の一歩と見るか、時を得てこの分野に広がりをもたらすものの後退の一歩と見るか、時を得てこの分野に広がりをもたらすものの後退の一歩と見るか、時を得ているがありません。

一九六八/六九年第十七巻。初登頂という感激が薄れ、無数の毛の変った冒険家が現れると、読者の興味も失われることになり、この巻でシリーズを終ることになった。最初から本誌を手がけたマルセル・クルツが八○歳でなくなり、この版の冒頭に彼の追悼がある。存命中に私の作ったヒマラヤの地図を送ったところ、クロニクる。存命中に私の作ったヒマラヤの地図を送ったところ、クロニクー九六八/六九年第十七巻。初登頂という感激が薄れ、無数の毛

地方の氷河湖の調査と未知の山々の美しい写真を発表している。「ルナナ」北部ブータンの峰々、氷河と湖と題してガンサーはこの登は、アルプスにもまだ新しい時代のあることを示している。一方ヨーロッパで最後まで残されたピッツ・バディレ北東壁の冬季初ヨーロッパで最後まで残されたピッツ・バディレ北東壁の冬季初

マウンテン・ワールドとしてのシリーズは以上であるが、マルセ

ワールドに発表したものが多いが、多少添削されており、地図や写本として山岳研究財団が発行したものである。すでにマウンテン・的問題を雑誌等に発表してきたもののうち、重要なものを独立した形学者としてヒマラヤへ出かけた筆者が、ヒマラヤの地理的、歴史形学者としてヒマラヤへ出かけた筆者が、ヒマラヤの地理的、歴史ル・クルツによる「ヒマラヤ編年誌」二冊が付け加えられている。ル・クルツによる「ヒマラヤ編年誌」二冊が付け加えられている。

真は新しく加えられた。

ず、未完成のまま掲載したものであり、最後にヒマラヤ登山年表一てクルツのまとめかけていた貴重な遺稿を埋れさせるわけにいか「ヒマラヤ編年誌2」は一九五二-五五年の記録と、「補遺」とし

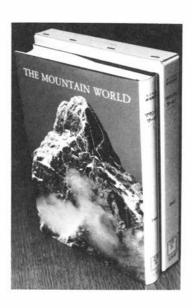
八一八一一九五七年と索引がつけられている。

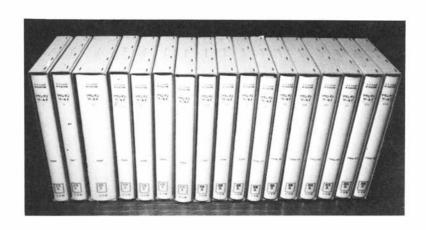
重厚さを増す配慮がなされた。

重厚さを増す配慮がなされた。

て企画面から最後まで監修にたずさわられた方々の御努力をたたえ

(阿部和行)





会報『山』 一一九八九年度図書紹介一覧

●四月号(五二六号)

正憲、C・ニコル対談集『森からの警告』(CBS・ソニー出版

を探る』(未来社) C・アレン著、宮持 優訳『チベットの山―カイラス山とインド大河の源流

木南金太郎著『日本の山登り記』(茗渓堂)

牧野和春著『森林を蘇らせた日本人』(日本放送出版協会)

●五月号 (五二七号)

P・マシーセン著、芹沢高志訳『雪豹』((株) めるくまーる

冨田弘平著『旅がらすの山』(新ハイキング社

札幌山岳会編『ナンガパルバット登山報告書』(札幌山岳会)

鴨井信政著『チベット・エベレスト・ネパール』(シビナ国際文化研究・交

The American Alpine Journal • 1988 (The American Alpine Club

●六月号 (五二八号)

水越久美子編『極楽トンボ・ヒマラヤに眠る―水越英隆追悼集』(非売品

福島高校山岳部〇B会編『西望祁連』(福島県立福島高校山岳部〇B会 足利武三、井上 優共著 『家族ハイク・九州北部の山』(西日本新聞社 シュテファン・グロヴァッツ、ウリ・ヴィースマイアー共著、 山と渓谷社訳

●七月号 (五二九号)

『ロックス・アラウンド・ザ・ワールド』(山と渓谷社

図書紹介なし

●八月号 (五三〇号)

高橋由美子『マンモスとの山旅』(岳書房

The Himalayan Journal • 1986—1987 (The Himalayan Club

色川大吉編『東北大学西蔵学術登山隊人文班報告・チベット曼荼羅の世界―

その芸術・宗教・生活』(小学館

鈴木盛彦著『わが山行』(非売品

白籏史郎編『日本の名峰・山岳写真の会「白い峰」』 (朝日新聞社

橋本 廣著『とやま雪山あるき』(桂書房

●十月号 (五三二号)

大森弘一郎著『山岳飛翔』(岩波書店

木村幸治著『おじさんたちの冒険』(山と渓谷社

小野 健著『栂海新道その自然』(さわがに山岳会

山里寿男著『画文集・道ひとすじ』(筑摩書房)

いらく山岳会) おいらく山岳会編『おいらく山岳会三十周年記念号「山行手帖」増刊』(お

山」(丸善) 荒巻重雄、白尾天理、長岡正利編『(理科年表読本) 空からみる日本の火 秋山恭子・秋山俱子編『ネバール研究ガイド文献目録補遺 (稿)』(非売品

石川県山岳協会編『石川の山』(石川県山岳協会

●十一月号 (五三三号)

宮本袈裟雄著『天狗と修験者』(人文書院

望著『阿蘇万歳』(西日本新聞社

修著『裏山の博物誌』(山と渓谷社

Himal Associates 編集発行 'HIMAL

小坂町教育委員会編『小坂の三角点』(岐阜県益田郡小坂町教育委員会)

●十二月号 (五三四号)

新ハイキング社編『一等三角点の名山一〇〇』(新ハイキング社

日本山岳会婦人懇談会有志編『村井米子追悼集・川森左智子追悼集(二分日本環境協会編『太平洋地域環境問題論考集』(財日本環境協会)

の記録』(毎日新聞社) (毎年出任会婦人懇談会) (毎年出任会婦人懇談会)

●一月号(五三五号

明峯山岳会六十周年記念誌『北岳のうた』(明峯山岳会)

巻)(小学館)

根深 誠著『風の瞑想 ヒマラヤ』(立風書房)、同著『ヒマラヤを釣る』●二月号(五三六号)

矢羽勝幸著『姥捨山の文学』

(山と渓谷社)

悠峰山の会編『悠峰2号』(悠峰山の会) 尾崎 隆著『ヒマラヤ冒険家族』(山と渓谷社)

Jose Maria Azpiazu Aldalur 🌎 FAlpinismo Espanol en el Mundoj

Peter Hillary FRIMO Mountain on the Silk Road』

●三月号 (五三七号)

トム・ホルツエル、オードリー・サルケルド共著・田中昌太郎訳『エヴェレ須藤儀門著『鳥海考』(私家版)日本山岳会越後支部編『越後山岳』・第八号(日本山岳会越後支部)

日本山岳会関西支部編『日本山岳会関西支部五十年史』(日本山岳会関西支神・憲明著『雲の上の支配人』(山と渓谷社)スト初登頂の謎』(中央公論社)



福田文二氏(一九二九~一九八九)

平成元年八月八日中国甘粛省敦煌で永眠

頂・下山し、国内旅行に入った酒泉で倒れ、異郷の地で他界されま 日目的の山・中国甘粛省祁連山脈・素珠連峰(五五四七米)に登 月二十一日に秋田を発ち、計画通りに登山行動をおこない、八月二 アキタ・アルパイン・クラブ日中友好祁連山登山隊隊長として七

「アキタ・アルパイン・クラブ」の設立に参画、会員番号一番をも を礎いた人の一人と言っても過言ではありません。 率先して事務局を担当される等、秋田県山岳界の草分けであり土台 月秋田県山岳連盟結成の発起人の一人として大きく係わりをもち、 多くの岳人を山友達にもって山歩きを楽しまれていたのです。 「文ちゃん」と呼ばれて尊敬されていました。このように県内外に 岳人からは「秋田の福田さん」と親しまれ、県内の山仲間からは 福田さんは、 クラブの発展に大きく寄与されました。また昭和二十六年十一 |田さんは、昭和二十五年十一月秋田県内で一番最初の山の会 秋田県内・県外に多くの岳人を友人にもち、県外の

> 登りの楽しみ・山での仲間との出合いの感激等々をしみじみ味 が、秋田の山をこよなく愛し「秋田の山が一番いい」と自慢し、 い、「山登りって本当にいいなぁ!」とよく口にしておられまし 田さんの四十数年と言う長い山歴からも伺うことができます

た。 見がよく、昭和二十年代後半から四十年代にかけてはクラブの若い 回を数えるくらい登り、これらの山塊については知らないことのな 山・秋田駒ヶ岳・鳥海山・乳頭山・八幡平・森吉山等々は年間数十 メンバーと県外の山にもよく登られ、クラブでの信望も厚い方でし いぐらい知り尽くすほどありました。クラブのリーダーとして面倒 秋田県内の山は殆ど登っておられますが、 なかでも秋田

感も持っておられました。 り除き、隊長として、この計画を見事に成功させるという強い責任 峰」に変更されたときは、愕然とし動揺する隊員の精神的不安を取 ル」を目指していましたが、パキスタン政府より「チョゴリザ北 祥の地インダス川上流フンザ地域の未登峰「ユクシンガルダンサー コルム登山隊」を派遣するとき、自らリーダーをかって出て文明発 て引き受け、海外登山の研究にも努力され、「秋田県山岳連盟カラ 海外登山ブームの時期には県山岳連盟海外登山研究部長を率先し

ちとなったことは、本人は申すまでもなく、誠に残念でなりませ 中友好祁連山登山」の途中、異国の地で病に倒れ極楽浄土への旅た フワークとする山歩きを楽しまれようとし、 四十年という長い公職を退かれ、いよいよこれからご自分のライ 自らが計画された「日

追 悼 OBITUARY



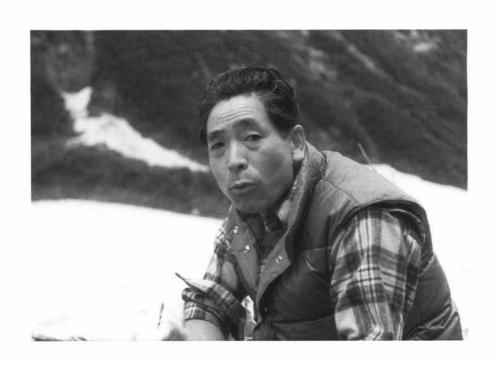
名誉会員 小原勝郎氏 OHARA Katsuro (Hon. Mem.) (1912~1990)



田 辺 主 計氏 TANABE Kazue (1895~1989)



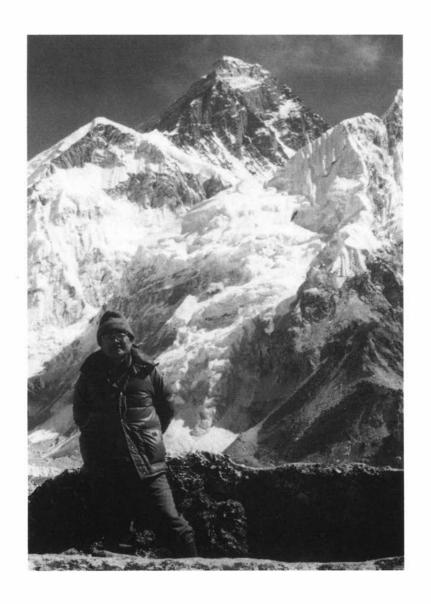
中田 清兵衛氏 NAKADA Seibei (1904~1989)



古 市 義 孝氏 FURUICHI Yoshitaka (1928~1989)

福 田 文 二氏 FUKUDA Bunji (1929~1989)





野 口 秋 人氏 NOGUCHI Akihito (1909~1989)

福田さんの持論は、「山で他人に迷惑をかけるな」「山で事故をお

悼

追

昭和三十五年八月

白馬岳・杓子岳

ません。「文ちゃんの山の考えと持論」を十分にそしゃくして、こ だけに残念でなりません。しかし、今となってはどうしようもでき れからの山行に生かしていきたいものです。 の発展にリーダーシップを願わなければいけないと思っていたとき こすな」「自然を大切にしよう」でした。 これから、いよいよ福田さんの真価を発揮していただき、 山岳界

路平安の旅をお祈りいたします。

平成元年八月八日没 昭和四年二月二十日生

平成元年三月 農水省秋田食糧事務所退職

主な山歴

昭和二十五年十二月 太平山仁別コース冬山

昭和二十六年七月

朝日連峰縦走

昭和二十六年八月 鳥海山·栗駒山

昭和二十七年四月 岩手山

昭和二十七年七・八月 槍ヶ岳・穂高岳

昭和二十九年八月 大雪連峯

昭和三十 年七月 剣·立山·唐松岳

昭和三十四年七月 昭和三十四年五月 飯豊連峯主脈縦走

鳥海山北面中央ルンゼ登攀

昭和三十九年一月 昭和三十五年十一月 富士山 岩木山

昭和三十九年九月 昭和三十九年七月 燧岳 西穂高岳

昭和四十六年十二月 昭和四十二年八月 知床硫黄岳·羅臼岳縦走 台湾玉山遠征

昭和五十四年五月 チョゴリザ遠征 平成元年七月一八月 中国祁連山遠征

その他

合掌

昭和三十三一四十五年 アキタ・アルパインクラブ副会長

昭和三十九~四十一年 昭和四十六年 アキタ・アルパインクラブ会長 秋田県山岳連盟理事長

昭和五十一年 秋田県山岳連盟副会長

昭和五十二年 昭和六十一年 秋田県山岳連盟顧問 日本山岳会秋田支部副支部長

昭和二十八年十一月 日本山岳会入会 会員番号4128

(鈴木 清

出

茂

雄氏(一八九四~一九八九)

(会員番号二七一二)で、五十三歳ぐらいの時だったから、そうお 岡さんが本会へ入会されたのは昭和二十二年(一九四七)十一月

岡さんと本会との関係は、実はそれより遙か昔に遡る。機だったと、ご自身で書いている(『炉辺山話』一九九頁)。だが、若いとは言えない。その事情は本会信濃支部をつくることが主な動

を刊行したが、それらの著者は殆どが本会々員であった。 と雪の日記』が岡書院併営の梓書房から発行されるようになった。 と雪の日記』が岡書院併営の梓書房から発行されるようになった。 と の で い と の で 水 と 雪」の 出版があるが、厳密な意味の山の本 と して は、 は や り 板 倉 さんの本 と 言って い い だ ろ う 。 爾後、 昭和 十 と し て は、 は や り 板 倉 さんの 本 と 言って い い だ ろ う 。 爾後、 昭和 十 と し て は 、 は や り 板 倉 さんの 本 と 言って い い だ ろ う 。 爾後、 昭和 十 と し て は 、 は や り 板 倉 さんの 本 と 言って い い だ ろ う に なった 。 を 刊行 し た が 、 そ れ ら の 著者 は 殆 ど が 本 会々 員 で あった 。 を 刊行 し た が 、 そ れ ら の 著者 は 殆 ど が 本 会々 員 で あった 。

ついで梓書房版の雑誌『山』の発刊があり、その編集には当時本記創刊についての極めて重要な一文といって差し支えない。目記』発刊に就て」(松方三郎記)以外に見あたらない現在、山日日記』創刊の経緯」に詳しい(前掲書所収・また岡著『本屋風梓書房であり、出版に至る迄の事情は、岡さんが書きのこされた梓書房であり、出版に至る迄の事情は、岡さんが書きのこされた

また昭和五年には本会が『山日記』を創刊したが、その発売所は

された。また、その時分松本に山岳博物館を造ろうと東奔西走され戦後は、疎開中の槙さんを担ぎだして信濃支部をつくるのに努力は、決してか細いものではなかったと言えよう。の主だった会員であったことから見ても、岡さんと本会との繋がり

会々員の石原巌さんがあたり、また協力を惜しまなかったのも本会

たが、この方は遂に実現されなかった。その事情は「松本山岳博物

の『山行』、松方さんの『アルプスと人』などを刊行したが、あま戦後、岡書院として再び出版の仕事を始められたときは、槇さん館、企画の挫折記」(前掲書所収)に委曲が尽くされている。

後を岡さんにお願いするというような話があった。行、交通公社発売の雑誌『山』が五号で終刊になったとき、六号以私が岡さんと親しくお話したのは勿論戦後だと思うが、本会発り長く続かずに終ったのは惜しいことであった。

知の開明堂にすることができた。昭和二十四年のことである。(『山岳』八五年参照)。また河出が戦後最初の『山岳』四三年一号という條件で岡さんと話し合い、引き受けていただいたことがあっという條件で岡さんと話し合い、引き受けていただいたことがあっという條件で岡さんと話し合い、引き受けていただいたことがあっという條件で岡さんと話し合い、引き受けていただいたことがあっという條件で岡さんと話し合い、引き受けていただいたことがあっという條件で岡さんと話し合い、引き受けていただいたことがあった。昭和二十四年のことである。

岡さんは陸軍幼年学校、士官学校を経て、一旦は陸軍将校になら行き来のあったのは、思えばまことに短い期間に過ぎなかった。離れ、茗渓堂へ移ってゆき、以後延々現在にまで引き継がれている離れ、茗渓堂へ移ってゆき、以後延々現在にまで引き継がれているだが昭和二十六年刊の『山岳』四五年からは、また岡さんの許をだが昭和二十六年刊の『山岳』四五年からは、また岡さんの許を

学、考古学、民族学、民俗学などの学問にのめりこみ、鳥居竜藏、人類学教室に専科生として入られた(大正十年)。それ以来人類れたが、考えるところがあって日本民族学史を学ぶため、東京大学れたが、考えるところがあって日本民族学史を学ぶため、東京大学のでは、「旦に図算案书になら

追

った。 が書かれていて、私はそれを読んで教えられるところが少なくなか 0 柳田国男、新村出、浜田青陵、南方熊楠、今和次郎等の一流の学者 知遇を受けた。 晩年の作、 『本屋風情』 には、 その当時の思い出

深く読んだ記憶もいまに鮮やかである。 ってくださった。また『アルプ』などに書かれた随筆を、大変興味 その『本屋風情』で第一回日本ノンフィクション賞をえられたこ 手紙を差上げたら、新しい随筆の載った『月刊百科』などを送

に残る。

た岡さんのご冥福を祈りつつ筆をおく。 ととは思うが、それらのことを改めて書き加え、永の眠りにつかれ を語るとき、欠くことのできない文献でもあろう。すでに周知のこ が山に関係ある随筆であり、中でも第三の「追憶」は、本会の歴史 『炉辺山話』には『本屋風情』中の二篇が再録されているが、 殆ど

日死去 (明治二十七年松本市で誕生。 昭和五十七年二月退会。平成元年九月二十一

Ш

(望月達 美

野 秋 人 氏 (一九〇九~一九八九)

れ 術を安全な治療法として確立、 日本医師会最高優功賞や三宅賞を受けている。だが、偉ぶった 口氏は甲状腺疾患の診療・研究の日本的な権威だった。 九〇%の治癒率をあげたことで知ら 特に手

> 生」と市民や患者から親しまれ、 ところは全くなく、その気さくで温厚な人柄から「山と椿の院長先 慕われた。

き合っている方がよほど楽しいのだが……」とささやいたのが印象 に「私には山と椿があった。お医者さんたちより、 席上、医者や薬品関係者の数々のお祝いの言葉を聞きながら、 ていた。晩年に医学への貢献で勲五等双光旭日章を受けた祝賀会の 本人も、自分を支えて来たのが「山と椿」であることを良く知 山仲間や椿と付

となった院長時代である。その境目は戦争であり、 期は九州の山々から海外へ、そして日本山岳会東九州支部の組織者 前期は北アルプスを中心に「松高の内山」で鳴らした学生時代。 「から野口へと姓が変わった時代である。 氏の登山人としての足跡は、大きく前後の二期に分けられよう。 さらに言えば内

年夏、涸沢から奥又白に入り、 きから山に登り、 まったと言われる で、正確な地図さえなかった。奥又のパイオニア・松高はここに始 ースを入れている。当時のこの谷はカモシカ狩りの猟師が知るだけ とんど登り尽くし、 念岳が真正面に仰がれたという。そうしたこともあってか、 明治四十二年の秋、 旧制の松本高校山岳部に在籍中に北アの山々はほ 新しい多くのルートを開拓した。 長野県池田町の内山家に生まれた。家から常 池にベースを置いて前穂の岩にトレ 例えば昭和六

雄三郎氏に腕を見込まれ、 業後は東京大学医学部にいた。ここで別府市の野口病院初代院長 その後、 東北大学に進学、医業を学ぶかたわら山に登り続け、 十五年に野口家に入った。 その後、

になる。 を再開 に就任、 同時に登山人たちのリーダーとしての本領を発揮するよう 時は軍医に召集されたが、終戦の翌日から病院での診療

岳会に入り、実践のなかで新しい登山の在り方を植え付けていっ が、正直なところ、スポーツ・アルピニズムという点ではまだ初歩 のなかで氏は、別府を基盤に九州でも古い伝統と実績を持つ二豊山 の段階。加えて戦争がのしかかり、登山は重苦しい時代だった。こ 十五年から二十年当時、大分県にも既に幾つかの山岳会があった

と連絡を取り合った。三十五年八月に大分支部を創立、副支部長か ら三十九年には支部長に就任、翌年には宮崎の会員を迎えて東九州 人の結集を目指し、大分はもとより熊本や宮崎などに在住する会員 としての本格的な活動を開始する。個々の山岳会の枠を超えた登山 さらに日本山岳会に入会 (会員番号四五一九)、ここから組織者

ヒマラヤなど広範な地域を歩いている。七〇歳でカラ・パタールに できなかったが、後継者が育つとともに自ら出かけるようになり、 ュに登山隊を送った。このさいは院長としての仕事が忙しくて参加 に支部会員を主体に遠征委員会をつくり、四十年にヒンドゥ・クシ の歴訪から。やがてヒマラヤ研究会を組織、支部長就任とほぼ同時 海外に目を向け始めたのは支部結成直前のヨーロッパ・アルプス

立ったあとも、四~五〇〇〇メートルの山歩きを続け、チベットや 雲南にもよく入った。これは花を求めての旅。 特に椿については 昭和三十九年 昭和四十年 大分ヒンドゥクシュ登山隊を派遣、 日本山岳会東九州支部支部長

ブータンなどにも足跡を印した。

県に移され、椿公園となって管理されている。 物園。一千本を超える椿が育っていた。これは最近、 極めて造詣が深く、新しい品種を誕生させた。 自宅の庭はまさに植

者だった。多忙な仕事の合間に、 許さなかった。温厚な人柄から周囲には人が集まり、 好みせず平等に接した。だが、理非は明確にし、いたずらな妥協は に通ずる人間や自然を愛した。 まれているときの野口氏は、本当に幸せそうだった。最期の病床に ともあれ、自然と人が好きだった。山や椿を愛することで、それ 医師として支部長として、人をえり 山の道具や書物、そして仲間に囲 巧まざる組織

は、

生家付近から見た常念岳の写真が掛けられていた。

昭和十五年 明治四十二年十月二十九日 昭和十一年 東北大学医学部を卒業、東京大学医学部副手 野口病院医局員 長野県北安曇郡池田町に生まれる

昭和十七年 野口病院院長

支部に育て上げた。

昭和二十年 昭和十九年 院長として病院再開。 海軍軍医少尉·別府海軍病院

昭和三十五年 昭和二十六年 日本医療法人協会評議員。 法人野口記念会・野口病院に改組して理事長を兼任 日本山岳会東九州支部を設立、

副

支部長

昭和三十八年

日本内分泌学会評議員

大分合同新聞文化賞特別功

追

昭和五十三年 昭和五十一年 日本医師会最高優功賞 大分合同新聞文化賞

昭和五十八年 三宅賞、西日本新聞文化賞

昭和六十一年 勲五等双光旭日章。野口病院名誉院長 厚生大臣表彰

平成元年十月九日

死去、七十九歳

(梅木秀徳

田 辺 主計氏(一八九五~一九八九)

彼が愛誦した次の詩の訳文が挟んであった。 もろもろの樹のなかで最も美しい桜は今 田辺さんから生前いただいたA・E・ハウスマンの詩集の中に、 大枝も撓むばかりに真盛り

さて、私の二十の三倍に十を加えた歳月のうち 一十はもう戻っては来ない

即ち、七十のめぐり来る春から二十を引き去れば

残るは僅か五十である

かも、物の盛りにあるのを眺めるには

さればこそ、この森林地をさして出かけるのです 五十の春もそうゆとりはない

『シロプシアの若者』から

桜の花が雪のように満ち咲いているのを眺めようと。

ていたのは、フランスの象徴詩を原語で味わいたかったためだっ 術家が多かった。七十歳を過ぎてもフランス語のレッスンにかよっ た職業に拘わらず、ねはまったく詩人的気質で、友人のなかにも芸 の訳だと思うが、その時分の心境でもあろうか。彼は、 九五四年一月とかかれているので、田辺さんの六十歳近いころ

の門の図書室に時々かよっていたころ、昼休みの一時、風のように えられて、あの人が『エヴェレスト登山記』の訳者なのかと知っ か居なくなっていた。事務員の小沢さんから、田辺主計さんだと教 入って来て長椅子に横臥して本を読んでいた人が、またいつの間に い思い出ではあるが、まだ私が本会へ入会する前、おそるおそる虎 あれはもう半世紀はゆうに超えているから、夢とも現ともつかな

たとき、そのお礼をかねて家内と共に大井鹿島町のお宅へうかがっ られた記憶がある。 であろうか、野辺地瓜丸とか伊藤武雄のような音楽家が四、 たことがある。かなり広い洋間には、戦災にあって家を失った人々 た。その友情は本当に忘れることができない。私が奇跡的に生還し では入手のむずかしくなっていた書物を度々戦地へ送っていただい 兵隊にとられてからは、戦陣によく便りをいただき、また当時内地 交際の始まったのは、それから二、三年後だったと思うが、私が 本会再建の仕事が既に始まっていて、 五人お

私もそれにかり出された

た。古本が異常な高値をよんでいたころの話である ると、彼は惜しげもなく自分の山の蔵書を随分沢山会へ寄贈され 田辺さんも熱心な一人だった。お茶の水の新しい図書室が出来

うに勧めた

辺さんとは、バウァーの『カンチェンジュンガをめざして』、メイ んと始めたのはそれから間もなくのことであった。それに続いて田 『エヴェレスト登頂』の翻訳を松方三郎さんに勧められて、田 辺さ

い出である。

するようになった。この時代のことは、私にとっても忘れがたい思

スンの『ヒマラヤ』、スマイスの『カメット登頂』などを一緒に訳

ってくれるなら二度とその話はしないでほしい」と言われたので、 もう一度、名誉会員の件を私から持ち出したが、「自分のことを思 ので、その解決にも出来るだけの助力はしたが、落着した翌年秋に 昭和四十九年に本会評議員会は田辺さんを名誉会員に推薦した 固辞して受けなかった。当時住宅問題で窮地に陥っておられた

その侭にしてしまった。

厚い友情に対し、幾分でもおかえしができたようで嬉しかった。そ 夫人の雪さんは特に喜んでおられた。私は多年田辺さんから享けた 柄だったが、健康にもよかったらしく、精神的圧迫もなくなって、 のごく小さい住居に移り住んだ。七階で陽あたりのよいのだけが取 和五十年の春から田辺さんは、私の世話した荻窪のマンション

につく。

辺主計の三人の先駆者の幸福なる出会い……と書いている一節が目

れた。お二人には子供さんはなく、田辺さんは間もなく有料老人ホ ったろうか。人生の小春日和といってもいいかも知れない。 だが、それも五十七年四月の雪さんの病死によって終止符がうた

れからの数年間が、田辺夫妻の晩年での一番よかった日々ではなか

という私の忠告もきかず、昭和五十七年七月三十日附で本会を退会 かがったところでは、いかにも田辺さんらしい言動が多く、時にナ したのも、自分は既に世捨人なのだという心境からだと思うので、 ース嬢を困らせたこともあったらしい。それだけは止められたら、 そこでの七年間は、 あとからヴィラのオーナーの岩城女史からう

そうした言動も私には解らないでもない。それでも、彼に好意を寄 せる同宿の人が何人かはいたらしい。

代から兄事した古い友人である……長谷川巳之吉、 の登山家」になるきっかけを作った本であり、田辺は自分が学生時 計訳の『エヴェレスト登山記』が半世紀に亘って自分を「安楽椅子 之吉』を見ると、エンサイクロペディストの林達夫さんが、 たまたま、その時分、昭和五十九年九月刊の 『第一書房長谷川 大田黒元雄、田 田辺主

た読んだとしても、どう思ったであろうか。 しかし、 当の田辺さんは果たしてそれを読まれたであろうか ま

合った友のうち最も親しい一人であったのは、まぎれもない事実で である。しかも私とは十八歳も年が違いながら、日本山岳会で知り でも残念に思っている。彼が戦後は一度も山へ行かなくなったから く附合いながら、唯の一度も山へ同行しなかったことで、これは今 田辺さんについて想い出すことの一つは、あれだけ長いこと親 を見つけ、雪さんの親戚にあたる〇氏とも相談の上、そこへ移るよ

ムに入ることを決意され、私が「シルバーヴィラ向山」という所

る

辺さんはどうしても賛成しなかったので、遂に沙汰やみとなったこ 何度か山行経験をもち、生前親しくしていた藤島敏男さん(田辺さ ら、本の好きな田辺さんにも慰めになるのではなかろうかと、 気づけようと、彼がそれ迄に書いた随筆などを一冊の本に纏めた んの本会入会時の紹介者の一人)とも打合わせたことがあるが、田 また、たしか昭和三十六年ごろ、私の在札幌時代、田辺さんを元

あった。

とき私は、本会での旧友吉沢一郎、島田巽、織内信彦さんらに連絡 ように生を終ったと、あとから聞いた。亡くなった知らせをうけた い経験をしたが、田辺さんらしい最期だという感をしみじみ味わっ へは織内さんと唯二人で行って、お骨拾いも二人だけという珍らし し、〇氏夫妻ら雪さんの親族数名の方たちと岩城さんの配慮をえ 散歩もやらずに横臥する日が多くなって遂に十月二十五日、 平成元年八月ごろから、田辺さんは徐々に体力が弱まり、 お通夜をし、つづいて十月二十七日に葬儀をすませた。火葬場 ねむる 好きな

さがあったのだと、 田辺さんの胸中には、常人には及びもつかない梃でも動かぬ芯の強 表面はまことに穏やかで、およそ人と争うようなことのなかった いまにして思うのである。

『山』五三四号にかなり詳しく述べたので、ここには省略す

(望月達夫)

古 市 義 孝氏(一九二八~一九八九)

す。 別れの言葉を霊前に述べた弔辞をもって故人を偲びたいと思いま 手厚い看護で快癒を願っていたのですが、大変残念なことでした。 前に友人と安達太良山の残雪を楽しみに出掛けた時のことでした。 元年十一月六日の夜でした。身体の不調を訴えられたのは、 んは、生来明るい、親しみ易い人でした。逝くなられたのは、 時小康を得、 多数の岳人と共に十一月十日告別式に参列し、 福島支部発足以来の入会時年齢の一番若い記録保持者古市義孝さ 軽い山行が出来たのですが、二回の手術と、 友人代表としてお

弔 辞

お察し致します。 入院以来昼夜をわかたず看護なされた奥様のご心痛いかばかりかと ないとは考えてもみませんでした。悔んでも悔みきれません。 古市さん、このように早くお別れの言葉を申し上げなければなら

と会津若松から沼尻、 い豪雪の年で、 るのが恒例行事としておりました。昭和二十五年の合宿は例年にな そこに重いザックを背に新雪を踏んで、吾妻の小屋に冬山合宿をす 振りかえってみますと、 日本山岳会に入会されたばかりのあなたは友人二人 横向を経て吹雪の中、 四十年前毎年正月には元日の雑煮もそこ 夜半遅く会津弁丸出

との最初の出会いでした。その情景がいまだにまぶたに浮んで参りの張りのある元気な声で小屋に飛び込んで来ました。それがあなた

の"闊達"、判断力の早さ、"明るさ、をもってまとめ役として周囲来各種大会、集会、山行にあなたがおられれば、もって生れた天性に懐中電灯をたよりに十五時間余の行動をしたこともあります。以に大田の県体育大会が飯豊山で開催された時は、亡きお父上と共

の人から信頼を一身に集めておられました。

日本山岳会福島支部の常任委員として残された業績は枚挙にいと日本山岳会福島支部の常任委員として残された業績は枚挙にいとまがありません。役員会、打合せ会には地の理のよいことをいいこまがありません。役員会、打合せ会には地の理のよいことをいいこまがありません。役員会、打合せ会には地の理のよいことをいいこまがありません。役員会、打合せ会には地の理のよいことをいいこまがありません。役員会、打合せ会には地の理のよいことをいいことがよりません。役員会、打合せ会には地の理のよいことをいいことがよりません。

長年の山岳スポーツに貢献された功績が認められ平成元年度の福長年の山岳スポーツ功労章受章が内定致しておりました。この報告等々お見舞いに伺ったのはつい先日でした。その時は共々喜び合い、十一月三十日の表彰式にはよくなり是非出席され名誉ある表彰い、十一月三十日の表彰式にはよくなり是非出席され名誉ある表彰い、十一月三十日の表彰式にはよくなり是非出席された功績が認められ平成元年度の福

訓として参りたいと思います。山の頂からあなたの面影を偲ぶこと

これからもあなたがモットーとされた。人の和

"強調性

を教

が当分続くことでしょう。

のお別れの言葉と致します。安らかにお眠り下さい。申し上げることはまだまだ盡きませんが、岳人の代表として最後

平成元年十一月十日と致します。安らかにお眠り下さい。

読ませて貰い、私も先年マナスルトレッキングに参加して来た事を昭和四十九年にはエベレスト街道をトレッキングしその紀行文を在として数多い役職についておられました。
古市さんの人格は以上のような事ですが、山関係ばかりでなく、

いたので、実現することが出来なくなり残念でなりません。話し合い、この次は一緒にのんびりと山を眺めに行こうと約束して討ませて貰い。私も先年マナスルトレッキンクに参加して来た事を

職歴

阿部商事株取締役福島営業所長

歴

昭和三年

いわき市にて出

昭和二十年 福島県立会津工業学校卒

昭和五十七年 日本山岳協会参与

平成元年 日本山岳会評議員

平成元年十一月 胃癌にて逝去

(中嶋正夫)

中田清兵衛氏(一九〇四~一九八九)

中田家は元和元年の創業で、三百八十五年の歴史を有する全国でも稀な薬の老舗である。そのナカダ薬品株式会社の会長中田清兵衛も稀な薬の老舗である。そのナカダ薬品株式会社の会長中田清兵衛さんが、平成元年十二月十六日午後二時十五分に満八十五歳の生涯を閉じられた。二年程前から膝を悪くされて自宅に引き籠もって居られた。ご子息からご逝去の電話を受けて駆け付けたが、あまりにられた。ご子息からご逝去の電話を受けて駆け付けたが、あまりにられた。ご子息からご逝去の電話を受けて駆け付けたが、あまりにられた。ご子息からご逝去の電話を受けて駆け付けたが、あまりにもない。 世界では、一方により、一方には、父の使いでお伺いと記憶もあり、先代を勇吉さん(十六代清兵衛を襲名)のお供でいた記憶もあり、先代を勇吉さん(十六代清兵衛を襲名)のお供でいた記憶もあり、先代を勇吉さん(十六代清兵衛を襲名)のお供でいた記憶もあり、先代を勇吉さん(十六代清兵衛を襲名)のお供でいた記憶もあり、先代を勇吉さん(十六代清兵衛を襲名)のお供でいた。

ている。

大演習で一週間もお泊まりになったご縁によるものと聞い折、北陸大演習で一週間もお泊まりになったご縁によるものと聞いったお家である。なかでも秩父宮家とは宮様が陸軍大学にご在学の折の行在所であり、その後宮様方が当地へお出での節は宿泊所となけの行在所では由緒ある素封家で、明治天皇の北陸御巡幸の中田家は富山市では由緒ある素封家で、明治天皇の北陸御巡幸の

当時は富山に在住して居られなかった。私も昭和二十五年から昭和と聞いている。富山支部が創立したのは昭和二十三年三月で、そのに親戚の中田栄太郎さんの推薦で入会(会員番号二一八二)されたに親戚の中田学太郎さんの推薦で入会(会員番号二一八二)された中田さんは富山の財界人の中でも、特に自然を愛し、大切にされ

名の方を招いて現地調査を実施してもらった。今でいうアセスメン でで止めるべきであると言うことであった。 らしてはいけない」、止むを得ない場合でも交通手段は弥陀 トである。結論として「富山県民のシンボルである立山の自然を荒 た。翌昭和二十七年四月に、槇さん、松方さん、堀田弥一さん等数 道が、鉄道を千垣から千寿ヶ原へ延長し、更に交通手段を弥陀ヶ原 とであった。早速、 が、当時の槇有恒会長と松方三郎さんにぜひお会いしたいと言うこ 頃だったと思うが、 頃は東京にも支部があった)の役員をしていた。 へ進めようとしているが、どう対応したらよいかと言うことであっ して戴いた。それは戦後の復興期の開発の走りとして、 一十七年まで東京で勤務した期間があり、 日本橋のなぐらやホテルに場所を設定して話を 富山からの連絡で中田さんと佐藤助九郎さん その間は東京支部 昭和二十六年の 富山地方鉄 ŧ

昭和二十七年秋に私が富山に帰った時には中田さんは富山支部長昭和二十七年秋に私が富山に帰った時には中田さんは富山支部長として活躍して居られた。毎月の支部役員会は北陸銀行の応接室をとして活躍して居られた。毎月の支部役員会は北陸銀行の応接室をとして活躍して居られた。毎月の支部役員会は北陸銀行の応接室をお成りになっている。

さん、三田さん、松方さん、吉沢一郎さん等本部役員の方々がよく集会以外にも山岳団体の会合には開放されていた。この山荘へも槙羽山荘を建てて戴いた。建坪三十坪程の総二階の山小屋で、支部のったが、それに引続いて中田さんの呉羽山にあった地所に支部の呉このクラブルームは七、八年して電気ビルの増築のために無くな

コヨミルをうを責ま也に、スコウンド、コミンスロリーミスト立寄られた。ヒラリー卿夫妻もこの山荘でくつろいで行かれた。

五ヶ山経由で高山まで案内したこと等が記憶に残っている。

「お成りになった秩父宮妃殿下、松方三郎さん、愛知揆一さん夫妻にお成りになった秩父宮妃殿下、松方三郎さん、愛知揆一さん夫妻を、未だ積雪のある室堂までご案内。昭和四十四年七月から九月にた、大様雪のある室堂までご案内。昭和四十四年七月から九月に中田支部長の業績は他にも沢山あるが、中でも昭和四十年六月初中田支部長の業績は他にも沢山あるが、中でも昭和四十年六月初

ここに中田清兵衛さんのご遺徳をしのび、ご冥福をお祈りする次成を待って、ご高齢の故をもって支部長を退かれたのである。の文字は中田支部長に書いて戴いた。中田さんはこの記念事業の完生誕地である大山町河内に播隆上人顕頌碑を建設した。題字と副碑昭和五十八年三月には支部創立三十五周念記念事業として、その昭和五十八年三月には支部創立三十五周念記念事業として、その

生年月日 明治三十七年九月二十八日 中田勇吉住所 富山市東田地方町一-六-二十七本籍 富山県富山市中央通り二丁目三十五番地

第である。

大正十四年三月 富山薬学専門学校卒

昭和三年三月

明治大学政経科卒

昭和九年 金沢貯蓄銀行取締役同年四月 日本銀行入行

昭和十八年 北陸銀行と合併により当行取締役昭和十七年 同行頭取

昭和二十四年 北陸銀行頭取

昭和四十八年九月 十六代中田清兵衛を襲名昭和三十三年四月 中田清兵衛薬品㈱社長昭和二十七年四月 日本山岳会富山支部長

昭和六十年十月 ナカダ薬品㈱会長昭和五十八年三月 日本山岳会富山支部長退任

平成元年十二月十六日

(若林啓之助)

小原 勝郎氏(一九二二~一九九〇)

追

る

であったようだ。 く裕福なよい環境に恵まれていたらしい。小原君もそのなかの一人 庭など(『山岳』第八十三年、 のせがれ、東京一番のラシャ店の後継ぎ、長者番付に載るような家 私などと違って、そのころの立教は、三菱財閥の重鎮の長男、 したこともある、どっちかと言えばハングリーな学生生活をやった 補佐した実力は、この時代に積み重ねられたものであろう。 部室で馬鈴薯を茹でて昼食がわりにし、旅費を捻出するのに苦労 堀田弥一・立教大学初期の登山 伯爵) 凄

> 0 0

13

立大部報にはさんであったのが、彼の告別式の前夜弔辞の草稿を書 仲間が来ないのか手持ぶさた気味の彼と、初対面であったが、お互 は昭和八年四月、針ノ木岳やスバリ岳とその周辺を登ろうと、 くにあたって偶然に見つけた。変色して古びた一葉の名刺を手にし 雪崩の話などして短い時間を過ごした。そのとき貰った彼の名刺を いに話はすぐ通じる方だったから、春の陽だまりのなか、後立山の をかついで大町の対山館へ寄ったときである。待ち合わせている 部報などを通じて名を知っていた小原君に私がはじめて会ったの 六十年近い歳月の流れをたちまち忘れてしまう思いをした。 スキ

その折のお供は後立山第一級の案内者伝刀林藏 鳥輝夫氏尊父)であった。氏の著書『山の古典と共に』 登山家がやってきた。財界人として高名な大島堅造氏 から大沢小屋を堀出していたところへ、お供の人夫衆に囲まれた老 のっている。余談だが小原君に見送られて籠川谷に入り、雪のなか 名刺には住所が大久保百人町三一二番地と印刷され、 桜井一夫ほかであ (現評議員大 に依れば、 電話番号も

> 行って仕様がないので、義兄である呉文炳(のちの日本大学総長 結婚前です」と満更でもなさそうなお顔であった。 家にあずけられていたころのものらしいですね、もちろん私たち 筈ですよ」と言いながらその名刺を見せたら「小原が山ばっかり 晴子夫人に「ぼくが勝郎を知ったのはたぶん奥さんよりずっと早

の行軍などはいつも部隊の最後尾にくっついて割合のんきにやって めての召集だから、 まま南支那の戦線に従軍する。湖南省の湘潭県守備隊である。 たということだ。小原君自身の話である。 要領よく病弱体質だと申告し、 小原君は昭和十九年、 間違いなく星一つの二等兵であろう。 補充兵として水戸の連隊に召集され、その 部隊から重労役を免除され、

Vi

は

でしたね、というのは飯田君の述懐である。 原君はとてもなつかしそうにしていた。ほんとに思 がらたっぷり御馳走をした。しわくちゃになった山岳会の会報を小 うようなことで、 と思って「きみ小原君じゃない?」「はい、小原であります」とい る兵隊たちが一斉に銃を手に、直立してさっと敬礼をする。 をやっていた。会議の場所へ飯田大尉が行くと、 彼は笑っていた。 積雪季ジャンダルム飛驒尾根初登攀)は幹部候補生の大尉で部隊長 岳部で一緒に山を登っていた飯田輝英君(本会会員番号一八五〇、 長に呼ばれる。そして、きみは登山家だそうじゃない ある日、部隊長連絡会が駐屯地の丘の上で開かれた。 それからは重労役免除の特典はとり上げられてしまったよ、 会議のあと部隊長幕舎で、 翌日小原君は直属 お互いの健在を祝いな 周辺を警備してい いがけない 私と農大山 わ

ん、小室雅夫さん(慶応山岳部〇Bの長老)と三人で雑談していた八年ばかり前になるが、晩秋のある日、銀座の交詢社で島田巽さ

それだけでなく何と言っても小室、島田の両先輩を私が一人でエスと、ホテルの室割りや、食堂のテーブルにしてもおさまりが悪い。と、ホテルの室割りや、食堂のテーブルにしてもおさまりが悪い。と、ホテルの室さんが言い出したのだったと思うが、ニュージー折に、たしか小室さんが言い出したのだったと思うが、ニュージー

めに書き加えておかねばなるまい。ど全くなく、終始御自分たちで始末をされていたことを御両氏のたど全くなく、終始御自分たちで始末をされていたことを御両氏のたけると「いいねえ、いい仲間だねえ」。話は一発で決ってしまった

どうだろうかと咄嗟の思いつきが浮んだ。その晩彼の家へ電話をかコートするのは荷が重い。もう一人誰かを、小原君を誘ってみれば

旅行中同じルームメイトとなって知ったことは、小原君が身の廻旅行中同じルームメイトとなって知ったことは、小原君が身の廻が驚くほど手順がよいというか早いことである。私がスーツケースを開けたり閉めたり、ロックをしたあとまた開けてみたり、実に不器用なのに反して、服の着替えも済まないでいるのを待ちかねるようにさっさと荷物を廊下へ出して、一服やりながら待っちかねるようにさっさと荷物を廊下へ出して、一服やりながら待っちかねるようにさっさと前がよいというか早いことである。私がスわりの処理が驚くほど手順がよいというか早いことは、小原君が身の廻が行った。

がら、南極一番乗りを争ったスコットの記念像のあるクライストチのピクトン港へ船で渡り、そこから列車で南半球の風光を楽しみなニュージーランドでは北島から空路を使わず、クック海峡を南島

ャーチへ行った。

この旅行の最後はオーストラリアのシドニーであった。東京へ帰る日、現地のお金を余しても仕方があるまいと、余分の両替をしないようにしていた。空港へ向う前、小原君と二人で暑い商店街をぶらぶらしているとき、どっちからともなく凄い暑さに堪えかねて、らぶらしているとき、どっちからともなく凄い暑さに堪えかねて、なにか冷たいものでも飲もうじゃないか、とそれらしい店へはいった。ふと料金表をみて、「オレこれだけしかないけど君どう」と聞くと、彼も財布の底をはたいて「二人合わしても足りないなあ」ということでいちばん安いコーラも飲めず、指を銜えてその店をあということでいちばん安いコーラも飲めず、指を銜えてその店をあということでいちばん安いコーラも飲めず、指を銜えてその店をあということでいちばん安いコーラも飲めず、指を銜えてその店をあということでいる。東京へ帰この旅行の最後はオーストラリアのシドニーであった。東京へ帰この旅行の最後はオーストラリアのシドニーであった。東京へ帰る日、日本の大の両替をしないようによっている。

心づかいの人一倍温い小原君はよく私を共通の知友の病気見舞いに誘ってくれた。伊藤秀五郎さんや成瀬岩雄さんを築地のガンセンターに、金坂一郎君を虎ノ門病院に、また三田幸夫さんを神奈川のかというのは私は不得手で、一人だとよほどのことがない限り行かないことが多いのだが、小原君から声をかけられ、これらの人達のないことが多いのだが、小原君から声をかけられ、これらの人達のないことが多いのだが、小原君から声をかけられ、これらの人達の方に誘っている。

に私が常連になり、一晩泊りくらいで随分方々の山へ出かけた。山の空気を吸ってもらおうじゃないかと言い出したのも小原君であ山の空気を吸ってもらおうじゃないかと言い出したのも小原君であまた三田さんが老齢になるに従い高い山へ行けなくなったのはあまた三田さんが老齢になるに従い高い山へ行けなくなったのはあ

日本山岳会では古くからの会員であったから理事や評議員を経験

追

茶の水時代の十五年」に詳しく書いておいた。めておきたい。その前後のいきさつは『山岳』第八十年の拙稿「お再建を提案したのがほかならぬ小原君であったことはここに書きとをあげない。ただ、戦後まもない理事会でクラブルームの必要性とし、多くの功績を残していることは言うまでもない。いまその一々

山岳会の運営に偏りが見られるようなことがあれば、いつもきって生きていた。見るからに痛々しかったが、彼はそれなりに楽しで倒れてから三年半、我がままな自分を抑えひたすら晴子夫人に頼であった。しかし昭和六十一年八月二十三日予期せぬ蜘蛛膜下出血で倒れてから三年半、我がままな自分を抑えひたすら晴子夫人に頼ばりものを言ってそういう傾向をたしなめることがあれば、いつもきっは自会の運営に偏りが見られるようなことがあれば、いつもきっした。

(織内信彦)

多い。小原先輩もその通りである。と、権威振らず、奢らず、ホノボノとした人柄が滲み出ている人がで通って居る。老年なのに「ちゃん」呼びされて居る人は、温かさで通って屠る。老年なのに「ちゃん」と温かい信頼の呼び方

供した事や、インドの旅、インドネシヤの旅のお供の思い出、タラして、逗子のお宅へと翔ぶ。新幹線の車中、ヒマラヤの旅へ二度お山岳部のOB関係への通報を、山野井武夫・太田晃介の両君に依頼父が亡くなりました」と訃報の電話を受ける。取り合えず立教大学平成2年1月24日、朝9時頃、息子の岳郎さんから「昨夜十時に平成2年1月24日、朝9時頃、息子の岳郎さんから「昨夜十時に

から後から思い出が尽きない。

がいら後から思い出が尽きない。

がいだ象の背中は、背骨がゴツゴツ出て居て、跨ぎ座った根の尾底骨を象が歩く度、前後左右に擦るので、遂々私の尾底骨の私の尾底骨を象が歩く度、前後左右に擦るので、遂々私の尾底骨のした私の尻へ膏薬の貼り替えは小原さんが前、私が後で象に乗っての三時間。生イのジャングルで小原さんが前、私が後で象に乗っての三時間。生

本間に、私を待って居て下さった。年ら起き出しそうな、安らかな、いつもの顔の小原さんが応接の日年ら起き出しそうな、安らかな、いつもの顔の小原さんが応接の日本間に、私を持つない。

8名 田政雄・中島雷二・湯本、 初めて台湾の玉山 七月にされて居る。昭和三十七年日本山岳会の名前で静岡支部 亡くなられて山野井君の作ってくれた年表を見て、改めて小原さん めて、ホトンど識らない事に気がつきビックリもした。 れて居た。(同行 の山歴の深さに驚く。十六歳で既に燕岳-槍ヶ岳の縦走を昭和三年 随分と親しくさせて頂いて居た小原さんの事は、亡くなられ 昭和八年に新高山・大覇尖山の山々へ、在台二カ月の山旅をさ ・大覇尖山の登山をしたが、 台湾山岳会、 同志社 沼井鉄太郎、 児島勘次・入江保太・塩見正 立大 小原さんは戦前、 小原勝郎 小原さんが て初

洋委任統治のサイパン・テニヤン・ロタ・ヤップ・パラオの島々を八年から十四年の六年間は精力的に、樺太・朝鮮の山々を歩き、南か。昭和三年頃から北アルプスに、南アルプスで鍛えた脚は、昭和と思う。自分でジット山を、自分流に楽しんで居られたのではない、小原さんは自分の事を余り語りたがらない、口の重い方であった

治生れでチャキッチャキの江戸っ子の小原さんは、生まれ乍らの恵を金が無ければ出来ない楽しみであった。江戸・深川に生まれ、明と金が無ければ出来ない楽しみであった。江戸・深川に生まれ、明と金が無ければ出来ない楽しみであった。 東に、戦前の登山や探検は暇次いで満州・内蒙古・北支へも旅をされて居る。山で鍛えた脚力と数渉して居る。更に、フイリッピンの鳥々にも足を延ばして居る。

まれた家庭に育ち、

良き青年時代を過ごされた方と思

います。

た時、予算無しの決算で、資金的に大いに援助してくれた、 中も一寸した事でもヒントをくれて大いに助かった事を覚えて居ま るまで毎日本部の在った井川村で過ごして居ました。国体運営期間 さん、技術委員長の小原さん、副の折井健一さんとは、 さんとは、 が、開催六箇月前にやっと許可された。当時、登山部門の国体実行 村・梅が島村・上川根村の皆さんへ、お礼を兼ねての懇親会をと、 なった。御陰で国体準備万端整って、国体委員長の日高信六郎会長 委員長であった私は、技術委員長の小原さん、副委員長の折井健一 最後の第十二回静岡国体は、 第十二回静岡国体以来、特に親しくさせて頂いた。日本山岳会主管 キチッとけじめを付ける日常生活の小原さんは、時には一寸悪戯 前の小原さんの事は何一つ知る事は無く、戦後、 日高会長、小原さん、折井さん達が先頭に立ってお礼回りの 次いで静岡国体でも山岳は体協から除名処分を受けていた 登山部門の国体は暫く実施出来なかったかも知れなかっ 度重なる打合せをJACルームで行い、時には夜半にも 紅葉会がこれ 前年、兵庫国体山岳部門は実施を許さ から三十年も続きました。 昭和三十二年 国体の終わ 井川

え

神であるのに気がつく。小原さんの強烈な教え。郷に入らば郷に従 味が判らず戸惑う。あアそうか! インドでは牛はヒンズー教での ン・スープをのむスプーンを一寸休めて小原さんがボソッと言う。 人の外国人グループが思わず一斉にこちらを見た。そしてオニオ 板の余熱に弾け焼ける音が、ビックリする程大きく、 かなムード音楽の流れて居る席へ、ピチピチと、ステーキの油が鉄 光と静かなバンド演奏が、リッチな気分と旺盛な食欲をそそる。 ら遠ざかって居たのでビーフ・ステーキを注文。ほの暗く適当な減 ディナーは小原さんはさらりとインド料理、 ンドが静かに、サクラサクラの曲を奏でて歓待をしてくれ始めた。 ル になって直してくれる事が多かった。デリーのインペリアル Ш のバンド付きの食堂で、目敏く、私達を日本人の連れと認めたバ 本は元気があるなア。 神さんを食べるんだから……」 私は暫く脂っこい 隣の席の老婦

か、冷気の当たらない様に頭の先から足の先まで、毛布でスッポリカ、冷気の当たらない様に頭の先から足の先まで、毛布でスッポリット堪えて居る小原さんを発見。無駄な脂肉の着いて居ない小原さんには、クーラーのひんやりとした心地好い冷気は身体に毒なのさんには、クーラーのひんやりとした心地好い冷気は身体に毒なので、个気が付くと、隅のベッドが、冷気の当たらない様に頭の先から足の先まで、毛布でスッポリラでチビチビ水割りの杯を重ねる。フト気が付くと、隅のベッドグラでチビチビ水割りの杯を重ねる。フト気が付くと、隅のベッドグラでチビチビ水割りの杯を重ねる。フト気が付くと、隅のベッドで減からまっぱり、たいに、カーラーのひんやりとした心地好い冷気は身体に毒なの治した。酒を飲まない小原さんには、クーラーのひんやりとした心地好い冷気は身体に毒なのたが、冷気の当たらない様に頭の先から足の先まで、毛布でスッポリが、冷気の当たらない様に頭の先から足の先まで、毛布でスッポリが、冷気の当たらない様に頭の先から足の先まで、毛布でスッポリンと、

ぽい小学生の様な瞳を輝かして、

私の無礼・無作法を指摘、

とイモ虫姿。「他人の振り見て我が振り直せ」。気付いた私は勿論

り合い。タンボチェの小さな尾根に登り、そっと持ってきた若死に 思ってくれて居る先輩に申し訳ない思いが今でも込み上げて来る。 クーラーのスイッチを切った。滲み出る汗を手の甲で拭い乍ら、 んも居たゴラパニ峠でのスケッチのお互いの坐る場所の取り合い譲 失敗談や我慢は思い出すと後から後からと出て来る。大塚武さん 冷房を弱くしてくれ」とも言わずに暑がり屋の私の事を

居ない。 ろよ」と霊界へ若死にした山の友達と話をして居た小原さんはもう トに向けて「おい! した山の友達の写真を、雪煙が長くローツェの方に棚引くエベレス お前の見たがっていたエベレストだ。良く見

(山本朋三郎)

大正十三年十二月 明治四十五年三月二十五日 赤城山猪谷旅館に遊ぶ 東京深川に生まれる

昭和三年四月 七月 立教大学入学 燕岳→槍ヶ岳 上高地定着 山岳部入部

昭和四年三月 地蔵岳(鳳凰山

七月 剣岳 八ツ峰

黒部川遡行 平の小屋より源流迄登り三俣蓮華を越え金木戸

十月~十一月 剣岳

十二月 八方尾根より唐松小屋

昭和五年一月 白馬岳

三月 鹿島槍岳 爺ヶ岳 登頂

三月

針の木岳

スバリ岳

赤沢岳

鳴沢岳

岩小屋沢岳及び蓮華

四月 御山谷小屋より針の木岳 スバリ岳 鳴沢岳 赤沢岳

及び

黒部別山(黒部側から積雪期初

七月 乗鞍より笠ヶ岳 烏帽子岳 剣岳縦走後 真砂沢B・Cより

八ツ峰 三窓谷等

七月~八月 黒部別山内蔵之助平を経て黒部川遡行

上廊下を経て

薬師沢より有峰へ

十一月 祖母谷小屋中心に鹿島槍岳 十二月~六年一月 白馬岳 清水岳 五竜岳の偵察 不帰谷を経て黒部本流へ下り

字奈月へ(冬期初

昭和六年三月~四月 黒部川より鹿島槍岳 五竜岳(黒部側から積雪期初)

四月 剣岳

昭和六年七月 鳳凰山より白根を経て塩見岳へ

八月 涸沢定着 ジャンダルム 前穂高 北尾根等

十月 日本山岳会入会 会員番号一三三四番 紹介者・早川種三・

槇有恒・藤島敏男

十二月 明神岳

昭和七年一月 富士山

三月~四月 内藏之助平定着生活 黒部別山

仙人山

池の平

小

十月~十一月 窓より剣岳縦走(積雪期初 前穂高岳 奥穂高岳 ジャンダルム等

十二月~八年一月 奥穂高岳等

八峰キレット小屋より五竜岳

鹿島槍岳

カクネ里よ

昭和八年三月~四月

127

り北槍北壁試登

七月 剣岳真砂沢生活 剣岳東面

七月~八月 台湾の山(1)新高山塊 大水窟山2能高越え3大覇尖山

十月~十一月 槍ヶ岳

昭和九年三月 立教大学卒業 九月 東邦電力入社

間に樺太沖縄等、当時旅行可能の辺地を旅した。 昭和七年夏 南洋委任統治の島々に旅行 サイパン 台湾、昭和十一年 朝鮮 パラオを経てフィリピン ミンダナオ島のダバオより引き返す。昭和八 満州 内蒙古 北支、その後昭和十四年迄の テニアン ロタ ヤッ

昭和十四年 近衛第一師団入隊 同年除隊

昭和十八年五月 昭和十六年十二月 鹿島槍岳 天狗尾根 田辺晴子と結婚

昭和十九年~二十一年 再度応召 中支湖南方面に従軍 昭和三十年春 日本山岳会第三次マナスル先遺隊長

昭和三十一年秋 日本山岳会第三次マナスル隊

昭和五十四年十一月 シャンボジェ トレッキング 昭和五十二年十二月 アンナプルナ周辺トレッキング

昭和五十七年八月 フンザ周辺トレッキング

昭和六十一年八月 くも膜下出血のため手術 昭和五十九年十一月 日本山岳会 名誉会員

平成二年一月二十三日 逝去(享年七十八歳

(山野井武夫)

会報『山』追悼文一 覧

• 一九八九年七月号 (五二九号)

西堀栄三郎元会長を偲ぶ(斎藤惇生 山田 昇会員 (八木原圀明

• 一九八九年八月号 (五三〇号)

•一九八九年九月号 (五三一号) 槇 有恒氏 (山田二郎)

追悼 新貝 勲会員の死を悼む(権藤太郎

• 一九八九年十月号 (五三二号)

追悼森喬(Y・M

•一九八九年十一月号 (五三三号)

岡 茂雄さんのこと (丸山尚一

追悼 元会員 太飼哲夫氏(M

計報 鄭在泓 (CHONG JAE HONG) (Y·M

• 一九八九年十二月 (五三四号)

野口秋人氏(梅木秀徳 元会員 田辺主計氏 望月達夫

• 一九九〇年一月号(五三五号

古市義孝評議員を偲んで(中嶋正夫

• 一九九〇年三月号(五三七号

小原勝郎

支部だより

を迎えた。 当秋田支部は昭和三十四年に設立され、本年をもって三十周年目

秋

田

支

部

ありながらも実数五十五名を維持している。
た経験豊かな方々の入会は、ここ数年とぎれることなく、退会者がた経験豊かな方々の入会は、ここ数年とぎれることなく、退会者がはみの一つである支部会員の高齢化に歯止めをかけたいが、若手

本年は、三十周年の祝年に当ったが、福田副支部長の逝去によりさに惚れず、県内の忘れ去られている山々に的を絞っている。ず、最小限に留めている。したがって、山行は年二回程度とし、高籍しており、それ等の状況を考慮し、先鋭的な大きな事業は実施せ事業内容は例年通りであるが、大方の支部会員は他の山岳会と重事業内容は例年通りであるが、大方の支部会員は他の山岳会と重

これを形式的な記念山行として実施、また、日本一低い富士山が秋これを形式的な記念山行として実施、また、日本一低い富士山が秋

としては五年に一度のみの負担であり、支部交歓の場としての意義

東北支部集会の開催賛否については色々と問題もあるが、

当支部

記念事業を実施せず、春は雄長子内山

秋山山行の奥宮岳の際は、

の足跡を刻む会報も二回の発行が可能となった。 支部会費と増額となった本会還元金で予算不足も一段落し、は大きく、内容によってはその継続を望んでいる。

に自主的に活動している。 (佐々木民秀)他の山岳団体との交流・親睦等をも深め、支部会員それぞれ各方面を部総会は本会総会前に実施、年二回の役員会、その他としては

—北海道支部

の大塚武前支部長七回忌追悼神威岳登山には二十二名が参加。十月月達夫元副会長ら十五名参加の利尻山登山。七月二十九日、三十日平成元年度の主要行事は、七月二十五日から二十八日にかけて望

元会長ら二十九名が参加された。

十四日、

十五日の岩内山麓での観月会と目国内岳登山には佐々保雄

河」出席者三十七名(共に山之内ホールで開催)と毎回好評を博し名が出席。平成二年二月二十三日の小野有五氏「白夜の国の山と氷あちこちの旅」、五百沢協子氏「南米を走り抜けた旅」には三十三南極観測」出席四十七名。十月二十五日の五百沢智也氏「ヒマラヤ南極観測」出席四十七名。十月二十五日の五百沢智也氏「ヒマラヤ南極観測」出席四十七名。十月二十五日の渡辺興亜氏の「三十年を迎えた

前の論考で、山域、山名、標高の山岳一覧表や地域区分附図は貴重られている『日本の山岳標高』二千五百紀以下の山の中間報告発表道の山の標高再検討について」が寄稿され、現在国土地理院で進め発行された支部報「ヌブリ」十九号には、五百沢智也氏の「北海

な資料である。

海外・岡田勝英、川越晧充、山行・大久保五郎、長谷川耕司、藤野長佐々木孝雄、新任の担当委員として集会・酒巻吟一、中嶋英彦、様佐々木孝雄、新任の担当委員として集会・酒巻吟一、中嶋英彦、新副支部長がら辞意を表明されていた橋本誠二支部長から新役員候補の推平成二年度の支部総会は五月二十四日に共済サロンで開催され、平成二年度の支部総会は五月二十四日に共済サロンで開催され、

定した。 六月八日開催の支部委員会で平成二年度の山行計画は次の通り決

和男の各氏が任命された。

十一月十一日 定山渓小天狗岳九月二十九日~三十日 十勝岳六月三十日~七月一日 狩場山

平成三年三月十六日~十七日 チセヌプリー・月十一日 気山湾小天発岳

(高澤光#

山陰支部

徳田章人(会員番号一〇二八四)で新しく運営することといたしま四)支部長のもと、事務局長中井俊一(会員番号九七七二)、会計役員の改選を図り、平成二年度からは、吉川暢一(会員番号七〇三山陰支部では、創立四〇周年を契機に港支部長の勇退を受けて、山陰支部では、創立四〇周年を契機に港支部長の勇退を受けて、価値です。 借りて厚くお礼申し上げます。 借りて厚くお礼申し上げます。 の改選を図り、平成二年度からは、吉川暢一(会員番号七〇三世りて厚くお礼申し上げます。 のいを支部創立四〇周年に併せ開催させて頂き、全国各地から沢山の集 の大田の集

したので、今後とも宜しくお願いします。

木山への山行を実施したところです。
ホ山への山行を実施したところです。
本山への山行を計画し、平成二年度にはこの目標達成に向けて会員やに会の山行を計画し、平成二年度にはこの目標達成に向けて会員やに会の山行を計画し、平成二年度にはこの目標達成に向けて会員や

熊本支部

先ずこの一年間の支部の動きから。一九八九年五月二十六日、日

員持寄りの「山の写真展」も実施した。

では、「早春の仰鳥帽子山」と「黒岳の春」を上映したが、併せて会内のホルン山小屋で開催し二十三名が出席した。神谷会員の八ミリ内のホルン山小屋で開催し二十三名が出席した。神谷会員の八ミリーが出いる。

行会員のヒムルン・ヒマールのスライドと説明会を開く。翌日、上告の一十月二十二日、秋季例会は球磨の名山、白髪岳(一四一六點)に十月二十二日、秋季例会は球磨の名山、白髪岳(一四一六點)に入月十五日、自然保護委員長の澤井さんを迎え、阿蘇周辺のリゾハ月十五日、自然保護委員長の澤井さんを迎え、阿蘇周辺のリゾ

村の榎 小屋で開催し二十五名が出席した。 明けて一九九〇年一月十三日、 L た。十二月二日、年次晩餐会に奥野支部長と広永会員が出席した。 た。十月二十八日、二十九日、 た。 の実体を、 田 頂の尾根部分を僅かに残して伐採された「白髪岳 から林道を登り、 支部会員六名が参加し全国から集まった会員と交歓し 会員に知ってもらうのが、 猪 ノ子伏を経由 支部新年晩餐会を熊本市のホルン山 山陰支部四十周年記念「伯耆大山の して登頂。 この例会の目的であっ 十九名が参加 環境保全

ŋ,

号を三月末日に発行することができた。 0 訓練を兼ねて実施したが、 ち例会三十五回、 部発足以来例会で登った山の数が、この回で丁度百山となった。 いた初心者の参加がなく陽だまりの山歩きに終った。十名参加。 山が四十三山に達している。 二月十二日、冬季例会は九重山の中岳(一七九一點)周辺で冬山 県外三十七山で、この内、今西錦司元会長と登った九州 特別例会十七回で百山に登った。内訳は熊本県内 暖冬のため積雪なく、 なお前号で予告した しかも対象として 「支部報」第一 (本田誠也) 即 支

福 島 支 部

ある。 的な趨勢であろうが、 上下していたのが、今年は一一五名を越すまでになって来た。 ていたが、ここ二、三年その傾向が薄れて、 職域、 前までは入会を勧誘しても私如きは恐れ多くてと、 地域山岳会の有名無実化であり、 地方では特に顯著に現れている山岳会離れで 当支部員の数は百名を その中から個人的に 敬遠され 全国

> \$ n

多くなると思う。 勉強し合い、また本部のバックアップ、資料提供に依存することが にではあるが下り、 かし活性化に伴い若い人達 友を求めるケースがあるのではないだろうか。 装備、 技術、 海外研究等のことは県岳連とタイアップして共に 本年は五十歳強と大変喜ばしい次第である。 への要望に応えるべき努力も必要とな 結果平均年齢

という部落である。 何とも言えない味である。 根オロシをたつぷりかけての『高遠』と呼ばれる食べ方は、それは るとやっぱり蕎麦である。 白なウドンの様である。芯の部分のみで練られたものだ。 れ、そんなものかと思っていたが、ここのはツナギを全く入れず真 である。黒いのが純粋で、白いのはツナギを入れたものだと言わ 豊かな食生活の中で山菜と共に脚光を浴びている昨 る。蕎麦は元来米作に適さない冷涼山間地の作物とされてきたが、 会。を新そば収穫直後の十一月に支部員家族同伴で盛大に開いてい 生活を知ることも一つの行事である。 う。という点に努めたいものである。 ある。 の料理、 支部としては岳人として必要な "人の和" このような会合をこれからも長く続けてゆきたい。 言いたい放題のことを話し合う、 部落の古老唐橋氏の打ったそば、 会津の山奥、 会津独特の食べ方らしい。 山行、 五年前から "幻のそばを食う 飯豊 これが当支部の半面 弘山の麓、 懇親会のほ "仲間を大切にしよ 今の食物の一つ Ш 山菜色とりど 茹でたてに大 都町の宮古 かに山 食べ てみ

中嶋正夫

いただき誠にありがとうございました。
単、太田義一氏、西田立氏等編集)の販売には会員各位の御協力を
平成元年度出版の「石川の山」(石川県山岳協会発行、本会会

山系で登山が行われたのですが、今回平成三年(一九九一年)に二機に、その実行団体として石川支部が設立され、石川県下の医王山昭和二二年(一九四七年)に石川県で第二回国体が開かれるのを

会石川支部は県山岳協会加盟の一団体としてその競技運営の分担をですが、現在は石川県山岳協会が競技母体の受皿となり、日本山岳当時の実行母体は体協加盟の日本山岳会であり、各支部だったの巡目の第四六回国体が地元の白山山系で開催されます。

務をやりくりする事は大変です。 地元石川県の登山人口が少ないため、僅かな協会加盟会員数で出

負っています。

当支部独自の実動可能な会員がほとんどいないため、行事がある度会の役員、ひいては石川県山岳協会の要職を占めてはいるものの、ありません。特に当支部ではその性質上他会所属会員が多く、そのなく会員の高齢化が進み四苦八苦の状態であり、当支部も例外ではかつての海外登山ブームの沈静化と共に、どの会も新規加入が少かつての海外登山ブームの沈静化と共に、どの会も新規加入が少

うな意見がない訳ではなかったのも事実です。が既に県山岳協会から脱退していますし、当支部としても、そのよが既に県山岳協会から脱退していますし、当支部としても、そのよりな意見がない。

にそれを消化する事が困難で、

企画に頭を痛めている現状です。

ながら巨大化した訳のわからないものに、またいつの間にかそれをが登山かと考えさせられるさまざまなルールにおどろき、とまどいの得点対象となった登山競技には、採点基準の明確化の為か、登山人口の底辺拡大の為か、その複雑怪奇とまではいわないまでもこれの得点対象となった登山競技には、採点基準の明確化の為か、登山人口の底辺拡大の為か、その複雑怪奇とまではいわないます。進展もからみ、何とか国体を乗り切るつもりで頑張っています。

つながるかも知れないとひそかに期待しています。体とはと、私達自身が問い直し、活動してゆく事が会の再活性化に体とはと、私達自身が問い直し、活動してゆく事が会の再活性化にアナクロニズと言われるかも知れませんが、これが国体さと知っ

当り前として受入れる事に怖さを感じます。

振回されて支部がゆるがぬように注意してゆきたいと考えていま(七七〇六m)登頂以来二〇年目の節目も迎えます。国体ばかりにまた平成三年には国体の他にも、パキスタンのティリッチミール

す。

(津田文夫)

岩

手

支

部

タルを行う。 彦氏が三年間、 0 テープ録音した演奏、 ハヤチネウスユキソウ盗掘をした山中二男会員の件の理事会の報 月二六日、 その他、 南米パラグアイでアルパ修業の成果報告、 盛岡市、 話題は、 および作曲したエル・ルクイドス等のリサイ しゅんにて新年会をかねて、 八九年夏、 早池峯山中の天然記念物 会員の本田 現地にて

わうことを計画立案中。

東九州支部

調べは確実に、いい新年会となる。間では確実に、いい新年会となる。との意見が多数を占めた。その不愉快な話題とは別に、アルパののとの意見が多数を占めた。その不愉快な話題とせず自覚した、も出しなかったのか、肩をたたかれて初めて、それも六ケ月後まで無けしたのか、我々支部会員も他山の石ならぬ草とせず自覚した。又、どうしま、十二月の理事会で退会受理の決定事項を確認した。又、どうし

た。
四月一四日、遠野、あかばね民宿で開催し次の如く役員が決定し

護・近藤有慶、 小野寺正英、 ずれも委員は留任となり、 支部長·佐藤敏彦、 鹿野松男、 高橋俊紀、 松田和弘、 監事·田鋭鎖、 総務·菊地修身、 二上純 地区・関口宏、 任期三年とする 一、科学・石村実、 藤岡知昭、 椚田房男、 宮伸穂、 在京連絡·佐藤泰彦、 中谷充、 立花幹雄、 指導遭難対策· 自然保 渡辺

講演パーティーを盛岡市にて開催する。多数のファンの参加者で賑 での三巻に未収の原稿、 の三巻の著者、 また、支部会友、 秋季山行、 夏季山行、 春季山行、 七月七日、七時雨山荘泊、御月山、 四月一五日、 一〇月六日、 芙蓉書房刊を今秋、 西山一三氏、 三千二百枚をノーカット出版し、 安家かむら旅館泊、 長春洞、 秘境西域八年の潜行、 中公文庫で上梓の予定、これま 雨天中止 甲子山、 駒木立 上・下・別 明神楽 その記念

> ある。 泉。 る。 が、支部の会員規模は当時とほとんど変わらない。 した。さらに退会して行く会員もいたし、宮崎支部の独立もあった のおりは全国各支部からのご参加を得て今西博士らの講演会や九重 ほしい。本誌が出るころには、成功のうちに終わっていたいもので 先の自然保護委員会以来であり、 由布岳で実施する。支部として全国の仲間を大分にお招きするのは も設けて入会の勧誘を進めているが、若手が増える傾向は嬉しい。 だった。しかし、この間に支部長の野口氏はじめ六人の会員が物故 山群の登山会を催したが、それからは、まさにあっと言う間の十年 三〇周年の記念集会と登山会は十一月三日と四日に予定してい 当支部は今年(一九九〇年)で創立三〇周年を迎えた。 集会では山田会長に講演を依頼、 場所は近年になって全国的に知られるようになった湯布院温 各地からたくさんの登山人に来て 登山は豊後富士の別称を持つ 現在、

も生まれている。
したがった。既に十年間ですべての頂を踏んだ会員がというのが狙い。したがって、ここ十年間の支部山行は一○○山からというのが狙い。したがって、ここ十年間の支部山行は一○○山かるさとの山を見直し、日本・九州の自然と山々を改めて認識しよるとの山を別主体になった。既に十年間ですべての頂を踏んだ会員を巡ることが主体になった。既に十年間ですべての頂を踏んだ会員を巡ることが主体になった。

大分一○○山」の出版も計画中。支部会員の全員が手分けして執筆その成果を三○周年で活かしたいと考え、冬には「ガイドブック

が、みんな張り切っている。先輩各支部のご教示やお力添えをいた連帯意識を深めてもらいたいわけ。資金などに問題は山積している動している者がたくさんいるので、ここで日本山岳会会員としてのし、連帯・交流を図ろうというのも目的のひとつ。支部会員のなかし、連帯・交流を図ろうというのも目的のひとつ。支部会員のなか

だきたい。

富山支部

壊の惨状であった。業者の慾なのであろうか

(梅木秀徳)

は五月晴の十三日であった。(昭和五八年三月二三日建立)のある大山町旧河内集落に集ったの(昭和五八年三月二三日建立)のある大山町旧河内集落に集ったの横倉ヶ岳の開山僧「播隆上人」の遺徳を敬仰するため、上人顕彰碑

り合うチャンスともなっている。 がれているが、この機会を得て相集い親睦を深め古き好き時代を語活の基盤を拓いた方々も廃村となって転居されてから久しい歳年が支部で播隆祭を催してから八回目である。山深い河内村集落に生

ある。 で、今回参加をみなかったが孤独な日々の内に厳かな供養の毎日で、今回参加をみなかったが孤独な日々の内に厳かな供養の毎日である。

催しの数時間が過ぎて二十名で高頭山(一二〇三米)の登りにか

に「楮」の荷を運んで得られたものは「油揚げ」一枚余であった、や搬出などである。語り伝えられるところによると、八尾の紙問屋たものと考えられる。その一つに「楮」の自生地に和紙の原料採集かった。播隆さんが幼少の頃家業の手伝いに高頭山周辺に登ってい

転った姿は業者の経済主義の墓場であった。無智と無神経な人工破転った姿は業者の経済主義の墓場であった。無智と無神経な人工破杉?)の老樹がチェンソーで、ずたずたに細断されていた。山裸に残な山の姿に出逢った。樹齢四○○余年もある数多の杉(立山残な山の姿に出逢った。樹齢四○○余年もある数多の杉(立山海岸線の林に「カッコウ」の啼声が響いていても、この山塊ではと。少年の背や肩が痛んだことであったであろう。

一人の登山者から声をかけられた。声のした方をみると大野氏である。薬師岳に五○回、小佐波御前に一四○回余りその他の山に踏ある。薬師岳に五○回、小佐波御前に一四○回余りその他の山に踏た。この日マッキンレーから帰った高塚さん等十数人が高頭山へのた。この日マッキンレーから帰った高塚さん等十数人が高頭山へのた。この日マッキンレーから帰った高塚さん等十数人が高頭山への山に踏める。薬師岳に五○回、小佐波御前に一四○回余りその他の山に踏める。薬師岳に五○回条りを表したい。

る。

「ロタン王国自然環境研究のため九月十八日東京を発ってブータンの自然を観ずして自然保護が語れないという考え方からであな。近日本帯の研究に主眼をおく二班で構成、約二週間の予定である。ブー本帯の研究に主眼をおく二班で構成、約二週間の予定である。

例会は年四~五回、一泊二日の山行は年二回余。山岳に関する情をで貰いたいと願ってかる。例会参加者が定着した感がある。これはどうした報の交換である。例会参加者が定着した感がある。これはどうした報の交換である。

員諸兄のご参加を望みたい。 る。 立山 九月中旬、 集会を平成三年、 初秋の山々を眺め意義ある集会になりますよう会 立山 連山で行なうことで準備段階に入って (石坂久忠)

ほどは出番がなかったが、この秋、

登頂祝い

0

大パーティーを芦生

る

京 都 支 部

七メートル)である。 京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊によるシシャパンマ峰(八、○二 員による六○歳同志、 九五名と増え、四季折々の山行や行事を楽しく行なっている。 近の京都支部の大ニュースといえば、斎藤支部長と中島道郎会 都支部も今年で、 二人合わせて一二〇歳の八千メートル登頂 発足五年目を迎えることができた。 会員数 6

ともあれ、 とになった。その時、うどんをつくりはじめた若手支部員を尻目に を思い出した。 関 日前から焼き始めて、 行ってこられた。この頃すでに、期するところがあったのだろう。 斎藤支部長は「もうちよっと上まで行ってくるわ」と丸山手前まで 「係の会員が足場用建築資材で作った丸焼きスタンドも、ここ一年 無理と判断して、 京都支部には、 六月初めの朝、 牛の丸焼き」がある。 唐松岳へ向けて出発したものの、あいにく天気が悪く登頂 後進にとってたいへん励みになる快挙であった。 集会委員会主催の八方尾根スキー集会に参加した折 三年前の第一 登頂の知らせの電話を聴きながら本年の冬のこと 八方池辺りでスキーの練習でもするかというこ 晩宴会が続いても翌朝まで楽しめる。 七〇人位なら骨付き片もも 回全国支部懇談会から始めた、「名 Æi. Okg

海

0

称して宴会があるのはもちろんである。

で集まる会を行なっている。これに新年会や総会、 るため昨年より「山水会」と銘打って第三水曜日の夜に色々な話題 念ながら支部ルームがまだ無いので、 習会があり、今年の打ち上げは北岳バットレスを予定してい スキー登山を行なう。このほかに毎年四~五回シリーズの岩登り 紅葉山行、冬には築場の陀羅仏小屋スキー集会、 に集まって の京大演習林にて行なうべく計画してい ほぼ定例となった支部の行事は以下のようなもの 春は、岐阜支部と合同で新緑山行、 「送り火」の火床で行なう大文字ビアパーティ 少しでも会員間の交流をは 夏には沢登りと土曜日の夕方 関西支部と合同 なになに祝いと から あ か 講

ラコルム・ハイウェーを越えて、 ミール峰登山隊を計画、 アドベンチヤーファンデーションと合同でカラコルムの のルートを予定している。 来年(一九九一)には、支部発足五周年を記念して、 同時にトレッキング隊はパキスタンからカ カシュガル、 ウルムチ、 ティリ キスタン F

会 務 報 告

平成元年(一九八九)六月~平成二年(一九九〇)五月

会 長 Ш 田二郎

九八九年度役員・評議員・支部長

副 |木潤次郎・藤平正夫

理 常 務理 事 松田雄一・西村政晃・重広恒夫・山本良三

事 織田沢美知子・早坂敬二郎・小林政志・入沢郁夫・穴田雪江・ 小倉 厚・関口令安・松本恒広・伊丹紹泰・石橋正美・藤本敏

行·藤井正彦

事 敬·飯野 亨

常任評議員 小倉董子・平林克敏・大島輝夫・鴫原啓佑・橋本 清·大森久

沢村幸蔵・今西壽雄・吉村健児・古市義孝 室質輝男‧奥原教永‧河野 長‧井上豊重 (※)·大塚博美·

部 長 橋本誠二(北海道)・佐藤敏彦(岩手)・岡田光行(秋田

(宮城)・中島正夫(福島)・佐藤一栄(越後)・赤

支

庄司駒男

評

議

員

山野井武夫・広羽

清·川上 隆·杉野目

浩・日下田

實

尾上 昇 羽孝一郎 (東海)·松井辰弥(岐阜)·斎藤惇生(京都)·若 (信濃) · 大沢伊三郎 (山梨) · 安間 荘 (静岡) ·

林啓之助 (富山) · 增江俊三 (石川) · 阿部和行 (関西) · 港

叶 (山陰) 奥野正亥(熊本)・魚本定良(宮崎)・村上勝太郎(山形)·権藤太郎(福岡)·野口秋人(※)(東九州)

(注) 古市義孝評議員は一九八九年十一月、野口秋人支部長は

理事会は会長、副会長、理事、 監事、常任評議員によって構成される。

◇六月 (一九八九年) 理事会 六月十五日 (木) ルーム

一、常務理事互選の件

理事担当業務分担の件

◇評議員会 六月十九日 (月) 中村屋レザミ 会報「山」五三〇号参照

武夫、沢村幸蔵、今西壽雄、 出席者 山田二郎、村木潤次郎、藤平正夫、小倉董子、大島輝夫、 吉村健児、古市義孝、大塚博美、橋本

> 清 山野井 河

長、井上豊重、松田雄

一、常任評議員互選の件

◇七月理事会 七月十三日 (木) ルーム 会報「山」五三〇号参昭

出席者 二十二名 ▽審議事項

二、各委員会別委員承認の件 一、各担当別委員会活動方針検討の件

▽報告事項 一、タンボチェ僧院再建募金の件

会報「山」五三一号参昭

◇八月理事会

◇九月理事会 九月十四日(木)ルーム

出席者 十九名

九八九年十月に物故され、以後欠員のまま年度末まで推移し

136

出席者 二十二名

▽審議事項

▽審議事項 、海外登山基金委員会設置の件

◇十月理事会 十月十一日 (水) ルーム 会報「山」五三三号参照

出席者 二十名

▽審議事項

一、秩父宮記念学術賞候補推薦の件

一、海外登山基金委員会委員承認の件

三、支部設置についての方針検討の件

会報「山」五三三号参照

◇支部事務局担当者会議 十月二十八日 (土) 鳥取・皆生グランドホテル 出席者 十八名 他に執行部事務局十五名

▽検討事項

一、支部東京連絡員の設置について

二、支部ルーム設置に関する要望について

会報「山」五三五号参照 支部事務局会議は年二回開催する方向で検討する

◇評議員会 十一月六日 (月) ルーム

清・広羽 出席者 清·川上 山田二郎・村木潤次郎・小倉董子・大島輝夫・鴫原啓佑・橋本 隆・杉野目 浩・日下田 實・沢村幸蔵・吉村健児・

大塚博美・松田雄

一、名誉会員推薦の件 今西壽雄、

会報「山」五三四号参照

◇十一月理事会 十一月九日 (木) ルーム

出席者 二十五名

開会に先立ち十一月六日に亡くなった古市評議員への黙禱を行う

▽審議事項

一、本年度名誉会員推薦の件

一、岩菅山冬季オリンピックに関する要望書の件

三、上高地山岳研究所改築の件

四、上半期監査報告の件

会報「山」五三四号参照

◇支部長会議 十二月二日 (土) ルーム

出席者 十九名 他執行部六名

▽報告事項

一、未来ヴィジョンについて

二、海外登山基金について

三、本年度名誉会員推薦の件

▽検討事項

一、早池峰山における高山植物無断採取問題の件 会報「山」五三六号参照

◇十二月理事会 十二月十四日 (木) ルーム

出席者 二十名

▽審議事項

二、早池峰山における高山植物無断採取問題の件 一、ナムチェバルワ峰登山許可申請の件

三、海外登山基金委員会運営内規の件

篠田軍治を推薦することを決める。

▽報告事項

一、篠田名誉会員推薦に関するその後の経過報告 会報「山」五三六号参照

◇臨時評議員会 一九九○年一月十一日 (木) ルーム

佑・橋本 出席者 清·平林克敏·山野井武夫·広羽 清·川上 隆·吉村健児·今 山田二郎・村木潤次郎・藤平正夫・小倉董子・大島輝夫・鴫原啓

西壽雄・大塚博美・室賀輝男

一、篠田軍治名誉会員に対する異議申立ての件

会報「山」五三六号参照

◇一月(一九九〇年)理事会 一月十一日(木)ルーム

出席者 十七名

二、来年度予算編成方針の件 一、ナイロンザイル事件の解説

◇二月理事会 二月十五日 (木) 会報「山」五三六号参照

出席者 二十名

▽審議事項

一、ヒマラヤン・アドベンチャー・トラストの件

二、平成二年度予算検討の件

会報「山」五三八号参照

◇三月理事会 三月十五日 (木) ルーム

出席者 十七名

▽審議事項

一、平成二年度予算案及び事業計画案の件

長派遣の件 一、ヒマラヤン・アドベンチャー・トラストのニューデリー会議に山田会

三、岩菅山冬季オリンピック競技コース設置に関する要望について(再確

四、山研改築案検討の件

会報「山」五三九号参照

清·沢村幸蔵·広羽 清·川上 隆·吉村健児·今西壽雄·大塚博美·室賀 ◇評議員会 四月十九日 (木)ルーム 出席者 山田二郎・村木潤次郎・小倉董子・大島輝夫・鴫原啓佑

·橋本

▽議事

輝男・井上豊重・松田雄一・西村政晃

、通常総会提出議案承認の件

◇四月理事会 四月十九日 (木)ルーム 会報「山」五四〇号参照

出席者 二十名

一、平成元年度事業報告及び決算報告、 ▽審議事項 財産目録承認の件

二、監查報告

三、理事及び評議員欠員補充選任の件 会報「山」五四〇号参照

◇五月理事会 五月十七日(木)ルーム

出席者 十九名

二、篠田名誉会員推薦に関する要望書の件

一、本年度海外登山基金運用益、助成割り当ての件

◇支部長・支部事務局担当者合同会議 五月二十六日(土)全共連ビル 出席者 四十名 会報「山」五四一号参照 他に執行部及び事務局八名、オブザーバー七名

▽報告事項

二、各支部現況報告 会務報告

告 四、その他の意見・要望事項 一、会長挨拶

一、高齢者対策・若返り対策の件 山に関する情報交換の体制づくりについて 自然保護に関する考え方について

▽検討事項

◇平成二年度通常総会 五月二十六日(土)千代田区平河町 出席者 二五二九名 (委任者含む) 会報「山」五四一号参照 全共連ビル

▽総会次第

会務報告

平成元年度事業報告承認の件

平成元年度収支決算・財産目録承認の件

監查報告

七、平成二年度収支予算(案) 平成二年度事業計画 (案) 承認の件 承認の件

平成二年度理事及び評議員欠員補充の件

神崎忠男(新任

佐藤 光 (新任

九、平成二年度除籍対象者の件 議事録署名人の件

総会終了後、引続き懇親会が行われた。

◇主な行事と集会 「山」五四一号参照

▽平成元年六月二~三日上高地 第四十三回ウェストン祭(信濃支部

会 務 報

> ▽平成元年六月十六~十八日(金~日)馬場島大辻山 若葉会山行 (富山支部 第九回日本登山医学シンポジウムに協力

▽平成元年六月十~十一日 (土~日) 昭和大学

▽平成元年六月十九日 (月) 中村屋レザミ

新旧役員交歓会

▽平成元年六月二十八日(水)ルーム

講演会「石間流登山術 (第二回)」講師 石間信夫

▽平成元年七月二十二日(土)ルーム

リンジャニ登山報告会 婦人部有志

▽平成元年八月二十六~二十七日(土~日)上高地山研

山研を考える集い

▽平成元年九月三日(日)富士山五合目 自然保護山行「富士の自然を訪ねる」

▽平成元年十月四日(水)ルーム

講演会「中高年登山の救急対策」 講師 関口令安

▽平成元年十月七日 (土) 黒姫山、 自然観察山行 飯網山

▽平成元年十月七~八日 (土~日) 戸隠

▽平成元年十月十五日(日)青山学院大学 全国自然保護集会「一緒に歩いて山の自然保護を考えよう」

▽平成元年十月二十一日(土)ルーム シンポジウム「登山用雨具」安田 武、斉藤利忠他

第二十一回図書交換会

▽平成元年十月二十二日 現地小集会 (日) 裏妙義

139

▽平成元年十月二十三日 (月) ルーム

南米ベルーアンデス登山報告会 講師(神山、嶋崎

▽平成元年十月二十五~二十六日(水~木)秩父・四阿山

▽平成元年十月二十八~二十九日(土~日)米子皆生グランドホテルおよ 自然観察山行

び伯耆大山

全国支部懇談会山陰集会 山陰支部

▽平成元年十一月十二日(日)吾妻耶山

現地小集会 集会委員会

▽平成元年十一月十一~十二日(土~日) 探索山行「温泉を科学する」科学委員会 渋ノ湯、 講師 田中 唐沢鉱泉他 収

▽平成元年十一月十六日(木)ルーム

▽平成元年十一月十八~十九日日和田山 会員懇談会「新人会員のつどい」

岩登り講習会 講師 中山茂樹

▽平成元年十二月二日 (土) アルカディア市ヶ谷

平成元年度年次晚餐会

▽平成元年十二月三日 (日) 日和田山

年次晚餐会記念山行

▽平成元年十二月三日(日) 皇居周辺

▽平成元年十二月六日(水)ルーム 第二十六回マラソン大会(学生部

登山報告会 ウルグムスターグ、エヴェレスト、北極アイスウォーク

▽平成元年十二月七日(木)ルーム

▽平成元年十二月十七日(日)大菩薩峠 冬山登山情報交換会(学生部)宮下秀樹他

現地小集会

▽平成二年一月十一日 (水) ルーム

冬山登山報告会(学生部

▽平成二年一月十三~十五日 (土~月) 八方尾根

スキー懇親会

▽平成二年一月二十一二十一日八ヶ岳

冬山登山技術講習会(婦人懇談会)講師 中山茂樹

▽平成 一年二月四日 (土) 加波山 (茨城

現地小集会

▽平成二年二月七日(火)ルーム

自然保護講演会 講師 藤平正夫

▽平成二年二月十七日(金)ルーム 講演会「冬期マッキンリー登山と気象遭難」奥山

▽平成二年二月二十四~二十六日 (土~月) 根子岳

(長野

大藏喜福他

スキー登山講習会(第一回

▽平成二年三月七日(火)ルーム

第十六回新入会員オリエンテーション

▽平成二年三月十七日(金)ルーム

▽平成二年三月十七~十九日(土~月)八甲田山 第十八回山岳史懇談会「一ツ橋山岳部のあゆみ」吉沢一郎、

望月達夫

スキー登山講習会(第二回

▽平成二年三月三十一~四月二日 (土~月) 笹ヶ峰

スキー登山講習会(第三回)指導委員会

▽平成二年四月十五日 新入会員及び新旧会員交流さくらハイク (日) 栃木・大平山

▽平成二年四月二十日 (金)ルーム

140

山岳図書を語る夕べ「ロシアの山と探検の本」(この一本展併催)講師

田村俊介

▽平成二年四月二十六日(木)ルーム

▽平成二年五月二~六日 (水~日) 剱岳八ッ峰他 フリートーキング「この人と語ろう」講師 山野井泰史

剱岳強化合宿(青年部

▽平成二年五月十二日(土)青山学院大学

シンポジウム「山岳地域に於ける自然エネルギーの利用」鳥井亮、

▽平成二年五月十九日 (土) 交詢社

恒久、本多潤一他

名誉会員を囲む会

◇海外登山及び海外との交流

▽三月三十~三十一日 ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト ニュー

デリー会議に出席

山委合同第一次パミール登山隊(一〇〇万円)の二隊に対し援助金を交付し 支部の日中友好天山山脈雪蓮峰登山隊(一五〇万円)、本会青年部・高所登 ▽海外登山基金(七○○○万円)の創設と、第一回の基金運用として東海

▽タンボチェ僧院再建基金に協力

◇機関誌などの発行

「山岳」第八十四年(一九八九年)号の発行

「山岳」総索引の編集

▽会報「山」第五二八号~第五三九号の発行

▽学生部年報第八号の発行

>三国友好登山公式報告書の刊行(五月) 「登山医学」第九巻の発行に協力

◇その他トピック

▽未来ヴィジョン設定のための会員アンケートのまとめとこれを踏まえた

検討会の実施

▽山の高さに関する委員会(国土地理院)

によって実施することに関する要望書」を提出。(十一月十七日付長野冬季 ▽「冬季オリンピック競技コースを岩菅山山域以外の県内既存施設の改修 への協力

オリンピック招致委員会宛他五通

▽名誉会員

原田



SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Vol. 85 (No. 143)

Issued in December 1990

Contents	
(Thinking over the conservation of nature)	
Problems in the conservation of nature	
—A suggestion by a mountaineer ······ FUJIHIRA Masao·· (7)
The policy and problems in the conservation of nature by Alpine Club	
-My idea as a mountaineer at the first year to consider our environment	
SEKIZUKA Sadaaki… (15	5)
Concerning the signature on the menu of AC dinner party	
	8)
On the stone huts in the southern part of the North Japan Alps	
······ HOKARI Sadao··· (38	8)
A short history of the Alpine Club Hitotsubashi University	
YOSHIZAWA Ichiro, MOCHIZUKI Tatsuo,	
YAMAMOTO Kenichiro, KURACHI Kei… (53	
Books on mountains and expeditions in RussiaTAMURA Shunsuke (60	0)
An account of an ascent of 8,000 meter by two sixty-year-old-men	
····· NAKAZIMA Michiro··· (72	2)
The Southeast Ridge of Everest (in autumn)	
—Laying stress on tactics ······KANAZAWA Ken··· (79	9)
The account of the first ascent of the North Ridge of Bhagilathi I	
Aizu Alpine Club (82	
The North Ridge of Diran (7242m) ······TAKAHASHI Ken··· (88	
A record of East Wall of the Phabrang (6172m) SEKIMOTO Shiro (93	3)
Brain disorders induced by cold environment and practical measures	
to avoid them ····· ENDO Katsuaki, SHIRASAWA Azumi (A2)	1)
The life and chronicles in Japan of Rev. Walter Weston	
····· KAWAMURA Hiroshi, MITSUI Yoshio, YASUE Yasunori··· (A37	
Chronicle of Himalayan expeditions BABA Katsuyoshi (A85	9)
Book Review (96	6)
In Memorial	
Report from Local Section	9)
Club Note June 1989~May 1990····· (136	6)

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address: Tokyo, Chiyodaku, Yonban-cho, 5-4

Office Bearers and Committee 1990 (May 1990-April 1991)

President: YAMADA Jiro

Vice President: MURAKI Junjiro, FUJIHIRA

Masao

Honorary Secretary: MATSUDA Yuichi Honorary Editor: OGURA Atsushi

Honorary Librarian: YAMAMOTO Ryozo Honorary Treasurer: NISHIMURA Masaaki

Auditor: OTA kei, IINO Toru

- 4	Com	252 2 1	too
- 3	$\cup om$	TILLLI	ee
	700000		

MATSUDA Yuichi KOBAYASHI Masashi IRISAWA Ikuo ANADA Yukie OGURA Atsushi

HAYASAKA Keijiro

SEKIGUCHI Reian MATSUMOTO Tsunehiro ITAMI Akiyasu ISHIBASHI Masami

FUJIMOTO Toshiyuki

FUJII Masahiko NISHIMURA Masaaki HIROSHIGE Tsuneo YAMAMOTO Ryozo ODAZAWA Michiko KANZAKI Tadao

Council

HIRABAYASHI Katsutoshi OSHIMA Teruo SHIGIHARA Keisuke

OGURA Kinko

HASHIMOTO Kivoshi OMORI Hisao

YAMANOI Takeo HIROHA Kivoshi KAWAKAMI Takashi SUGINOME Hiroshi HIKEDA Minoru SAWAMURA Kozo IMANISHI Hisao

YOSHIMURA Kenji SATO Teruo OTSUKA Hiromi MUROGA Teruo OKUHARA Norinaga KONO Naga INOUE Toyoshige

Chairmen of Local Sections

Hokkaido: HASHIMOTO Seiji Iwate: SATO Toshihiko Akita: OKADA Mitsuyuki

Yamagata: MURAKAMI Katsutaro

Miyagi: SHOJI Komao

Fukushima: NAKAIIMA Masao

Echigo: SATO Ichiei

Shinano: AKABANE Koichiro Yamanashi: OZAWA Isaburo

Shizuoka: ANMA So Tokai: ONOE Noboru Gifu: MATSUI Tatsuva Kyoto: SAITO Junsei

Toyama: WAKABAYASHI Keinosuke

Ishikawa: MASUE Shunzo Kansai : ABE Kazuyuki San-in: MINATO Kano Fukuoka: GONDO Taro

Higashi Kyushu: UMEKI Hidenori Kumamoto: OKUNO Seigai

Miyazaki: UMOTO Sadayoshi

BRAIN DISORDERS INDUCED BY COLD ENVIRONMENT AND PRACTICAL MEASURES TO AVOID THEM

K. Endo and A. Shirasawa

Department of Physiology, Faculty of Medicine and Department of Forestry, Faculty of Agriculture, Kyoto University

Functional disorders induced in the human body by cold environment are closely associated with weather conditions. When brain disorders produced by profound hypothermia prove fatal, unexpected changes in weather may have been a determinate factor. We realized the rigorous power of Nature in such a moment. Thus, it is an important problem to establish the scientific means to protect against brain disorders, for security and success in mountaineerings, expeditions and field works. In this report, concentrated on the frontiers between the meteorology and the environmental physiology, we described briefly the weather of mountain fields in Japan and Himalaya, mountain accidents, and physiological disorders in the human body induced by cold environment. Finally, we proposed practical measures to avoid brain disoders with our recent results obtained from field works at Xixabangma in Tibet. Following problems were discussed.

- 1. Observation and forecasting of the weather, using the wireless communication system and an weather facsimile.
- 2. Understanding the condition of snow and the configuration of the ground.
- Protection against the cold by clothes. Recommendation for use of goods made of wool and down.
- 4. Application of the wireless communication equipments. Use of transceivers for avalanche safety and for monitoring of electrical activities of the brain and the heart.
- 5. Food and water supplies. Intake of 4000 kcal of food and 4 liters of water is needed in cold environment at high altitude.
- 6. Sleep and rest. Use of oxygen with 5% carbon dioxide in sleep and rest at extreme cold and hypoxic environment.
- 7. Acclimatization to the cold. Importance of training for several weeks in the cold.
- Measurement of body temperature and rate of pulsation. Use of thermometer with a range from 20 to 40 degrees centigrade.
- 9. Inhalation of oxygen. One of the most efficient measures to protect against hypothermia, frostbite and hypoxia.
- 10. Use of medicines. Caffeine and amphetamine to avoid hypothermia by sleep. Gluco-corticoid for facilitation of glucose metabolism in the brain as well as in the muscula-

ture.

With respect to brain disorders induced by cold environment, prevention is far preferable to treatment which is much more complex than warming the patients. However, in the case when the treatment of serious brain disorders is required, the fundamental care must consist of preventing ventricular fibrillation while we rewarm the affected subjects deliberately.

寒冷による脳機能障害とその予防法

ENDO Katsuaki and SHIRASAWA Azumi: Brain disorders induced by cold environment and practical measures to avoid them

遠藤 克 昭 (京都大学医学部生理学教室) 白 沢 あずみ (京都大学農学部林学教室)

はじめに

高所の寒冷環境により人体に引き起こされる機能障害は、自然現象である気象と極めて関係が深い。体温の低下により最初に現れる脳機能障害が、循環機能障害、呼吸機能障害などを誘発し、人体が生命の危険に曝されるとき、決定的要因となるのは天候の急激な変化である。私たちが自然の恐さを身をもって知るのもこの時である。そこで、登山、探検、フィールド調査等の安全と成功のために、これらの障害を未然に予防するための科学的手段を新しく確立していくことは今日の重要な課題である。本報告においては、気象と環境生理の境界領域に重点をおいて、高所の気象、高所の気象と遭難、寒冷による人体の機能障害について基本的な事実を述べ、さらに、寒冷による脳機能障害を予防するための適切な手段を、私たちの本年のシシャパンマ山域における調査結果と安全登山対策も加えて、登山家が実地に活用できる形に整理し、簡潔に説明した。

高所の気象

ここでは、私たちの対象とする高所として、日本の山岳地帯とヒマラヤ山地を選んだ。これらの地域は、それぞれ、自然環境に大きな特徴があり、また、私たちが厳しい寒冷環境に遭遇する代表的地域でもある。そこで、これらの地域における気象について基礎的な事実をつかんでおくことは、寒冷による人体の機能障害を防ぐためにも重要な意義があると考えられる。はじめに、これらの地域について高所の気象の特徴を簡単に述べる。

1. 日本の山の気象

日本は四季を通じて世界で有数の気象の変化が激しい地域である。日本の山の高さは 最高4000m程度であるが、その気象は特殊な地形と自然環境により、ヒマラヤや南極な どとは著しく異なっており、また地域による差も大きい。ここでは大陸より下って来る 冷たい気団と、南の太平洋より上がって来る気団が相衝突して、四季にわたり亜寒帯か ら亜熱帯に近い気候が私たちの活動に大きな影響を与える。一般に、冬山は積雪、低 温,強風が特徴であるが、春山になると気温の上昇により雪崩が多くなる。夏山は梅雨と台風が大きな特徴である。秋山では季節風が吹き出し、山の天候の急変により寒冷、吹雪になり易い。新雪の後は表層雪崩の危険も大きい。日本の冬山の気象は厳しい。特に、立山や大雪山の周辺はこの厳しい冬山の代表例としてあげることができよう。このあたりは世界でも希な多雪地帯であって、積雪は一昼夜で数mにもおよぶこともある。気温は大雪山で氷点下25℃、立山で氷点下15℃程度であるが、時には氷点下40℃あたりまで下がる。風速は秒速10mから50mにまでおよぶ。このような寒冷環境下でひとたび窮地に立つと、人体は低体温に陥り、脳障害のため正確な状況の把握と判断が出来なくなり生命の危険がせまってくる。剣岳あたりで冬の猛吹雪と豪雪に遭遇したときの環境の厳しさは南極やヒマラヤのそれに匹敵するといわれるが、事実、この時期に多くの第一線の登山家がこの地で遭難している。このような気象による遭難を避けるために、まず、気象庁から発表される山岳地帯の局地的天気予報を確実に把握し、さらに、日本周辺の比較的長期にわたる気象情報を得るとともに、現地における天候の変化を注意深く観察しながら、慎重に行動することが要請される。

2. ヒマラヤの気象

標高9000m 近くにまで及ぶヒマラヤ山地に於いては、対流圏上部の気象が問題にな る。この地域の気象は、冬季は偏西風、夏季はモンスーンの影響が大きい。このため、 冬季は、8000mに及ぶ高所では、しばしば気温の上昇に続いて、秒速70mを越える強風 が吹く。また、最低気温は氷点下50℃以下にもなり厳しい寒波が襲来する。夏季のモン スーンはヒマラヤ山脈の南面に多くの降雨と積雪をもたらす。南側は湿度が高く麓は年 中緑に覆われているが、北側は乾燥していて緑が現れるのは夏の一時期だけである。一 般に、モンスーンの始まる前の2カ月と、モンスーンの後の2カ月が登山に適してい る。ヒマラヤの北側に位置するチベットや新彊では年降水量は100mm 以下で少なく, 広大な砂漠が大きな面積をしめている。また、ヒマラヤの東と西のあいだにも大きな差 がある。例えば西のスカルドでは年降水量は100mm 程度で乾燥していて緑も少ない が、東のカトマンズでは1500mm を越える。ヒマラヤにおいては雪のある地域はごく-部で、大部分が地肌を見せているため山地における太陽熱の吸収量も大きく、これが対 流圏上部に対する熱源となり、大きな上昇気流が生じてモンスーンが引き起こされると 考えられている。事実、モンスーン期においては、気温の極大がチベット高原上空に存 在することが示された。以上は、ヒマラヤの気象を大局的にとらえたものであるが、局 地的にはかなり複雑な気象変化が見られる。その一例として、本年のプレモンスーン期 における私たちのシシャパンマ地域での気象観察の所見をここで簡単に述べる。

本年の1990年3月から6月にかけてのこの山域の天候は、チベット側は晴天続きで、この方面からの私たちの隊の登山活動も順調に進み、5月中に3度のアタックに成功し、22名がシシャパンマに登頂できた。3月から4月の初めにかけては、時に、わずかの降雪がみられ、風の強い日も多かったが、それ以後はベースキャンプでは時々雲がかかった程度で雪や雨は全くみられず、第一キャンプから上で時々降雪がみられる程度で

あった。一方、同じ時期に、南面のネパール側のランタン谷周辺においては、連日厚い 雲がかかり、降雪量も多く登山活動を進める上に多くの困難を来し、雪崩の危険も大き かった。南面のネパール側の天候は、この方面で活動した隊からの連絡により知った が、この地域では北のチベット側と南のネパール側には大きな天候の差が見られた。シ シャパンマ頂上付近の天候は大体周期的に変化したが、5月中は、北方のチベット中央 にあるトランス・ヒマラヤ山脈方面に雲が現れると、一両日中にシシャパンマの頂上に 雲がかかり天候が悪化する傾向にあった。但し、頂上に強風が吹きながら、下のキャン プでは快晴の穏やかな天気の場合も多く、また、下部のキャンプが吹雪で頂上が穏やか な天気の日もあった。最初のアタックで私たちが登頂した時は、頂上の天候は晴れてい て風も弱く、気温もシャツで過ごせる程度の暖かさであった。高度5500m のキャンプに おける4月27日から5月14日までの気象データを簡単にまとめると以下のようになる。 午前9時の気温は平均-2.5℃、午後2時の気温は平均4.0℃、午後7時の気温は平均-6.8℃であった。降雪は三度見られたが、積雪量はいずれも5cm以下で1日以内に消失 した。午後2時の天気は18日間のうち13日が快晴または晴で、5日が薄曇りまたは小雪 であった。雨は一度も降らなかった。風速10m以上の日は1日だけであった。日射量は 午後2時あたりが最大で、午前10時の日射量は午後2時の日射量の約50%であった。午 後7時の日射量は午後2時の日射量の10%以下になった。気圧の日変動は規則的で、昼 間は高く、夜間は低くなった。朝になっても気圧が高くならない時は天候が悪くなる傾 向になった。この地域では、局地的な天気の予報が登山活動の安全に大きな影響を与 え、現地に於ける観天望気による天候の予測も重要である。

高所の気象と遭難

高所に於ける遭難事故は多くの場合天候の悪化が直接または間接的に関係している。一つは、寒冷が人体の体温を低下させて脳機能障害を引き起こし、低酸素による障害も加算的に作用して、転滑落死、疲労死、凍死などを誘発する場合である。もう一つは、気象の変化が誘因となって雪崩が発生し、不運にもそれに巻き込まれて低酸素症および低体温症等のため命を失う場合である。さらに、重症高山病の脳浮腫や肺水腫の発症にも、低酸素だけでなく寒冷による低体温も関与するといわれる。ヒマラヤにおいては、原因別に見ると、転滑落と雪崩による遭難が全体の90%ちかくを占めている。そこで、具体的に、西部ヒマラヤのナンガ・パルバットに於けるこれまでの登山活動を例にとって、気象の変化が原因となって発生した遭難事故に焦点をおいて検討してみよう。

ヒマラヤの西に位置するこの困難な8000m 峰に最初に挑んだのは19世紀のイギリスの優れた登山家ママリーの隊で、1895年のことであった。彼らはまず南面のルパール氷河から登行を試みた後、西面のディアミール氷河に廻り、6100m あたりの高さにまで到達した。さらに北面のラキオト氷河に入るため、8月24日に、ママリーたち3名はデイアマ・コルへ向かったが、そのまま消息を絶った。すぐあとを追った同僚達の捜索結果から、恐らく彼らは天候の急変によりクロアールの登行中に雪崩に遭遇し、不帰の客にな

な遭難事故は少なくなりつつあるが、登山人口の増加とともに、8000m にも及ぶ高所に 於いては低体温と低酸素が加重的に作用して脳機能障害に陥り、登山の安全に大きな影響を与えていると云える。

寒冷による人体の機能障害

寒冷環境においては、人体では体温の低下を防ぐために、二つの調節機能が働く。一 つは熱の産生反応であり、もう一つは熱の放散を防ぐ反応である。どちらの場合も、脳 神経系の活動が重要な役割を担っており、それらの調節機能の中心は、視床下部の体温 調節中枢にあると考えられている。熱産生の機序としては、視床下部下垂体内分泌系 が、重要な役割を果たしている。この系を介する甲状腺ホルモン、カテコルアミン、副 腎皮質ホルモン(グルココルチコイド)などの作用は、特に重要である。また、運動系 を介する筋の収縮(ふるえ)も、熱産生の機序の重要な部分を担っている。一方、熱の 発散を防ぐための機構としては、皮膚表面における血流量の減少即ち皮膚血管の収縮が 挙げられる。長期的には、皮下脂肪の増加が起こり、皮膚の断熱効果を高める。また、 長期間寒冷環境下で活動を続けると、寒冷順応が形成される。これらの調節機構の働き にもかかわらず、体温が低下した時に、まず脳および神経系の症状が現れる。最初は、 主に、自律神経系に対する体温低下の影響により、睡眠障害、情緒不安定、性格の変化 などがみられる程度であるが、体温が35℃から32℃あたりまで低下すると(軽症低体温 症)、精神作業能の低下、指南力の低下、寒冷に対する防護能力の喪失、傾眠などの症 状が現れる。更に体温が降下して32℃以下になると (重症低体温症), 運動障害, 言語 障害、視力障害、錯乱、不可解な行動、けいれん発作、意識障害などの重篤な症状に陥 る。体温の低下(脳温の低下)により、このような神経症状が現れる機序は現在のとこ ろ明らかでない。低体温により神経系の電気活動も低下し、代謝も妨げられるので、神 経細胞の能動輸送能力も低下する。また、中枢の伝達物質の遊離量も減少し、シナプス 伝達も阻害される。これらの機能障害が原因となって前記の高次神経症状が現れると推 定されている。一方、さらに体温が下がり脳神経系の機能が低下すると、延髄の呼吸中 枢や循環中枢も影響を受け、その活動が低下する。これにより、呼吸及び循環系の機能 低下を来し、心筋や骨格筋の酸素需要に応じきれなくなった時に低酸素による症状が現 れる。心筋の低酸素症が更に進行すると、心室細動が誘発され死に至る。低体温中は、 一般に、血液が酸性に傾く。これは低体温のため延髄の呼吸中枢が機能低下をきたし換 気が充分に行われなくなるためである。また、これと平行して乳酸等の蓄積による代謝 性のアシドーシス(酸性化)も起こるが、これは低体温からの復温時に特に顕著とな る。また、低体温中のアシドーシスは、肺の換気量を増して炭酸ガスを排出させるか、 重炭酸ソーダの様な緩衝液を静脈内に注射することにより改善できる。血漿中の重炭酸 イオンはバンドⅢ蛋白という陰イオン透過性蛋白により赤血球内に移され、炭酸脱水酵 素の作用により遊離した炭酸ガスが肺胞から体外に排出されるが、これらの機能が体温 の低下により障害を受ける。さらに、低体温症においては、皮膚、肺などに浮腫がしば

ったと推定されている。これはヒマラヤにおける登山家の最初の遭難であった。1928年 8月から3カ月間、日本の長谷川伝次郎はナンガ・パルバット周辺の偵察を行った。9 月16日にはコトリからゲルボン尾根を経て、6096mの高さまで登るという快挙を成し遂 げ、その後事故もなく計画を終えた。1934年のドイツ隊は、40年前のママリー隊の成果 をふまえて、ラキオト氷河からキャンプを進め、7月6日にジルバー・ザッテルの奥に 最終キャンプが設営され、そこに、メルクル隊長以下16名もの多人数が泊まった。翌日 晴天ならば、あと数時間で登頂は確実と思われたが、その夜からひどい暴風雪が一週間 以上続き、2日目から危険を冒して吹雪の中の退却を敢行したが、寒冷と食料の不足に 低酸素の障害も加わって彼らは山稜上に次々と倒れ、隊長を含めて10名の命が失われ た。この遭難は、初期のヒマラヤ遠征に於けるタクティクスの設定と局地に於ける天候 の予測がいかに難しかったかを示している。また, 低体温症の予防法と救助法が当時は まだ確立していなかったことも被害を大きくした。1937年のドイツ隊は、前回のルート にそって順調にキャンプを進め、6月14日に主力隊員が第4キャンプに集結したが、睡 眠中に雪崩に襲われ,低酸素症および低体温症により隊長以下16名が死亡した。すでに この事故の前に第2キャンプが大きな雪崩により紛砕されていたので、雪崩を避けるた めに、キャンプ地の設定と天候の変化に対しては細心の注意が払われていたが、自然の 猛威は人間の予測をはるかに越えるものがあった。翌年の1938年に、またドイツ隊が挑 戦した。すでに多くの人材を失っていたので、今回はバウアーが陣頭に立った。この年 は天候がきわめて悪く、何度も登行を試みたが、いずれも悪天候のために退却を余儀な くされた。バウアーは2度にわたるカンチェンジュンガ遠征の失敗にもめげず、彼の得 意とする長期戦に持込み、3カ月にわたり粘りに粘ったが、7300mを最高到達点にして 今回の遠征も敗退した。しかし遭難者は1人も出さなかった。この隊の、科学的な背景 にもとずいた慎重な行動は、1953年のエベレストのハント隊、K2のハウストン隊の行 動などと共に,ヒマラヤの安全登山史上高く評価されるべきものと思われる。1953年 7 月3日、ついにナンガ・パルバットはオーストリア人のヘルマン・ブールにより単独初 登頂された。彼は、好運にも天候に恵まれて、6700mのキャンプから約40時間かかっ て、食料や水もほとんど取らず、酸素の吸入もなしに、一気に頂上を往復した。帰路、 8000m の高度で岩壁にもたれたまま夜を過ごしたが、睡魔による転滑落を防ぐため覚醒 剤のアンフェタミンを使用した。これは睡眠により増強する低体温と脳障害による遭難 を防ぐためであった。1962年のドイツ隊においては、70年前にママリー達が最初に挑戦 したディアミール壁から3名の隊員が初登頂した。その1人,レーウは帰路8000mの稜 線でビヴァークをおこない、翌日、低体温に低酸素の障害が重なって脳障害を来たし、 転滑落により致命傷を負って, 友の胸の中で息を引き取った。他の2名も脳障害に悩ま されながら最終キャンプの近くをさまよっているところを救援隊によって助けられた。 以上の記録が私たちに示してくれる教訓は、気象の変化によりひきおこされた寒冷と雪 崩がこれらの遭難の主たる原因であり、これを避けるためには、天候の予測を正確に行 うとともに、低体温および低酸素による脳機能障害を予防することが最も重要であるこ とがわかる。また、最近は、登山の科学および技術の進歩により寒冷や雪崩による大き

しば現われる。脳に浮腫が生ずることもある。これらは、毛細血管の透過性の変化と浸透圧の低下によるものと考えられるが、酸素の欠乏、ヒスタミンの分泌なども低体温による浮腫の原因になっている。また、低体温により誘発された低酸素症により細胞膜の能動輸送が妨げられると細胞内外の電解質の平衡が崩れ、心筋の機能障害から心室細動を起こしやすくなる。さらに、これは、脳の神経細胞の活動性にも大きな影響を与える。

本年のシシャパンマでの調査では、脳神経系においては大脳の電気活動と眼底網膜の検査を行った。大脳の電位としては感覚誘発電位、運動関連電位、脳波などを21名の隊員から記録した。これらの電位は高所では一般に減少し、感覚誘発電位の二次反応は5名(23%)において、運動関連電位は8名(38%)において有意の減少を示した。脳波は睡眠時および覚醒時ともに平坦化し、電位も減少した。眼底網膜の所見は、中島氏の調査結果によると、平地からBCに到着した時すでに17名の被検者のうち8名(47%)に出血が見られ、登頂後は19名の登頂者のうち10名(53%)に出血が見られた。また、杉江氏の胃カメラによる検査では、登山活動終了後、BCにおいて、5名に胃潰瘍、2名に十二指腸潰瘍が見いだされた。これらの高所における機能障害を示唆する所見に対して、低温と低酸素がどの程度関与しているかは今後の調査に待たなければならないが、そのなかでも、特に潰瘍の発生には寒冷が大きな誘因になっていると推察される。

寒冷による脳機能障害の予防法

1. 気象観測と天候の予測

正確な気象観測による天候の予測は、それに続く登山活動の安全に、すなわち、寒冷 による人体の機能障害を予防するために最も基本的で重要な作業である。寒冷による遭 難の多くは、気象情報の不足から天候の予測を誤って、悪天候下に無理な行動を強行し た場合に発生している。寒冷環境においては、低体温から脳障害に陥ったり、天候の悪 化により誘発された雪崩に巻き込まれて、低酸素および低体温による脳障害に陥ること も多い。登山に必要な気象情報としては長期および短期の天候の予測とそれに関連した 気温、風速、風向、気圧、降雨雪量などがある。標高4000m以下の日本国内の山岳にお いては対流圏下部の気象が問題となる。日本国内で得られる気象情報としては、まず. NHK 第二放送と日本短波放送による気象通報がある。これにより地上天気図も作るこ とができる。高層天気図は、気象庁の気象ファクシミリの放送(JMH および JMJ)によ るか、ラジオたんぱ放送の高層気象通報の資料から作成する。通常は700mb 等圧面天 気図が役に立つ。これにより悪天をもたらす低気圧や寒気の接近も正確に予測すること ができる。一方、標高8000mにも及ぶヒマラヤにおいては対流圏上部の気象情報が重要 である。本年のシシャパンマ遠征においても、私たちは現地で気象用小型ファクシミリ を用いて、主にインドおよび日本の気象台からの500mb、300mb の高層天気図を受信し その解析を行うとともに、短波および中波の一般放送から長期および短期の天気予報に 関する情報を集めた。また、これらの情報のほかに、日射量、湿度、雲の分布とその特 徴も調べた。頂上アタックの前後2-3日の天気は登山隊員の生命の安全に最も大きな影響を与えるため、大気の大循環の監視とともに各キャンプの通常気象観測と観天望気も重視した。一般に、悪天候が予測される時は無理な行動を控えるとともに、好天下で行動中も天候の変化に常に注意を払い、不測の事態に遭っても直ちに対応できるよう準備しておくことが肝要である。

2. 雪の状態の観察および地形の把握

これは、ルートを確保し登山活動の安全をはかるとともに、雪崩による遭難を防ぐた めに必ず実行する必要がある。天候の急変に遭ってルートを見失い、クレバスに転落し たり、寒冷にさらされて低体温から脳障害に陥り遭難する場合が一般に多い。クレバス に転落した場合も外傷と寒冷により低体温症に陥りやすい。今回のシシャパンマ遠征に おいても、1週間も経過するとルートの状態は大きく変わり、特に5月に入ってから随 所にクレバスが出現した。氷河上のルートの変化も著明で、荒天時や夜間の行動中に私 たちの仲間がルートを見失い、トランシーバーで連絡をとりながら難を避け得たことも あった。このため、時間の許す限りフィックスザイルをはりポールを立ててルートの確 保と安全のための努力がなされた。一方、雪崩を避けるためには、まず、雪崩の危険地 に接近しないことが最も重要であるが、このために、雪の状態と地形の把握を正確に行 う。積雪の内部に弱層のみられるときはなだれる危険が特に大きい。人為的に雪崩を誘 発しないように、危険性のある雪の上での行動は特に慎重を要する。雪崩紐の使用も推 奨される。 雪崩に埋没した場合は低酸素症, 低体温症, 外傷などにより, 3時間以内に 90%以上が死亡する。このため、救助活動は一刻を争う。低体温症が主因となって死亡 する割合は20-40%と推定される。人体は酸素の供給が絶たれると約30分で、5℃の水 に浸かると約1時間で脳死の状態に陥る。雪崩に埋められたとき、軽くて乾いた、温度 の低い雪の場合は低体温症になりやすく、濡れて重い、温度の高い雪の場合は低酸素症 に陥りやすい。雪崩の起こりやすい天候下で行動する時は、防寒服を充分に着ておく。 これにより、雪崩に埋没した時に、体温が低下するのを防ぐことができる。これらの事 実をもとにして、 雪崩に対しては、常に遭難の予防と救助の両面を念頭において登山活 動を進める必要がある。今回のシシャパンマ遠征においても、積雪の内層の状態、氷河 の変化とその表面の状態、周囲の雪崩の観察とその危険度などの正確な情報を得るよう に努めた。さらに、これに関連して、ベースキャンプから頂上に至るルート上のクレバ スの有無と消長、渡渉点の水量や流速、落石や崩壊の危険性などの情報にも注意をはら った。4月中は気温も通常10℃以下で、氷河上の雪の量も多く、クレバスもほとんど見 られなかったが、5月になると気温も最高20℃あたりまで上昇し、多くのクレバスがル ート上に現れ危険も増した。状況に応じてルートを安全な位置に移動させた。

3. 防寒衣服の着用

高所の寒冷環境においては、熱の喪失による体温の低下を防ぐために、適当な衣服を 着用することは必要不可欠であり、その適否は極限環境下においては私たちの生死の命

運を決める。外気の温度が0℃前後の寒冷環境下では、軽くて断熱効果のあるクロロフ ァイバーやポリプロピレンなどの化繊の下着の上に、ポリエステルやナイロンなどの繊 維で出来たパイルのジャケットを着る。更に、羽毛服やゴアテックスのヤッケを用いれ ば、風が強くない限り、低体温症に陥ることなく軽快に活動を続けることができる。但 し、外の気温にあわせて、衣服の脱着を丁寧に行い、よけいな汗をかかないように細心 の注意をはらう。これには、かなりの経験を要する。これらの化繊は、この程度の気温 では湿気を通し易いので、発汗による水分は衣服を通して容易に大気中に放散される。 しかし、大気の温度が零下数10℃から零下50℃にも及ぶ低温環境下で強風を伴う場合に おいては、慎重に衣服を選ぶ必要がある。この場合は、ウールまたは化繊の下着の上に ウールのセーター、ジャケットおよびズボンを着用し、その上に羽毛服および羽毛ズボ ンを必要に応じて着て、さらに風雪が強い場合は、ゴアテックス製のヤッケおよびオー バー・ズボンを使用する。この様な極限環境におていは、化繊のみからなる防寒衣服を 着用すると、化繊は水分を吸収保持することがほとんど出来ないため、身体から発散す る水蒸気は、直接、大気に接する部分から内へ向かって氷結すると推定される。このた め、衣服の断熱性は急速に低下し、人体は低体温に陥る。冬のマッキンリーや立山にお けるわが国の優れた登山家の遭難は、強風下の寒冷環境において化繊や木綿の衣服を着 用したことが原因の一つとされている。ウールの衣服は化繊の衣服よりもはるかに多く の水分を吸収することが可能であり、また、水浸しになっていても断熱性は乾燥時の 80%以上保持されているので、中の水分も氷結しにくいと考えられる。頭部や頸部も、 内部の血流量が多いにもかかわらず、表層組織の断熱性は低いので、熱を失い易い。こ のため、頭頸部の防寒対策も、強風時には特に重要である。通常は目出帽の上に、厚手 のウールまたは羽毛の耳および頸部を覆うことの出来る帽子を被る。この上に風を防ぎ 雪盲を予防するためのゴーグルをつければ悪天候下においてもある程度は活動が可能で ある。手の防寒は、薄手の絹またはウールの手袋の上に厚手のウールの手袋またはミト ンを着け、必要に応じてオーバー手袋を使用する。足の防寒は、ウールの靴下の上に二 重靴をはいて、さらに、オーバーシューズまたはスパッツをつける。本年のシシャパン マにおける私たちの隊でも、大体これと同じ装備を用いたが、特に登山活動の安全上に 問題はなかった。一方,800mにおよぶ高所では、上に述べた装備でもしばしば凍傷に かかる場合があると報告されている。顔は強風時に、手は手袋を脱いだ瞬間に、足は汗 でぬれたときが危ないといわれる。しかし、最も大きな原因は寒冷環境において低酸素 の影響が加算的に作用することにある。事実、高度6000m、氷点下15℃の外気温で皮の 二重靴に毛の靴下を一枚はいた状態で、足の親指表面の温度は6.5℃であったが、1分 間1リットルの酸素吸入により10.5℃に上昇した。それ故、これらの凍傷を防ぐために は、悪天候下の行動を避け、エネルギーと酸素の補給を十分に行う必要がある。これを 守れば、通常高所で使用する重い二重靴は不必要で、むしろ軽い一重靴を用いて機動的 に活動するほうが能率的で危険も少ないといわれる。また、統計によると、皮製の靴の ほうがプラスチック製の靴よりも凍傷になりにくい。特に、ビバーク中の酸素の吸入 は、単に凍傷の予防にとどまらず、低酸素および低体温による脳障害を予防するために

も極めて有効である。

4. 通信機の活用

川では登山活動の推進と安全のために通信機を使用する。通常用いる装置としては、 無線通話用トランシーバー,AM および FM 受信機,気象用小型ファクシミリ,雪崩埋 没者探知用発信器などがある。最近は衛星通信システムなども利用されている。今回、 私たちはトランシーバーを各人が一台ずつ携帯し使用したが、さらに、新しい方法を開 発して、これを、寒冷による遭難の予防と科学調査のために活用したのでその概略を紹 介する。現在, 市販されているトランシーバーは, ほとんどが FM 方式で, 144MHz ま たは430MHz 帯の電波を使用する。このトランシーバーの外部マイクの接続用端子に1 キロオーム程度の抵抗を接続すれば、発信状態が持続する。すなわち、この状態で、雪 崩埋没者探知用発信器として使用できる。これを携帯している者が雪崩に埋没した時 は、捜索者は、埋没者の発信電波を自己の持つトランシーバーで受信し、その電波が最 も強く受信できる地点をみいだせば、その下が埋没地点である。受信電波の強さは、ほ どんどの機種において、トランシーバーの液晶面に棒線の長さとして表示される。電波 の強度が視覚的に読み取れる点が強風などの悪条件下に於いては特に有利である。この 方法は雪崩だけでなく、ルートを見失ったり転滑落により行方不明になった者の所在位 置を探索する時にも応用できる。電波の到達範囲も数百 m から数 Km におよぶ。ここ で、最も問題になるのは電波の発信持続時間である。この方法で、アルカリ・マンガン 電池を用いて約2時間であった。この持続時間を延長するために、我々は10秒おきに1 秒間だけつながる電子スイッチを自作し使用した。これを上記の抵抗に直列につないで マイク端子に接続する。これにより、発信持続時間は10倍以上に伸びた。リチウム電池 を使用すれば低温下に於ける性能も、より優れたものとなる。さらに、このトランシー バーのマイク端子に外部から入力を与えて、心音、肺の呼吸音、脳波、心電図などを FM 波として送信し、ベース・キャンプあるいはラボ・キャンプにおいて、距離的に離 れた所にいる被検者の循環系や神経系の機能をモニターすることも可能となった。次 に、専用の雪崩埋没者探知用発振器の製品としては現在下記のものがある。ヨーロッパ ではオーストリヤ製の Pieps (2275Hz) およびスイス製の Autophon (457KHz) があ り、ほかに、アメリカ製の Skadi (2275Hz), 日本製の Yamatan (50MHz 帯) などがあ る。Pieps, Autophon および Skadi には受信器も内蔵されている。Yamatan は、主に、 冬期に剣岳や黒部渓谷周辺に入山する隊に、富山県が貸し出している。シシャパンマで は京都・ムラカミの好意により Pieps を準備した。気象用ファクシミリは日本無線の IAX-9型を使用した。これは、動作がプログラム化されていて、一度セットすると操 作は非常に簡単になり便利であった。

5. 食物と水分の補給

人が安静にしている時は、一日につき、食物は約2000キロカロリー、水分は約2リットルを必要とする。高所の寒冷および低酸素環境下で活動中は、それぞれ、少なくとも

2 倍は必要である。特に、防寒衣服の不備により、寒冷下で低体温を防ぐために体を動 かして運動により熱を産生している場合は、さらに大量の食物が必要で6000-8000キロ カロリーもとらなければならない。これほどの大量のカロリーを3度や4度の食事で摂 取するのは無理で、絶えず物を口にして食べながら行動する必要がある。そして、この 方法は、体力を維持し疲労を防ぐためにも極めて良いとされている。カロリー源として は、すぐにエネルギーとして利用できる糖分としてとるのが最もよい。エネルギー源あ るいは睡眠剤としてアルコールを飲むと、皮膚の血管が拡張し体温が下がりやすい。ま た、筋収縮による熱産生がおさえられる。すなわち、低体温に陥りやすい。さらに、低 酸素による影響が加算され体力も低下する。これを防ぐために,アルコールを飲んだ時 は、さらに多くの糖分と水分を摂取する必要がある。水分の補給はエネルギーの補給に 劣らず重要である。人は、安静状態において、水分を補給しない場合、約1週間で脱水 症により死亡する。しかし、水分を補給すれば食物を摂取しなくても約2ヶ月は生きる ことができる。高所においては、低酸素下で人体に必要な量の酸素を摂取するために、 換気が促進され、そのため呼気中に大量の水分が失われる。また、寒冷により尿量が増 える。これは、脳下垂体後葉ホルモンの分泌減少により腎尿細管の水の再吸収が抑えら れることによる。このため、血液が濃縮される。これは低酸素による血液の濃縮と加算 的に働く。これらを補うため1日に4リットル以上の水分を、努力して、摂取する必要 がある。食物と水分の補給は、防寒衣服とともに、人が寒冷から身を守るための最も基 本的な要件の一つである。

6. 睡眠と休養

人体の低体温症に対する抵抗能力に大きな影響を与えるのは体力と疲労である。それ故、睡眠と休養を十分にとって疲労を除き、体温を維持するための基礎体力の回復に努めることは、きわめて重要である。悪天候の寒冷下で道に迷い、そのまま動きまわれば疲労して低体温に陥る危険のあるときは、早めに、風雨を避けて暖かくして睡眠と休養を取ることが第一である。睡眠中は、体温調節中枢の感受性が低下し、体温が下がり易いので、十分なカロリーと水分を摂取し、保温力の大きい衣服や寝袋を使用する必要がある。また、高所の低酸素環境においては睡眠が体力の回復に最も効果的であるとは限らず、起きて安静にしているほうが疲労感も少なく呼吸も楽な場合がよくある。これは寒冷だけでなく低酸素が人体の自覚症状に大きな影響を与えるためである。このようなばあいは、酸素の吸入が最も効果がある。これにより、体温の低下を防ぎ、呼吸も楽になり、充分な睡眠をとることが出来る。

7. 寒冷順応

人体を適度に寒冷にさらして,寒冷順応を形成しておくことは,低体温症を予防する ための有力な手段となる。寒冷に順応した人は身体の表層組織の断熱性が高く,最も高 い深部体温を保つ部分の容積が少なくなっている。また,皮下脂肪組織が発達し褐色脂 肪細胞が機能を発揮するようになる可能性も示唆されている。一般に,女性のほうが男 性よりも低温に対する抵抗力は強い。寒冷地に居住する民族は、手足を露出させて戸外で活動しても凍傷にかからず、また、薄着にもかかわらず低体温に陥らない。これは、長い年月をかけて寒冷順応が形成されたためである。この様な高度な寒冷順応は数カ月程度の寒冷暴露では形成できないとされている。人体は、気温が0℃以下の寒冷環境下に数週間滞在すると寒さに慣れて、血管のノルアドレナリンに対する感受性が高まる。また、ノアルアドレナリンの注入に反応して、酸素消費量が著明に増加するようになり、寒冷順応が形成されつつあることを示す。寒冷により著明となる手や足の血管拡張反応も、寒冷傷害や凍傷を防ぐ作用があり、局所の寒冷順応といえる。高所滞在中はカテコルアミンの血液中の濃度が上昇するが、これは、低酸素にたいする高所順応とともに寒冷順応の形成過程を反映していると推察される。

8. 体温の測定

体温は我々の身体の一般状態を知るための基本的な指標である。体温を測定するため には、水銀温度計あるいは気温をはかるアルコール温度計を用いて、舌下あるいは腋下 の温度をはかる。舌下の体温を測定するには5分間は必要である。人の正常体温は37℃ であるが、安静時の舌下の温度が35-32℃のときは軽症低体温症であり、32℃以下にな ると重症低体温症と診断される。低体温症は本人が知らない間に進行する。衣服がぬれ た状態で強風に吹かれるような湿性寒冷環境において多数発症する。一般症状ととも に、正確な体温を測定し、迅速な予防措置と治療を行うことが、特に、重症低体温症の 場合、強く要請される。凍死する温度は体温が約25℃になった時だと云われる。しか し、厳重な管理のもとで冷凍麻酔を行う場合は体温を15℃まで下げても手術後回復する ので、体温だけでは凍死の機序を説明することはできない。即ち、体温が25℃以下で 体が硬直して凍結したように見える場合でも、心臓が動いていれば回復する可能性があ る。人は、水の中に全身が浸かっている場合には、水温が0℃の時は約30分、水温が 5℃の時は約1時間で凍死する。即ち、薄着の状態でなだれに埋没したり、クレバスに 落ちて氷河の水に浸かったりしたときは1時間前後で凍死する。また、川やクレバスに 落ちて10℃以下の冷水に浸かったときは、数分以内に筋肉が硬直して泳げなくなり溺死 する。これらの事実を認識して、20℃から40℃まで計れる温度計を携帯し、常に体温測 定を行うことにより低体温症を早期に発見しそれを予防するように努力するとともに. 低体温による遭難の危険を避けるべく断えず注意を払う必要がある。

9. 酸素の吸入

酸素の吸入は、高所の低酸素による脳機能障害を防ぐために最もよく用いられる。一方、高所の寒冷環境において、衣服の保温効果が低いとき、すなわち、その断熱値が低いとき、人体は体温を保つためにエネルギーを消費して熱を産生するが、その際に、より多くの酸素を必要とする。安静状態では体温が1℃下がると酸素の消費量は約5倍になる。このような条件下では、酸素の吸入が低体温を防ぐために特に有効である。8000mにもおよぶ高所においては、睡眠中の低酸素による脳機能障害は低体温をも引き

起こしやすいため、これを予防するために1分間に1リットル程度の酸素の吸入を行えば、速やかな機能の回復が達成出来る。今回のシシャパンマ遠征においても、睡眠中および行動中に必要に応じて酸素の吸入を行い、低酸素および低体温による脳障害を予防するよう努力した。酸素の使用は、私たちの登山および調査活動の安全と、登頂の成功に大きく貢献した手段の一つであった。

10. 薬物の使用

カフェインおよびアンフェタミン:寒冷により生じた体温低下は睡眠によりさらに進行し症状は悪化する。体温が正常で食料と防寒装備の十分な場合は、たとえ厳しい寒冷環境においても睡眠を取って体力の回復を図るほうがよいが、体温が35℃以下になって、低体温症が進行し、生命に危険のある場合は、上記の理由により眠ってはならないとされている。この場合は覚醒作用のあるカフェインやさらに作用の強いアンフェタミンの使用も必要とされるであろう。但し、これらの薬物は、それぞれ、循環系おより神経系に対して強い副作用をおよぼすので、必要最小限の量を使用する。前述のごとく1953年のナンガ・パルバット初登頂の際に、登頂隊員はアンフェタミンを使用し、8000mの高度で夜間の寒冷に曝されながら、岩壁に立ったまま眠らずに夜を明かして転滑落をまぬがれ、無事生還したが、幻覚や頭痛に悩まされたと報告している。低圧室における作業遂行能力に対するアンフェタミンとコデインの効果を調べた結果、高度2000フィートではアンフェタミンの方がすぐれており、高度15000フィートではコデインの方が効果的であったという報告もある。アンフェタミンやコデインについては、一般の使用および携帯が禁止されている地域では前もって許可を得ておく必要がある。

グルココルチコイド:人体が寒冷刺激にさらされると副腎皮質ホルモンであるグルココルチコイドなどの分泌量が増加するが、これにより、体内の糖新生促進、毛細血管の拡張抑制、中枢神経系の賦活作用などが引き起こされ、低体温による脳機能障害を防止することができる。また寒冷環境においては、骨折、外傷、呼吸循環系のストレスなどにより体温維持機構に障害をきたし、低体温症に陥ることがしばしばあるが、これは下垂体副腎皮質系の機能変調によりグルココルチコイドなどの副腎皮質ホルモンの分泌量が低下するためである。これらの理由から、グルココルチコイドを服用すれば、寒冷に対する防護能力が増強されると考えられる。なお、グルココルチコイドなどの副腎皮質ホルモンは脳浮腫や肺水腫などの重症高山病に対する予防と治療にも用いることができる。短期間使用する場合は副作用も少なく、ほとんどの地域で自由に使用できる。

おわりに

寒冷による脳障害を克服するには、何よりも予防が第一である。本報告においては気 象観測による天候の予測から薬物の使用まで、幅広い見地から、寒冷による脳機能障害 の予防対策についてまとめたが、ここで、あらゆる予防措置にもかかわらず、重症の脳 障害に陥り生命に危険のせまった場合の救助法について要点を述べる。悪天候や雪崩な

どに遭遇し、体温の低下と低酸素により、意識を失い、脈拍もほどんどふれ得ないよう な遭難者に対して、まず行うべき措置は、息をしやすいように顎を前上方に引き上げて 気道を確保することである。そして、ただちに、ゆっくりと身体を暖めるためのあらゆ る努力を開始する。凍った衣服は切り取り、乾いた防寒具や寝袋で包み、お湯や健常者 の体温で遭難者を温める。これと同時に、自発性の呼吸の有無を慎重に判定する。少し でも呼吸をしていれば、心室細動を誘発しないように細心の注意をはらう。手荒に身体 を扱うことを極力避け、不必要な人工呼吸やマッサージを行わないように特に注意す る。たたいたり、大声で叫んだりして意識を回復させようとする試みも心室細動をおこ す危険がある。一方、自発性の呼吸が全く見られないときは、予後は厳しいが、明らか に低酸素症による症状、すなわち、くちびるが紫色を呈している場合などは、ただちに 人工呼吸を行うとともに、前記の身体を暖める努力を平行して続ける。人工呼吸は強過 ぎないように常に注意をはらい、時々人工呼吸を停止して自発呼吸の回復を丹念に調べ る。心臓や呼吸が止まっているようにみえても、決してここであきらめないことが肝要 である。体温の測定を絶えず行いながら以上の措置を遭難者の体温が正常に復するまで 続け、生死の判定はその後で行う。可能な場合は、40°前後に温めたリンゲル液の点滴 静注も効果がある。暖かい飲物を慎重に胃内に注入する方法も良いとされている。心電 図で心停止が確認できる場合には、ただちに心臓マッサージを行う。以上が、野外の苛 酷な環境下で実行可能な救助法の概要であるが、最後に、我々の経験を率直に述べ、本 報告を終りたい。著者が北アルプスで山岳診療に携わっていたとき、一人の登山家が、 午後おそくに風雨のなかを行動中に、岩場から転滑落した。彼の友人の連絡により、直 ちに、救助隊が現地に赴いて、捜索活動を行ったが、遭難者を発見できず、さらに天候 が悪化して二重遭難の恐れもあったので、夜半に、捜索活動を一旦中止した。翌朝から 再び捜索した結果,数百 m 下の岩壁の途中で停止し,まだ生存していた遭難者を発見 した。彼は、経験と技術を備えていたため、厳しい状況にもかかわらず、冷静に対処 し、全身打撲の重傷は負っていたが、適切な止血措置も自分で施していた。寒冷と出血 が原因となって生じた低体温による脳障害のため、意識はすでに不明瞭になりつつあっ たが、大声で励ますと応答した。脳底や頸椎の骨折の所見は見いだせなかったので、保 温と応急処置を行った後、そのまま背負って安全な場所に収容することに決まった。と ころが、稜線に担ぎ上げる途中で、突然、容態が急変し心不全のため絶命した。恐ら く、低体温により心機能障害に陥った状態で、身体を急に動かして物理的な刺激を与え たため、心室細動を誘発し、心停止を来したと推定される。この時は、万難を排して、 動かす前に、現場で彼の身体を暖めて、何よりも先に体温を上げる努力を忍耐強くなす べきであった。そうしていたならば、彼は命をとりとめたのではないかと考えられる。 著者にとっては、厳しく反省をせまる経験であるが、ここに報告して、これが、今後の 救助活動に対する貴重な指針となることを祈っている。

参考資料

- (1) 山田知充:ネパールの気候に関する覚え書き、山岳、65、1970.
- (2) 中島暢太郎: ヒマラヤの天気予報, 山岳, 78, 1983.
- (3) 安成哲三,藤井理行:ヒマラヤの気候と氷河,東京堂出版,1983.
- (4) 白沢あずみ:中国新彊の気象, ヒマラヤ学誌, 1, 1990.
- (5) 新田隆三:雪崩遭難に関わるトピックス, 山岳, 81, 1986.
- (6) 飯田睦治郎:山の天気の見方,東京新聞出版局,1988.
- (7) アメリカ林野局編:雪崩―その遭難をふせぐために,橋本誠二・清水 弘訳,北大 図書刊行会、1974.
- (8) 伊藤真次:適応のしくみ一寒さの生理学,北大図書刊行会,1974.
- (9) 遠藤克昭ほか:高所脳障害とその予防法, 山岳, 83, 1988.
- (10) 関口令安ほか:寒冷高所環境における呼吸機能動態,登山医学,1,1981.
- (11) 中島道郎:積雪期登山と衣服,登山医学,9,1989.
- (12) 吉村寿人: 凍死, 凍傷のメカニズム, 岳人, 423, 1982.
- (13) M. ウォード:高所医学、御手洗玄洋・中島 寛訳、山と渓谷社、1975.
- (14) J. ウィルカーソン編:低体温症と凍傷, 栗栖 茜訳, 三洋社, 1986.
- (15) E. ツィグモンデイほか:山の危険、松井 博訳、朋文堂、1942.
- (16) K. E. Cooper et al. : Respiratory and other responses in subjects immersed in cold water. J. Appl. Physiol., 1976, 40: 903-10.
- (17) G. R. Hervey: Physiological changes encountered in hypothermia. Proc. Roy. Soc. Med., 1973, 66: 1053-57.
- (18) L. G. C. Pugh: Closing insulation and accidental hypothermia in youth. Nature, 1966, 209: 1281-86.
- (19) E. L. Lloyd: Hypothermia and cold stress. Croom Helm. 1986.
- (20) D. W. Choi : Cerebral hypoxia : Some new approaches and unanswered questions. J. Neuroscience, 1990, 10 : 2493-2501.

来日 100 年記念

W・ウェストン年譜 その4

(大正5年〈1916〉~昭和15年〈1940〉まで)

お読みになる前に

- 1. この年譜は前号に続いて大正5年から死去までの25年間とし、本誌における4年間の連載の完結編である。
- 2. 年譜はすでに公開されている資料と,新しく発掘した資料を出来る限り集大成したものである。
- 3. 英国山岳会や英国地学協会などでの講演原稿は殆どが邦訳されていないため、簡単な内容紹介や解説を加えた。
- 4. 各項目については出典を明らかにするため、参考資料名を () 内に記した。さらに 『 』は論文名とし、著者、誌名、刊行年月日の順に列記してある。ただし、ウェストンの著作は著者名を省略した。また、○○資料とか、書簡とか記したものは未公開の個人資料等である。
- 5. 最後に「正誤欄」を設け、判明した誤りは出来る限り訂正した。しかし、発 行後に明らかになった新事実の追加は、煩雑になるため割愛せざるを得なかっ た。
- 6. この年譜の作成に当たっては、ウェストンの事績を探究している編者 3 人の 蒐集した資料をもとに、大正 5 年から 7 年までを三井が、大正 8 年以後を川村 が解説を担当した。
- 7. 全体にわたって名誉会員鳥田巽氏の監修を受けたほか、本誌編集担当の大森 久雄氏にも貴重な助言を頂いた。そのほか、資料の提供などさまざまな形でご 協力下さった方々、誤りを指摘して下さった諸氏に、この場を借りて厚くお礼 申し上げる。

平成2年6月30日

編纂者 日本山岳会会員 川村 宏

同 三井 嘉雄

同 安江 安宣

大正5年(1916)

2月1日 (火)……英国山岳会 (The Alpine Club=以後 AC と略称) の 例会で『富士山の年代記』(Annals of Fuji-San) と題して講演。

(The Alpine Journal, Vol. 30, No. 213, 1916)

- * 講演の内容は、ほとんど全文が「極東の遊歩場」の第3章と第4章に収められている。ただ、著書の中にあるラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn)の部分が、あとからの書き足しである。この日の講演にはブライス、フレッシュフィールド、H. W. ベルチャーが出席していて、講演のあとそれぞれ発言をした。ウェストンはハーンとは意見を異にしたらしい。
- 2月……英国地学協会 (The Royal Geographical Society=以後 RGS と略称) のケルティ (Sir J. S. Keltie) に書信を送る。

(RGS 所蔵 ウェストン書簡)

- * 発信日は不明だが21日に RGS が手紙を受け取った。5月に発行される RGS 会誌へ文を依頼され、題名なしで送ってあったと思われる。桜島の噴火についてのものであった。これに対して RGS からは、28日にウェストンに再び手紙が出されている。
- 3月1日 (水)……RGS のヒンクス (A. R. Hinks) に書信を送る。

(RGS 所蔵 ウェストン書簡)

- * 前便で RGS から,鹿児島県議会が地震計のためにわずか 14 ポンドの支出を認めなかったことについて質問を受け,その説明をしている。お互い律儀な英国人らしい厳しいやりとりであった。この日の手紙から,発信地が 78,Melbury Gardens,Wimbledon,S. W.となった。ヒンクスは後に RGS と AC 合同のエヴェレスト委員会の事務局長を務める。
- 3月23日 (火)……スコットランド地学協会の集会で『日本アルプスの 最近の探検』(Recent Exploration in the Japanese Alps) と題して講 演。

(The Scottish Geographical Magazine, Vol. 32)

- * 講演はエディンバラの同協会で催され、話は大正2年に夫人と同行した白馬岳と、翌年の中房温泉から大天井岳への登山が中心だった。
- 3月……RGS 会誌に『1914 年の桜島噴火』(The Sakurajima Eruption of 1914)を寄稿。

(The Geographical Journal, Vol. 47, No. 5, 1916)

* 日本の陸軍省が発行した「大正3年の桜島の噴火に起因する鹿

児島県での地形上の変化と大地の移動」を紹介したものである。14 ポンドのことも出ている。

8月30日(水)……ジョン・マリー社に書信を送る。

(John Murray 所蔵 ウェストン書簡)

- * 2冊目の本についての作業が中断しているが、かなり先に取りかかること。鮮やかな思い出のために、ホームシックにかかりそうなこと。来週、ニューキャッスルで『魅惑的な地域の地理』(The Geography of those Fascinating Regions)について講演すること。11月にはイートンで講演の予定があると書いている。マリー社に残る最後の手紙である。
- 9月21日 (木) …… タイムズ紙に『王室の登山家』(A Royal Mountaineer) と題して投書。

(The Times Literary Supplement, Sept. 21, 1916)

* 14日付「タイムズ文芸付録」に、ダラム (P. Durham) の「アルプスでの夏休み」(The Summer Holidays in the Alps) の書評が載り、その批評に対してウェストンは、ベルギーのアルベルト国王 (King Albert) が AC の名誉会員であり、現にこの7月14日にはペニン・アルプスに登った登山家であると擁護した。

大正6年(1917)

1月5日 (金)……ケンジントンで『日本の子ども』(The Children of Japan) と題して講演。

(The Times, Jan. 6, 1917)

- * RGS のクリスマス講演の一環として、ケンジントン・タウンホールで少年少女を対象に催された講演であった。話の中でウェストンは、東京の一つの学校だけで前年1月に8人の自殺者があったと述べている。華厳の滝での藤村操らの自殺を指している。この内容はタイムズの教育附録1月11日号にも特集された。
- 5月21日(月)……RGS記念総会でバック・グラントを受賞。

(RGS 資料)

* ウェストンの受賞理由は、ヨーロッパ人に知られていない地域、日本アルプスでの旅行と探検であった。賞金は、当時の額で20 ポンドであったらしい。バック・グラントはジョージ・バック (Sir George Back) の名を付けたもので、合計 4 人が RGS に寄託した基金から、毎年科学的業績の顕著な地理学者か発見者に贈られている。ウェストンにとって初めての大きな受賞であった。

5月24日(金)……受賞について疑問視する記事を「ジャパン・クロニクル」紙が掲載。

(The Japan Chronicle Weekly Edition, May. 24, 1917)

- * この記事はドーント (H. E. Daunt) が全国 41 の山岳に登頂しており、バック・グラントの賞はドーントにこそ与えられるべきだと、ウェストンの受賞に疑問を投げかけた。受賞の数日後に、早くも日本にその報が伝えられていたのだった。
- 7月6日(金)······「ジャパン・クロニクル」紙に日本での登山リスト を送る。

(FTo the Editor of the Chronicle The Japan Chronicle Weekly Edition, Oct. 26, 1917)

- * 原稿はバック・グラントの受賞と日本での登山リストを記したもので、『受賞の発表は、私にとって大変な驚きであったばかりでなく、それは新聞にも掲載された』とその喜びを表わした。ウェストン自身も受賞を予想していなかったのであろう。「クロニクル」の編集長は、ウェストンの手紙がアメリカ経由で着いたため掲載が遅れたことを注記している。
- 10月3日 (水)……ロンドンの日本人船員伝道会の委員会に出席。杉浦 藤四郎に書信を送る。

(杉浦家旧蔵 ウェストン書簡)

- * 杉浦がウェストンに絵葉書を出し日本へ帰国する旨を伝えてきたので、12日に食事と泊りに来ないか、来週はその日しか空いていないからと連絡した。また、杉浦の助力が日本人船員伝道会(The Japanese Seamen's Mission)で感謝されたことも伝えた。
- 11月1日 (木)……「ジャパン・クロニクル」紙が『ウェストン師とほかの登山家』(Rev. W. Weston and other mountaineers) を掲載。

(The Japan Chronicle Weekly Edition, Nov. 1, 1917)

- * バック・グラント受賞理由について、ウェストンに問合わせた ものらしい。ウェストンが登る9年も前に「日本旅行案内」(初 版)には、すでに槍ヶ岳や乗鞍岳の登攀が記されているとして、そ の理由を批判した。ウェストンは、受賞の理由については自分には 責任がないと反論している。
- 11月23日(金)……杉浦藤四郎に書信を送る。

(杉浦家旧蔵 ウェストン書簡)

* 杉浦がウェストン宅に来れずに離英したため、さよならが言えなかった詫びと、セシル監督への紹介状を同封した。さらにウェス

トンは、来週リーフォード(Leaford)とイーストボーン (Eastbourne)で日本について何日か講義をすること。夫人がウォータールー駅で、無料軽食サービスの婦人巡回に奉仕しているとも述べている。

大正7年(1918)

4月16日 (火)……ロンドン日本協会の例会でフランセス夫人が講演。 (『Fuji San, Old and New』 By Mrs. Frances Weston, F. R. G. S. 倫敦

日本協会雑誌 第16巻 1918)

- * 講演はハノーバー・スクエア(Hanover Square)のホール (The Hall) で催された。ウェストン夫人の講演は『富士山 今昔』で、スライドも用いられた。前半の昔については『万葉集』から始まる2年前のウェストンの講演『富士山の年代記』と、内容がかなり重なる部分がある。現在の方では明治35年(1902)の須走からの雨を押しての富士登山を詳しく語った。夫人の講演のあとウェストンが補足し、山の頂上から石を持って帰ると悪天候になるという民間の伝承について語った。なおこの講演の予告記事は、タイムズの3月28日付に出ている。この講演会の議長・森は、その数
- 5月20日 (月)……「INAKA」が『日本での登山』 (Mountaineering in Japan) を掲載。

日後にウェストン夫妻と日本式の夕食を楽しんだ。

(INAKA 第8巻 大正7年5月20日)

- * この一文は前年10月26日に「ジャパン・クロニクル」に掲載されたウェストンの日本における登山記録を再掲したものである。 バック・グラントの受賞に疑問を投じたのが、ドーント自身でなかったことを明らかにしようとしたものではないだろうか。
- 5月29日(水)……アーネスト・サトウ(Sir Ernest M. Satow)と会う。エクセター(Exeter)の陸軍病院で"日本"について講演。30日(木)……日本山岳会へ書信を送る。

(『News from Members』山岳 第13年 第1号 大正7年12月10日)

* この手紙は、ウェストンの近況について内容が豊富である。まず、日本山岳会から写真展の通知を受けてホームシックを感じたこと、戦争のためスイスに行けなかったこと、夫妻でリザードポイント(Lizard Point)やランズエンド(Land's End)で 3、4 週間を過ごしたことを伝えている。ウェストンは大正 12 年(1923)には、

ランズエンドの近くのゼナー (Zennor) の教会で講話をしている。手紙の中でいう写真展は、山岳会の第11回大会に併せて5月1日から東京日本橋の白木屋呉服店で開かれた山岳画展覧会だった。また戦争としているのは、ヨーロッパで始まった第1次世界大戦のことである。

- * 手紙は続けて、きのうエクセターの陸軍病院で"日本"について講演をしたこと。このあとヘイスティングズ(Hastings)でのケンブリッジ大学校外公開講座で日本の説明に務めること。ウェストン夫人が講演をしたこと。その出席者の中に矢田夫妻がいたが、その夫人は志賀重昂の娘であることなどを伝えた。矢田鈴江のことで、重昂の長女である。さらに、その秋「極東の遊歩場」を出版すること。アーネスト・サトウに会ったことを述べている。
- * サトウ日記によると、ウェストンとサトウが会ったのはエクセターのプライク師(Rev. William Emmanuel Pryke)の家で、サトウはウェストンがコーンウォールから戻ったら夫婦でオタリー・セントメリー(Ottery St. Mary)の自宅を訪ねるように招いている。サトウ日記をご教示下さった近代史研究家の萩原延壽氏によれば、プライクはエクセター大聖堂の参事会員で大法官(Cannon and Chancellor of Exeter Cathedral)であり、晩年のサトウと親交のあった聖職者の1人であった。ウェストンは陸軍病院での講演の前にプライク師を訪ねたものと思われるが、その交友についての資料は他に見あたらない。
- * サトウは幕末から明治にかけて英国公使館の日本語書記官として活躍,のち駐日英国公使となった人物である。通算25年にわたる滞日で日本文化の研究紹介に務めた知日家でもあった。著書に「一外交官の見た明治維新」など多数がある。
- 7月4日 (木)……夫妻でデボン州 (Devonshire) のオタリー・セントメリーにサトウを訪ねる。

5日(金)……昼の汽車で帰途につく。

(杉浦家旧蔵 ウェストン書簡) (サトウ日記)

* 夫人とともにサトウの自宅を訪れた。午前11時6分着の汽車で着き、駅までサトウが出迎えている。この日の大半は日本とその山々について語り合ったという。ウェストンは槍ヶ岳と穂高岳の写真を持参してサトウに見せている。サトウも古い日記を貸した。ウェストンは"甲州の山々への初期の登山の日記を読んだ"と書いて

おり、明治 14 年 (1881) の山旅であろう。また "この山旅に同行していた従者は面白い人物で、今はサトウの執事である" としている。明治 13 年 (1880) 年 9 月から従者となり、昭和 4 年 (1928) 8 月のサトウの死を看取った本間三郎である。

ウェストン夫妻はサトウの屋敷で一泊し、翌日正午の汽車で帰 途に就いた。

7月24日 (水)……ドーントに書信を送る。

(『Some Reviews, etc』INAKA 第10巻 大正8年6月28日)

- * 「INAKA」が届いた礼状だった。ウェストンのこともふんだんに盛り込まれている第8巻のことである。この雑誌により日本への郷愁があふれるとして、日本を思う気持を伝えた。
- 9月17日 (火)……RGS のヒンクスに書信を送る。

(RGS 所蔵 ウェストン書簡)

- * 手紙によると、プール (O. M. Poole) から最近もらった写真を同封したこと、彼が RGS に入会を希望していることなどを述べ、その住所、横浜のドッドウェル商会を記してある。この年プールは、そこの日本総支配人であった。
- 12月6日 (金)……「極東の遊歩場」(The Playground of the Far East)をジョン・マリー社から出版。

(John Murray 資料)

- * この題名についてウェストンは、ACの第4代会長スティーブン (Sir Leslie Stephen) の著書「ヨーロッパの遊歩場」(The Playground of Europe) に模したことを、日本山岳会への文の中で述べている。発行部数は1010 冊で、定価は18シリングだった。
- * 『本会近藤幹事への私信によれば、本会名誉会員ウォルター、ウエストン氏は氏の日本アルプスに於ける第二冊目の探検旅行記を完成して(第一冊目は彼の"Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps" -1896 なり)多分今秋に於いて、ジョン・マレー社より"The Playground of the Far East"と題して発行さるべく』(『名誉会員ウエストン氏の近業、第二の「日本アルプス」』山岳 第12年 第2、3号 大正7年8月5日)
- 12月11日 (水)……「デイリー・ニュース」紙に「極東の遊歩場」の 書評が載る。

(Travel in Japan The Daily News, Dec. 11, 1918)

* 登山家の本ではあるが、日本の辺鄙な地方の習慣や信仰について、楽しいページが一杯あるとしている。13日付の新刊紹介の欄

にも書名が出る。

12月16日(月)······ACの評議員に選出される。

("Proceedings of the Alpine Cluba The Alpine Journal, Vol. 32, No. 219, June 1919)

12月19日 (木)……「タイムズ」文芸付録に「極東の遊歩場」の書評 が載る。

(FClimbing in Japan, The Times Literary Supplement, Dec. 19, 1918)

- * 書評は、日本とギリシャの相似点などを紹介したあと、ウェストンの登攀は技術的というよりむしろ一般的なものであり、ウェストンがその国とそこの人びとの真価を認めているので、日本を語るには適切な人であると結んでいる。
- 12月24日 (火)……杉浦藤四郎に書信を送る。

(杉浦家旧蔵 ウェストン書簡)

* 手紙には、2週間前に日本人会で矢田七太郎一等書記官夫妻に 会ったこと。数日前に自分の本が出版され、志賀重昂の序文がある こと。それで関心のある人に伝えて欲しいこと。本は東京の丸善に 発送済みであること。先週 AC の評議員に選出され、光栄に思って いることなどが記されている。

大正8年(1919)

1月3日(金)……日本山岳会幹事宛に書信を送る。

(『News from Members』山岳 第13年第2号 大正8年4月17日)

- * 別便でバドミントン叢書中の「登山」1冊を日本山岳会の図書室用に送ったことを伝え、これはアルプスなどでの名高い登山家の努力の結晶であり、最も信頼出来る名著だとしている。また、ACの評議員に選ばれたが、日本アルプスでの登山と日本山岳会創設への貢献が認められたものだとその名誉を喜んでいる。そして、『日本アルプスの語源』について原稿を送ったので、「山岳」に載せて欲しいと結んでいる。
- 3月24日(月)……ロンドン滞在中の日本山岳会員加藤栄に書信を送る。

(日本山岳会所蔵 ウェストン書簡)

* 同月31日(火)のウェストン家のお茶に招き、ACの会合に一緒に出席するための相談をしませんかと誘った内容である。加藤 栄に宛てたハガキがもう2通あるが、これらは関西支部の富田健一 氏が昨年日本山岳会に寄贈されたもので、富田氏が加藤氏から入手された経緯は「日本山岳会関西支部五十年史」の『関西支部の戦中戦後』に詳しい。

- * 加藤栄 (明治11年~昭和31年?) は京都帝国大学機械科卒業後,八幡製鉄所から藤田組を経て住友に勤務した技師である。住友の資料によれば、加藤は大正7年5月に藤田鉱業本店を退職し、同月住友総本店に入社してアメリカ・ヨーロッパ出張となっており、大正9年5月には住友伸銅所尼崎工場の初代支配人になっている。丁度この時期はロンドンに滞在していた。
- * ウェストンとの交友の詳細は不明であるが、武田久吉や高野鷹蔵と親交があったらしく、加藤がロンドンに滞在すると聞いてウェストンを紹介したのは武田あたりではなかったかと富田氏は推測されている。また、加藤が日本山岳会の会員(会員番号 510 番)だったことも確認されている。
- * 加藤は"日本スキーの父"と呼ばれるレルヒ(Theodor Edler von Lerch)や彼とともに明治44年(1911)の富士スキー登山に同行したクラッセル(Egon von Kratser)とも親しかった。明治45年(1912)には、すでに藤田組小坂鉱山で小坂スキークラブを結成し、クラッセルの指導も受けていたようだ。クラッセルは横浜で貿易業を営んでいたオーストリア人である。
- 3月30日(日)……加藤栄にハガキを送る。

(日本山岳会所蔵 ウェストン書簡)

- * 最寄りの駅から自宅までの略図を描いて簡単な説明を加えている。加藤が翌日のお茶の招待に応じたものであろう。住所は 78 Melbury Gardens Wimbledon, S. W. 19. である。
- 4月17日 (木)……「山岳」に『日本アルプスの語源』(Of the Origin of the Term "The Japanese Alps") が掲載される。

(山岳 第13年第2号 大正8年4月17日)

* "この『日本アルプス』という言葉は、サトウ(E. M. Satow)氏らの編纂した「日本旅行案内」(初版=明治 14 年刊)の 飛驒・信州山系についてのガウランド(W. Gowland)教授の解説 中に使われている。最近 2 人に命名者を尋ねる機会があり、ガウランド教授は『最初に使ったかどうか思い出せない』と答えられたが、サトウ卿は『ガウランド教授によって用いられたのは間違いないと思っている』と語った"とガウランドの命名説を支持している。しかし、その後この山系には殆どヨーロッパ人は足を踏み入れ ず、『日本アルプス』の名称も使われなかったが、明治24年 (1891) に自分が初めて登山して新聞への寄稿やAC、RGSなどでの講演にこの言葉を借用するようになって次第に定着した。その後、信州と甲州の山々と飛驒・信州の山系を区別するために、それぞれ『南日本アルプス』と『北日本アルプス』と名づけたと、こちらは自分の命名であることを強調している。

- * 『日本アルプス』という言葉をウェストンが広めたことについては疑問の余地はない。しかし、「日本旅行案内」の初版と第2版に登場して以後初めてウェストンが使ったと言うのは不正確である。明治15年(1882)にディクソン(W. G. Dixon)が著わした「黎明の国」(The Land of the Morning)にすでに引用されているからである。この書は日本の地理から歴史、自然、人々の暮し、風俗、慣習、行事、宗教、教育等々に及び、いわば外国人向けの日本百科として英国のエジンバラ(Edinburgh)で出版された。その第14章『山と洪水』の小見出しに~日本アルプス(The Japanese Alps)~が掲げられ、"立山から御岳山まで、幅5マイルから10マイルで長さ60ないし70マイルにわたって伸びる飛驒・信州山系は、日本アルプスと呼ばれていた。"とある。
- * ではこの書をウェストンが知らなかったかと言えば、決してそうではない。明治 26 年(1893)に AC 会誌に寄稿した『日本アルプスの登山』(Mountaineering in the Japanese Alps)の冒頭に、「黎明の国」でディクソンが述べたとして第 14 章の最初の 3 行を引用している。
- * ディクソンは長老派教会の司祭で、明治9年(1876)に日本政府に招かれた工学寮(のちの工部大学校)の英語教師である。明治13年(1880)まで在職し、明治11年には針ノ木峠、翌明治12年にはアトキンソン(R. W. Atkinson)らと八ヶ岳、白山、立山に登っている。
- 同上……「山岳」の英文欄に「極東の遊歩場」の書評が載る。

(『Reviews. The Playground of the Far East』山岳 第13年 第2号 大正8年4月17日)

* 便宜上「極東の遊歩場」としたが、原題のまま英文欄に掲載されている。評者は大正3年(1914)にウェストンと立山温泉から黒部谷、大町へと同行したホワイト(Oswald White)である。著書にはホワイトの名前も登場しており、書評は当然のことながら絶賛に近い。ホワイトは当時、大阪川口35番にあった英国副領事館の

副領事である。

4月20日(日)……丸善が「学鐙」に「The Playground of the Far East」の広告を掲載。

(学鐙 第23卷4号)

* この広告では日本語の内容紹介はあるが、タイトルは英文のままで「極東の遊歩場」という邦訳は付されていない。価格は10円である。

同月……RGS 会誌に「極東の遊歩場」の書評掲載。

(Reviews The Geographical Journal, Vol. 53, No. 4, April 1919)

- * 各章ごとの内容を紹介してその一部に簡単に触れている程度で、書評と言うより単なる紹介に近い。評者は S. C. G. となっており、ギルモア(S. C. Gilmour)と推察される。
- 5月……日本交通公社発行の雑誌「ツーリスト」に『妙義山, 筆岩の征服』(The Conquest of Fude-Iwa: Myogi-san)を寄稿。

(The Tourist, Vol. 7, No. 3, May 1919)

- * 大正元年9月5日のフランセス夫人と根本清蔵を伴っての登山 記である。文中に登山の日を大正3年としているのは、ウェストン の記憶違いかミスプリントであろう。また、外国人で筆岩に最初に 登頂したのはファラー(J. P. Farrar)だと記している。ファラーは 明治32年(1899)に来日しており、筆岩登山はこの時と考えられ る。
- * なお、この寄稿文の前に「極東の遊歩場」の書評も掲載されている。
- 7月20日(日)……「学鐙」のこの号の広告で初めて「極東の遊歩場」 という邦訳が登場する。

(学籍 第23年第7号)

- * 日本語に訳し難い「The Playground of the Far East」を「極東 の遊歩場」としたのは丸善の担当者であろう。これは最初の全訳者 岡村精一氏の苦心作だとの説もあるが、どうやら岡村氏は丸善の広 告を踏襲されたと見たい。
- 7月29日 (火)……加藤栄にハガキを送る。

(日本山岳会所蔵 ウェストン書簡)

- * 内容は、来週ケンブリッジの講義を終えてすぐに会いたい。水曜日の午餐にどうかと都合を尋ねたものである。発見された加藤宛の書簡はこれで途切れているため理由などはわからない。
- 9月……「ツーリスト」誌に『日本とギリシャ』(Japan and Greece) を

寄稿。

(The Tourist, Vol. 7, No. 5, Sept., 1919)

* 前書きにことわってあるように、「極東の遊歩場」の第13章 『極東のギリシャ』からの抜粋である。

秋……ウィンブルドンの住まいを慎有恒が訪問。

(わたしの山旅 槇有恒 昭和43年2月20日)

- * 『私にとっての槙有恒氏』(山岳 第84年 1989年)に付された同氏の略年譜によれば、大正8年の項には『渡欧、ロンドンに渡り大英博物館に遊学、W. Weston 氏の知遇を受く。この年、秋スイスに渡る。』とある。
- * また、槇氏から富田氏への書簡(昭和60年9月25日付)には、"寄書は1919年のものにて其頃老生はロンドンに滞在中にてウェストンさんのお宅には終始お伺いしており同年末アルパインクラブの晩餐会にはウェストンさんに客人として伴われ書中の先輩の何人かにご紹介いただきました"と記されている。

(富田健一氏所蔵 槇有恒書簡)

- * 文中の"寄書"あるいは"書中"とあるのは、同年5月6日のAC 晩餐会に出席した加藤栄がその日のメニューに書いて貰った出席者のサインである。サインの中にはファラー(J. P. Farrar=当時AC 会長)やマム(A. L. Mumm)、次のAC 会長コリー(J. N. Collie)の名前が見える。このメニューも富田健一氏がウェストン書簡とともに加藤氏から譲り受けられたもので、今年日本山岳会に寄贈された。
- 10月26日(日)······「INAKA」が「極東の遊歩場」の書評を転載。

(INAKA 第11巻 大正8年10月26日)

* 「山岳」と「RGS 会誌」に掲載された書評を転載している。

12月8日 (月) ······AC の評議員に再選される。

("Proceedings of the Alpine Club」 The Alpine Journal, Vol. 33, No. 220, March 1920)

12月 ……AC の年次晩餐会に槇有恒を伴って出席。

(富田健一氏所蔵 植有恒書簡)

大正9年(1920)

2月28日(土) ……アーネスト・サトウらと昼食を共にした後,楽しく散策。

(日本山岳会所蔵 武田久吉宛ウェストン書簡)(サトウ日記)

3月……AC 会誌に「極東の遊歩場」の書評掲載。

(『Reviews』 The Alpine Journal, Vol. 33, No. 220, March 1920) 4月13日 (火)……武田久吉に書信を送る。

(日本山岳会所蔵 武田久吉宛ウェストン書簡)

- * モナコで開かれる山岳会議のために今週出発するが、日本山岳会の正式の代表として講演出来ないのは残念だ。それよりも「極東の遊歩場」を日本の岳友に献呈したのに、誰からも感謝とか賞賛の一言もないのに失望していると記している。
- * モナコでの国際アルピニスト会議はフランス山岳会の主催で、日本山岳会にも出席要請が来ていた。しかし、適当な代表者を派遣することが不可能だとして出席は見合わせ、地図などの出品にとどまった。恐らくこのためだったと思えるが、フランス山岳会はウェストンを招いて講演を依頼した。そしてウェストンは講演の資料を日本山岳会に求め、高頭式が『日本山系の概要』を、梅沢親光が『日本山岳会沿革略史』をまとめた。それを田部重治と武田久吉が英訳してウェストンに送っている。このうちの高頭の『Sketch of the Mountain-Ranges of Japan』は「山岳」第16年第2号の英文欄に掲載された。

同月14日(水)……神戸のドーントに書信を送る。

(INAKA 第13巻 大正9年12月18日)

- * 前日の AC 例会 (13 日) でドーントの入会が認められたことを報告。アルプスでの第1級の登山を3年間経験していないと入会を認めない AC で、日本の人里離れた地域での山行という事情を説明して評議員会に満場一致で承認されたと、日本アルプスでの登山がAC 入会資格として認められたことを喜んでいる。
- 5月1日 (土)……モナコで開かれた国際アルピニスト会議 (The International Congress of Alpinists) に出席。

(『会報』山岳 第14年第2号 大正9年4月25日)

(『Le Congrés de L'Alpinisme á Monaco』 La Montagne, No. 143, Dec., 1920)

- * この会議は5月10日までの予定で開かれている。ウェストンは『日本アルプスの登山』(Ascensions dans les Alpes Japonaises) をフランス語で講演したが、内容や日時は不明である。
- 6月1日 (火)……『筆岩の征服』(The Conquest of Fude-iwa) を「INAKA」が転載。

(INAKA 第12巻 大正9年6月1日)

- * 大正8年5月の日本交通公社の英文雑誌「The Tourist」に寄稿したものを転載している。
- 7月15日(木)……武田久吉に書信を送る。

(日本山岳会所蔵 武田久吉宛ウェストン書簡)

* 眼の病気のために多くを書いたり、読んだりするのを暫く許されなかったと詫びた後、モンテカルロでのアルピニスト会議に触れている。前便に続いて、自分が日本山岳会に正式の代表として認められなかったのを残念がり、代表を送らなかった唯一の山岳会として会議の運営委員会によって遺憾の意が表明されたこと。高頭、梅沢の論文の手元に届くのが遅かったため、講演原稿をフランス語に訳す時間がなかったこと。この論文中には、自分の日本アルプスへの登山や日本山岳会の創設への努力が全く省かれており、歴史的正確さの点でも間違いだし親切でもない。志賀(筆者注 重昂)教授や小島鳥水なら、こうした手落ちはなかったろうと、自分の功績に言及されなかったことを厳しく指弾している。

また、日本山岳会がバッジの交換を求めたのに対しては、妻は日本アルプスの最後の遠征で、大天井から下降の途中二ノ俣で紛失した。自分のは何ものにも代え難い日本の友人や山々との、沢山の思い出のために手放すのは惜しい。明治38年にオリエンタルホテルで山岳会の創設を話し合い、サヨナラを言ってくれた古い大切な仲間と同じような見方を今の評議員会がしてくれないがゆえに、バッジは手元に置いておきたいと拒絶している。これ程長文で不満をぶちまけたのは、ウェストンにしては珍しいと言えよう。

8月31日 (火)……『ヨーロッパの遊歩場』(The Playground of Europe)を「山岳」に寄稿。

(山岳 第15年第1号 大正9年8月31日)

- * サブタイトルに"明治 44 年の日本山岳会員 2 人の山岳探渉" とある通り、ウェストン夫妻による同年(1911)のアルプス登山記 である。
- 12月1日 (水)……この日から開かれた AC の年次写真展に夫妻それぞれがスイスアルプスの写真などを出展。

(FAlpine Club Photographic Exhibition, The Alpine Journal, Vol. 33, No. 222, March 1921)

* フランセス夫人はグリンデルワルト・フィッシャー氷河の氷瀑 の写真を、ウェストンは"オーバーステインベルグからのユングフ ラウ"と"シルトホルン直下からのラウターブルンネン・ブライト ホルン"などを出展し、その前景を含めた構図を賞められている。

* 日本の写真ではスペンサー (S. Spencer) が "精進湖からの富士"を、ウェストンが "南日本アルプスの野呂川谷"と題した小品を展示した。また、フランセス夫人は日本人 N. Gwaho による着色された富士の写真を送って来たが、これは極めて巧みに彩色されていて一目見ると水彩画のような印象を与えると評されている。N. Gwaho という人物は不明である。

同月6日(月)……ACの年次総会で評議員として留任。

("Proceedings of the Alpine Cluba The Alpine Journal, Vol. 33, No. 222, March 1921)

* 評議員として3度目の選任で、翌年12月12日の年次総会で退 任している。

大正10年(1921)

1月12日 (水)……ロンドン日本協会の例会で『古い友と新しい顔―北 日本アルプスでの最近の探検』(Old Friends and New Faces: Some Recent Exploration in the Northern Japanese Alps) と題して講演。

(倫敦日本協会雑誌 第18巻 1921)

- * 大正 2 年 (1913) の奥穂高登山と槍ヶ岳の北側からの登攀,翌 年の大天井から上高地への縦走記を中心に,最初の白馬岳登山での エピソードなど懐古を交えての講演であった。
- 2月……RGS 会誌にラフマン (C. B. Luffmann) 著「日本の農作物」 (The Harvest of Japan) の書評を寄せる。

(Reviews, The Geographical Journal, Vol. 57, No. 2, Feb., 1921)

3月31日 (木)……「ジャパン・アドバタイザー」紙が『10世紀の美しい日本がまだ見られる』(Picturesque Japan of 10th Century may still be seen) と題してウェストンの講演要旨を掲載。

(The Japan Advertiser, March 31st., 1921)

* ロンドン日本協会での1月12日の講演内容とほぼ同じものである。記事の冒頭にLondon (Mail) …とあることから、ウェストン自身が講演原稿を送ったものと推測される。"ほぼ同じ"としたのは、「倫敦日本協会雑誌」の最初の2ページ半がカットされるなど、ところどころに省略がみられるからである。また紙面では内容をいくつかに分けて小見出しが付されているが、最後の小見出しの部分は「倫敦日本協会雑誌」では省かれている。大正12年(1923)の「INAKA」第16巻に転載されたのは新聞からであっ

た。

4月15日 (金)……『甲斐ヶ根山の登攀』(The Ascent of Kaigane San) を「INAKA」が再掲。

(INAKA 第14巻 大正10年4月15日)

- * 明治 35 年 (1902) 夏の第 1 回北岳登山記で,同年 11 月 1 日に「ジャパン・ウィークリー・メイル」(The Japan Weekly Mail) に寄稿したものを転載。
- 4月……日本郵船のクライスト号(後に吉野丸と改名)でロンドンから マルセーユへ向かう。

(「主の御名によりて~横浜聖アンデレ教会百年史~」日本聖公会横 浜聖アンデレ教会 昭和60年11月30日)

- * 当時クライスト号の通信士東海林定一氏が船上で撮ったウェストンとの記念写真が残っている。出会いはロンドン港にあった日本人船員伝道会(The Japanese Seamen's Mission)だったという。マルセーユでも一緒に教会の礼拝に出席したりしたが,登山の話は一切出なかった。東海林氏はウェストンが日本の山々を踏破した登山家であることを知らず,第2次大戦後にウェストン祭の新聞記事から初めて気づかれたものである。なお,東海林氏はその後日本聖公会の司祭となられ,現在もお元気で活躍されている。
- 7月……「ナショナル・ジオグラフィック・マガジン」に『日本の地理 〜特に日本人の性格への影響について』(The Geography of Japan ~ With Special Reference to Its Influence on the Character of the Japanese People)を寄稿。

(The National Geographic Magazine, Vol. 40, No. 1, July 1921)

- * 内容は、日本の風土や自然現象が日本人の性格形成に与えた影響を論じたものである。日本は火山の噴火や地震、台風、津浪など自然の災害に常に見舞われることから、人々は倦むことを知らない忍耐と不屈の精神を持ち、宿命論的考えを抱いている。特に山々で隔てられた山国の人々は、その上に倹約的で独立独歩の気持が強い。また、日本海側に較べて太平洋岸では、その気候が陽気な性格を醸成しているなどとさまざまな例を挙げて論証している。
- 12月5日 (月) ······AC の年次写真展にスイスアルプスと日本アルプス の写真を出展。

(『The Photographic Exhibition』 The Alpine Journal, Vol. 34, No. 224, May 1922)

* ウェストンは"ローゼンホルンからのベルグリストック"

(nice little picture of the Berglistock from the Rosenhorn) を出展したほか、日本人登山家の撮影した5枚の日本アルプスの写真も展示した。このうちの1枚は"ライガタケからの焼岳"(Yakedake from Rai-ga-take)で、高野(鷹蔵)氏の作品であったと記されている。ライガタケは槍ヶ岳の誤植であろう。

12月12日 (月)······AC の評議員を任期満了で退任。

("Proceedings of the Alpine Cluba The Alpine Journal, Vol. 34, No. 224, May 1922)

- * この日開かれた AC 年次総会で退任した。
- 12月13日 (火)……AC の年次晩餐会に槙有恒を伴って出席。

(わたしの山旅 槇有恒 昭和43年2月20日)

- * この年、槇はモンテ・ローザやマッターホルンを登り、9月9日にはアイガー東山稜の初登に成功した。槇は「わたしの山旅」にこう書いている。"ここ(筆者注 ロンドン)ではウェストン師が待ち構えていて下さった。登山のためにグリンデルヴァルトを勧められたのも同師であったこととて、登山の詳しい報告をした。師は自分の手柄のように喜んで下さった。"
- * 翌年の AC 年次総会での告別演説で、コリー会長は"1874年 (明治7年) に企てられて以来、多くの登山家の挑戦を退けて来た アイガーの東山稜が、遂に日本山岳会の横有恒氏によって征服され た。"と激賞しており、ウェストンがこの若き日本の登山家の壮挙 を喜んだことは想像に難くない。

大正11年(1922)

3月17日 (金)……ロンドン日本協会の例会で『農業日本の特色』 (Some Aspects of Rural Japan) と題して講演。

(倫敦日本協会雑誌 第19巻 1922)

* 講演の前にウェストン自身が述べているように、純粋な農業的 見地から論じたものではなく、どちらかと言えば民俗学的な立場か ら自らの見聞をまとめたものである。日本の詩的な表現の最古の言 葉は"豊葦原瑞穂国"であり、近代化が進みつつある現在も農業は 日本の基幹産業であると、このテーマを取り上げた趣旨を強調して いる。続いて、農民の性格から農村の祭り、米・蚕・茶などの農産 物、農村婦人の地位、農民の楽しみである湯治までエピソードを交 えながら話を進めている。講演後に議長は、日本の農業というテー マが初めて語られたと述べ、この年「日本の基盤」と題する農業問 題の書物を出版したスコット (J. W. R. Scott) も、有益で価値ある 講演だったと讃えている。

7月15日 (土)……「タイムズ」紙に『プロセロ卿と英国山岳会』(Sir G. Prothero and Alpine Club) を投書。

(The Times, July 15, Sat., 1922)

9月……「ナショナル・ジオグラフィック・マガジン」誌が『農業日本 の特色』(Some Aspects of Rural Japan) を掲載。

(The National Geographic Magazine, Vol. 42, No. 3, Sept., 1922)

* 3月17日のロンドン日本協会での講演と全く同じ内容である。

同月……RGS 会誌にスコット (J. W. R. Scott) 著「日本の基盤」

(The Foundations of Japan) の書評を寄せる。

(Reviews The Geographical Journal, Vol. 60, No. 3, Sept., 1922)

11 月 10 日 (金)……ロンドン日本協会の例会で『日本人の性格における日本の地理の影響』(The Geography of Japan in its Influence on the Character of the Japanese People) と題して講演。

(倫敦日本協会雑誌 第20巻 1923)

- * 前年の「The National Geographic Magazine」(Vol. 40, No. 1, July 1921) に執筆した同名の論文の内容が主体である。
- 12月11日 (月) ······AC の年次総会でコリー (J. N. Collie) 会長が告別 演説を行い、その中でウェストンの「極東の遊歩場」に触れたほか、 横有恒のアイガー東山稜初登を賞讃している。

(Valedictory Address The Alpine Journal, Vol. 35, No. 226, May 1923)

* この告別演説はコリーの在任中のさまざまな登山や探検活動を 振り返ったもので、"日本はウェストン師の「極東の遊歩場」に代 表されている。その著書は遙か遠くにある美しい国を見せびらかせ てじれったがらせてくれる"と述べている。

大正 12年 (1923)

2月6日 (火)······AC の例会に出席。

("Proceedings of the Alpine Club』 The Alpine Journal, Vol. 35, No. 226, May 1923)

* この例会ではハード師 (Rev. P. Heard) が『メンヒの北西稜と縦走』 (The North-West Ridge and Traverse of the Mönch) を講演し、ウェストンが討議に加わっている。

3月9日(金)……ロンドン日本協会の例会で議長を務める。

(倫敦日本協会雑誌 第20巻 1923)

- * この日はベルリン駐在日本大使館員須磨弥吉郎の『日本の信仰 生活』(Religious Life in Japan) と題した原稿を、協会の名誉編集 者クープ (Albert Koop) が代読した。
- 5月11日(金)……ロンドン日本協会の例会に出席。

(倫敦日本協会雑誌 第20巻 1923)

- * 広島高等学校の英文学教授菱沼平治が『日本問題の主な特色』 (The Main Features of the Japanese Problem) を講演。後の討議に ウェストンも参加している。
- 5月20日(日)……『北アルプスにて』(In the Northern Alps)を「INAKA」が転載。

(INAKA 第16巻 大正12年5月20日)

- * これは大正 10 年 1 月 12 日のロンドン日本協会での講演原稿を「ジャパン・アドバタイザー」紙(The Japan Advertiser, March 31st, 1921)が『10 世紀の美しい日本がまだ見られる』と題して掲載したものの転載である。
- 5月……RGS 会誌にフレッシュフィールド (D. W. Freshfield) 著『雪線の下』(Below the Snow-line) の書評を書く。

(FA Complete Mountaineer The Geographical Journal, Vol. 61, May 1923)

6月4日(月)……ロンドン日本協会の年次晩餐会に夫妻で出席。

(倫敦日本協会雑誌 第20巻 1923)

6月……RGS 会誌にポンティング (H. G. Ponting) 著「逸楽の国~日本」 (In Lotus Land Japan) の書評を書く。

(Reviews The Geographical Journal, Vol. 61, No. 6, June 1923)

- * 書評はだいたいにおいて長所を取り上げて褒めておくのが一般 的である。しかし、この書評では写真の素晴らしさを賞讃しながら も、事実の記述に多くの誤りがあり、日本語の綴りや用法などに無 数の間違いが見られると指摘。また、自然の美しさを理解している が風景描写は冗漫過ぎて退屈だとこきおろしている。当然ながら著 者も黙っている訳にゆかず、次の号で早速反論の投書を寄せてい る。
- 7月1日 (日)……「アサヒ・スポーツ」誌に『日本アルプスでの最初 の登山』(My First Climbs in the Japanese Alps) を寄稿。

(アサヒ・スポーツ 第1巻 第8号 大正12年7月1日)

- * 本文に先立つウェストンの紹介記事に"当時の記憶を辿って、特に本誌のために執筆された記念すべき登山紀行である(記者)"とある。ウェストンの付した英文とは別の『三十餘年前の槍ヶ嶽風雨の為失敗した第一回登山』というタイトルがつけられているように、内容は明治24年のベルチャー(H. W. Belcher)との槍ヶ岳登山記が中心である。
- 8月……「逸楽の国~日本」の書評に対するポンティングの反論とウェストンの再反論を RGS 会誌が掲載。

("Correspondence," The Geographical Journal, Vol. 62, No. 2, Aug., 1923)

* 前号の書評に対するポンティングの反論を編集者がウェストン に送り、その再反論を同じ誌面に掲載している。

論争のポイントは日本語の固有名詞などの綴りである。例えばポンティングが外国人は"Chion-ji"(筆者注 知恩寺?)を"Chio-ji"と京都人の発音通りに綴るのが当然だとしているのに対し、ウェストンは日本についての権威者であるチェンバレン(B. H. Chamberlain)らの用法に従うべきである。誤った綴りや分音符記号を誤った位置に置くことで、本来の発音や意味を変えてしまったと再び強く批判している。

- * ほかにも、浅間山麓に自生する小果実はヤマブドウかコケモモか。本に掲載されている写真は、現代の一般的な日本女性を代表しているかどうか、などについて論争が展開されている。
- 9月10日 (月)……「タイムズ」紙に『1891年の地震』(The Earthquake of 1891)を投書。

(The Times, Sept. 10, Monday 1923)

- * 「タイムズ」には、この他には同月19日にも次の投書が掲載されている。『Help for Japan』Sept. 19, Wed., 1923.
- * 上記の文末の住所が 57 Iverna-Court, Kensington, W. 8. となっている。ロンドン・ケンジントンの住所が出て来るのは初めてで、この年か前年あたりに移って来たものであろう。
- 11 月……RGS 会誌に鉄道省編「日本の温泉」(The Hot Springs of Japan) の書評を寄せる。

(Reviews The Geographical Journal, Vol. 62, No. 5, Nov., 1923)

12月17日 (月)……RGS の例会で『日本人の性格に及ぼす自然の影響』(The Influence of Nature on Japanese Character)を講演。

(The Geographical Journal, Vol. 63, No. 2, Feb., 1924)

大正13年(1924)

1月11日 (金)……「タイムズ」紙に『火山帯』(Volcanic belts)を投書。

(The Times, Jan. 11, Friday 1924)

* この年、ウェストンは合わせて5回「タイムズ」に投書している。残る4編の見出しと日付を下記する。

Mr. E. N. Buxton, Jan. 14, Mon., 1924.

The Octopus as Food, May 27, Tues., 1924.

"England as she is wrote, June 14, Sat., 1924.

British troops in Cairo Nov. 29, Sat., 1924.

1月23日(水)……ロンドン日本協会の例会に出席。

(倫敦日本協会雑誌 第21巻 1924)

- * この日はウィルデンハート教授(Prof. Bernard J. Wilden-Hart)が、『日本における運動競技の影響』(The Influence of Athletics in Japan)と題して講演した。その後の討議でウェストンは、日本の中世からのスポーツを簡単にまとめて述べ、現在の最も盛んな娯楽のうちでも登山が一番ポピュラーだと自論を展開している。
- 1月……RGS 会誌にベイカー(A. E. Baker)著「ザイルとリュックの山 地」(The Highlands with Rope and Rucksack) の書評を寄せる。

(Reviews The Geographical Journal, Vol. 63, No. 1, Jan., 1924)

* この年, ウェストンは RGS 会誌に 6 冊の本の書評を書いている。この他の 5 冊分をまとめて記しておく。

Through Formosa: an Account of Japan's Island Colony By Owen Rutter. (Vol. 63, No. 4, April 1924)

「The Nations of To-day」 Edited by John Buchan. 中の J. H. Longford が執筆した『Japan』の章。(Vol. 63, No. 6, June 1924)

「China: Yesterday and To-day」 By Edward Thomas Williams. (Vol. 64, No. 3, Sept. 1924)

「The Scottish Mountaineering Club Guide」 Vol. 3, 中の『Section A: Island of Skye』 Edited by E. W. Steeple, G. Barlow and H. Macrobert. の章。(Vol. 64, No. 4, Oct. 1924)

「Shelton of Tibet」By F. B. Shelton. (Vol. 64, No. 6, Dec. 1924) 2月……RGS 会誌が『日本人の性格に於ける自然の影響』を掲載。

(The Geographical Journal, Vol. 63, No. 2, Feb. 1924)

* これは前年 12 月 17 日に RGS で行なったウェストンの講演要

旨である。

5月28日 (水)……ロンドン日本協会の例会に出席。

(倫敦日本協会雑誌 第21巻 1924)

- * この例会ではシドモア (Miss E. R. Scidmore) が『梅の花』 (Ume no Hana) と題して講演した。ウェストンはシドモアの家族 と横浜で親しかったと、後の討議で述べている。
- 5月……RGS 会誌に大森房吉教授の追悼文 (『Obituary: Prof. F. Ōomori』) を寄せる。

(The Geographical Journal, Vol. 63, No. 5, May 1924)

* RGS 会誌は同年3月号 (Vol. 63, No. 3, March 1924) に, C. D. の署名で大森教授の追悼文を掲載している。編集者は"同教授をよく知る会員の要請で追加する"と注記した上でウェストンの一文を掲載した。

この中でウェストンは、大森が単に噴火や地震の観測・研究という学究の世界に閉じこもることなく、研究の結果を火山地域の人々の利益のために役立てたとその功績を讃え、明治 43 年の有珠岳噴火では大森教授の警告によって人命は全く失われなかったと例証している。

7月……RGS の評議員となる。

(FObituary: The Rev. Walter Weston. The Geographical Journal, Vol. 95, No. 6, June 1940)

- * 追悼文によると 1932 年 (昭和7年) まで間をおいて評議員を 勤めている。正確には確認出来ないが、1927年 (昭和2年)7月から1929年 (昭和4年)6月までの役職者リストにウェストンの名前はない。
- この年……ロンドン日本協会の名誉書記となる。

(倫敦日本協会雑誌 第22巻 1925)

* 名誉書記の任期は翌年までだったが、就退任の月日は不詳である。

〈参考記録〉

- この年まで……「ギルクリスト教育信託」(Gilchrist Educational Trust)の講師(Lecturer)を勤める?
 - * ウェストンはケンブリッジ大学の公開講座やギルクリスト教育 信託の講師を勤めたと追悼文などに記されている。しかし、そのシ ステムや内容、ウェストンの在任期間などは不明である。この情報

も英国人から知らされたものだが出典は明らかでない。解明への手がかりの参考資料に留めたい。

大正 14年 (1925)

1月21日 (水)……ロンドン日本協会の例会に出席。

(倫敦日本協会雑誌 第22巻 1925)

- * この日はセンビル大佐 (Colonel the Master of Sempill) が『日本における英国航空使節団』(The British Aviation Mission in Japan) と題して講演し、後の討議でウェストンが日本の潜水艦乗組員の特質を述べている。
- 2月4日 (水)……「タイムズ」紙に『北アメリカの最高峰』(Highest North American Peak) を投書。

(The Times, Feb. 4, Wed., 1925)

* ウェストンはこの年に6回「タイムズ」に投書している。残る 5編を記しておく。

The late Sir James Ramsay, Feb. 20, Friday 1925.

King Albert and Mountaineering, April 13, Mon., 1925.

Wasp Killing, April 22, Wed., 1925.

Memorials to the Missing, May 11, Mon., 1925.

The Church in Japan, Oct. 5, Mon., 1925.

2月25日(水)……ロンドン日本協会の例会に出席。

(倫敦日本協会雑誌 第22巻 1925)

- * この日の講演は、セクストン少佐(Major J. J. O'Brien Sexton)の『日本切手のデザイン』であった。講演後にウェストンは"切手には富士山以外の日本の山が描かれているか"と質ね、セクストン少佐は富士以外の山は知らないと返答している。
- 3月11日 (水)……ロンドン日本協会の例会で議長を務める。

(倫敦日本協会雑誌 第22巻 1925)

- * この日の講演はブライアン博士 (Dr. J. I. Bryan) の『日本人種の起源』 (The Origin of the Japanese Race) であった。
- 6月……RGS 会誌にキングホール (S. King-Hall) 著「西洋文明と極東」(Western Civilisation and the Far East) の書評を書く。

(Reviews The Geographical Journal, Vol. 65, No. 6, June, 1925)

* この年にはRGS会誌にもう1編の書評を書いている。

The World Missionary Atlas Edited by H. P. Beach and C. H. Fahs. (Vol. 66, No. 4, Oct., 1925)

12月……RGS 会誌に『大東洋文庫』(A Great Oriental Library)を寄稿。

(The Geographical Journal, Vol. 66, No. 6, Dec., 1925)

* 東洋学の専門図書館兼研究所として、東京に東洋文庫が開館し たことを知らせ、その内容の一端を紹介したものである。この文庫 の中核をなす中国関係の欧文書籍約24000点は、「タイムズ」紙の アジア通信員から中華民国総統府顧問に転じたジョージ・モリソン (Grorge Ernest Morrison, 1862-1920) の蔵書であった。これを大正 6年(1917)に三菱合資会社の岩崎久弥社長が買い取り、別に購入 したアジアの現地語の書籍など 25 000 点を加え、現在地に鉄筋の 建物を新築して大正13年(1924)に東洋文庫を設立した。最初は 岩崎の個人所有であったが、翌大正14年には財団法人として独立 している。モリソンは北京の自宅の図書室を研究者に開放し、その 価値は広く知られていたため、蔵書が譲渡されるとわかったときに は欧米の大学や研究所が争って購入を希望したと言われている。そ して日本への譲渡は当時の世界的大ニュースとなり、欧米の新聞雑 誌にも様々に報道された。この当時の論調がどのようなものだった かはっきりしないが、ウェストンは日本のためにも東洋学の研究セ ンターとして広く公開された東洋文庫を改めて紹介したかったのだ と思える。

モリソン文庫を中心としたこの貴重な書籍や資料は関東大震災にも、また第2次大戦にも被害を受けずに護り通され、現在の東洋文庫は蔵書70万冊を擁する研究機関として世界に門戸を開いている。ウェストンの願いもまさにこの点にあったと言えるだろう。

- この年……「知られざる日本を往く」(A Wayfarer in Unfamiliar Japan)をロンドンの Methuen & Co., Ltd. から出版。
 - * この書はウェストンの3作目であるが、前の2著と違って登山の紀行文ではない。どちらかと言えば一般的な日本の紹介書である。日本の自然や歴史文化、国民性を中心に、民俗学的な見地から人々の暮しや行事に触れている。発行日は不詳だが、この年の9月に前書きが書かれているところから10月ころの出版と見られる。

なお,本書は昭和62年4月に「ウェストンの明治見聞記」と して,新人物往来社から邦訳が出されている。

この年……「ロンドン日本協会雑誌」にロングフォード (J. H. Longford) の追悼文を寄せる。

(倫敦日本協会雑誌 第22巻 1925)

大正 15 年·昭和元年 (1926)

1月……RGS 会誌が「知られざる日本を往く」(A Wayfarer in Unfamiliar Japan) の書評を掲載。

(Reviews, The Geographical Journal, Vol. 67, No. 1, Jan., 1926)

- * 評者は、日本についての沢山の書物のリストに1冊を加える理由には、それまで語られたことのない何かが必要である。その基準からみても、日本人の生活の知られざる数多くの姿に触れている本書は歓迎されるに違いないと、書評は好意的である。
- O. R. のサインがあるが、RGS 会員のラター少佐(Major Owen Rutter)であろうか。
- 1月22日 (金)……「タイムズ」紙に『天気の民間伝承』(Weather Folklore) と題して投書。

(The Times, Jan. 22, Fri., 1926)

* ウェストンはこの年, 他にも次の2編を「タイムズ」に投書している。

"A Japanese St. Francis, Oct. 7, 1926.

The New Emperor of Japan, Dec. 31, 1926.

4月……RGS 会誌に『知られざるコーンウォール』 (Unknown Cornwall, By C. E. Vulliamy) の書評を寄せる。

(Reviews The Geographical Journal, Vol. 67, No. 4, April 1926)

* この年には他にも RGS 会誌に下記の書評を寄せている。

The Cairngorm Hills of Scotland By S. Gordon. (Vol. 67, No. 6, June 1926)

「Adventures of Exploration」 By Sir J. S. Keltie and S. C. Gilmour. (Vol. 68, No. 3, Sep., 1926)

5月2日(日)……英国留学中の秩父宮に午餐に招かれる。

(雍仁親王実記 秩父宮家 昭和47年11月3日)

* 秩父宮の夏の山行計画が槇有恒を中心として具体的に動きだした経緯は渡辺八郎の『秩父宮殿下の瑞西に於ける御登山の概要』 (山岳 第26年第1号 昭和6年5月1日)に詳しい。その中のウェストンの役割に関しては次のように述べられている。"槇氏は極めて慎重な態度をとられた。殿下の左右に奉仕する方々の意向をただされたことは勿論,山に関する同氏の恩師ウォルター・ウェストン氏に意見を求め熟議を凝らし,遂に自ら一の腹案を立てて之を殿下に提言された。そして愈々その御採用を拝するに及んで初めて御案内の役を引受けられたのであった。" 8月12日 (木)……グリンデルワルトで慎有恒らと秩父宮を出迎える。 13日 (金)……ファウルホルンへ同行,別ルートで下る秩父宮一行 と別れて往路を戻る。

14 日 (土)……チェッカンに登る秩父宮一行にクライネシャイデックまで同行。メンリッヒェンのホテルに先着して出迎える。

16日(月)……ヴェッターホルンへ向かう秩父宮一行をグリンデル ワルトの村はずれまで見送る。

(雍仁親王実記 秩父宮家 昭和47年11月3日) (『秩父宮殿下の瑞西に於ける御登山の概要』渡辺八郎 山岳 第26 年第1号 昭和6年5月1日発行)

- * 渡辺によると、準備のため槇、松方、渡辺が秩父宮到着の20日前にはグリンデルワルトで落ち合い、ウェストンも遠からぬウェンゲンに来ていたという。そして、8月12日には揃って秩父宮を出迎えている。この登山ために特派された朝日新聞の藤木九三記者はウェストンについて次のように伝えている。"老体に似ずすこぶる元気で記者に向ひ、アルプスに殿下を迎へることは頗る愉快である、日本アルプスのこの頃はどうであるか登山はますます盛んであるかなどと語り、丁度殿下が御到着になるころから空が晴れたのを見て巧みな日本語で『日出づる国の皇子が来られるのでアルプスも輝き始めた』などと語った。"(大阪朝日新聞 大正15年8月14日)
- * 翌13日, 足ならしにグリンデルワルトの北西のファウルホルンへ登る槇, 松方らの一行と共に頂上のホテルまで同行。尾根伝いに下る秩父宮らと別れて往路を戻った。
- * 14日はチェッカンへの登攀である。グリンデルワルトからクライネシャイデックまで電車に乗ったが、ウェストンと前田事務官らはここで登山の一行を見送り、メンリッヒェンへ先回りして下山して来た秩父宮らを出迎えている。
- * 16日には初めての高峰ヴェッターホルンへ向かう一行を見送った。"午後三時、二台の田舎馬車に分乗してホテルを出た。村はづれまでお見送りにとウェストン師と前田、中村の二氏とが加はった。エミールの経営してゐるホテル・ヴェッテルホルンの前で馬車をすて、オーベル・グレッチェルを左手に見下ろして岩の坂路を登り出した。程なくお見送りの連中がお別れすることになった。"と渡辺は書いている。そして、この記述を最後にウェストンの名前は出て来ない。足ならしも済み、練達のガイドも揃って、計画が順調

に滑り出したのを見届けて英国へ帰ったのではないだろうか。17 日に出版されている自著も気にかかっていたであろう。

8月17日 (火)……「日本」(Japan) を A & C Black 社から出版。

(A & C Black 社 資料)

- * A & C Black 社からの返書で判明したことは、3000 部印刷して7シリング6ペンスで発売したこと。ウェストンに原稿料として90 ポンド支払ったことであった。売行きや重版については不明とのことである。
- 11月30日(火)……松井大使主催のレセプションに夫妻で出席。

(倫敦日本協会雑誌 第24巻 1927)

- * この日のためにパリから招かれた有名な杵屋夫妻の三味線演奏 があり、その後は深夜までダンスが続いたと記されている。
- 11 月 ······AC 会誌に『キエンタールの内外』(『In and Out of the Kiental)を寄稿。

(The Alpine Journal, Vol. 38, No. 233, Nov., 1926)

- * キエンタールの案内人のリーダーであるヤコブ・マニ (Jakob Mani) の宿, アルベンルーへに滞在して, グスパルテンホルンを 盟主とするブリュムリスアルプ諸峰への登山を語っている。 尖鋭的 で困難な登山ではなく, どちらかと言えば "中高年のための登山の楽しみかた" という趣きがある。
- この年……フランセス夫人が「レディス アルパイン クラブ」会誌に 『日本アルプスでの 2 つの登攀』 (Two Climbs in the Japanese Alps, By Mrs. Walter Weston.) を寄稿。

(Ladies' Alpine Club, 1926)

* 大正3年の槍ヶ岳と奥穂高岳登攀記である。このレディス ア ルパイン クラブは英国山岳会が女性会員を認めていなかったため に,女性の登山家や探検家によって組織されていたものだが,現在 両者は合併されている。

昭和2年(1927)

1月……RGS 会誌が「日本」(Japan)の書評を掲載。

(Reviews, The Geographical Journal, Vol. 69, No. 1, Jan., 1927)

同月……RGS 会誌にホール (T. Hall) 著「シルエットの日本」(Japan in Silhouette) の書評を寄せる。

(Reviews, The Geographical Journal, Vol. 69, No. 1, Jan., 1927)

* RGS 会誌にはこの年ほかにも2冊の書評を書いている。

「An Immigrant in Japan」 By T. Geoffrey. (Vol. 69, No. 2, Feb., 1927.)

FEchoes in Cornwall」 By C. C. Rogers. (Vol. 69, No. 4, April 1927.)

2月9日 (水)……大正天皇の追悼礼拝式に参列。

(倫敦日本協会雑誌 第24巻 1927)

- * この追悼礼拝式は日本キリスト教連合(The Japanese Christian Union)の提唱で、ロンドン日本協会が主催してウェストミンスター寺院で行なわれた。司式聖職者はサザンプトンの主教セシル・ボウフラワー(Cecil H. Boutflower)であった。ボウフラワーは前の南関東地方部監督であり、司式の補佐も大阪地方部の前監督フォス(H. J. Foss)や九州地方部監督リー(A. Lea)ら、日本と縁が深くウェストンとも旧知の人が選ばれている。礼拝は日本語で行なわれた。
- 2月11日 (金)……「タイムズ」紙に『日本の新しい君主』(The new ruler in Japan)を投書。

(The Times, Feb. 11, 1927)

* 「タイムズ」には、この年ほかにも2編を投書している。 『Britain and Japan』 Feb. 15, 1927.

"Motor-cycling on Surrey Hills, July 19, 1927.

3月24日(水)……ロンドン日本協会の例会で議長を務める。

(倫敦日本協会雑誌 第24巻 1927)

* この日は槇有恒が『日本の登山の特色』と題して要旨次のように講演した。日本では信仰登山によって富士,立山,白山,大峰山などが開かれ,「講」による登山が盛んであった。スポーツとしての登山は,約30年前に日本アルプスでウェストン氏夫妻によって始められた。現在日本山岳会は800人近い会員を擁し,山々に近い大きな町にはそれぞれ山岳会が設立されている。また,およそ30の大学にも山岳会があり、学生はウィンパーのマッターホルン登攀記やエベレスト遠征の物語を貧るように読んでいる。そして,夏の登山だけではなく、困難な冬の氷雪にも挑みたいと熱望している。高等学校や中学校の生徒も登山部を組織し、小学校や女学校ですら山への遠足や登山を行なっている。登山の考え方として,一方ではその実践や信念において中世的なものを残しながら、他方新しい考えや方法を試みようとしており、日本の登山の将来は若い世代の肩にかかっている。

- * 「わたしの山旅」で模は次のように書いている。"ウェストン師の勧めで、ジャパンソサエティで一夕講演をした。頗ると恥かしい話だが、わが国の風景観と近代登山といったような題で、ウェストン師蒐集の、講中の寄進する手拭などを資料に使わせていただいた。話は山岳信仰などに触れたためだったろう、聴衆の一人から先達の行なう印契について質問された。私は詳細を答えることができなかった。(中略)これらの人たちはみなアマチュア研究家なのである。不学の私は世間は広いと、今更ながら驚き自戒の念に堪えなかった。" 槇は年月を記していないが、恐らくこの日の講演であろう。
- 6月……RGS の評議員を退任。

(The Geographical Journal, Vol. 70, No. 1, July 1927. の役員名簿から推定)

7月……RGS 会誌に志賀重昂の追悼文 (Obituary: Shigetaka Shiga) を 寄せる。

(The Geographical Journal, Vol. 70, No. 1, July 1927)

- * 志賀重昂はこの年の4月6日に死去している。追悼文では型通りに経歴を述べて、日本山岳会の活動に大きな興味を持ち、その2人目の名誉会員になったと記している。古い仲間として頼りにしていた志賀の死去は、ウェストンにとっても淋しいことであったろう。
- この年……「ロンドン日本協会雑誌」が「日本」の書評を掲載。

(倫敦日本協会雑誌 第24巻 1927)

* ウェストンの著書は"日本の日常生活の行事やエピソードから 男子選挙権、労働団体といったような重要な問題にまで言及してい る。およそ 18 年前に出版された「ふだん着の日本」(Everyday Japan. By A. Lloyd) 以来これ程有益で、写真も美しい(価格も妥 当な)本は出ていない"と書評は非常に好意的であった。

昭和3年(1928)

1月11日 (水)……「タイムズ」紙に『秩父宮』(Prince Chichibu)を 投書。

(The Times, Jan. 11, Wed., 1928)

* この年には他に2編をタイムズ紙に投書している。

The Ascent of the Eiger Aug. 27, Mon., 1928.

"Origin of Place-Names, Dec. 6, Thur., 1928.

1月……RGS 会誌にモンクリフ(A. R. H. Moncrieff)著「ダービー州」 (Derbyshire) の書評を寄せる。

(Reviews The Geographical Journal, Vol. 71, No. 1, Jan., 1928)

* この年には他にも RGS 会誌に次の書評を書いている。

Testo e Atlante di Geografia Ecclesiastica e Missionaria By Luigi Gramatica. (Vol. 72, No. 5, Nov., 1928.)

3月28日(水)……ロンドン日本協会主催の松井大使送別会に出席。

(倫敦日本協会雑誌 第25巻 1928)

6月15日 (金)······RGS 会長クローズ (Colonel Sir Charles Close) に書信を送る。

(RGS 所蔵 ウェストン書簡)

- * 故志賀重昂の記念碑を建立するのに、RGS が石を寄贈することを要望し、その石に刻む言葉も贈るよう依頼している。また、この日の朝、日本の経済地理学者を会員に推薦すべく RGS へ伴ったと述べている。山崎直方であろうか。
- 7月6日 (金)……RGS 書記ヒンクスに書信を送る。

(RGS 所蔵 ウェストン書簡)

- * RGS の午餐会で志賀記念碑に石を寄贈する提案が会長に認められたので、『この石は、今は亡き名誉会員志賀重昂教授を讃える英国地学協会によって捧げられたものである』と刻んだらどうかと文案を提示している。
- * 記念碑は岐阜県美濃加茂市の祐泉寺に建立されたもので、昭和 10年6月10日に除幕式が行なわれた。祐泉寺には槍ヶ岳開山の播 隆上人の墓がある。志賀との縁は、大正2年に無庵和尚が木曽川下 りを共にし、後に日本ラインと命名されるきっかけを作ったこと、 祐泉寺の境内を志賀が「岐蘇遊園」と命名したことからである。
- * また、義理の兄弟にあたるクライブ・ディビス (Clive Davies) に RGS でハワイ諸島に関する論文を発表させたいと依頼している。このディビスはフランセス夫人の妹の夫である。
- * 最後に、英国に来た山崎直方博士を紹介したいと結んでいる。 山崎は同年7月18日から25日までケンブリッジで開かれた国際地 学会議に出席している。
- 7月9日 (月) ·······日本山岳会員大島堅造に大小2枚の自分の写真を贈る。

(大島輝夫氏所蔵 ウェストン書簡)

* 先週便りを受け取りながら、週末にはロンドンを離れていて返

事が遅くなったと詫び、大小2枚の自分の写真を送っている。大き い方の聖職姿の写真は昭和30年頃に日本山岳会に寄贈された。

* 大島とウェストンとの交友についてはよくわからない。輝夫氏の話では、住友勤務の父が日本から写真を依頼したのに対し、日本語の住所や名前の読めなかったウェストンが、辛うじて読めた"住友"を頼りに住友のロンドン支店長宛に送ったものらしいという。

9月10日(月)……大島堅造にスイスから絵はがきで礼状を寄せる。

(大島輝夫氏所蔵 ウェストン書簡)

- * 大島が穂高岳と笠岳の写真を送ったのに対する礼を述べ、浦松 佐美太郎と来週合流したいと思っており、帰英は月末になると記し ている。大島がウェストンの写真の返礼にこれらの写真を贈ったも のだろう。トゥーン湖畔のホテルベルビュー(Hotel Bellebue)か らの発信である。
- 10月1日 (月) ······「東亜評論」に『日本における初期キリスト教迫害 の 遺 物』 (Reliquien aus der Zeit der fruhen Japanischen Christenverfolgung) を発表。

(Ostasiatische Rundschau, Vol. 9, No. 19, 1928)

- * 内容は日本のキリシタン遺物について語ったものである。"30 年前に自分が日本から持ち帰った 1684 年(天和 4 年)の年号の 「高札」がイギリスの博物館にあり、それにはキリスト教徒を密告 した者に与えられる褒賞が列記されている。こうした徳川幕府のキ リスト教徒弾圧の遺物やその破壊を免れた遺物から、歴史家は日本 と西洋の最初の出会いとなったキリシタン時代の研究を始めてい る"と述べ、隠れキリシタンの墓石や礼拝用具、絵画、16 世紀と 17 世紀の教会の鏡、踏絵などを紹介している。
- 11 月 ······ AC 会誌にベインブリッジベル(F. C. Bainbridge-Bell)の追悼文を寄せる。

(『In Memoriam』 The Alpine Journal, Vol. 41, No. 237, Nov., 1928) この年……フランセス夫人がロンドン日本協会の会員となる。

(倫敦日本協会雑誌 第27巻 1930)

昭和4年(1929)

2月14日(木)……ロンドン日本協会の例会で議長を務める。

(倫敦日本協会雑誌 第26巻 1929)

* この日の講演はブライアン師 (Rev. Dr. J. I. Bryan) による『日本の叙情詩』(Japanese Lyric) であった。会員と客はウェスト

ン夫人に迎えられた。

4月25日 (木)……ロンドン日本協会の例会で、秩父宮の『日本アルプスでの登攀』(A Climb in the Japanese Alps)を代読。

(倫敦日本協会雑誌 第26巻 1929)

- * この一文は秩父宮が皇室の内部雑誌「近き御垣」に書かれたもので、ウェストンと浦松佐美太郎が英訳したと記されている。内容は昭和2年の日本アルプス登山である。
- 5月……AC 会誌が秩父宮の『日本アルプスでの8日間』(Eight Days in the Japanese Alps) を掲載。

(The Alpine Journal, Vol. 41, No. 238, May 1929)

- * 4月25日にロンドン日本協会でウェストンが代読した『日本アルプスでの登攀』と内容は同じである。秩父宮がACの名誉会員になられたのを機に掲載されたものだろうが、その蔭にはウェストンの働きかけがあったと推察している。
- 7月……RGS 会誌に「帆船~6000 年の歴史」(The Sailing-Ship: Six Thousand years of history) の書評を書く。

(Reviews The Geographical Journal, Vol. 74, No. 1, July, 1929)

* この他、この年には下記の書評をRGS会誌に寄せている。

Falmouth for Orders: the story of the last Clipper Ship race around Cape Horn J By A. J. Villiers. (Vol. 74, No. 2, Aug., 1929)

「Les Panoramas du Mont Blanc」 By Robert Perret. (Vol. 74, No. 3, Sept., 1929)

Map Showing Distribution of Population in the Japanese Empire By Tetsuji Ono. (Vol. 74, No. 5, Nov., 1929)

Travel and Reflections By Rt. Hon. Noel Buxton. M. P. (Vol. 74, No. 6, Dec., 1929)

* 最後の「旅と考察」は明治 26 年 5 月に恵那山などへ行を共にしたバクストンの著書である。ウェストンは『最も楽しいのは"日本での登山"の経験の章である。その旅は当時の旅行者の通る道筋から全くはずれて、特異な状況のもとで行なわれた。中部日本にある天竜川の激流のスリリングな舟下り、外国の神聖を汚した罪で感情を害した山の神の遣わした台風によって、麓で 3 日間も閉じ込められた後、まだ冬の雪の残る富士への登山という珍しい経験がいきいきと語られている』と評している。36 年前の山行をまざまざと蘇らせていたことであろう。

同月……RGS の評議員に再び就任。

(The Geographical Journal, Vol. 74, No. 1, July 1929. の役員名簿から推定)

8月……「ディスカヴァリー」誌に『極東のギリシャ』(The Greece of the Far East) を寄稿。

(Discovery, Vol. 10, No. 116, August 1929)

- * 翌9月号にも続編が出ている。内容は「極東の遊歩場」の第 15章『極東のギリシャ』と全く同じで、9月号までだと途中で終わっている。10月号以降も続いているのではと推測されるが、今の ところ確認出来ていない。
- 12月?日 (火)……RGS 書記ヒンクスに書信を送る。

(RGS 所蔵 ウェストン書簡)

- * どんな経緯かはわからないが、日本語の母音の上に付す長音符記号の重要性を説明したものである。
- 12月18日 (水)……「タイムズ」紙に『Place-Names』を投書。

(The Times, Dec. 18, Wed., 1929)

12月30日(月)……RGS書記ヒンクスに再度書信を送る。

(RGS 所蔵 ウェストン書簡)

* 前便の説明に対するヒンクスの返事に、重ねて長音符記号の重要性を強調したもので、それを使うことによって意味がより明確になるとしている。大正12年(1923)のポンティングとの論争に見られるように、ことに日本語に関する綴りや分音符記号・長音符記号の用法にはシビアなこだわりをみせている。この往復書簡にもその片鱗が窺える。

昭和5年(1930)

1月……RGS 会誌に山崎直方の追悼文 (Obituary: Professor Naomasa Yamasaki) を寄せる。

(The Geographical Journal, Vol. 75, No. 1, Jun., 1930)

2月 14 日 (金)……『The Dean of Lincoln』を「タイムズ」紙に投書。

(The Times, Feb. 14, 1930)

- * このほかにも次の一文を「タイムズ」に投書している。
 『Young Geographer』 April 1, Tues., 1930.
- 4月1日 (火)……AC の例会で槇、松方、浦松の3人がまとめた『ベルナー・オーバーラントのいくつかの新ルート』(Some New Routes in the Bernese Oberland) と題する報告をウェストンが代読。

(Proceedings of the Alpine Clubs The Alpine Journal, Vol. 42, No.

240, May 1930)

4月……RGS 会誌に「ハクリュートの航海」(Hakuluyt's Voyages) の書評を書く。

(Reviews The Geographical Journal, Vol. 75, No. 4, April, 1930)

- * ハクリュート (Richard Hakluyt) は 16 世紀の英国の地理学者、航海史家である。
- * ほかにもこの年には同誌に下記の書評を書いている。

Derbyshire By T. L. Tuder. (Vol. 75, No. 5, May, 1930)

「Superstitions of Sailors」 By Anglo S. Rappoport. (Vol. 75, No. 5, May 1930)

The Basic Industries and Social History of Japan. 1914-1918 By Ushisaburo Kobayashi. (Vol. 76, No. 4, Oct., 1930)

「Japan in the World of To-day」 By A. J. Brown. (Vol. 76, No. 6, Dec., 1930)

5月……AC 会誌に『富士山』(Fuji-San)を寄稿。

(Alpine Notes, The Alpine Journal, Vol. 42, No. 240, 1930)

- * これは「Die Alpen」(1929) に、日本の台湾領有によって富士 山は王座から退位させられ、6位に格下げされたと書かれたことに 対して富士を擁護したものである。ウェストンは高さにおいて6番 目であることを認めた上で次のように述べている。"それにも拘わ らず、これらの山々は問題の聖なる山とは、その姿の美しさあるい はその美的特質において比べるべくもない。そして、『比類なき 山』としての資質は、その美しさという点で決して挑戦されること はあり得ないのだ"と。
- 同月……AC会誌にフライ(T.C.Fly)の追悼文を寄せる。

(Fin Memoriam The Alpine Journal, Vol. 42, No. 240, May 1930)

6月7日 (土)……RGS 名誉書記ウラストン (A. F. R. Wollaston) の葬 儀に RGS を代表する 1 人として参列。

(The Geographical Journal, Vol. 76, No. 1, July 1930)

- * ウラストンはオックスフォード大学キングズカレッジの指導教 官で、葬儀もキングスカレッジのチャペルで行なわれた。
- 9月までに……日本山岳会に蔵書の一部を寄贈。

(『会報,図書及寄贈書』山岳 第25年第3号 昭和5年11月30日)

* 日本山岳会が図書室を設置することを聞いて贈ったものである。書物もあり雑誌もあり、また片々たる小冊子もあるといったようなプレゼントだったらしい。寄贈リストは松方三郎の一文ととも

に上記「山岳」に掲載されている。

10月……創立 25 周年を迎えた日本山岳会が, 英国山岳会とウェストン に謝意を表明。

(『会務報告』会報1 昭和5年10月)

11月……「山岳」に『おりおりのこと』(Now and Then)を寄稿。

(山岳 第25年第3号 昭和5年11月30日)

- * 日本山岳会創立 25 周年を記念して、自分が 40 年前に初めて日本アルプスの山々へ登り始めた頃と、この頃の登山の隆盛を対比しながら思い出を綴っている。この文の最後に、ウェストンが説教にもよく引用し、サインを求められた際に好んで書いた言葉が記されているので紹介しておく。祈禱書の詩篇第 121 篇の 1 である。『われ山に向いて目をあげん わが助けはいずこよりきたるべきぞ』(I will lift up my eyes to the Hills, from whence comes my help)
- 同月……AC 会誌が松方三郎の『アイガーとヘルンリーいくつかの報告 と思い出』(Eiger and Hörnli: Some Accounts and Recollections)を 掲載。

(The Alpine Journal, Vol. 42, No. 241, Nov., 1930)

* これはタイトルが代わってはいるものの、4月1日にウェストンによって代読されたとの註釈がある。

同月……AC 会誌にブラウン (G. F. Browne) の追悼文を執筆。

(『In Memoriam』 The Alpine Journal, Vol. 42, No. 241, Nov., 1930) この年……日本山岳会員国分勘兵衛がウェストン宅を訪問。

(昭和63年3月21日の横浜ウェストン記念祭での講話)

* 国分氏によると、松方三郎の紹介でケンジントンを尋ねた。ウェストンは筋骨たくましい好々爺で、フランセス夫人は英国婦人の典型だと感じたという。一緒に RGS と AC に行き、AC ではブルース (C. G. Bruce) やヤングハズバンド (F. Younghusband) に紹介されている。

昭和6年(1931)

1月頃……日本山岳会に書信を送る。

(『会員通信』 会報4 昭和6年2月)

* これは創立 25 周年を迎えた日本山岳会がウェストンに謝意を 表したのに対する返書である。"感謝状を貰ってびっくりしたが、 とても嬉しかった。早速 AC の会長に報告したところ,数日後の年 次総会で会長がそれを紹介し、祝辞を送ろうとの私の提案に全員が 暖かく賛成した"と記している。

1月7日 (水)……「タイムズ」紙に『ファラーの植物』(Farrer's Plants)を投書。

(The Times, Jan. 7, Wed., 1931)

* この年, ほかにも「タイムズ」に下記の7篇を投書している。

Coranges in Japan, Jan. 22, Thur., 1931.

The Iron Duke March 7, Sat., 1931.

"Camellia Japonica』 March 14, Sat., 1931.

The glory of Budda March 27, Friday, 1931.

Faraday's Lectures | Sept. 23, Wed., 1931.

The Cornish wreckers, Oct. 23, Friday, 1931.

"Muffins and crumpets," Nov. 24, Tues., 1931.

3月26日 (木)……ロンドン日本協会の例会で『英国山岳会の日本人会 員3人によるスイスアルプスにおける最近の登山』と題して講演。

(倫敦日本協会雑誌 第28巻 1931)

- * ウェストンの講演タイトルは『Some New Climbs in the Swiss Alps by Three Japanese Members of the Alpine Club』であったが、この原稿は最近の AC 会誌に出ているとして内容は掲載されていない。前年の4月1日に AC の例会でウェストンが代読し、11月の AC 会誌に掲載された槇、松方、浦松3人のまとめたスイスアルプス登山記であろう。
- 5月5日 (火)……AC の例会に出席。

(FProceedings of the Alpine Club』 The Alpine Journal, Vol. 43, No. 243, Nov., 1931)

* この例会でウェストンは冬の晩餐会の規程を承認するよう提案 し、採択されている。しかし、ウェストン提案の規程やその背景な どはよくわからない。

昭和7年(1932)

1月18日 (月) ······RGS の例会に出席。

("The Lötschental: A Regional Study." The Geographical Journal, Vol. 79, No. 4, April 1932)

- * 『レッチェンタール:地域研究』と題したアンステッド (J. F. Unstead) の講演の後で発言している。
- 2月25日 (木)……「タイムズ」紙に『リビングストンの遺品』 (Livingstone relics)を投書。

(The Times, Feb. 25, Thurs., 1932)

* これは2月19日にラジオ放送でリビングストンのことを聞いて投書したものらしい。この年、ほかにも「タイムズ」に下記の3編を投書している。

"Sydney Harbour Bridge, March 23, Wed., 1932.

Bishop Foss, March 29, Tues., 1932.

FIn rural Japans Sept. 12, Mon., 1932.

4月1日 (金)……日本山岳会員国分勘兵衛に書信を送る。

(『ウェストンさんの手紙』成瀬岩雄 山 No. 406 1979 年 4 月 20 日)

- * 慶応大学山岳部の会誌「登高行」を送ったことに礼を述べ、ついで「山岳」など日本の刊行物のタイトルや写真説明に英文を併記するよう要望している。ウェストンはその理由として、日本の山岳雑誌の記事が何なのか英国人には見当もつかないし、結果として日本の登山家の業績が世界に認められないことを挙げている。
- 5月……RGS 会誌に「山崎直方論文集」(Collected Essays of Naomasa Yamasaki) の書評を寄せる。

(Reviews The Geographical Journal, Vol. 79, No. 5, May, 1932)

* この年、ほかにも RGS 会誌に下記の書評を書いている。

Fujiyama | Japanese Alpine Club. (Vol. 80, No. 1, July 1932)

The Western Highland By James A. Parker. (Vol. 80, No. 2, August 1932)

6月末……RGSの評議員を退任。

(The Geographical Journal, Vol. 80, No. 1, July 1932. の役員名簿から推定)

昭和8年(1933)

1月……RGS 会誌に「ピークへの脅威」(The Threat to the Peak) の書 評を寄せる。

(Reviews The Geographical Journal, Vol. 81, No. 1, Jan., 1933)

7月7日 (金)……スイスのインターラーケンから小島烏水に書信を送る。

(『邦訳「日本アルプス」の巻後に』小島鳥水 日本アルプスの登山 と探検 梓書房 昭和8年)

* これは小鳥と槇有恒が「日本アルプスの登山と探検」の翻訳許可を求めたのに対して、無条件で許可することを伝えたものであ

る。これを受けて同年には梓書房から岡村精一訳で初めての邦訳が 出版された。以後、今日までに合わせて6つの出版社から翻訳が出 ており、梓書房版以降を下記する。

昭和28年(1953) 創元選書 236番 創元社 岡村精一訳 昭和37年(1962) 日本山岳名著全集1 あかね書房 山崎安 治・青木枝朗訳

昭和38年(1963) 角川文庫 2198番 角川書店 岡村精一訳 昭和51年(1976) 新編日本山岳名著全集1 三笠書房 山崎安治・青木枝朗訳

昭和57年(1982)大江出版社 黒岩健訳

10月26日 (木)……「タイムズ」紙に『Agricourt』を投書。

(The Times, Oct. 26, Thurs., 1933)

- * この年, ほかにも「タイムズ」に次の1編を投書している。 『The mind's eve』Nov. 29. Wed., 1933.
- 11 月頃……松方三郎がウェストンをしばしば訪ねる。

(『神河内』高原 深田久弥編 青木書店 昭和13年7月)

- * この11月前後の1ヵ月半の間、ロンドンに滞在していた松方 三郎は隔日くらいにウェストンの警咳に接していたと言う。そのう ちのある日、ウェストンが松方に日本交通公社の英文雑誌 「Tourist」を見せながら、君は上高地にホテルが出来るのを知って いるかと尋ね、松方が答えに窮しているうちに窓際でじっと涙をこ らえていたというエピソードは余りに有名である。
- この年……「ディスカバリー」誌に『日本の街道を離れて』(Off the beaten track in Japan)を寄稿。

(Discovery, Vol. 14, 1933)

昭和9年(1934)

4月26日 (木)……ロンドン日本協会の例会で『いくつかの山の思い出など』(Some Mountain Memories and Other)を講演。

(倫敦日本協会雑誌 第31巻 1934)

- * この講演原稿は会誌に掲載されなかった。
- 9月22日 (土)……「タイムズ」紙に『最後の麦束の収穫を祝って』 (Crying the Neck)を投書。

(The Times, Sept. 22, Sat., 1934)

11月1日(木)……ロンドン日本協会の例会で議長を務める。

(倫敦日本協会雑誌 第32巻 1935)

- * この日の講演者は日本聖公会九州地方部のリー (Arthur Lea) 監督で、テーマは『発展の光にきらめく現代日本』(Present-day Japan in the Light of her Development) であった。
- 11 月 8 日 (木)……日本山岳会第 64 回小集会で浦口文治が『ウェストンと歩んだ頃』と題して講演。

(『会務報告』会報 40号 昭和9年11月)

- * 浦口はウェストンと行を共にした明治27年夏の山旅を語っている。この講演ではウェストンがすでに思い出の人になっていることが感じられる。
- 12月11日 (火)······AC の年次晩餐会に出席。

(『倫敦だより』 会報 42号 昭和10年1月)

(Proceedings of the Alpine Club』 The Alpine Journal, Vol. 47, No. 250, May 1935)

- * この晩餐会には日本山岳会を代表して石川欣一が出席。ウェストンは石川やゴースデン (A. G. S. Gausden) と同じテーブルに着いた。ゴースデンはドーントらと神戸マウンテンゴートクラブ (Kobe Mountain Goat Club) で活躍したメンバーの1人である。
- この年……ダービー協会(The Old Derbeian Society)の会長に選出される。

(Clare College 資料)

- * ダービー協会についての詳しいことは不明だが、出身校である ダービースクールの同窓会のようなものらしい。日本で言えば、さ しづめ同窓会会長というところだろうか。
- この年……「世界の国の人々」の日本の章に28葉の写真を提供。

(FJapan. Life in Cherry-Blossom Land』 Peoples of All Nations, By Sir J. A. Hammerton, Vol. 2, 1934)

- * この書物はどちらかといえば写真で各国を紹介しようとしている。73 枚の写真のうち、ウェストンは同書に自分が撮影したものも含めて28 枚を提供している。なかでも、愛犬を連れて釣に行く上条嘉門次を、河童橋上で撮った写真は日本で未紹介の珍しいものである。本文の筆者は明記されていないが、内容の端々にウェストンを思わせる記述が見られる。4番目の著者「日本」のダイジェスト版ではないかと推定している。提供写真の解説は無論本人であろう。
- この年……ロンズデイル叢書の「登山」(Mountaineering) に『日本』 (Japan) と『朝鮮』(Korea) の項を執筆。

(Mountaineering, The Lansdale Library, Vol. 18, 1934)

* この本はスペンサー (S. Spencer) を編集者としてウェストンの他に、ロングスタッフ (T. G. Longstaff) やヤング (G. W. Young) ら22人が登山に関するさまざまな事柄を解説し、アルプスを始めヒマラヤ、ニュージーランド、アメリカ、アフリカなどの登山を紹介している。ウェストンは日本の南北アルプスの主な山々の登路を案内して詳しい。が、朝鮮やその項に含めた台湾の山についてはウォルトン (Rev. W. H. M. Walton) の著書などを利用し、それらを参考文献として挙げている。

昭和10年(1935)

1月……『ウェストンと歩んだ頃』が「山岳」に掲載される。

(山岳 第29年第3号 昭和10年1月)

- * 前年の11月8日に日本山岳会小集会で行なわれた浦口文治の 講演要旨である。
- 2月16日 (土)……「タイムズ」紙に『ジャイルズ博士』(Dr. H. A. Giles)を投書。

(The Times, Feb. 16, 1935)

* この年,他にも下記の3編を「タイムズ」に投書している。

FA Jubilee Service May 22, Wed., 1935

Votive Ships, Aug. 16, Fri., 1935

"Guiding the Trippers Sept. 7, Sat., 1935

3月 26日 (火)……オーウェン・ラター (Owen Rutter) に書信を送る。

(『ウェストンの書簡 (六)』 水野勉 山書月報 No. 280 昭和 61 年 5 月号)

- * 日本のスライドを借りたいという依頼に対する返書である。ウェストンは今回はお貸しするが、以後はもう貸せないかも知れないと伝えており、その理由として関東大震災でスライドのネガが失われ、再び作り直せないことを挙げている。ウェストンがスライドを購入していたのは横浜の江南写真店であった。また、スライドの使用目的はショーか、あるいは無料の慈善的なものかと質問し、ビジネスならば破損などのために10%の料金を貰うことにしていると記している。
- * ラターは RGS の会員で、日本ばかりでなくアジア全体に詳しく、RGS 会誌にアジア関係の書評をよく書いている。ウェストン

- の「知られざる日本を往く」や「日本」に好意的な書評を書いた O. R. はラターではないかと思われる。
- 3月30日(土)……オーウェン・ラターに書信を送る。 (『ウェストンの書簡 (六)』 水野勉 山書月報 No. 280 昭和 61 年 5月号)
 - * スライドの返却と同時に、ラターの著書を贈られたことに対す る礼状である。前便が割合冷ややかな手紙だったのに比べて、親し みの籠った内容となっている。

昭和11年(1936)

2月5日 (水)……「タイムズ」紙に『オーウェン・シーマン卿』(Sir Owen Seaman) を投書。

(The Times, Feb. 5, Wed., 1936)

* この年、他にも下記の4編を「タイムズ」に投書している。

"A Fighting Family Feb. 7, Fri., 1936. Cuvier and Silhouettes March 21, Sat., 1936.

"Profitable Food Aug. 8, Sat., 1936.

Crystal Palace Sites Dec. 4, Fri., 1936.

5月……AC 会誌にエドワーズ (W. G. Edwards) の追悼文を寄せる。 (Fin Memoriam, The Alpine Journal, Vol. 48, No. 252, May 1936)

昭和12年(1937)

3月9日 (火)……日本山岳会がウェストンへの叙勲申請の趣意書を政 府に提出。

(「朝日新聞」昭和12年3月10日)

3月11日 (木)……日本山岳会理事会でウェストン顕彰の具体案を協 議。

(『会務報告』 山岳 第32年第1号 昭和12年11月30日)

- * 日本の近代登山の発展に尽くした先駆的業績を永久に記念し、 40年にわたる登山界への親身な寄与に酬いるとともに、喜寿に祝 意を表するためにウェストンの肖像を青銅に刻み日本アルプスの適 当な地に設置することが決められた。
- * 理事会は4月、5月にも『ウェストン氏記念事業ノ件』を論議 し、6月には『寿像原型完成ノ件』として報告されている。
- 4月……「会報」にウェストンレリーフ製作の趣旨など掲載。

(『ウェストン氏への便り』松方三郎 会報 65 昭和12年4月)

- * この一文はウェストンの我国登山界に寄与した業績を讃え、レリーフ製作の趣旨や経緯を記したものであるが、ウェストンはここ数年健康が勝れず、フランセス夫人も重病の床にあると夫妻の近況にも触れている。
- 同月……朝日新聞の荒垣秀雄記者がロンドンでウェストンを取材。

(信濃毎日新聞 昭和61年5月30日)

- * 荒垣記者は、"最初の握手の感触を今でもはっきり覚えている。とても牧師なんかの優しい手じゃない。いかにも槍や穂高に取りついたという力強さが伝わってきた。生粋の山男というのが実感だった"と書いている。
- 4月30日(金)……ジョージ6世の戴冠式参列のため英国滞在中の秩父 宮に招かれる。

(東京朝日新聞 昭和12年5月2日)

- * 前田伯爵もまじえて思い出話に花が咲いたという。
- 5月4日 (火)……AC 総会に出席した秩父宮をエスコート。

("Proceedings of the Alpine Cluba The Alpine Journal, Vol. 49, No. 255, Nov., 1937)

(朝日新聞 昭和12年5月5日)

5月17日(月)……フランセス夫人死去。

(Who was Who, 1929-1940)

- * 夫人死去の直前にウェストンが小島,高野,高頭の3人宛てに送った書簡で病状の一部が小島によって明らかにされている。"奥さんの御病気が非常に悪く,苦痛が名状す可からざるようで,医師が一時苦痛どめの注射をしてもその瞬間だけの利き目しかないことが,細々としたためられたお手紙を読んだだけでも,何とか方法がないものだらうかと,私たちは焦慮してゐます。"(『ウェストン翁に与ふるの書』小島烏水 山と渓谷 昭和12年11月号)小島がこの書簡を受け取った時,すでに夫人は世を去っていたという。
- * 夫人の病気は子宮癌で、解剖所見によると他の器官への転移・ 浸潤を伴っていた。前記の書簡の病状と末期癌の症状がぴったり一 致している。死去の場所は 44 Grange Road, Bermondsey S. E. 1. で、姉のシレーナ・フォックス (Selina F. Fox) の居宅と推察され、死亡届けもシレーナによって出されている。ウェストン自身が 自宅で看護出来るような健康状態ではなく、シレーナに看護を委ね たのではないだろうか。

(The General Register Office 保管 フランセス・ウェストン死亡証明書)

5月21日(金)……フランセス夫人火葬に。

22日 (土)……パトニーベール墓地に埋葬。

(パトニーベール墓地 記録)

- * フランセス夫人はパトニーベール墓地 (Putney Vale Cemetery) BS ブロック 56号に埋葬された。ここには 1900年に死去した母シレー (Selina Fox) が眠っていた。父のフランシス・フォックス (Sir Francis Fox) は 1927年に死去したが、再婚した関係でか同じ墓地の別のブロックに葬られている。ウェストンも 3年後にはフランセスの隣りに埋葬されたが、なぜ夫妻がフォックス家の墓地に…? という疑問は、このあたりに解答がありそうだ。
- 5月……AC 会誌にスマイス (F. S. Smythe) 著『チロルの山々を越えて』(Over Tyrolese Hills) の書評を寄せる。

(Reviews, The Alpine Journal, Vol. 49, No. 254, May 1937)

6月10日 (木)……日本山岳会事務所でウェストンレリーフの内見会が 開かれる。

(東京朝日新聞 昭和12年6月11日)

- * 佐藤久一朗製作のレリーフの石膏原型が完成し、山岳会関係者 や新聞記者に公開されたものらしい。これは6月中にブロンズに鋳造されるとしている。
- 6月23日 (水)……ウェストンに対する叙勲 (勲四等瑞宝章) が発令される。

(東京朝日新聞 昭和12年6月24日)

* 叙勲の理由を要約すれば『日本の山岳地帯の自然美とその雄大 さ、住民の様子を世界に紹介する一方、我国民への登山知識の啓蒙 と自然に対する関心や愛着を喚起したこと。また、帰英後は講演や 著作を通じて日本及び日本人への理解を深めるために努力するな ど、登山界開拓の恩人として国民体育運動の発展に寄与したのみな らず日英両国の親善に尽くした功績は顕著である』ということであ った。

(ウォルター・ウェストン氏の叙勲事由 総理府賞勲局)

7月16日(金)……ロンドンの日本大使館で勲四等瑞宝章が授与される。

(『ウェストン翁に与ふる書』小島烏水 山と渓谷 昭和 12 年 11 月 号)

* 伝達式は吉田大使によって行なわれ、ウェストンは非常な感激 をもってこれを拝受したと伝えられる。なお、吉田大使は戦後のワ ンマン宰相として知られた吉田茂その人である。

7月26日(月)……日本経済使節団主催のお別れ晩餐会に出席。

(大島輝夫氏所蔵 ウェストン書簡)

7月27日 (火)……日本山岳会員大島堅造に地図の礼状を送る。

(大島輝夫氏所蔵 ウェストン書簡)

- * 大島がどこかの地図を送ったのに対する礼状である。この夏どの山に登りたいと思っていますかと尋ね、夏の上高地へはどれだけの人が入るのでしょうか。大変な数にのぼるに違いないですね、と往時を懐かしんでいる。
- 8月14日 (土)……「タイムズ」紙に『日本での登山』を投書。

("Mountaineering in Japana The Times, Aug. 14, Sat., 1937)

- * 少し前に「The Olympic Games」という書物がスポーツ書として初めて日本語に訳されたとの記事が出たらしい。これに対してウェストンは自著の『日本アルプスの登山と探検』はすでに日本語訳が出ていると指摘し、それが間接的に日本山岳会の設立をもたらしたと幾分誇らしげに述べている。
- 8月26日(木)……上高地梓川畔にレリーフ完成。

(『ウェストン師の寿像建設について』山岳 第32年第1号 昭和12年11月)

- * レリーフは建設委員の槇有恒と製作者の佐藤久一朗立会いのもと、松本の石工金子栄蔵父子が取付け作業を行ってその日のうちに完成した。山岳会としてのセレモニーは行なわれなかったが、何もしない方がウェストンに相応しいと考えられたからと報告に記されている。
- 9月……RGS 会誌がフランセス夫人の追悼文を掲載。

(『Obituary: Mrs. Frances Emily Weston』 The Geographical Journal, Vol. 90. No. 3. Sept., 1937.)

* 要約すると"フランセス夫人は父親から自然に対する愛情を受け継ぎ、娘時代から登山家としての素質を現わしていた。ウェストン師と結婚後は日本で富士山などの山々の探検登山を行い、日本山岳会の初期会員の1人であった。一方、聖書協会の仕事では、その優しい思いやりと好意が全ての日本人から慕われ、英国でも日本人船員のための働きに力を尽くした。また、彼女は日本の美術と装飾に深い興味を抱いていた。"と述べられている。

同月……日本山岳会員伴野清がウェストンを訪問。

(平成2年1月の三井嘉雄によるインタビュー)

- * 伴野氏は当時大蔵省勤務でロンドンの財務官事務所に赴任されていた。手紙で都合を確かめた上、日時を決めて自宅を訪問した。ご記憶ではケンジントンのフラットではなく、ハムステッドのデタッチドハウス(Detached House=2戸1棟の2階建て独立家屋で、中流階級の典型的住居)だった。こぢんまりした家で、8畳か10畳の居間か書斎らしく事務机があり、逆光でウェストンの顔ははっきり見えなかった。あなたはこの頃山に登っているかとか、日本の山のことを質問された。あんまり出かけられない様子で、今考えるとご機嫌もよくなかったように思うとのことである。
- * ハムステッドのデタッチドハウスというのは初耳で、自宅では ないように思う。日本人船員伝道会が借りていた家屋とも考えたが 確証はない。
- 10月18日(月)……RGS 年次総会の会長挨拶でフランセス夫人への追悼の言葉が述べられた。

(The Geographical Journal, Vol. 90, No. 3, Sept., 1937)

昭和13年(1938)

3月……日本山岳会員藤島敏男,田口二郎がアイベルナ・コートのフラットにウェストンを訪問。

(『山をめぐって』藤島敏男 山に忘れたパイプ 昭和45年5月)

- * "ウェストンさんは既に夫人を失われ、孤独な生活を過ごしていられたのだが、遠い国からの訪問を喜ばれたのであろう。心の籠ったお茶のもてなしを受けたのである。英語よりもフランス語の方が…という私のために、ウェストンさんは日頃めったに使うこともあるまい仏語で、それでもボツリボツリと話が続いた。"と藤島は書いている。
- 3月24日(木)……ロンドン日本協会の例会で議長を務める。

(倫敦日本協会雑誌 第35巻 1938)

- * この例会ではバーナード・リーチ (B. Leach) が『現代の日本の陶工』(Japanese Craftmen of To-day) と題して講演している。
- 5月5日 (木)……日本山岳会木暮理太郎会長宛に礼状を送る。

(会報 No. 78 昭和13年7月)

* 暫く前に上高地のレリーフの写真を受け取ったことを伝え、レリーフの建設は古い友の友情の証として何よりも嬉しいものだったと感謝の気持を綴っている。写真を受け取ってから返事が遅れたのは、ここ 1-2 ヵ月(few months)そうしようと思っても出来ない

事情があったと詫びており、体調がおもわしくなかった様子が窺える。

9月28日 (水)……『The Elizabeth Jonas』を「タイムズ」紙に投書。 (The Times, Sept. 28, Wed., 1938)

昭和14年(1939)

夏……スイスを訪れる。

(FIn Memoriam: Walter Weston 1861-1940』 By T. A Rumbold. The Alpine Journal, Vol. 52, No. 261, 1940)

* 追悼文に "スイスへの最後の旅は去年の夏だった。大戦の勃発 は彼に帰国を決意させただけでなく、本当の病人にしてしまった" と述べられている。大戦の勃発とは、この年9月のドイツ軍による ポーランド侵攻である。

10月……大手術を受ける。

(会報 No. 99 昭和15年11月)

* 日本山岳会から AC への弔電に謝意を表したオートン (F. Aughton) の手紙によるもので、病気が何であったのか一切不明である。すでに日英関係も良くなかったのだろうか。この年にウェストンを訪ねた日本の岳人を聞かず、何の情報もない。

昭和15年(1940)

1月18日 (木)……遺言状を登録。

(ウェストン 遺言状)

- * この遺言状は「遠い崖」の著者萩原延壽氏が、先頃ロンドンの サマセットハウス(Somerset house)の中にある遺言登録所で発見 されたものである。
- * 遺言を要約すると、ウェストンはまずバークレイズ銀行 (Barclays Bank)を遺言執行者に指定し、家政婦のジェシー・ライリ (Jessie Riley)に 250 ポンド、友人のトマス・アーサー・ランボルト (Thomas Arthur Rumbold)に 100 ポンドをそれぞれ遺贈している。そして姪のコンスタンス・マリー・ウェストン (Constance Mary Weston)に無条件で不動産の全てと個人財産の残額を遺贈し、もしコンスタンスがウェストンの存命中に死去したら、その母であるマリー・エリザベス・ウェストン (Mary Elizabeth Weston)に全てを遺贈すると記している。
- * コンスタンスは明治 25 年 (1892) 5 月に箱根宮ノ下の富士屋

ホテルでウェストンと同宿した少女と同一人物であろう。この遺言でコンスタンスが姪であることは分かったが、兄弟のうち誰の娘かは判然としない。彼女は明治 25 年にはジョン・ウェストン夫人 (Mrs. John Weston) と共に来日している。とすれば、長兄のジョンの娘と推定するのが妥当と思われる。しかし、ここにネックがひとつある。それは明治 39 年 (1906) 6 月 7 日付けチェンバレン宛の書簡であり、この中に "先週の金曜日に長兄 (eldest brother)が死去したとの電報を受け取りました。兄は生涯独身で母と一緒に暮したのです"と記されていることである。長兄ジョンが生涯独身ならコンスタンスは娘ではあり得ない。コンスタンスが誰の娘かを確定するのは今後の調査に委ねたい。

- * なお,この遺言状に副署しているのはアイベルナ・コート 45 に住む門番のマーサー夫妻 (F. & M. Mercer) である。
- 3月……AC評議員オートン(F. Aughton)とお茶を共にする。

(会報 No. 99 昭和 15年 11月)

- * オートンによると午後のお茶を共にしたのは死去の数日前のことで、ウェストンは"近ごろはずっと気分もよく、元気も恢復した"と語っていたという。
- 3月27日(木)……ウェストン死去。満78歳。
 - * 脳出血による急逝だった。オートンも死去の報を受け取った時に非常な驚きを感じたと述べている。もうひとつの病名として動脈硬化が記載されているが、前年10月の大手術との関連はわからない。ケンジントンの自宅で死去しており、家政婦のライリ(Jessie L. Riley)に看取られての死であったろう。死亡届けもライリによって出されている。

(The General Register Office 保管 W・ウェストン死亡証明書) 3月29日 (土)……南ケンジントンの聖ユダ教会の中庭 (St. Jude's Courtfield Gardens) で葬儀が行なわれ,午後火葬に付される。

(The Times, April 1, Mon., 1940)

* 葬儀の参列者の総数は不明だが、記事には22人の男女の名前がある。中にベルチャー(H. W. Belcher)の名前もあった。ウェストンが明治24年(1891)に初めて日本アルプスを訪れた時の同行者であり、当時は山陽鉄道(現JR山陽線)の顧問技師であった。その他には、ACを代表してオートン、日本協会からは副会長のクロウ卿(Sir Edward Crowe)、英国海員伝道会のショウクロス師(Rev. W. H. Showcross)らが参列している。また、故フランセ

ス夫人の親族らしいダグラス・フォックス (Douglass Fox) の名前 はあるが、ウェストンの親族と思われるような人物の名前は見当たらない。

3月30日(日)……日本の新聞に死亡記事が掲載される。

(東京朝日新聞 昭和15年3月30日)

4月1日 (火)……遺骨がパトニーベール墓地に埋葬される。

(The Times, April 1, Mon., 1940)

- * フランセス夫人とその母シレーナが眠るバトニーベール墓地の BS ブロック 56 号に埋葬された。
- 4月23日 (火)……日本山岳会定例理事会で AC 宛てにウェストンの弔 電を打電したことが報告される。

(『会務報告』 山岳 第35年第2号 昭和16年3月13日) (『名誉会員ウェストン氏の計』 会報 94 昭和15年5・6月)

- * 理事会には槇、藤島、茨木ら9人が出席し、社団法人の件などの審議項目の1つとして『ウェストン氏逝去につき弔電 打電済(A・C 宛)。神河内のブロンズにつき此際何か考慮の事となる。』と簡単に記されている。しかしここで何が話合われたかなど具体的な内容やその後の動きなどは「山岳」には一切現われず、追悼の言葉も見当たらない。
- 5月……AC 会誌に追悼文が掲載される。

("In Memoriam, The Alpine Journal, Vol. 52, 1940)

* 遺言状に100 ポンドを遺贈すると記されたランボルト (T. A. Rumbold) とプロック (H. S. Bullock) の両人が追悼文を寄稿している。ランボルトは若い頃にウェストンによって登山の手ほどきを受け、ともに最初のガイドレス遠征を行なったと述べている。しかし、それがどの登山であったかはわからない。ブロックは、ウェストンが終生誇りとした明治30年のアイガー・ヨッホ越えに同行し、以後もウェストンのパートナーとして本年譜にも度々登場する友人である。ここではランボルトの追悼文からその一部を紹介しておきたい。"たまにウェストンに会っても、彼が生涯を片目だけで過ごしたと気づく人はいない。距離の判別にも万全を欠いていた彼が、いかにして山に登り、いかに本を読み耽って勉強し、ちょっぴりハーディの文章を思わせる美しい流麗な筆致で文章を綴れたかを説明するのは難しい。確かに彼の不完全な視力は、その償いとしてさまざまな美質を発達させた。精神的にも同じような反応が続くようだ。彼の指がしっかりと岩を確保することは、精神と目的を確保

することに相当した。(中略)彼は友人たちのどのような才能のひらめきも認め、それを十分に育てようとしていた。彼の一番の弱点は、かつて2分以上パイプをくゆらせることが出来なかったことである。"

6月……RGS 会誌に追悼文が掲載される。

(Obituary The Geographical Journal, Vol. 95, No. 6, June 1940)

* AC 会誌に掲載された追悼文をほぼ踏襲したもので、最後にそうした断りを入れている。筆者の H. E. 氏は不明である。



W・ウェストン年譜 正誤表

その1 (文久元年〈1861〉~明治29年〈1896〉) 山岳 第82号 1987年所載

頁	行 (上から)		[正]
A 38	2 行目	昭和 62 年	昭和 63 年
A 45	9 行目	(S. S. Rombardy)	(S. S. Lombardy)
A 50	27 行目	祖母山 <u>[外国人初登頂]</u> 一五 ヶ所一	祖母山一五ヶ所一
*	[外国人初登頂]	,] をカット。理由はウェストン	自身が英国山岳会への入会申請
書	こ『第2登』と	しているため。初登の記録は未	発見である。
A 54	23 行目	10日(月)…黒沢口から御	10日(月) …黒沢口から御
		岳登山一王滝一橋渡 [茶屋]	岳登山 [宿不明]
"	24 行目	11 日 (火) …橋渡一上松	11 日 (火) …? 一王滝一橋
		[宿不明]	渡一上松 [宿不明]
*	明治 27 年のウェ	ストン日記によると、橋渡の初	· 茶屋は数分立ち寄っただけとあ
37	ため。		
A 54	27~29 行目	に登頂し、その日のうちに上	に登頂した。行程や宿泊場所
		松まで下ろうとしたようだ。	は判然としない。翌日は橋渡
		全行程徒歩とすれば, 一見不	の茶店で休み, 上松まで出
		可能なほどで、その健脚に驚	た。
		くほかない。さすがに上松ま	
		では出られず, 橋渡の茶屋で	
		一夜を過ごした。	
A 62	23 行目	Vol. 16, No. <u>119</u> , 1892)	Vol. 16, No. <u>118</u> , 1892)
A 70	26 行目	7月17日(火) <u>…?</u> 東	7月17日(火)…名古屋—
		京・	〈汽車〉—東京·
A71	9 行目	ウィリアム・コンウェイ	左記をカット。
		(Sir William Conway) の	1. SSCORES SERVICES
		「アルプス・端から端まで」	
		のひそみに倣って,	
* :	コンウェイのア	ルプス縦断旅行もこの年(明治	27年)である。従って『その
			The second secon

* コンウェイのアルプス縦断旅行もこの年(明治27年)である。従って『その ひそみに倣って』とは考えられない。

A72 2 行目 | 薬屋兼宿屋 [と<u>ふ</u>しや] で | 薬屋兼宿屋 [と<u>う</u>しや] で

A 73	28 行目	16日(木)…〈休息〉	16日(木)福島-権兵衛
		3300 97 38,81 58,000 93,000	峠-坂下 [藍屋]
"	29 行目	17日(金)…福島一権兵衛	左記をカット。
		峠	100
"	最終行	頂上から王滝に下って常盤橋	頂上から王滝に下っている。
		の畔にある橋渡の茶屋に泊ま	かなり急ぎの登山で,
		っている。健脚に驚くほかな	
		いが,	
A 74	11 行目	翌1日ゆっくりと休息をとっ	左記をカット。
		<u>た。</u>	
*	明治 27 年のウェ	ストン日記によると、16日に	は福島から宮ノ越まで馬車で行
ŧ,	人力車で神谷山	峠まで出て権兵衛峠を越え、坂	下の藍屋で泊まっている。
A 75	9 行目	Vol. 17, No. <u>128</u> , 1895)	Vol. 17, No. <u>129</u> , 1895)
"	23 行目	No. <u>128</u> , 1895)	No. <u>129</u> , 1895)
その	2 (明治30年	三〈1897〉~明治 43 年〈1910〉)	山岳 第83号 1988年所載
A 51	2 行目	大正年代に廃業して	昭和の初めころに廃業して
A 53	22 行目	(明治 36 年 2 月号)	(第10巻 第3号 明治37
			年2月1日)
A 55	20 行目	12月5日に横浜文芸協会で	12月5日の横浜文芸協会で
A 57	31 行目	〈汽車〉一勝沼	〈汽車〉一初鹿野一〈馬車〉
			一勝沼
A 59	31 行目	* この年6月に	─勝沼* 前年12月に
	31 行目 35 行目	* この年6月に(愛知教育大学チェンバレン	Section (Section 2) Street (Physics Part
			* 前年12月に
A 73		(愛知教育大学チェンバレン	* 前年12月に
A 73	35 行目	(愛知教育大学チェンバレン 文庫所蔵	* 前年 12 月に (<u>杉浦家旧蔵</u>
A 73	35 行目	(愛知教育大学チェンバレン 文庫所蔵 (愛知教育大学チェンバレン	* 前年 12 月に (<u>杉浦家旧蔵</u>
A 73	35 行目	(愛知教育大学チェンバレン 文庫所蔵 (愛知教育大学チェンバレン 文庫所蔵	* 前年 12 月に (杉浦家旧蔵 (杉浦家旧蔵

5月……杉浦藤四郎がユーエ 左記を明治 41 年 (1908) に

移動。

ルのウェストン宅に止宿。

1986年11月10日)

A78 16 行目

A79 11行目

* しかし、杉浦がウェスト 左記をカット。 A78 29 行目 ン宅に止宿したのは数ヵ月で あった。この止宿が当初から 暫定的なものか, あるいは別 の理由があったのかは不明だ が, 少なくとも10月頃まで に彼は南ユーエルのマーティ ン (Martin) 宅に移ってい る。マーティンはウェストン の知人で、杉浦がそこへ止宿 したのもウェストンの世話に よるものらしい。 A79 23 行目 (愛知教育大学チェンバレン (杉浦家旧蔵 文庫所蔵 (愛知教育大学チェンバレン (杉浦家旧蔵 28 行目 文庫所蔵

* チェンバレンと杉浦藤四郎宛てウェストン書簡8通のコピーは、杉浦家の示唆によって筆者が入手したものであるが、その現物はチェンバレン書簡とともに杉浦家から愛知教育大学に寄贈されているものとみられていた。その後、ウェストン書簡だけが杉浦家に残されていたことが判明し、現在は第三者に譲渡されているため(杉浦家旧蔵 ウェストン書簡)と訂正する。

『ヒマラヤ山岳誌』ノート(そのⅢ)

1981~1987

馬場勝嘉

本稿は第83年・1988, 第84年・1989 掲載のもに続くもので、内容及び参考文献やその略号など全く同じである。前号同様記載漏れや間違いがあるやも知れず、会員諸兄姉の御叱正、御教示を賜りたく思っています。

KHUNYANG CHHISH 7852 m

Karakorum. Hispar Muztagh, Yazghil group 36°12′N, 75°13′E

- ① 1982 年春 Japanese 華奈婆同衆隊 中村 五十夫 Isoo Nakamura 他 8 Kunyang gl.~ Upper Yazghil gl. 日数不足のため主峰はあきら め北峰 (7108 m) を目指し 6月 17日 6200 m ま でルート工作を終えたが同日隊長が病気になり 断念 ●岩と雪, 95, 66 (緒方準) / AAJ, 1983, 276
- ② 1982 年 French Pierre Pujot 北稜試登 ● AAJ, 1983, 276
- ③ 1987 年春 Japanese サンナビキ同人隊 岡本正人 Masato Okamoto 他5 北西壁,7月 7日 6400 m まで登る。7月 19日 C 2=6000 m 上部で大沼拓実 Takumi Ohnuma 隊員が落ちて 来た氷塊に飛ばされて転落死亡,このため断念 ●山岳年鑑, '88, 104 及び 221 / AAJ, 1988, 256/報告書, 1990

KULA KANGRI (KUNLA KANGRI) 7554

m

Bhutan Himalaya 28°12'N, 90°32'E

- ① 1985 年春 Japanese 神戸大学隊 緒方俊治 Shunji Ogata 他 2 先遣偵察隊, 4月19日 北東側の氷河を源まで偵察, 23日 Kula Kangri La (5700 m) を往復する。ついで東面,南面を偵察, 4月28日 Pt. 4700 m に登る ●長谷川浩: 天帝の峰クーラ・カンリを目指して,岳人, 464, 62-65, 1986-2/山岳年鑑, '86, 24 (緒方俊治)
- ② 1986 年春 Japanese 神戸大学隊 平井一 正 Kazumasa Hirai 他 25 西稜より初登頂。 前年偵察隊のルートより西稜を登り 4 月 21 日 第一 次隊居谷 千春 C. Itani, 大谷 映 芳 E. Ohtani, 坂本淳 J. Sakamoto, 尾崎久純 H. Oza-

ki が、翌22日第二次隊の森長敬 T. Morinaga, 長谷川浩 H. Hasegawa が登頂す る。学術隊はクーラ・カンリ周辺及び東チベッ トから四川省にかけて学術調査を行う ●平井 一正/クーラ・カンリ初登頂と横断山脈学術調 査。山岳、82年、32-42、1987/- ルー: クー ラ・カンリ初登頂。岳人、472、73-76、1986・ 10/-/一:ほほえんでくれた天帝の峰。岳 人, 472, 84-87, 1986・10/-/-: 微笑んだ 「天帝の峰」クーラ・カンリ。山と渓谷、610、 26-28, 1986 · 8 / Hirai, Prof. Kazumasa: The Ascent of Kula Kangri from Tibet, HJ, 43, 1-6, 1985・86/楊逸畤:東チベット三〇〇〇 キロ踏査。人民中国、1987年2月号/神戸大 学西蔵学術登山隊編:「天帝の峰に挑む」。神 戸新聞総合出版センター、1988/朝日教之。 「東チベット横断紀行」。山と渓谷社、1988/岩 と雪、118、82 (緒方俊治) /山岳年鑑、'87、 42 (- * -) / AAJ, 1987, 295-97 (K. Hirai) /神戸大学山岳会·山岳部(部報) 山 と人、第14号、1988/

KUN 7086 m

Jammu & Kashimir, Ladakh 34°01'48"N, 76°04'22"E

- ① 1981 年春 Japanese 大阪・青と白同人隊 三吉幹男 Mikio Miyoshi 他 8 5月 19 日隊員 4 人で 6100 m に C 2 を設けたが、翌日 1 人が 急病になり、他の 3 人も高山病になったため 25 日へリで Kargil に運ばれる。このため断念 ●岩と雪、88、66
- ② 1981 年夏 Japanese 岡山クライマーズ・ クラブ隊 近藤国彦 Kunihiko Kondo 他2 6 月12日 Parktik gl. にBC, 19日 5700 m 地点に ABC, 23日 近藤隊長 K. Kondo と名越実 Minoru Nagoshi 隊員が Pinnacle Peak からの尾

根の最低コルーKun 内院の氷河一北西稜のコルを越して西壁取り付き点 5850 m に到る。坂田興一 Koichi Sakata 隊員は西稜下部を南面に廻り込んで東稜に取り付く。西壁パーティはcapsule style で 12 ビバークの後 7 月 5 日西壁を初登攀して 17:35 に登頂(第 23 登)西壁のビバーク地に戻る。6 日再び頂上に登り(24登)東稜を下る。そして東稜を断念(7 月 4日頂上直下 100 m まで登る),東稜のコルで待機中の坂田隊員と合流,7 日 ABC に下る ● 名越実: クン西壁登攀。山岳,77 年,39-47,1982 / 近藤国彦:クン西壁。岩と雪,85,78-84,1981 / 岳人編集部:クン西壁までの道のり。岳人,414,32-36,1981・12 / 岩と雪,88,67(近藤国彦) / AAJ,1982,265 /

- ③ 1981年 Spanish 連絡官の死で断念
- ④ 1981 年夏 W. German, Hauser Excursions隊 Martin Lutterjohann. Shafat gl. より8月6日6人登頂(第25登) AAJ, 1982, 265-66 (Wolfgang Augenstein)
- ⑤ 1981 年夏 Japanese 杉並勤労者山岳連盟隊 栗山博 Hiroshi Kuriyama 他 9 東稜通常ルート, Shafat gl. 3910 m に BC, しかし女性隊員 2 人が高山病にかかり 8 月 8 日金沢直子Naoko Kanazawa 隊員が死亡する ●岩と雪、88、67 / Moun、83、11 / HCNL、36、4 / 報告書
- ⑥ 1981 年夏 Japanese 第二次 RCC 隊 松 本正城 Masaki Matsumoto 他 2 8月16日 Shafat gl. 左岸 4500 m に BC, 東稜アルパイ ン・スタイル。18 日 5500 m まで往復, 20 日 5200 m にデポして下る。21 日5200 m, 23 日 6000 m まで往復して 24 日 6000 m にキャン プ, 25 日スノー・プラトー 6300 m でビバー ク,26 日東稜のコルをこして6800 m でピバー ク、27 日まず 2 人が登頂 6300 m のビバーク地 に23:20 に着く。すこし遅れて登頂した松本 隊長は6800 m でビバーク、翌日コルからの下 降でホワイト・アウトとなりクレバスでビバー ク, さらに3ビバークの後9月1日BCへ(第 26 登) ●松本正城:クン峰下降5日間の苦 闘。岳人、414、120-22及びカラーグラフ、 1981・12/岩と雪, 88, 67(松本正城)/ AAI, 1982, 265/Moun, 83, 11
- ⑦ 1982 年 夏 Garman Alpine Association, Hamburg 支部 Gunter Schulz と Rainer Hollerer が Shafat gl. よりアルバイン・スタイルで北 東稜を登り7月16日登頂(第27登) ●岩と

- 雪, 97, 11/IM, 11, 109/HCNL, 36, 25 ⑧ 1982 年夏 Indian 7月19日 Mandip
- Singh Soin が単独登頂 (第 28 登) Soin, Mandip Singh: Kun Solo, HJ, 40, 196-98, 1982・1983
- ⑨ 1982年夏 Japanese 日本ヒマラヤ協会公募隊 山森欣一 Kin'ichi Yamamori 他 16 Shafat gl. より東稜, 7月29日4500 m=BC, 初登ルートを採らずにスノー・ブラトーから派生する2ツの岩稜のうちの右の岩稜にルートを拓き8月9日6200 m=C2まで登る。この日勝山教孝 Michitaka Katsuyama 隊員が落石事故で死亡したため断念 ●山岳, 78, 118/岩と雪, 95, 56 (山森欣一) /ヒマラヤ, No. 131 / IM, 11, 109
- ⑩ 1982 年夏 W. German, Hauser Exkursionen International 隊 Bogdan Brakus 他 11 東稜, 8月17日C3=6370mを設け, 18日2人, 19日8人登頂(第29, 30登) ●岩と雪, 97, 11/HCNL, 36, 25/IM, 11, 109
- ① 1982 年夏 French, Trekking International 公募隊 Claude Jaccoux 他 17 北稜~北東稜, 8月27日C3=6300 m, 28日8人, 29日2人登頂(第31, 32登) ●岩と雪, 95, 56 (Jozef Nyka) / AAJ, 1983, 266 (C. Jaccoux) / IM, 11, 109-110
- ② 1982 年秋 French Jean Louis Prat 他 4 9月 20日 C 3=6000 mまで ●IM, 11, 110, 1983
- (3) 1983年夏 Japanese 水戸葵山岳会隊 山崎正 Tadashi Yamazaki 他3 7月7日4450 mに BCを設け、8日無名氷河をコル (5200 m)まで往復したが不可能とわかり次の氷河にルートを求め3700 m、4500 mにキャンプし7月21日 西稜へのルートを確認したが時間切れのため5000 mで断念 ●岩と雪、102、58 (山崎正)/IM、12、165
- ④ 1983 年夏 Austrian Marcus Schmuck 他 9 東稜, 8月29日C3=6200 m, 31日2人, 9月1日5人,5日3人登頂(第33~35登) ●IM, 12, 165, 1983
- 13 1984 年春 French J. Fouque 5月~6月 西面より試登
- (6 1984年 W. German Heiko Irmisch 他 2 6月~7月 東稜試登
- ① 1984年 Austrian Guenter S. Mair 7月 西面より試登
- (18) 1984 年秋 Japanese 旭川インド・ヒマラ

- ヤ隊 西野正晃 Masaaki Nishino 他 3 Shafat gl.~東稜 (79 年松本・山崎隊と 82 年 HAJ 隊 ルートのほぼ中間), 9月3日6500 m = C 3, 10 日頂上付近で雪崩が発生し6900 m 付近を登高中の西野隊長が行方不明になる。11 日難波 稔正隊員が現場付近を捜索の後頂上に立つ(第36登) ●岩と雪,109,68 (難波稔正)
- 19 1984 年 夏 W. German, Deutscher Alpenverein 隊 8 月 東面より登頂(第 37 登)◆AAJ, 1985, 305
- ② 1985 年 夏 French Dominique Morquis 他 14 Shafat gl. ~ 東稜, 7 月 27 日 隊長が 6300 m のキャンプより単独登頂 (第 38 登) ●山岳年鑑。'86, 83
- ② 1985 年夏 French Jean-Pierre Barnard 他 9 Shafat gl. より東稜, 8月11日 6250 m= C 3, 14, 15日の両日で全員登頂(第 39, 40 登) ●山岳年鑑, '86, 88
- ② 1985 年 夏 DAV, Munchen 隊 Arnold Hasenkopf 他 13 グルマトンガー西稜, 8月 23日 6400 m = C 4, 24日 6人, 25日 3人, 26 日 4 人登頂(第 41~43 登) ●山岳年鑑, '86, 88
- ② 1985 年 秋 W. German, Lufthansa 隊 Gernot Waschek 他 3 東稜, ハイ・キャンプを 3 ツ設け, 9月上旬 6250 m で断念 ●山岳 年鑑, '86, 88
- ② 1985 年秋 Austrian G. Mayr 他 東面試 登 (10月)
- ② 1986 年夏 Belgian, Club Alpin Belge 隊 Andre Lamberty 他 10 7 月頂上直下 300 m で悪天候のため断念, Pinnacle 6922 m, White Needle 6166 m も試登したが, いずれも悪天候で失敗 Moun, 112, 10 / Hima, 18-5, 74-75;18-12, 188/山岳年鑑, '87, 90
- ② 1986 年秋 Japanese 大阪工業大学隊 峯本枢 Kaname Minemoto 他4 9月19日隊長他1人登頂(第44登),下降中6850m付近で 峯本隊長滑落死亡する ●山岳年鑑,'87,90/Hima, 18-6,95
- ② 1986 年 W. German, DAV隊 Friedrich Zinti 他 15 8月~9月 東稜試登
- ② 1987年夏 Spanish Julian Javier Martinez Angel 他3 西稜, 8月12日BC=4500 m, 14 日 4750 m に C1を設けたが、C2を設けること が出来ず 5100 m で断念 ● IM, 21, 184, 1988
- 29 1987 年秋 Austrian Willy Jardin 他 5

- 東面,6000mにC2を設けたが,10月12/13 日にC1=5400mで雪崩によりW. Jardin, Heindl Wolfgang, Ruef Josef, Praxmarer Josef, Dr Rettenbachler Danielの5人が死亡●1M, 21,184/AAJ,1988,239/山岳年鑑,*88,90
- 30 1987 年 French Georges Tsao 他 登頂●AAJ, 1988, 239
- 1987 年 W. German Ekkart Gudelach 他
 登頂 ●AAJ, 1988, 239
- ② 1987年 French Philippe Albert 他 登頂 ●AAJ, 1988, 239

LABUCHE KANG (CHOKSIAM) 7367 m

Tibet, Shisha Pangma と Cho Oyu の間 Pamari Himal approx. 28°20′N,86°20′E

- ① 1986 年秋 Japanese 日本ヒマラヤ協会隊 Chinese 西蔵登山協会隊 (合同隊) 成天亮他3 (内日本2) 87 年本隊の偵察隊 9月9日 Longoro 朗果に着き、4500mに BC, 17日 Tsolongma 錯朗瑪 (氷河期) 左岸に ABC = 5300m, 18日 P 6140 (20145 feet) に登り偵察,ついで5650mに C1をおき、主峰と7072m峰の西稜上のコルを目指し6200mまで登り可能なルートを見出す ●山岳年鑑,87,46-47/ヒマラヤ,No.181/AAJ,1988,278 (Sadao Tambe)
- (2) 1987 年秋 9 Japanese 日本ヒマラヤ協会隊 (山森欣一) -9 Tibetan Mountaineering Federation (Chen Tianliang 成天亮) 合同隊 9月16 日北東麓の朗果村に BC=4500 m, 20 日 ABC= 5300 m, 10 月 6 日西稜下の氷河上 6150 m に C 2, 14 日西稜に出る。25 日 C 3 = 6900 m を設 け、翌26日出口常登 Ataru Deguchi, 古川英 勝 Hidekatsu Furukawa, 須藤圭一 Keiichi Sudo, 田辺治 Osamu Tanabe と中国側 4 人 (Wangjia, Gyala, Daqing, Laji = 17 歳の女性) が初登頂し、27日7人(日3,中4)が登頂す る ●山森欣一:一五人のサミッター。山と渓 谷, 630, 185-89, 1988·1/HAJ·西藏登山協 会合同登山隊:ラプチェ・カン。岳人、488、 90-94, 1988 · 2/Yamamori, Kin'ichi: The Unknown Peak in Tibeto HJ, 45, 149-51, 1987 · 1988 / AAJ, 1988, 279 (Ataru Deuchi) / Moun, 120, 10/HCNL, 41, 63 (J. Nyka) /岩と雪, 126, 92/山岳年鑑, '88, 50 (山森欣一) /報告書, 1988

LANGTANG LIRUN (GANCHEN LEDRUB) 7234 m

Nepal Langtang Himal 28°15′22″N, 85°31′10″E ① 1981 年春 Japanese 群馬県勤労者山岳連盟隊 吉田俊之 Toshiyuki Yoshida 他 8 Langtang gl.~南東稜, 3月25日 BC=4300 m, 4月25日 C4=6600 m, 26日2人(含むサーダー), 28日3人登頂(第3,4登) ●岩と雪,88,45(館林孝一)/山と仲間,81年9月号/Moun,80,12/AAJ,1982,221-22 (Toshiyuki Yoshida)

- ② 1982 年秋 French Denis Chatrefou 他 17 Langtang gl. より東稜, 10月7日 C 1=5000 m まで ●岩と雪, 95, 41/AAJ, 1983, 235/ IM, 11, 148
- ③ 1982 年秋 Italian Bruno Taskan 他 6 南東稜 81 年日本隊ルート、ハイ・キャンプを 4 ツ設け、10 月 17 日隊員 1 人とサーダーが登 頂 (第5登)、10 月 18 日 Bruno Crepaz が C 3 より下降中雪崩で死亡 ●岩と雪、95、41/ AAJ、1983、235 (Silvia M. Buscaini) / IM、 11、148/Moun、89、12
- ④ 1983 年春 American Robert M. Harwood 他 3 4900 m に ABC をおきアルパイン・スタ イルで南稜を試登, 4 月下旬多雪と雪崩の危険 性高く断念 ● AAJ, 1984, 245 (Robert M. Harwood)
- ⑤ 1984 年春 Canadian Shaun Parent 他 7 南面 80 年イギリス隊ルート, 3月 12 日 BC= 4000 m, 31 日第一次アタック隊が 6400 m に達 しC3を設ける。4月 14 日第二次隊 5550 m ま で。15 日断念 ●岩と雪, 109, 49 / AAJ, 1985、277-78
- ⑥ 1984 年秋 American Daniel Newell 他 3 北東バットレス 5030 m まで (?) ●岩と 雪, 109, 49
- ⑦ 1985 年 秋 American-British Daniel Newell 他3 北面から北東稜。北東稜につづくバットレスに取り付き 10 月 16 日 5000 m まで達する。18 日 BC=3775 m へ下降中 4900 m 付近で雪崩により D. Newell, Elliot Spake, Sherpa Gyalgen が死亡する ●山岳年鑑, '86, 54/AAJ, 1986, 237
- ⑧ 1986年春 Japanese 大谷ヒマラヤ山岳会隊 沼賢亮 Kenryo Numa 他8 Lirung gl.~ 南東稜,4月29日C4=6500m,5月3日4人登頂(第6登) ●岩と雪,119,90(沼賢亮)/山岳年鑑,87,67(-∞-)/Moun,

- 110, 10 / AAJ, 1987, 244-45 (Kenryo Numa) /HJ, 43, 164 (Illustrated Note 1)
- ⑨ 1986 年秋 S. Korean Yoon Deong-Jung 他7 南西稜の下に BC, 10 月 8 日 C 3=6000 mを出発 80°の雪壁で夜となりビバークし 9 日 7000 m で南東稜に出て C 4 を設け, 10 日 6 人 (内シェルバ 1) が登頂する (第7登) ●山 岳年鑑, '87, 67/Hima, 18-7, 111/AAJ, 1987, 245 (Yoon Deong-Jung)
- ⑩ 1986 年秋 Spanish Miguel Angel Puertas 他 6 南東稜, 10月17日6300mまで ●山岳 年鑑, '87, 67/Hima, 18-11, 173/AAJ, 1987, 245 (M. J. Cheney)
- ① 1987/88 年冬 Polish Wojciech Maslowski 他 9 南東稜, 88 年 1 月 2 日 C 3=6500 m, 3 日 Kazimierz Kiszka, Adam Potoczek, Michal Czyzewski が冬期初登頂する(第 8 登),第二 次隊は 6600 m まで ● Maslowski, W.: Langtang Lirung. HJ, 45, 173-76, 1987 · 1988 / AAJ, 1988, 212 (Elizabeth Hawley) / IM, 21, 180 / Moun, 121, 11 / 岩と雪, 128, 93-94/山岳年鑑, '88, 69

LANGTANG RI 7205 m

Nepal Langtang Himal 28°22′55″N, 85°41′01″E
① 1981 年秋 7 Japaneses 日本ヒマラヤ協会
隊-3 Nepaleses 植松秀之 Hideyuki Uematsu
Tilman's Col をはずして南西稜に出て10 月 10
日那須宗一 Soichi Nasu, 若尾巻広 Makihiro
Wakao, 山田昇 Noboru Yamada と Ang Ringe
が初登頂し、11 日飯沢実 Minoru Izawa, 中岡
久 Hisashi Nakaoka が第二登する ●植松秀之
: ランタン・リ。山岳、77 年、33-38、1982/
ネパール・日本合同登山隊: ランタン・リ初登
頂。岳人、424、182-85、1982 年 10 月号/岩
と雪、88、45(那須宗一)/ヒマラヤ、No.
122/AAJ、1982、223/Moun、83、10

- ② 1983 年秋 3 Japaneses 中央大学隊 3 Nepaleses 西 奥 亮 平 Ryohei Nishioku Langtang gl.~call Tilman's Col~南西稜, 10月 9 日隊員 3名(日1, ネ2)と HAP 1 名登頂 ●岩と雪, 102, 40(西奥亮平) / AAJ, 1984, 245 / Moun, 96, 12 / HJ, 41, 204 (Illustrated Note 5)
- ③ 1987 年春 7 Japaneses 同人青いケシ隊-3 Nepaleses 福 沢 勝 幸 Katsuyuki Fukuzawa Langtang gl. ~ Tilman's Col ~ 南西稜, 4月17日 4人(内ネパール2), 18日4人(内ネパール1

= Ajiba は 2 回とも登頂) が登頂 (第 4, 5 登) ● AAJ, 1988, 213 (M. J. Cheney & E. Hawley) / Moun, 116, 10 / Hima, 19-3, 36 /山岳年鑑, 88, 68-69/IM, 22, 191

LATOK Karakorum Panmab Muztagh

I = 7145 m 35°55′43″N, 75°49′24″E (Bergamaschi $\mathcal{O} []$, 7085 m)

 $II = 7108 \text{ m} 35^{\circ}54'\text{N}, 75^{\circ}49'\text{E} (Bergamaschi <math>\mathcal{O}$ I, 7151 m)

- ① 1982 年夏 British Rab Carrington 他 3 I 峰北稜 (78 年アメリカ M. Kennedy 隊ルート) アルバイン・スタイル, Choktoi gl. を遡り ABC, 取り付きから 30 ピッチ, 4 日目断念 ●岩と雪, 95, 65 / AAJ, 1983, 276 (Rab Carrington) / Moun, 88, 11-12
- ② 1982年 Spanish Guillermo Lateo Ⅱ峰試登 ●AAJ, 1983, 276
- ③ 1984 年春 Polish Aleksander Lwow 他 10 Ⅲ 峰, 5月 10日 Baintha Likpar gl. に BC, 南壁をねらったが入山時期が早すぎたため5月 26日断念, Ⅲ峰, Ⅲ峰の基部を往復する ●岩と雪, 109, 79 / AAJ, 1985, 320-22 (Jozef Nyka)
- ④ 1985 年春 Japanese 登攀倶楽部京都隊 山崎豊正 Toyomasa Yamazaki 他 3 Ⅱ 峰, Biafo gl. ~ Latok gl. ~ 6月 10 日西稜のコルに C 2=6000 m を設け, 6200 m までルート工作をお えたが, 天候悪化で装備をデポして下山, 21 日再び C 2 まで登ったが天候回復せず, 6月 26 日断念 ●山岳年鑑, '86, 99 (山崎豊正) / AAJ, 1986, 279

- ⑥ 1987 年夏 British Edward Howard 他 7 Ⅱ峰, BC=Uzun Brakk gl. Latok Ⅱ の西稜目指 して支氷河に入り, 6月23日5350 mに ABC, 5日後 C1=6100 m, 7月8日 C2=6750 m, 10 日 6850 m まで登ったが雪崩と食糧の欠乏のた め 14 日断念 ● AAJ, 1988, 254 (Edward Howard)
- ⑦ 1987 年夏 French Laurent Terray 他 2 I 峰北稜 Lowe route, セミ・アルパイン・スタイル,7月11日 Choktoi gl. にBC, この夏のカラコルムの悪天候にわざわいされたのと1人が病気になったため,8月1日 6000 m で断念

 AAJ, 1988,251 (Laurent Terray) / 岩と雪,125,103 (- γ) / 山岳年鑑, '88,101-02 (- γ)

LHOTSE 8516 m

NEPAL Khumbu Himal 27°57′45″N, 86°56′03″E

- ① 1980/81 年 冬 Italian Piero Antonio Camozzi 他 5 Western Cwm から西壁初登ル ート、1月6日BCを、29日7550mにC3を 設ける。2月1日アタック Geneva Spur の頭を ヘてクーロワール目指したが強風のため引き返 す。翌2日は8050 mで断念。冬の天候の厳し さのため失敗 ●岩と雪, 88, 41/AAJ, 1982, 215/Moun, 79, 13-14/HCNL, 35, 8 ② 1981 年春 Bulgarian Christe Prodanov 他 20 西壁初登ルート、3月23日 BC、4月 30 日 C 4 = 7900 m より隊長が無酸素で出発 Reiss クーロワールをへて単独登頂 (第9 登),遅れて出発した2人は天候の悪化と酸素 マスクの故障で 8200 m から引き返す ●岩と 雪, 88, 41 (Christe Ivanov Prodanov) / AAJ, 1982, 218 (Jozef Nyka) / Moun, 80, 12
- ③ 1981 年春 Yugoslavian Ales Kunaver 他 25 南壁, 3月 25日 Lhotse gl. のモレーン上に BC=5200 m。南壁をダイレクトに登り中間部で左にトラバース Everest からつづいている Yellow Band に食い込んでいる雪の詰まったガリーの中に5月1日 C5=7850 m を設け、8日 8050 m に C6を設ける。ここからヘッド・ウォール右のリッジ、頂上につづく岩稜をダイレクトに登るルートを10日、14日と試登したが強風と雪のため失敗。18日今度はヘッド・ウォールの下を左にトラバースして西稜の肩に抜けるルートに挑む。Frencek Knez と Vanja

Matijevec が C 6 を 06:00 出発 18:00 西稜の 8150 m にでたが、天候悪く最初の計画は断念 往路を下り、翌日 04:00 C 4 に帰る。南壁部分完登 ● Kunaver、Ales: Lhotse South Face. Moun、81、38-41、1981 / AAJ、1982、215-18 (A. Kunaver) / 岩と雪、84、29-30;88、41 (- 2 -) / Moun、80、11-12

④ 1982 年秋 1 New Zealander-1 Australian-2 Britons Peter Hillary Western Cwm ~ Lhotse Face, 8月26日BC, カナダの Everest South Pillar 隊とかちあう。9月20日 Western Cwm に C 2=6550 m, このあと2週間順応行動をなし10月6日C2を出発 Lhotse Face の途中で一泊 Geneva Spur の7835 m に C 4をおき8日初登ルートのクーロワールに入り8250 m にある岩のステップまで達したが突然の雪嵐と強風のため断念(無酸素) ● Moores, Paul: Five Miles High Without Oxygen. AJ, 333, 59-62, 1984 / AAJ, 1983, 224 (Adrian Burgess) / Moun, 89, 12 / IM, 11, 148 / 岩と雪、95, 35-36 (Peter Hillary)

⑤ 1983 年秋 Japanese カモシカ同人隊 高橋和之 Kazuyuki Takahashi 他 11 西面初登ルート,9月9日 BC,10月2日最終キャンプ C 4=7950 m を設け,10月9日3人,10日3人(内シェルパ1),14日サーダーを含めて3人が登頂(第10~12登)ついで Everest へ●カモシカ同人隊:カラーグラフ。山と渓谷,569,20-25,1984年2月号/岩と雪,102,35-36/AAJ,1984,238/Moun,96,10/→Everest No.28

⑥ 1985 年秋 Polish Janusz Majer 他 10 南壁 (84 年チェコ隊の Lhotse Shar へのルート) 酸素ポーターなし、8月30日 BC=5200 m,7200 m 地点で Czechoslavaks route と別れ Lhotse 主峰と Shar の間にある凹地に入り10月3日 C5=7400 m,21日 C6=7800 m を設け、22日南稜 8200 m で断念。25日 Rafal Cholda がアタック後 C6 へ下降中転落死する。11月1日3人がフランス隊の隊長と最後のアタックをしたが8050 m で断念 ● AAJ,1986、232 / Moun、108、11 / 山岳年鑑、86、43 (Jozef Nyka) / Hima、17-9、140-41 (一々一)

⑦ 1985 年秋 French Vincent Fine 他3 南壁。 Tamserku 試登後 Island Peak に登ってから10月23日より南壁にアルバイン・スタイルで挑む。中央ピラーにルートを求め3日間で

7250 m に達したが 26 日断念。このあと隊長は ポーランド隊の第三次攻撃に加わって 8050 m まで登る ● 山岳 年 鑑, '86, 44 / AAJ, 1986, 229-32 (Vincent Fine) / Moun, 108, 11

⑧ 1986 年春 Japanese ベルニナ山岳会隊福島正明 Masaaki Fukushima 他 4 西面通常ルート、3月31日 BC、5月2日最終キャンプC 4=7900 m、4日4人 (内シェルバ2) 登頂(第13登) ●福島正明:ヒマラヤ未経験者も登頂世界第四位の高峰「ローツェ」。山と渓谷、611、172-75 1986 年9月号/岩と雪、118、78(福島正明)/山岳年鑑、87、55 (ーゥー)/ Moun、110、9/ Hima、18-3、48/AAJ、1987、233 (Michael J. Cheney)

⑨ 1986 年秋 Italian Renato Moro 他 10 Makalu を終えてから西面通常ルート, 10月10 日 BC, Khumbu Icefall は Eiselin's Everest 公 募隊のトレイルを利用する。15 日 C 3=7450 m. 16 H Reinhold Messner, Hans Kammerlander が登頂 (第 14 登), Messner は 8000 m 峰 14座全山登頂を完成する ●メスナー,ライ ンホルト: 『生きた、還った』。14章、 233-39, 横川文雄訳, 東京新聞社, '87/岩と 雪, 119, 89/山岳年鑑, '87, 55/Moun, 112, 10/Hima, 18-8, 127/→Makalu No. 29 ⑩ 1987 年春 French-Swiss Eric Escoffier 他 4 順応のため Lhotse Shar 南東稜 6800 m ま で登ったが主峰南壁は試みずに終わる。4月28 日 BC 撤収 ● Hima, 19-3, 45/IM, 22, 191 /→Lhotse Shar No. 13

① 1987 年秋 International, 8 Poles-2 Italians-1 Briton-2 Mexicans, Krzysztof Wielicki (Polish) 南壁 (85 年秋と同じルート), 9月 6日 BC, 84年 Lhotse Shar へのチェコ隊ルー トを登り 10月4日 C5=7450 m を設ける。50 m上の7500 mでチェコ・ルートをはなれて大 クーロワール上端を横切るように主峰直下の壁 に向かう。10月14日7800mのC6地点に達 したが17日~21日に大雪が降り中断,29日 8300 m の雪洞で一夜をあかして翌日頂上まで 200 m のところで強風のため断念, 9月15日 Czeslaw Jakeil (Polish, doctor) が雪崩で死 亡、2人が負傷する (隊員の一部は Shisha Pangma に登頂後参加) ●岩と雪, 127, 86-87/Moun, 118, 5;119, 8-9/HCNL, 41, 34/山岳年鑑, 88, 60 (K. Wielicki) 及び 220 / AAJ, 1988, 201-02 (M. Cheney & E.

Hawley) / IM, 21, 179;22, 191 / → Shisha Pangma No. 20

1987 年秋 International Hans Schell 他 14 Everest と共に試登, Lhotse の方はなにも なし ●→Everest No. 81

LHOTSE SHAR 8400 m

Nepal Khumbu Himal 27°57′30″N, 86°56′35″E ① 1981 年春 Spain, Basque 隊 Xabier Frto 他3 南東面新ルート (南稜), ハイ・キャン プ2ツ設けビバーク2晩ののち, 7550 m で断 念,装備の大半を強風に吹き飛ばされたため, なお1人病気で死亡 ●岩と雪, 88, 42/ AAJ, 1982, 218/Moun, 80, 12

- ② 1981 年秋 Swiss Joseph Fauchere 他 14 南東稜オーストリア初登ルート, 10 月 16 日隊 員 4 人とシェルパ 2 人が C 4=7150 m を出発, 8150 m で隊員シェルパ各 2 人が引返し、2 人が登頂する(第 2 登), 引き返した 2 人 Pierre Favez と Philip Patten は 2 日後に南壁側に転落死しているのが発見された。さらに帰途について 2 日目隊長が氷河上で転落死亡する, Shar から中央峰をへて主峰への縦走は断念 ●岩と雪、88、42 (Trevor Braham) / AAJ, 1982, 218-19 (一ヶ一) / Moun, 83, 10
- ③ 1982 年春 Swiss Hans Berger 他 3 81年のスイス隊のルート南東稜, C 3=7450 m まで、深い雪と雪崩の危険性高く断念 岩と雪,95、36/AAJ, 1983、224/IM, 11, 148
- ④ 1983 年春 Italian, City of Lecco 隊 Giancarlo Riva 他 15 南東稜通常ルート, 4 月 26 日 C 3 予定地 6985 m で強風と大雪のため 断念 ●岩と雪, 102, 36/AAJ, 1984, 238/Moun, 92, 9
- ⑤ 1983 年秋 2 Canadians-1 American Roger Marshall 南東稜酸素・シェルバなし、10 月 21 日 7930 m で断念 ●岩と雪、102、36 / AAJ、1984、238 / Moun、96、10
- ⑥ 1984 年春 Czechoslovakia Ivan Galfy 他 17 81 年ユーゴ Lhotse 隊と同じ位置に BC=5250 m, Lhotse Shar の南西面の中央にルートを求め、5850 m, 6250 m, 6800 m, 7500 m とキャンプを進め、5月20日7900 mの C 6 より無酸素で 4 人がアタックし、3 人が 8200 m で引き返したが Zoltan Demjan のみ単独登頂する。21 日 Jaromir Steikal, Josef Rakoncaj, Peter Bozik が登頂(第 3, 4 登) Rakoncaj, Josef : Czechoslovak Expd. to Lhotse Shar, 1984。

- HJ, 41, 30-35, 1983・84/岩と雪, 109, 42 (J. Nyka) / AAJ, 1985, 257 (I. Galfy) / Moun, 99, 8
- ⑦ 1984 年春 Spanish Antoni Sors 他 5 南 東稜通常ルート,ハイ・キャンプを 4 ツ設け, 5月 20日 7350 m で食糧燃料の不足から断念●岩と雪,109,42/AAJ,1985,257-59
- ⑧ 1984 年 秋 British-Canadian Adrian Burgess 他 3 8月 28日 Island Peak の東斜面に BC=5200 m, Island Peak とのコルよりの南稜は 9月 26日 C 2=6810 m まで、ついで南東稜を 6250 m まで登ったが 10月 7日断念 ●岩と雪、109、42 / AAJ、1985、259 (Paul Moores) / Moun、102、15
- ⑨ 1985年春 S. Korean Heo Young-Ho 他5 南東稜通常ルート、8100 mまで、5月29日断 念 ●山岳年鑑、86、44/AAJ、1986、229
- ⑩ 1986 年春 British Malcolm Duff 他 4 4 月 22 日 BC=5310 m, Duff は Sandy Allan と 2 人で南面をアルバイン・スタイルで登るための順応として南東フェースを登る。5 月 9 日 7000 m でセラックの崩壊で Duff が重傷をうけ BCへ下る。Allan は J. Lowe のアメリカ隊の一員として Kangtega に登ったばかりの Miss Alison Hargreaves と南東フェースに挑み 6500 m で雪崩にあい断念 ●岩と雪, 118, 78/山岳年鑑, '87, 55/Hima, 18-4, 63/HCNL, 40, 9/AAJ, 1987, 233 (Michael J. Cheney)

① 1986 年秋 Swiss Toni Spirig 他 2 南東

- 稜酸素・シェルバなし、9月21日 Lhotse Sharと Imjatse の間のモレーン上に BC = 5350 m, 24日 ABC を設け6100 m まで偵察、4回目のアタックで10月21日 Beda Fuster が単独で8050 m の Snow Dome に達し頂上下 350 m で断念●岩と雪、121、81(Toni Spirig)/山岳年鑑、87、55-56(一〃一)/AAJ、1987、232(一〃一)/Moun、113、8/Hima、18-8、127 1② 1986 年秋 Spanish Manuel De Casas 他 9 南面一南東壁、10月30日C4の下7400 m 地点でPedro Alonso が滑落死する。このため 断念 AAJ、1987、233(M. J. Cheney)/ Moun、113、8/Hima、18-8、127-28/山岳年鑑、87、55
- 13 1987 年春 French-Swiss Eric Escoffier 他4 4月10日BC, Lhotse 南壁登攀のための 順応として Shar の南東稜を 6800 m まで登 る。(4月10日~28日) ●山岳年鑑, '88, 61/AAJ, 1988, 201 (M. J. Cheney) / IM,

21, 179/→Lhotse No. 10

④ 1987 年春 Yugoslav Vincenc Griljc 他 12 南東稜、3月14日BC、4月5日C3=6900 m、8日7300 mまでルート工作を終える。10日間悪天がつづき、4月20日C4予定地7450 mに達した再び天候悪化、5月5日再度C3に登ったがまたも天候悪くC5月12日断念 ● Griljc、Vincenc:Slovene Lhotse Shar Expedition、1987。HJ、44、176-77、1986・87/岩と雪、124、94(J. Nyka)/Hima、19-3、46/山岳年鑑、88、60(V. Griljc)/AAJ、1988、200(Vincenc Griljc)/IM、21、179:22、193

(5) 1987 年春 French-Indian-Nepalese Alain Esteve 他 11 (内ネ 1, イ 1) 南東稜, 4月 15日南面下に BC, 5月 1日 C 3=7000 m, 天候悪化のため C 4 を作れず C 3 よりアタック, 5月 20日 4人が出発したが 7600 m で 2人脱落, 8250 m でまた 1人断念 Yves Tedeschi だけが登頂 (第5登)。隊長と Eric Gramond は 2人乗りパラシュートで C 3 から BC=5800 m まで飛行する (ユーゴ隊のルートを利用したとユーゴ隊の隊長は非難している=山岳年鑑, '88, 60-61, V. Griljc) ◆ Alain, Captain Esteve: Victory over Lhotse Shar. HJ, 44, 174-76, 1986・1987 Moun, 116, 9 / Hima, 19-3, 45 / HCNL, 41, 30 / 山岳年鑑, '88, 60 / AAJ, 1988, 200 (Alain Esteve) / M. 21, 179

① 1987 年秋 2 Britons-2 Americans Adrian Burgess 南東稜アルパイン・スタイル。 Lhotse Shar~Lhotse Middle~Lhotse の縦走を目的に入山。8月28日BC=5270 m着,9月17日C2=6610 mを設けここからアルパイン・スタイルで頂上を目指す。27日7000 m付近に達した時板状雪崩が発生,3人が流されたが無事,このため断念BCへ。1週間後再度アタック,6800 m付近で雪崩の危険地帯に出くわし

中止, 19日から降雪はげしく, 22日断念 山岳年鑑, '88, 62/AAJ, 1988, 201 (A. Burgess)/HCNL, 41, 34/IM, 21, 179:22, 193

LÖNPO GANG (BIG WHITE PEAK) 7080 m (6979 m)

Nepal Jugal Himal 28°11′45″N, 85°48′00″E
① 1982 年春 Japanese 東海大学隊―Nepalese 合同隊 加藤弘司 Koji Katoh 他 9 (内ネ 3)
Phurbi Chachumb gl. ~東稜, 3月30日BC=4200 m, 4500 m, 5400, 5900, 6100 m とキャンプを進め5月2日6750 m に C 5 を設ける。3日隊長とシェルパ1人が,7日に3人が登頂する(第 3, 4 登) ●岩と雪,95,39-40 (加藤弘司) /山岳,78,106,1983/AAJ,1983,234 / ヒマラヤ No.131 / 仮報告書 / Moun.

86, 11

② 1987 年秋 S. Korean-Nepalese 合同隊 Ryong Yoon-Jae 他8 (内ネ3) 西面~南西稜, 9月3日BC=4750 m, 9月27日C3=6680 mより Lee Jeong-Hoon, Kim Soo-Hyeon と Sherpas Da Gombu, Ang Temba が登頂(Langshisha gl. よりの新ルート,第5登) ●岩と雪, 126, 94;127, 88-89/HCNL, 41, 34/山岳年鑑, '88, 68/AAJ, 1988, 212(Ryong Yoon-Jae)/HJ, 44, 201 (Illustrated Note 2)/IM, 22, 193/San Ak In No. 19 (K. A. F.)

LUPGHAR SAR Karakorum Hispar Muztagh, Momhil group

西峰 = 7199 m (7163 m) 36°20′56″N, 75°00′51″E

西峰Ⅱ=7010 m 東峰=7200 m 中央峰=7200 m

① 1986 年夏 Japanese 秋田クライマーズ・クラブ隊 小田嶋秀夫 Hideo Odashima 他 4 東峰、Momhil gl. から Lupghar Sar East と Dut Sar (6858 m) の間のコルにつづく支氷河を登りコルを目指したが氷の状態悪く 6200 m で 7月 30 日断念 (BC = Momhil gl. 4230 m) ● AAJ, 1987, 289 (Hideo Odashima) / 山岳年鑑、'87, 106

MAKALU 8463 m

Nepal Mahalangur Himal 27°53'23"N, 87°05'20"E

- ① 1980/81冬 Italian-Swiss Renato Casarotto 他5 80 年秋の英スコット隊のルートを採り南 東稜末端の 6000 m 級の無名峰より縦走ルート を登る。12 月 10 日 Barun gl. 4900 m に BC、前 進キャンプを 3 ツ設け、1 月 15 日南東稜 7220 m で寒気と強風のため断念、23 日 BC撤収 ● AAJ、1982、205 (R. Casarotto) / 岩と雪、 88、35-36 (一ヶ一) / Moun、79、14
- ② 1981 年春 Austrian Hanns Schell 他 11 北西稜〜北稜初登ルート, Makalu La に C 3, 4 月 25 日 C 4=7800 m より Robert Schauer が単 独無酸素登頂 (第 15 登), 数日後 3 人がアタッ クしたが C 4 で断念。5 月 17 日 George Bachler は頂上直下 50 m で断念 ● AAJ, 1982, 205-07 (R. Schauer) / Moun, 80, 12/岩と 雪, 88, 36
- ③ 1981 年春 2 Polish-1 Scottish-1 English-2 Nepaleses Wojchief Kurtyka 北西稜通常ルートで順応、Makalu La (7400 m) にデポとテントをおき、7800 m 地点にビバーク地を設ける(3/25~5/16)、5月13~17日に Padam Ghaley Gurung(Nepalese)が Makalu II に登頂する。5月16日から西壁登攀開始、6800 m で断念●AAJ、1982、207(Alex Mac Intyre)/岩と雪、88、36-37(一ヶ一)/→ Kangchungtse No. 2
- ④ 1981 年秋 Alex Mac Intyre 他 3 9月4日~10月2日まで北西稜で順応=Makalu Laにデポとキャンプ,8000m地点にビバーク地を設ける。10月4日より西壁に取り付き西稜に抜けるガリーをねらい7900mまで達したが断念。このあと10月15日よりJurek Kukuczkaは80年Roger Baxter-Jones が登った西壁左端のリブから北西稜に出て10月20日アルパイン・スタイル無酸素単独登頂をする(第16登) Kurtyka, Voytek:Makalu West Face Attempt and Solo Ascent of the Unclimbed North Ridge of Makalu. HJ, 39, 26-31, 1981・1982/岩と雪,88,37 (Alex Mac Intyre) /
- ⑤ 1981 年秋 Austrian Arthur Haid 他 8 北西稜通常ルート, 9月22日 C 2=7000 m を 設けたがそれから嵐となり10月8日断念 ● AAJ, 1982, 207/岩と雪, 88, 37

Moun, 83, 10

⑥ 1981 年 秋 Doug Scott (English), Reinhold Messner (Italian) 2人で南東稜を 計画したが Messner が個人的理由で帰らねば ならなくなったため断念 ●→Chamlang No. 1

- ⑦ 1981/82 年 冬 French Ivan Ghirardini (Solo) 西稜, 5900 m, 6800 m とビバークして1月9日7000 m まで達したが強風と寒気のため断念 ●岩と雪, 95, 32/AAJ, 1983, 219
- ⑧ 1981/82 年冬 British Ron Rutland 他 5 北西稜初登ルート, 11月30日 Makalu BC= 4400 m 着, 12月8日 ABC=5350 m, ここから 「スーパー・アルバイン・システム」で登り12 月20日 7315 m で断念 ● AAJ, 1982, 208 (Ron Rutland) /岩と雪, 95, 32
- ⑨ 1982 年春 S. Korean Hahm Tak-Young 他 15 南東稜〜東盆地〜東稜, 5月17日 Black Gendarme 下に C 5=7450 m を設けここ から日本隊ルートをはなれ東氷河に下り, 19 日 C 6=7600 m をおく。5月20日 Young Ho-Huh, Sherpas Pasang Norbu, Ang Phurba が 登頂(第17登) ● AAJ, 1983, 219-20 (Seung Mo Shin) / HCNL, 36, 14/ Moun, 86, 12/岩と雪, 95, 33 (申承模)
- ⑩ 1982 年秋 Japanese 山学同志会隊 湯田一男 Kazuo Yuda 他 4 80 年 R. Baxter Jones 試登, 81 年 J. Kukuczka が単独登頂したルート, 8 月 30 日 Barun gl. に BC=5160 m, 西壁西端のリブ上に C 2=6200 m, C 3=7200 m と進め, 21 日北西稜上に C 4=7850 m を設ける。9 月 30 日無酸素で 3 人が登頂(第 18 登)●山学同志会マカルー登山隊:マカルー北西
- ・ 間子内心気マガルー豆田隊・マガルー元と 枝。岩と雪, 94, 51-57, 1983/岩と雪, 95, 34 (湯田一男) / AAJ, 1983, 221 / Moun, 89, 11
- ① 1982 年秋 17 Poles-3 Brazilians 合同隊 Adam Bilczewski 西壁やや左より北西稜肩の下にある氷田につづく側稜を登る。8月31日BC=5400 m, 10月7日8000 m 地点で北西稜に出て Kukuczka ルートに合し C 4 を設ける。8日 Andrej Czok と Janusz Skorek が頂上を目指したが寒気と強風で引き返す。しかし Czok は C 4 にとどまりすでに酸素のなくなった 2 晩をがんばり 10日単独登頂する(第19登)、なお西壁でルート工作中 Tadziu Szulc が心臓発作で死亡する Bilczewski, A: Makalu West Face. HJ, 40, 48-51, 1982・1983 / AAJ, 1983, 220-21 (J. Nyka) / 岩と雪, 95, 33 (-∞-) / Moun, 89, 11
- 1982 年秋 Swiss Romolo Nottaris 他 Makalu と Baruntse を目指す。9月8日BC= 4900 m 着, 17日 ABC=5300 m, 10月4日

Makalu group の 3 人はアルバイン・スタイルで西稜フランス・ルートに向かう。7400 m まで登ったが6日1人が病気になったため断念、West Face の左端の新ルートへ転進、10月13日 BC 発、3 ビバークの後北稜に出て16日7750 m でビバークし17日8000 m で Kukuczkaのルートに合し8200 m で断念 ●岩と雪、95、34 / AAJ、1983、221 (Romolo Nottaris)/Moun、89、12 /→Baruntse No. 3

- (3) 1983年春 American, Colorado隊 Ronald Matous 他5 南東稜東盆地経由, 酸素・シェルパなし、3月28日 Barun Pokhari の下にBC, South Col につづく氷河を左手から登り南東稜に出て、4月27日C4=7300m, 7600mより East Basin に下り5月6日7450mにC5を設け7日7740mで断念 AAJ, 1984, 229-30 (R. Matous) /岩と雪, 102, 31 (一ゥー) / Moun, 92, 9
- ④ 1983 年春 Belgian Wounter Panis 他 8 Makalu La から北面初登ルート,8050 m に C 4 を設けたが,5月16日7750 m で断念 ● AAJ,1984,230/岩と雪,102,31/Moun, 92,9
- ⑤ 1983 年秋 Japanese ベルニナ山岳会隊福島正明 Masaaki Fukushima 他3 北西稜酸素・ボーターなし、9月5日 BC=5200 m,8日 Makalu La にダイレクトに登る新ルートを試みたが16日断念。フランス隊初登ルートに転じ10月6日6700 mで断念 ●岩と雪、102、31 (福島正明) / AAJ、1984、231 / Moun、96、10-11
- (6) 1983 年秋 New Zealand-Australian 合同隊 Peter Hillary 他3 西稜酸素・ボーターなし、ハイ・キャンプ3ツ設け10月15日 Hillary が単独で7600 mまで、10月3日6400 mでBill Denz が雪崩で、また15日 Mark Moorhead が下降中6800 mで墜落ともに死亡する AAJ、1984、230-31/岩と雪、102、31/Moun、96、10
- ① 1984 年春 Spanish, Basque 隊 Mari Abrego 他3 Makalu La 経由の初登ルート, 7750 m でビバークして5月16日2人登頂(第 20登) ● AAJ, 1985, 254-55 (M. Abrego) /岩と雪, 109, 40-41/Moun, 99, 9
- 18 1984 年春 2 Americans −4 Canadians Carlos Buhler 3月26日 Barung gl. 5400 m=BC, 西稜 West Pillar (71年フランス隊ルート), 5月17日フランス隊のC6にC4を設け, 20日

8250 m で南東稜に出て 8400 m で降雪激しくな り断念 • Buhler, Carlos: The American-Canadian Makalu West Pillar Expedition. HJ, 41, 12-19, 1983 · 1984 / AAJ, 1985, 252-54 (Carlos Buhler) /岩と雪, 109, 40 (一ヶ一) 回 1984 年春 International Doug Scott 他 11+トレッカー 10 4月 19日 Barung gl. 4900 m = BC, 22 日付近の 6170 m 峰に 4 人が登頂. 23 日 Peak 3 の南東峰 (Yaupa SE, c. 6300 m) に東稜から5人が初登頂, ついで Baruntse, Chamlang に登頂後, D. Scott, Jean Afanassieff, Stephen Sustad はアルパイン・スタイルで Makalu 縦走 (80 年に試登した南東稜~東クー ムを登り北面ルートを下るコース)に向かう。 South Col のさらに南方から取り付き5月23日 5800 m, 24 日 South Col 6800 m そして東盆地 を抜け24日ヘッドウォール基部7900mでビバ ークし29 日8380 m に達したが Afanassieff が 体調を崩したため縦走は断念往路を下る。30 日 South Col 下の氷河に下る。北西稜を試登し た 4 人も失敗に終わる • Scott, Douglas: Makalu-Almost. AAJ, 59, 70-80, 1985/- * — : Makalu-Nearly. HJ, 41, 1-11, 1983 · 1984 / - * - : Makalu-Nearly. Moun, 99, 22-31, 1984/スコット, ダグ:あと一歩のマ カルー。岩と雪、110、76-83、1985/岩と雪、 109, 41 (D. Scott) / Moun, 99, 9/HCNL, 38, 6

- ② 1984 年秋 Swiss Romolo Nottaris 他 2 9月11日 West Face 下 5350 m = BC, 13 日連絡官が肺水腫で死亡する。西稜左手の側稜から北西稜~初登ルート, 15 日より登攀開始, 23日 C 2=6400 m を設け翌日側稜の最も難しい部分を抜け 6850 m に達する。9月29日 Nottarisが単独登頂する(第 21 登) Nottaris、水単独登頂する(第 21 登) Nottaris、Romolo:Makalu, 1984。HJ, 42, 162-64, 1984・1985/AAJ, 1985, 255 (R. Nottaris) / 岩と雪, 109, 41 (一ター) / Moun, 102, 16 / HCNL, 38, 10
- ② 1984 年秋 Italian Almo Giambisi 他 10 南東稜 Czechoslovakian route, 9月19日6800 mまで、ついで北西面通常ルートに転じ10月 10日7900mで断念 ●岩と雪,109,41/ AAJ,1985,255-56/Moun,108,11
- ② 1984 年秋 3 Spaniards-1 Canadian Antonio Luna Rodriguez 北西面通常ルート, 10 月 10 日北稜 7600 m で強風のため断念 ●岩と 雪, 109, 41/AAJ, 1985, 255/Moun, 102,

16/HCNL, 38, 10

② 1985 年春 French Maurice Barrard 他 3 4月20~23 日 Makalu La を往復、4/27~5/3 に 8050 m まで往復して順応をおえてから、Chago gl. C 2=6850 m よりアルパイン・スタイルで北西壁フランス・ルートを登る。Barrard 夫妻が C 1、C 2 をへてさらに 2 回ビバークの後 5月11日8430 m で頂稜に達したが強風に阻まれ断念 ● 山岳年鑑、'86、38-39(L. Barrard)/AAJ、1986、217-18

② 1985 年秋 Italian-Spanish 合同隊 Sergio Martini 他 4 南スパーを偵察後,北西稜に転じ、10月1日 C 4=7850 m より 5 人登頂(第22登) ●山岳年鑑, '86, 39/AAJ, 1986, 218 (Sergio Martini)

② 1985/86 年冬 Japanese 日本冬期隊 馬場博行 Hiroyuki Baba 他 6 11 月 22 日 Barun gl. 4800 m=BC, Makalu La の上から派生するリブを登り 12 月 15 日 C 3=7140 m を設け北西稜直下の 7520 m まで登る。12 月 23 日の最後のアタックも強風で失敗 ●山岳年鑑, '86, 39 (馬場博行) / AAJ, 1986, 218 (H. Baba) / Moun, 108, 13

⑩ 1985/86 年冬 Italian Reinhold Messner 他 12 北西稜(81 年 J. Kukuczka route)3 回の試登の後 2 月 9 日 7500 m で天候悪化し断念
●山岳年鑑、'86、39/AAJ、1986、218-19(J. Nyka)/Moun、110、10/Hima、17-11、174
⑰ 1986 年春 American Ned Gillette 他 3 北西面初登ルート無酸素、5 月 26 日 N. Gillette はシェルパ 3 人を伴い C 4=7440 m よりアタック。シェルパは 7500 m で引き返したが Gillette は単独で 8100 m まで登る ●山岳年鑑、'87、51 / AAJ、1987、222-23(N. Gillette)/Moun、113、8 / Hima、18-3、48;18-8、128;18-9、144

図 1986 年秋 Polish-Swiss-Austrian Krzysztof Pankiewicz 他 14 Makalu La 経由の北西面通常ルート、Krzysztof Wielicki (Polish) とMarcei Ruedi (Swiss) の 2 人は 9 月 24 日別々に登頂する (第 23 登)、Wielicki は 3:45 に登頂し下山中午後 4 時頃順応の不足から遅れたRuedi にあったがそれが最後であった。Ruedi は C 3 の下 50 m ほどの地点で死亡しているのが Messner らによって発見された。10 月 14 日第二次アタックは 7900 m で断念 ●岩と雪、120、93-94 / 山岳年鑑、'87、51-52 / Hima、18-9、142-43 / Moun、112、10 / AAJ、1987、

223-24 (Oswald Oelz)

図 1986 年秋 Italian Renato Moro 他 10 通常ルート, 9月10日C3=7800 m, 23日頂上直下30 mまで登る。26日7900 m の最終キャンプより Messner ら 3 人が登頂 (第 24 登), その後 Messner は Lhotse に登頂し 8000 m 峰全部の登頂に成功する ●山岳年鑑, 87, 52/Moun, 112, 10/Hima, 18-9, 143/→Lhotse No. 9/AAJ, 1987, 224-25 (Renato Moro)

⑨ 1986 年秋 Italian Cesare Cesa Bianchi 他3 9月14日BC=4700 m, 上記 Moro 隊の キャンプを用いる。10月16日8100 mで断念 ● 山岳年鑑, '87, 52 / AAJ, 1987, 225 (Renato Moro) / Hima, 18-9, 143

① 1986 年秋 French Raymond Renaud 他 10 北西面通常ルート, 10月13日8300mま で。強風と寒気のため断念 ●山岳年鑑, 87,52 / AAJ, 1987, 223 (Michael J. Cheney)

3 1986年秋 Yugoslav 11月はじめ7400 m で断念 ●Hima, 18-9, 144

③ 1986/87 年冬 Japanese 山田昇 Noboru Yamada, 斎藤安平 Yasuhira Saito (カモシカ同人隊・ペア) 11月16日BC=4800 m 着。アルパイン・スタイルで南壁を目指したが雪が少なくて断念, 南東稜に変更, 11月30日までPk.3 付近で順応, 12月1日南東コルにC1=6600 m をおき 6800 m まで試登, 6日より登攀開始9日7500 m の Black Gendarme で断念・山岳年鑑, '87, 52 / AAJ, 1987, 225 (Elizabeth Hawley)

④ 1987 年春 American Glenn Porzak 他 8 北西面通常ルート、4月2日 Barun gl. 5300 m =BC、29日 Makalu La に C 3 を設け悪天候の ため翌日 C 4 予定地にデポして一旦 BC に下 る。5月11日 C 4=7840 m を建設し、12日3 人(内シェルバ1)、16日3人(内 HAP 2) が 登頂(第 25、26 登) ● Porzak, Glenn: Makalu. HJ、44、60-67、1986・1987/一々一 : Makalu. AJ」、62、29-36、1988 / Moun、 116、10 / Hima、19-3、46 / HCNL、40、30 / IM、22、193 / Summit、Vol. 33、No. 6 / 山岳年 鑑、'88、57 (G. Porzak)

③ 1987 年春 Dutch Edwin van Nieuwkerh 他5 南壁ユーゴスラヴィア・ルート, ハイ・ キャンプを 3 ツ設け 5 月 4 日 7600 m まで登 る。13 日断念 ● Nieuwkerh, E.: The Dutch Nomad-Makalu Expd., 1987。HJ, 44, 170-71, 1986·1987/AAJ, 1988, 193 (M. J. Cheney & E. Howley) / IM, 22, 193/Hima, 19-3, 46/山岳年鑑。'88, 57

- ⑩ 1987 年 秋 Austrian, Bergfuhrer 隊 Wilfried Studer 他 4 西稜フランス・ルート。順応のため北西面通常ルートを10月13日と17日に6500mまで登ったが、西稜は取り付かず断念 AAJ, 1988, 193 (M. Cheney & E. Hawley) / IM, 22, 193-95 / 山岳年鑑, 88, 57
- 図 1987 年秋 Swiss Daniel Anker 他 2 南 東稜, 10月13日 7600 m まで登る。BC に下っ たところ10月18-20日荒天となり再度のアタ ックは出来ず22日断念 ● AAJ, 1988, 193 (M. Cheney & E. Hawley) / IM, 22, 193/山 岳年鑑、'88, 57
- 38 1987 年秋 6 French-6 Americans 合同公募隊 Michel Fauquet 北西面通常ルート,9月17日 BC=5200 m,10月18日 Makau La上の稜線7550 mまで。 AAJ,1988,193-94 (James Fries) / IM,22,193/山岳年鑑,88,57 (B. Muller)
- ⑨ 1987/88 年冬 Polish 他 4 国合同隊 Andrzej Machnik 他 10 北西面通常ルート, 12 月 8 日 BC=4850 m, 10 日 Chago gl. ABC= 5200 m, 31 日 C 3=6850 m, 1 月 20 日と 22 日 7500 m まで登る ◆ AAJ, 1988, 194 (Andrew Evans) / IM, 22, 195/山岳年鑑, '88, 57

MALANGUTTI SAR 7025 m

Karakorum, Hispar Muztagh, Disteghil group 36°22′N, 75°09′E

- ① 1984 年春 Japanese 釧路縣の会隊 笠井 芳郎 Yoshiro Kasai 他 5 Momhil gl. 側より, 6月24日 C 2=5600 m を出発し 6400 m で悪天 候のため断念 ●岩と雪, 109, 80 (笠井芳郎)
- ② 1985 年夏 Japanese 東京志岳会隊 杉本 忠男 Tadao Sugimoto 他 4 西面 Momhil gl. に 入り7月22日 BC=4200 m 着, 偵察の後84年 釧路羆の会隊ルートから南西稜に変更, 27日 ABC=4800 m, 支氷河から南西稜に出て8月1 日 C 2=6200 m を設ける。13 日杉本忠男 T. Sugimoto, 中原健吾 Kengo Nakahara, 村中康 Yasushi Muranaka と Ang Nima Sherpa の 4 人 が南西稜と Disteghil Sar へつづく主稜の合流 点の南峰に登頂しさらに北峰 (7025 m) に初登

頂する ●山岳年鑑, '86, 100-01 (杉本忠男) / AAJ, 1986, 286/ヒマラヤ No. 173

MAMOSTONG KANGRI Karakorum, Rimo Muztagh, Kumdan group

I 峰=7516 m, 35°08′54″N, 77°34′41″E II 峰 = 7071 m, 35°04′43″N, 77°38′20″E (Chongkumdan I ?)

① 1984 年秋 Japanese 日本ヒマラヤ協会隊 尾形好雄 Yoshio Ogata 他 4 Indian Mountaineering Federation Balwant S. Sandhu 他 7 合同隊 8月14日 Mamostong gl. 出会に BC= 4600 m~Hope Col=5885 m~東面 Thangman gl. ~6700 m で北東稜に出て8月28日C3を設け る。全員 BC で休養の後 9 月 13 日山田昇 Noboru Yamada, 吉田憲司 Kenji Yoshida と Capt. H. Chauhan, P. M. Das, Rajiv Sharma Ø 5 人が初登頂し、さらに15日5人、16日2人登 頂する ●尾形好雄:マモストン・カンリ初登 頂。山岳,80年,69-77,1985/-/---:マモ ストン・カンリ初登頂。ヒマラヤ、157、 1-16, 1984/- / -: 75 年振りにその山容を 現した千人の悪魔の峰。岳人, 451, 22-24 及 Uf 40-45 / Sandhu, Col. B. S.: First Ascent of Mamostong. HJ, 41, 93-101, 1983·1984/岩 と雪, 109, 69 (尾形好雄) / AAJ, 1985, 306-08 (Balwant Sandhu) / Moun, 100, 14/ 報告書, 日本ヒマラヤ協会刊, 1985

MANA PEAK 7272 m

Uttar Pradesh (Garhwal) 30°52′52″N, 79°36′57″E

- ① 1983 年 Indian, Giripremi (Pune) 隊 Nandu Vinayak Page 他 2 Mana Peak へのルートを見付けようと衛星峰 6550 m の西面へとつづいている Gupta Khal 5788 m の尾根を登る。衛星峰を北と南西より試登、深雪と悪天のため失敗 ●IM, 12, 186-87, 1983
- ② 1983 年 秋 Indian, IMF 第 三 次 Pre-Everest Camp-Cum 隊 Col. B. S. Sandhu 他 51 9月6日 Dakhni Nagthuni と Uttari Nagthuni gls. の合流点に BC=4530 m, 14 日 Gupt Khat を越し Banke gl. のアイスフォールの中に C 2=6200 m さらに 19日C 3=6700 m を設け 3 度試登し 9月29日南西稜 7200 m で雪嵐と不安定な雪のため断念 Sandhu, Col. Balwant: Pre-Everest Expd. to Mana, 1983. HJ, 40, 168-71, 1982・1983 / 岩と雪, 102, 50 (B.

Sandhu) / AAJ, 1984, 264 (Balwant Singh) /IM, 12, 187

- ③ 1984年 Indian, ITBP隊 83年 IMF 隊と同じルートの西面から試登 ●岩と雪, 112, 76/HCNL, 38, 13
- ④ 1985 年秋 Indian, Holiday Hikers Club (Maharashtra) 隊 P. Bodhane 他 11 北東面, 8月31日 Raikana gl. BC=4724 m, East Kamet gl. を登り9月10日6303 m に C 4 を設ける。9月28日6858 m で断念 ●岩と雪, 117, 79-80 (P. Bodhane) / Hima, 18-1, 16
- ⑤ 1987 年秋 Indian Dr. D. T. Kulkarni 他 13 未踏の北壁試登 Abi Gamin, Kamet には 登頂 ●HCNL, 41, 36/山岳年鑑, '88, 80/ →Abi Gamin No. 10;Kamet No. 15

MANASLU 8163 m

Nepal Manaslu (Manasiri) Himal 28°32′58″N, 84°33′43″E

- ① 1981 年春 W. German, Hauser Exkursionen International of Munchen 公募隊 2 隊よりなる。(1=Hans von Kanel 他 12, 2=Bernd Schreckenbach 他 14) 北東面通常ルート, 4月6日BC, C5=7450 mより5月7日3人(内シェルバ1),9日5人(Anderl Loferer は62歳で最高齢登頂者を記録する),19日第二グループの7人(内シェルバ1,また2人がスキーを使用して登頂する)が登頂(第10~12登) 岩と雪,88,46-47 (Bernd Schreckenbach):84,30-31/AAJ,1982,226/Moun,80,12
- ② 1981 年秋 French Pierre Beghin 他 3 西壁初登, 9月5日西壁下に BC=3700 m, 西壁中央の巨大なピラーの右手西稜よりのラインをとる。ABC=4800 m, C1=5800 m, C2=6700 m と進め 10月6日 P. Beghin と Bernard Muller が 7400 m でビバークして翌日頂上に立つ (第13登), このあと Gerard Bretin が単独でアタック, プラトーに出たところで夜となり 2人が残したビバーク・テントが見付からず引き返す ●Beghin, Pierre: Manaslu's Unknown Face. AAJ, 56, 69-76, 1982/ーター: Manaslu's Unknown Face. HJ, 39, 32-35, 1981・1982/ミュレル・ベルナール:マナスル西壁。岩と雪, 91, 24-29, 1982/岩と雪, 88, 48 (B. Muller) / Moun, 83, 9:84, 11
- ③ 1981 年秋 Japanese イェティ同人日本オリンパス隊 加藤保男 Yasuo Kato 他3 北東

面通常ルート, 10月1日BC=4600 m, 10月 12日C3=7150 mより加藤隊長と尾崎隆隊員 がプラトーまでルート工作をし尾崎隆 Takashi Ozaki 隊員はそのまま登りつづけて登頂する。 14日2人登頂(第14, 15登) ●岩と雪, 88, 47(富田雅昭)/AAJ, 1982, 226 (Yasuo Kato)/Moun, 83, 9

- ④ 1982 年春 Spain, Catalan 隊 Enric Font 他5 北東面通常ルート,5月10日 E. Font と Pere Aymerich は C 5=7400 m より頂上を目指したが深い雪と悪天候のため 7600 m で引返し C 5 に泊まる。しかし翌日から連絡が途絶える。12日 C 2 より巨大な板状雪崩で C 5 がなくなっているのが望見された。16日からの捜索でもなんの手掛かりも得られなかった ●岩と雪,95,41/AAJ,1983,236/Moun,86,12/HCNL,36,15
- ⑤ 1982 年 秋 France, Chamonix guide 隊 Jean-Paul Balmat 他 4 東稜, 9月10日BC=4400 m 着 C 1 を設けた後 6100 m まで登ったが悪天候と雪の状態が危険であったため東稜を断念,通常ルートへ転進したが,連絡官が同ルートのフランス・イタリア合同隊の登攀了承をカトマンズに連絡しなかったため変更を拒否された ●岩と雪, 95, 41 (Jean-Paul Balmat) / AAJ, 1983, 237 (一ヶ一)
- ⑥ 1982 年 秋 French-Italian Louis Audoubert 他13 北東面通常ルート,ハイ・ キャンプを3ツ (5200 m, 6000 m, 6450 m) 設 け,10月9日隊長とシェルバ1人がC3を出 発7450 m でビバークして10日頂上に立つ (第 16 登) ●岩と雪,95,41/AAJ,1983, 236-37 (Louis Audoubert) / Moun,89,12
- ⑦ 1982/83 年冬 Japanese 日本ヒマラヤ協会 隊 山田昇 Noboru Yamada 他9 北東面通常 ルート, 11 月 30 日 BC = 4900 m, C 1 = 5900 m, C 2 = 6400 m, 12 月 17 日 C 3 = 7150 m を設 け 18 日プラトー上 7650 m で強風のため断念。 下降中 7500 m 付近で佐久間隆隊員 Takashi Sakuma がスリップして死亡。この事故で断念 ●山岳, 78, 115-16, 1983/岩と雪, 102, 41 (角田不二) / ヒマラヤ, No. 136 / AAJ, 1983, 237
- ⑧ 1983 年春 Yugoslavia, Croatian, Split Alpine隊 Vinko Maroevic 他 南稜, 4月25 日 Thulagi gl. の 4500 m 地点で雪崩にあい Jernej Zaplotnik, Ante Bucan が死亡し 1 人が軽傷 を負う。このため最高到達点 7100 m で断念

- ●岩と雪, 97, 8:102, 41/AAJ, 1984, 247 (Franci Savenc) / Moun, 92, 9
- ⑨ 1983年秋 Austrian Wilfried Studer 他4 北より東稜, ハイ・キャンプを3ツ設け, 10 月7日7400mで断念 ● AAJ, 1984, 248/ Moun, 96, 11
- ⑩ 1983 年秋 S. Korean Huh Yong-Ho 他 2 北東面通常ルート, 9月15日BC, 10月8日 の1回目のアタックはプラトーの 7700 m で断 念, 10月22日 Huh Yong-Ho が単独登攀する (第17登), ドイツ隊とあう ●岩と雪, 102, 41 (許永浩) / AAJ, 1984, 248 (Huh Yong-Ho) / Moun, 96, 11
- ① 1983 年秋 W. German, DAV 隊 Gurter Harter 他 8 Thulagi gl. より南稜, 10月18 日南稜 7500 m で断念。 C 2=5800 m に戻り "Butterfly Valley" に入り南西壁の72年オー ストリア・ルートをアルパイン・スタイルで 6600 m, 7400 m にビバークして 10 月 22 日 6 人 (内シェルパ2) が登頂 (第18登) ●岩 と雪, 102, 41 / AAJ, 1984, 247-48 / Der Bergsteiger, 1984 Feb, 24-28/Moun, 96, 11 ① 1983/84 年冬 Canadian Alan Burgess 他 4 北東面通常ルート, 11月19日BC=4100 m, Naike Col 上 5580 m に雪洞を掘って C1, 12月10日C2=6550m(雪洞)最高到達点 7100 m, 強風のため 12 月 22 日断念 • Burgess, Alan : Manaslu Winter Expedition 1983-1984. HJ, 41, 151-53, 1983 · 1984 / AAJ, 1984, 248-49 (A. Burgess) /岩と雪, 109, 51 (- \(\sigma\)-) / Moun, 96, 12/HCNL, 38. 5
- ③ 1983/84 年冬 Polish, Zakopane 隊 Lech Korniszewski 他 10 南西壁 72 年オーストリア・ルートより冬期初登頂, 12 月 2 日 BC = Thulagi gl. 4000 m~Butterfly Valley~プラトー, 1 月 12 日 C 4 = 7700 m より Ryszard Gajewski と Maciej Berbeka が冬期初登頂する(第19登), 14 日第二次隊はC 4 が見付からず断念する。なお12 月 11 日 Stanislaw Jaworskiは 100 m 転落し死亡する ◆ AAJ, 1984, 249-50 (L. Korniszewski) / 岩と雪, 109, 50-51 (J. Nyka) / Moun, 97, 10 / HCNL, 38, 5
- 1984 年春 W. German (Gunter Strum 他5) -Swiss (Hans Eitel 他 5) 合同隊 北東面通常ルート,4月30日スイス組2人登頂(第20登),5月7日ドイツ組2人,11日スイス1人

- ドイツ3人シェルパ2人登頂(第22, 23登)

 AAJ, 1985, 279 (Erhard Loretan) / Moun, 99, 9/岩と雪, 109, 51
- ⑤ 1984 年春 Yugoslavian Ales Kunaver 他3 未登の南稜は放棄し南西壁オーストリア・ルートへ向かう。4月17日BC=4250 m, 30日最終キャンプC3=6500 mを設ける。2日後Stipe Bozic, Viktor Groselj がアタックに出発2回ビバークして5月4日7700 mのビバーク地より登頂(第21登)C3に下る ●岩と雪,109,51 (J. Nyka) / AAJ, 1985,279 / Moun,99,9
- ⑩ 1984 年秋 Polish Janusz Kulis 他 5 南 稜初登, 酸素ポーターなし, 9月13日BC= Pungen gl. のモレーン上 4250 m, 14日 ABC= 4850 m, 17日クーロワール取り付きに C 1= 5650 m, 10月8日 Pungen La (P 29 とのコル 6750 m) に C 2, 18日 7400 m までルート工作 をし, 19日4人が C 2 を出発して 7350 m にテントを張り翌 20日 Aleksander Lwow, Krzysztof Wielicki が登頂(第 24 登) ●岩と雪, 109, 51-52 (J. Nyka) / AAJ, 1985, 279-80 (Krzysztof Wielicki) / Moun, 102, 15-16/ HCNL, 38, 10
- ⑪ 1984 年 秋 4 Swiss-2 Italians Cesqre Cesa-Bianchi 北東面通常ルート,7500 m に C 5 を設けたが、強風のため 10 月 23 日断念 岩と雪,109,52/AAJ,1985,280/Moun,102,16/HCNL,38,10
- 1985年春 Austrian Wilfried Studer 他 7
 Manaslu gl.~東稜~7600 m で通常ルートに合する。BC=4500 m, 4 月 30 日 C 3=6500 m, C 4=7300 m は悪天候に阻まれて設けられず。
 5月1日隊長とシェルバ Ang Kami が登頂(第25登) W. Studer は 7300 m から BC までスキー清降し、Ang Kami は徒歩で C 3 に下る。4日のアタックは 7300 m で断念下降にかかった時 P. M. Juen が転落行方不明になる ●山岳年鑑、 '86、56-57 (W. Studer) /岩と雪、113、75 (-/*) / AAJ、1986、238-39 (-/*)
 / Moun、105、11
- 19 1985年秋 Japanese 青森県マナスル登山隊 対島巌 Iwao Tsushima 他8 東稜,9月15日BC=4400 m,74年日本女子隊ルートに近いクーロワールより東稜に取り付き10月4日6300 mにC4を設けたが、降雪のため19日断念 山岳年鑑,86,57 / AAJ,1986,239-40

- ② 1985 年秋 Japanese イェティ同人マナスル・スキー隊 降旗義道 Yoshimichi Furuhata 他6 頂上からのスキー滑降を目的に通常ルート, 10 月 22~23 日 7200 m の C 3 に達したが, 25 日 C 2 が雪崩に襲われ, テントから出られなかった Nima Norbu はクレバスに埋められて死亡し同時に装備も大半失う。このため断念 ●山岳年鑑, '86, 57/AAJ, 1986, 239
- ② 1985 年秋 Spanish, Basque 隊 Felipe Uriarte 他 6 通常ルート, 10月大雪のため C 3=6300 m で断念 ●山岳年鑑, '86, 57/ AAJ, 1986, 239
- ② 1985/86 年冬 Japanese カモシカ同人ペア 山田昇 Noboru Yamada, 斎藤安平 Yasuhira Saito 通常ルート, アルパイン・スタイル, 12月5日BC=4800 m, 5350 m, 6100 m, 6850 m とビバークし、9日頂上を目指したが7200 m で強風のため断念 BC に下る。11 日再出発 6100 m でビバーク降雪で一日停滞 13 日スノ ー・エプロン入口のクレバス (7050 m) で泊ま り 14 日頂上に立ち 7050 m でビバークして BC へ (56 年初登パーティの遺したピース缶を発 見持ち帰る。冬期第2登, 通算第26登) • 山田昇:マナスル冬期アルパイン・スタイル。 岩と雪、116、52-56、1986/一ヶ一: K 2、エ ベレスト、そしてマナスル。山岳、81年、 24-32, 1986/外山一郎: "遂にやった"山田 昇の快挙。岳人、465、38-43、1986年3月号 / Yamada, Noboru: Three Eight-Thousanders in One Year. IM, 21, 41-53, 1988/山岳年 鑑, '86, 57-58 (山田昇) / Moun, 108, 13/ AAJ, 1986, 240 (Noboru Yamada) / Hima, 17-10, 158;18-2, 29-30 (N. Yamada) :18-11, 171 /→Everest No. 51;K 2 No. 15
- 図 1986 年春 12 W. Germans-4 Austrians 合同隊 Michael Dacher 北東面通常ルート,5月3日7400mにC4を設ける。同日 Wilhelm Klaiber (German) が行方不明になる。翌日C4より下降中の Dieter Oberbichler (Austrian)が7200m付近で滑落死する。5月9日からのアタックもC3=6850mまで、激しい降雪のため11日断念 ●山岳年鑑、87、69/Moun、110、10/Hima、18-2、30/HCNL、40、9/AAJ、1987、246 (Michael J. Cheney)
- ② 1986 年 秋 Yugoslavia, Macedonia 隊 Jovan Poposki 他 9 Punggyen gl. より南東フェース (84 年秋ポーランド・ルート) 9月11日 BC=4250 m, 10月29日7400 mで断念 ●

- 山岳年鑑, '87, 70/AAJ, 1987, 246-47 (M. J. Cheney)
- ② 1986 年 秋 Colombian-Polish 合 同 隊 Carlos Eduardo Gomez 他 9 北東面通常ルート, 10 月 31 日 7250 m に C 4 を設けたが強風と寒さのため 11 月 2 日断念 ●岩と雪, 121, 83 / 山岳年鑑, '87, 70 / Moun, 113, 8 / Hima, 18-11, 172 / AAJ, 1987, 246 (M. J. Cheney)
- ⑩ 1986 年秋 6 Poles-2 Mexicans 合同隊 Jerzy Kukuczka 9月8日BC=4400 m を設け9月17日-10月26日東稜を試登,7750 m で断念,11月5日~10日に Manaslu gl. よりアルパイン・スタイルで北東壁を初登攀する。3人がBCを出発し、5500 m,6300 m,7300 m,7600 m,さらに11月9日頂上プラトー8000 mでビバークし凍傷になった Corlos Carsolio をそこに残して10日J. Kukuczka と Artur Hajzer が登頂(第27登)北東面通常ルートを下る。初トラバース ●岩と雪,123,95 (J. Nyka) / AAJ,1987,247 (一ヶ一) / Moun,114,12 / Hima,18-11,171-72 / 山岳年鑑,87,70 / HCNL,40,12 /
- ② 1987 年春 Spanish Enric Bassassera, Bareclona Francisco シェルバ2人を伴い北東 面通常ルート,4月8日 Naik Col 5600 mにC2 を設ける。多量の降雪と強風のためにBCに下る。4月21日C2に戻ったがキャンプが見付からず断念 ●AAJ,1988,213 (M. J. Cheney & E. Hawley) / Hima,19-2,32/IM,22,195/山岳年鑑、88,70
- 図 1987 年 春 3 Poles-2 Czechoslovaks-1 German Wojciech Szymanski 北東面通常ルートを7100 m まで往復して高所順応をなし南東壁に挑む。アルバイン・スタイルで5月19日6200 m, 20日6800 m に達したがルート悪く断念 ●岩と雪, 124, 95 (J. Nyka) / Hima, 19-4, 63 (一〃一) / 山岳年鑑, 788, 69-70/AAJ, 1988, 213-14 (M. Cheney & E. Hawley) / IM, 22, 195 / HJ, 44, 201 (Illustrated Note 3)
- ② 1987年秋 Japanese 青森県山岳連盟隊 松島静吾 Seigo Matsushima 他14 東稜に抜 けるクーロワールより東稜, 10月5日東稜上 5430 m = C1, 14日C2=5852 m ここより北東 面通常ルートに向けてトラバース(85年オー ストリア隊ルート) 17日C3地点まで登る。 25日C3=6300 m, 28日6500 m で断念。この

日 BC に下った工藤一義 Ichigi Kudo 隊員が脳血管障害で死亡する (BC=9月26日4400 m)
●岩と雪, 126, 94;127, 89/山岳年鑑, '88, 70 (松島静吾) / HCNL, 41, 34 / AAJ, 1988, 214 (M. Cheney & E. Hawley) / Moun, 120, 11/IM, 22, 197

- ⑨ 1987 年秋 Austrian-W. German 合同隊 Arthur Haid 他9 北東面通常ルート, 10月7日 C 4=7300 m より3人(内シェルバ1)登頂 (第28登) AAJ, 1988, 214 (M. Cheney & E. Hawley) / Moun, 120, 11;124, 10/IM, 22, 195/岩と雪, 130, 97/山岳年鑑, '88, 70;'89, 73
- ① 1987/88 年 冬 Andrew Evans (American), Andrzej Machik (Pole) 1 月 Makalu を 7500 m で断念後, 上記 2 人だけで Manaslu に転進北東面通常ルートをアルバイン・スタイルで登る。3月8日~9日, 12日の 2回の試登で 5400 m まで登ったが降雪ひどく断念 ●岩と雪, 130, 97/山岳年鑑, '89, 72/ Moun, 121, 11/HCNL, 42, 17/→ Makalu No. 39/AAJ, 1989, 210-11 (A. Evans)

MANASLU NORTH 7157 m

Nepal Manaslu Himal 28°36′14″N, 84°32′40″E ① 1983 年春 Joint British Services 隊 Douglas Keelan 他 11 南稜, 4月12日BC=3850 m, 29日東斜面に C 3=6750 m, 主峰の北のコル (Manaslu North Col) をへて 5月10日 Pat Parsons, Charles Hattersley, Terry Moore, Doug Borthwick が登頂(第2登)その後 5500 m~6100 mの峰 3 座に登る ●岩と雪, 102, 41 / AAJ, 1984, 250 (D. Keelan) / Moun, 92, 9

- ② 1984 年 W. German-Austrian 合同隊 Klaus Wanger 他 6 北面 5900 m で断念。殆 ど活動せず ●岩と雪, 109, 52
- ③ 1985 年秋 W. German-Austrian-Swiss 合 同隊 F. Zintl 他 北稜。大雪のため 4950 m で 断念 ●山岳年鑑、'86、58
- ④ 1986 年秋 Italian Guiseppe Milleri 他 6 北東面, 11月6日断念 ●Hima, 18-11, 172

MASA KONG (MASA KANG, MATSA GANG) 7165 m (7200 m)

Bhutan Himalaya 28°07'N, 89°42'E

① 1985 年秋 Japanese 京都大学隊 堀了平 Ryohei Hori 他 15 北東スパーより初登頂, 9 月 13 日北東氷河の北側アプレーション・バレーに BC=5025 m, 16 日 ABC=5400 m, 10 月 4 日前衛峰に北面より登頂, 8 日ここに C 2=6417 m をおき東峰につづく尾根を行き 12 日東峰直下の 6690 m に C 3 を設ける。翌 13 日横山宏太郎 Shotaro Yokoyama, 人見五郎 Goro Hitomi,中山茂樹 Shigeki Nakayama, 月原敏博 Toshihiro Tsukihara が主峰に初登頂, つづいて 14 日 4 人, 15 日 4 人が登頂する ●横山宏太郎:ブータンの秘峰マサ・コンに初登頂。岳人, 466, 36-40, 1986 年 4 月 号/堀了平:『偉大なる獅子マサ・コン峰登頂』。講談社, 1986/山岳年鑑, '86, 34 (横山宏太郎) / AAJ, 1986, 211 (Sadao Tambe); 1987, 219-21/HCNL, 40, 3

MASHERBRUM Karakorum Masherbrum Range

主峰 = 北東峰, 7821 m 35°38′36″N, 76°18′31″E

南西峰 7806 m 35°38′29″N, 76°18′23″E

- ① 1981 年春 American, Yosemute AC 隊 Chas Mac Quarie 他 6 主峰,北壁一西稜,5月14日,16日 Mundu gl. 4600 m=BC,6月6日雪崩の危険高く5486 mで断念,6月19日 Yermandendu gl. を登り Masherbrum La を越しSaling へ AAJ, 1982, 270-71 (Anne Macquarie) / 岩と雪,88,69-70 (Eric Reynolds)
- ② 1981 年春 British, Royal Air Force Mountain Association 隊 Emlyn J. M. Thomas 他 7 南西峰試登, 6月9日 BC=4100 m 着, 60 年主峰初登ルート, 22日 Dome 上に C 4=6200 m アルバイン・スタイルで登り 29日 C 6=7135 mを設け 7800 m まで登る。7月1日悪天候のため断念 AAJ, 1982, 271 (Emlyn J. M. Thomas)
- ③ 1981 年秋 Polish, Polski Klub Gorski 隊 Piotr Mlotecki 他 8 南西峰初登頂, 8月13日 Masherbrum gl. の支氷河 Serac gl. に BC = 4300 m, 上記隊と同じルート,9月15日 Volker Stallbohm (W. German)も加わって C 4 = 7100 m を設ける。翌16日 Zygmunt Andrzej Heinrich, Marek Malatynski, Przemyslaw Nowacki が南西面から主峰とのコルに登り雪洞ビバークし17日南西稜より南西峰に初登頂する。しかし下降中 Malatynski と Nowacki が死亡する ●AAJ, 1982, 271-72 (J. Nyka) /岩

と雪, 88, 70 (一ヶ一) /Moun, 82, 11-12 ④ 1981 年秋 W. German Volker Stallbohm 他 3 V. Stallbohm だけとなる。8月3日 Masherbrum, Serac gls. の合流点にBC=4500 m, 9月15日 Abdul Karin (HAP) と2人で Masherbrum 東稜と Yermanendu Kangri の間のコルの近く6800 m まで登る。Karim が病気になったため単独でコルに達したが Yermanendu Kangri (7163 m) への登路は発見出来ず,17日 7400 m で断念 ● AAJ, 1982, 272-73 (Volker Stallbohm)

⑤ 1983 年夏 Japanese 京都岳人クラブ隊 須藤 建志 Tateshi Sudo 他 4 7 月 3 日 Masherbrum, Serac gls. の合流点に BC = 4500 m, 17 日 Serac gl. の奥 5600 m に ABC を設け アルパイン・スタイルで南西壁に取り付く。31 日 7750 m のコルに達したが南西峰は断念,主 峰を目指す。8 月 15 日 6800 m を出発 7550 m にビバークして 16 日 2 人が主峰に登頂する (第4登) ●南裏健康:マッシャブルム・ア ルパイン・スタイル。山岳、79 年、60-65、 1984/京都岳人クラブ:マッシャブルム・アル パイン・スタイル。岩と雪、105、52-56、1984 / 岩と雪、102、69 (須藤建志) / AAJ、 1984、296

⑥ 1985 年春 5 Britons-3 Canadians-1 American 合同隊 Michael Searle Baltoro, K 2, Gasherbrum 山域での地質調査と北側 Baltoro 側からの Masherbrum 試登を目的に入山 6 月 18 日 Yermanendu gl. に BC を設け東稜に挑んだが、30 日断念 ● AAJ、1986、277-78 (M. Searle) /山岳年鑑、'86、95

⑦ 1985 年夏 Japanese 関西カラコルム隊 賀集信 Shin Kashu 他 10 北稜~北西稜~北 西フェース, 5月29日 Yermanendu gl. に BC= 4600 m, 6月6日北稜にC1=5600 m, 13日C 2=6100 m しかし懸垂氷河の崩壊に脅かされ北 西稜へと進み 29 日北西稜上に C3=6300 m, 7 月4日北西稜を越えて北西壁に入り11日主峰 と南西峰の中間にあるロック・バンド下に C4 =7200 m, 22 日和田城志 Jyoshi Wada, 外山哲 也 Tetsuya Toyama, 山本宗彦 Munehiko Yamamoto, 伊藤博昭 Hiroaki Ito が南西峰との コルに出てから 7550 m でビバーク 23 日登頂。 同日 C 4=7200 m からの 6 人も登頂 (第 5, 6 登)。頂稜で81年死亡したポーランド隊のM. Malatynski か P. Nowacki かの遺体を発見す る。ついで Broad Peak へ ●村井葵:マッシ ャ, ブロード・ピーク連続登攀。岳人, 462, 76-80, 1985 年 12 月号/重広恒夫:マッシャ ブルム北西壁初登攀。岩と雪, 114, 32-36, 1986/山岳年鑑, '86, 94-95/Moun, 106, 10 / Hima, 17-9, 132/HCNL, 40, 4/AAJ, 1986, 275-77 (Sadao Tambe) /→Broad Peak No. 26

⑧ 1985 年夏 Austrian Robert Renzler 他 5 主峰北西壁, 6月25日 Mandu gl. 4300 m = BC, 北西壁の左手, 北稜の側稜に取り付き30日 C 1=5500 m 関西隊のルートに合し7月10日 C 3=6300 m, 12日7200 m にデポを設ける。7月23日7200 m にビバークして翌24日 Andreas Orgler, Michael Larcher, R. Renzler が登頂(第7登), このあとウルドカス・ピーク(5980 m) に向い南東壁より登頂する ● AAJ, 1986, 277 (R. Renzler) / Moun, 106, 10;108, 10 / 山岳年鑑, '86, 95 / Hima, 17-9, 132

MAZENO PEAK 7120 m

Nanga Parbat から Mazeno Pass への山稜上

① 1986 年 夏 Benelux 隊 (Belgium-Netherlands-Luxemburg) Jan Vannees 他 4 Nanga Parbat の順応登山として7月13日~15日 Mazeno 山稜 5000 m のコルまで登る ◆→Nanga Parbat No. 46

② 1986 年夏 Spain, Valencia 隊 Alberto Posada 他2 北西フェース新ルート試登, M. Gomez の率いる Nanga Parbat 隊の隊員 3 名が 7月29日~8月6日アルパイン・スタイルで Diamir gl. の BC を出発し 6900 m まで登ったが 悪天候のため断念 ●山岳年鑑, '87, 110/ AAJ, 1987, 294 (A. Posada) /→Nanga Parbat No. 44

MENLUNGTSE (QIAO GERU, JOBO GARU)

Tibet, Rolwaling Himal I 峰=7181 m 27°58′16″N, 86°26′15″E

1 麻 = 7181 m 27 58 16 N, 86 26 15 E II 峰 (西峰) = 7023 m 27°58′07″N, 86°25′15″E

① 1987 年春 2 Britons-4 Norwegians 合同隊 Chris Bonington ネパールからチベットに入り 3 月 25 日北面 4100 m に BC, 北面, 南面を偵察後, 4 月 4 日西の肩 7023 m に突き上げる南西側稜の取り付きに C 1=5240 m を設け, 3 回アタックを繰り返したがいずれも嵐や雷の悪天候で失敗。最高到達点 6300 m で 4 月 24 日断

念。その間にメンルン盆地の奥に入り南東稜を 偵察する ● Bonington, Chris: Menlungtse, 1987。HJ, 44, 32-39, 1986・1987/岩と雪, 123, 93-94 / Moun, 116, 9 / AAJ, 1988, 275-78 (C. Bonington) / 山岳年鑑, '88, 49 (- 〃 -) / Hima, 19-4, 62-63 (Justyna Kolsto) / HCNL, 41, 47

MOMHIL SAR 7343 m

Karakorum, Hispar Muztagh 36°19′03″N, 75°02′10″E

① 1987 年春 W. German Gunter Schulz 他 3 初登ルートの南東壁 (64 年オーストリア), 6月25日 BC=4600 m 着,7月7日6350 m に C 3 を設け8日6600 m まで登ったが悪天 候で雪崩の危険高く断念 ●山岳年鑑, '88, 104 (G. Schulz) / AAJ, 1988, 260 (--/-)

MUZTAGH TOWER 7273 m (West summit, 7270 m)

Karakorum, Baltoro Muztagh, Lobsang group 35°49'44"N, 76°21'31"E

- ① 1983 年夏 American, Fantasy Ridge 隊 Michael Covington 他3 8月8日 Baltoro gl. 4300 m に BC を設け, 56 年フランス隊ルートの南東稜を登り 6400 m で断念, 8月31日 BC 撤収 ●岩と雪, 102, 68 / AAJ, 1984, 299 (M. Covington)
- ② 1984 年 夏 British-American Mal Duff 他 6 (内 American 1) 56 年イギリス隊ルートの北西稜,7月29日2人,30日2人登頂 (西峰,第3,4登),ついでGasherbrum IIへ ● Duff, Mal: The Second Ascent of the Mustagh Tower. AJ,334,74-76,1985/岩と雪,109,77 (M. Duff)/AAJ,1985,316-18 (-〃一)/ Moun,100,13/AAJ,1986,278 (Trevor Braham)/→Gasherbrum No.18
- ③ 1987年 S. Korean M. J. Lee 他 1 試登

NANDA DEVI MAIN (EAST) 7816 m

Uttar Pradesh (Garhwal) 30°22′32″N, 79°58′22″E

① 1981 年秋 Czechoslovak Milan Martaus 他 11 北東壁初登攀, 7月30日 Uttari Nanda Devi Gal に BC, 北東面の中央ピラーを Direttissima で登る。9月6日最終キャンプ C 4= 7200 m を設ける。15日 Leos Horka, Luduik Palecek, Kamil Karafa が 7500 m でビバーク

- し、16 日サポートの Otakar Srovnal. Bohumil Kadlcik と合流して登頂、19 日 2 人登頂(第 10、11 登) Smida. Vlastimil: Nanda Devi, 1981。 HJ、38、171-73、1980・1981/一ゥー: Nanda Devi's Northeast Face. AAJ、56、77-81、1982/Rakoncaj. Josef: North Face of Nanda Devi.1 Moun、83、28-31、1982/岩と雪、88、60:89、48-49(Vlastimil Smida)
- ② 1981 年秋 Indian Balwant S. Sandhu 他 10 (内女性 6) 南稜~西稜通常ルート, 8月 22 日 BC = 5000 m, 9月 9日 C 4 = 7400 m, 16日のアタックは強風のため頂上下 1000 feet で失敗, 19日 6人 (内女性 3), 21日 1人登頂(第 12, 13 登) ◆ AAJ, 1982, 241 (B. S. Sandhu) /岩と雪, 88, 61 / Moun, 84, 11 ③ 1981 年秋 Indian, Army Paratroopers 隊
- Major. K. I. Kumar 他 9月7日 Nanda Devi Sanctuary 4950 m に BC,南西稜にキャンプを 進め10月12日7200 m に C 4 を設けたが下降 中に Lakha Singh が滑落死する。16日4人が 登頂(第14登)したが下降中に Gyarsi Ram が墜死する。東峰に11名登頂 ●→ Nand Devi East No. 1
- ④ 1981/82 年冬 Thomas Gross (a Czech mountain lover, Swiss citizen) 81 年 9 月 27 日~82 年 3 月 21 日迄 Nanda Devi Sanctuary で単独越冬 目的, 行動は不明 ●岩と雪, 97, 11/HCNL, 36, 41-42 (Bill Aitken)
- ⑤ 1982 年 秋 Australian Michel Anthony Rheinberger 他 5 9月3日BC=4700 m, 25 日 C 3=6650 m, 27日 C 4 予定地 7150 m まで 登ったが悪天候のためテントが張れず断念 ● IM, 11, 126 / AAJ, 1983, 250 (M. Rheinberger)
- ⑥ 1982 年秋 Indian, Mountain Lover's Association, Asansol 隊 Pranesh Chaudhry 他 北 稜, 8月29日BC=Changabang, North Rishi gls. 合流点4800 m に設ける。9月14日C4=7350 m より P. Chaudhry と Sherpa Lakpa が登頂する。13日 Badal Dutta Gupta がC4からC3=6900 m へ下降中に、さらに17日 Amalesh Sengupta がC2へ下降中に共に転落死する(第15 登) ●1M, 11, 126/HCNL, 36, 20/岩と雪、95, 49

NANDA DEVI EAST 7434 m

Uttar Pradesh (Garhwal) 30°21′58″N, 79°59′30″E

① 1981 年秋 Indian Army Paratroopers 隊 Major Kiran I. Kumar 他 9月7日 Nanda Devi Sanctuary 4950 m=BC~南西稜, 10月4日 C4=7000 mより Captain Premjit Lalと Phu Dorjee が登頂したが下山中に死亡する。7日4人, 9日5人登頂 Daya Chand は下山中滑落死する。ついで主峰へ。(第7~9登) ● AAJ, 1982, 242/岩と雪, 90, 50/→ Nanda Devi Main No. 3

NANGA PARBAT 8126 m

Panjab Himalaya 35°14'21"N, 74°35'24"E

- ① 1981 年春 W. German Karl Maria Herrligkoffer 他 5月15日 Rupal 谷の Lathebow に BC=3700 m を設け南東側稜を目指したが大量の雪におおわれていたためあきらめて南西稜 Kinshofer route に転じ、6月16日 Diamir 側への下降点(7450 m)まで達したが雪崩の危険高く断念 AAJ, 1982, 280 (K. M. Herrligkoffer)
- ② 1981 年 夏 Dutch Ronald Naar 他 5 Rupal face~南西稜, 無酸素, 6月28日 Tap AlpにBC=3600 m, 7月14日C3=7000 m, 17日 Rupal faceの頂7450 mまで登りデポを設けBCに下る。一度失敗した後8月2日4人が再びC3に登り7500 mでビバーク4日 Diamir faceをトラバースして7550 mでビバークし、5日 Naar が単独登頂,他の3人は7900 mまでの間に次々と断念(南西稜第2登,通算第10登) Naar, Ronald: The Lonely Climb. HJ, 41, 109-16, 1983・1984/AAJ, 1982, 280-81 (R. Naar) /岩と雪,88,68 (Gerard G. van Sprang) / Moun,83,10
- ③ 1981 年夏 Italian, Bergamo 隊 Augusto Zanotti 他 62 年 Diamir 壁初登頂ルート,前 進キャンプを 4 ツ設け,8月19日3人登頂 (第 11 登) ● AAJ, 1982,281 (Paolo Panzeri) /岩と雪,88,68 (-->-)
- ④ 1981 年秋 Japanese 山岳同志会隊 大宮 求 Motomu Ohmiya 他 3 10 月 10 日 BC = 3800 m, Diama gl. から北峰 I の北西面をまわ りこむようにルートをとり 11 月 15 日 C 4 = 5420 m, 16 日 6025 m で断念 ●岩と雪, 88, 68-69 (大宮求)
- ⑤ 1982 年春 Pakistan Army 隊 4月 Diamir 側より試登, 1人死亡
- ⑥ 1982 年春 International, Fondation Suisse pour l'Exploration Alpine 隊 Harald Neve (2

Austrans-5 Swiss-1 Czech-3 W. Germans) 南西稜 76 年 Hanns Schell route, 5月7日 Rupal 谷に BC, 5月末C3=6800 m, 6月4日C4へ登攀中 Dr. Peter Forrer が雪崩で死亡。このため断念 ● AAJ, 1983, 283-84 (Hans Zebrowski)

- ⑦ 1982 年春 Swiss Stefan Worner 他 7 62 年 Kinshoffer route, 5月9日 Diamir face の 下に BC, 6月5日 Bazin Col, 10日2人登頂1 人は肩まで(第12登)。高山病で Peter Hiltbrand 死亡 ● AAJ, 1983, 286-88 (Erhard Loretan) /岩と雪, 95, 59 (Stefan Worner) / Moun, 88, 11;89, 13
- ⑧ 1982 年春 France-W. German-Swiss 合同隊 Yannick Seigneur 他 8 5 月 9 日 Rupal face の直下に BC=4200 m, 南東側稜, 左手から取り付き 6 月 13 日 Y. Seigneur と S. Schaffter が 7100 m まで達し最も困難な部分を登り終える。6 月 20 日 Seigneur 隊長がセラック雪崩で重傷を受けたため断念, 6 月 7 日 C 1 付近でポーター 1 人転落死する AAJ, 1983, 284 (Stefane Schafter) / Moun, 87, 11;88, 11 / 岩と雪, 95, 58
- ⑨ 1982 年 夏 International 隊 Pierre Mazaud (8 French-2 German-1 British-1 Czech-2 Pakistani) Mummery リブを狙ったが断念, Diamir face 62 年初登ルートへ転進, 7月12日7400mにC4を設け、14日 Hans Englが単独登頂する(第13登) AAJ, 1983, 288/岩と雪, 95, 59-60 (P. Mazeaud) / Moun, 88, 11/La montagne et alpinisme, No. 4, 1982
- ⑩ 1982 年夏 International 隊 K. Herrligkoffer (2 Polish-6 German-1 Swiss-1 Pakistani), 7月8日BC=3650 m, 南東側稜, 側稜の右手 Bazhin gl. の 3800 m から取り付き 約 5800 m で Seigneur 隊のラインに合流 8 月 14 日 C 5=7300 m を設ける。15 日 7850 m で断 念,16日4人が頂上を目指したが主峰と南峰 の肩とのコルから50m下迄達し断念,しかし 深いガスの中ではぐれた Ueli Buhler はそれを 知らずに登りつづけ8000 m でビバークして翌 日南の肩(南峰, 8042 m) に初登頂する • Herrligkoffer, Prof. Dr. : The East Pillar of Nanga Parbat. AJ, Vol. 89, No. 333, 21-29, 1984 / - " - : The East Pillar of Nanga Parbat, 1982. HJ, 39, 124-28, 1981 · 1982/ AAJ, 1983, 284-86 (K. M. Herrligkoffer) /

岩と雪, 95, 58-59 (J. Nyka) / Moun, 88, 11/山, 452~454, 1983

① 1982 年夏 Spanish Angel Lauda Vidarte 他 3 8月 西面偵察, Ganalo Peak の 6400 m ま で ◆AAJ, 1983, 289 (Angel Landa)

② 1983 年春 French Liliane & Maurice Barrard 他 2 6月 Diamir route の新ラインを 2 度試登, 7950 m と 7850 m まで登る ●岩と 雪, 102, 62/AAJ, 1984, 305

①3 1983 年春 Japanese 登歩渓流会隊 国井 治 Osamu Kunii 他 10 76 年南西稜オースト リア・ルート、4月23日 Rupal 谷 3600 m に BC. 6月4日C4予定地=7400mまでルート 工作を終える。17日福岡登高会隊の先行パー ティの2人と共に7000 m 付近で行動中雪崩に よって志村一夫 Kazuo Shimura 隊員が Rupal 側に落ち行方不明になる。このため断念 ●岩 と雪、102、60 (玉田仁) /AAJ、1984、305 (4) 1983 年春 Japanese 福岡登高会隊 新貝 動 Isao Shinkai 他 16 南西稜オーストリア・ ルート、5月19日BC=3600m, 27日5400m までルート工作して登歩渓流会のルートと合 流, 6月14日C3=6500mを設ける。17日C3 上部の雪面で雪崩が発生し登歩渓流会隊と行動 していた隊員2名が負傷する。7月10日にC5 =7500 m を設けたが、許可期間内に登頂の見 込みがないため 11 日断念。翌 12 日 C 3 上部で 大雪崩が発生し山田信義 Nobuyoshi Yamada, 飯田敏 Satoshi Iida, 高森雄一郎 Yuichiro Takamori の 3 人が行方不明になる ●山岳, 79, 47, 1984 / HJ, 40, 204 (Illustrated Note 9) /岩と雪, 102, 61 (副島勝人)

IB 1983 年夏 Austrian Walter Gottinger 他 5 南西稜(Rupal 側 Kinshofer route), 7月 10日 Baruntse を終えた Edi Koblmuler と Fred Pressl がアルバイン・スタイルで登り 7月 17日 E. Koblmuler が単独登頂する(第 14 登), Pressl は Baruntse での凍傷のため 7950 m で断念 する ● AAJ, 1984, 302-03 (E. Koblmuler):305-06 (W. Gottinger) / Moun, 95, 10/岩と雪, 102, 61

1983年夏 Japanese 川崎市教員隊 (スピダーニェ同人) 坂原忠清 Tadakiyo Sakahara
 他4 北東稜 (53年ルート),7月28日BC=3967 m,8月10日C4=6100 m,18日
 MohrenkophにC5=7050 mを設けたが19日吹雪のため断念。8月14日 Chongla South (6448 m)に西面より2人,16日1人が登頂する

山岳 79, 47, 1984/AAJ, 1984, 304-05/岩と雪, 102, 62 (坂原忠清)

① 1983 年夏 Japanese 富山県山岳連盟隊 木戸繁良 Shigeyoshi Kido 他 13 82 年夏 Diamir gl. に BC をおき 5800 m 地点まで登り偵察 する。83年本隊は6月5日BC=4360m, 62年 Kinshofer route, 23 日 C 4=7300 m を設け 25 日アタック、深い雪のため Bazhinscharte 7800 m で断念2日後の第二次隊も Bazhinscharte で 天候悪化のため引き返す。29 日 7850 m に C 5 を設け 30 日谷口守 Mamoru Taniguchi と中西 紀夫 Norio Nakanishi が 8070 m の肩でビバーク し翌31日登頂(第15登,日本人初登頂) ● 高塚武由:ナンガ・パルバート西面ディアミー ル壁登頂。山岳, 79年, 72-79, 1984/富山岳 連登山隊:ナンガ・パルバット登頂。岳人, 437, 25-28, 1983年11月号/「魔の山」ナン ガ・パルバットの栄光と悲劇―日本人初登頂を めざした隊の記録から。山と渓谷,565, 30-35, 1983年10月号/岩と雪, 102, 62/ AAJ, 1984, 306 (S. Kido) / Moun, 94, 11/ 報告書, 1985

岩と雪, 102, 62/AAJ, 1984, 306 (S. Kido) /Moun, 94, 11/報告書, 1985

- ③ 1983年夏 Spanish, Basque隊 Jose Luis Zuloage 他4 西面 Diamir 側 (8070mの肩を通らずに直接頂上に出るルート), 7月15日BC=4000m順応のために C1, C2を設け6900mまで登る。8月3日アルパイン・スタイルで C2を出発して6800m, 7300mとビバークして8月5日2人が登頂する(第16登)●AAJ, 1984, 306 (Jose Luis Zuloage)/岩と雪, 102, 62
- 1983 年夏 W. German Pavel Dolecek 他7 南西稜, 8月5日BC, 13日C3=6800 mまで ●岩と雪, 102, 61 (P. Dolecek)
- ② 1983 年夏 France Erich Beaud 他 2 西面 Diamir Face, 8月14日よりアルパイン・スタイルでアタック 6150 m, 6900 m, 7400 m とピバークして 18日 7600 m で断念 AAJ, 1984, 306 / Moun, 94, 11 / 岩と雪, 102, 62 ② 1983 年秋 American Rick Wyatt 他 3 9月 20日 BC 着 Ganalo Peak で高所順応をしてから西面 Diamir face 62 年ルート, Kinshofer Gully 5750 m まで,同 Gully が最悪のコンディションの上に落石で1人負傷したため断念 AAJ, 1984, 307 (Rick Wyatt) / 岩と雪, 102, 62 (H. A. Carter)

- ② 1984 年春 Swiss Marcel Ruedy 他 6 西壁 (Diamir 壁) 62 年ドイツ隊ルート, C1, C2 を設ける。4月30日 Manaslu に登ったRuedyが5月19日BCに入りC3, C4を設けた後6月3日単独登頂する(第17登) ●岩と雪, 109, 70
- 図 1984 年春 Japanese U-TAN クラブ隊 長谷川恒男 Tsuneo Hasegawa 他 3 5月8日BCを設け付近の無名峰で順応の後6月3日南西稜の6000 m に ABC をおき, 25日 7450 m のコルを越して Diamir 側に移り6月26日 rockband, 7500 m で断念 ●岩と雪, 109, 70 (中里好宏) / AAJ, 1985, 332
- 図 1984 年春 France Maurice & Lilianne Barrard 夫妻 6月9日 Diamir 谷 4100 m = BC, 4900 m に ABC をおき西壁アルバイン・スタイル, 6100 m, 6800 m, 7300 m, 8000 m と 4回ビバークして 6月27日夫妻で登頂(第18登,ドイツ・ルートのバリエーション) ●岩と雪, 109, 70 / AAJ, 1985, 332 (M. & L. Barrard) / Moun, 99, 10
- ⑤ 1984 年春 Japanese 日本ヒマラヤ協会隊 角田不二 Fuji Tsunoda 他 3 南壁中央側稜 (70 年ドイツ隊ルート) 6月 25日 C 3=6700 m, 7月 6日再び C 3 に入ったが 18 時到着の連 絡があったまま翌日から消息絶つ。おそらく C 3 から下降中 4 人全員=角田不二 Fuji Tsunoda, 今給黎宣幸 Nobuyuki Imakurei, 肥田繁男 Shigeo Hida, 小暮孝 Takashi Kogure が 雪崩に呑まれたのか? ● AAJ, 1985, 333/ Moun, 99, 10/岩と雪, 109, 71
- ⑩ 1984 年春 Japanese 京都岳人クラブ隊 須藤建志 Tateshi Sudo 他9 西壁を3パーティにわかれてアルパイン・スタイルで7月10 日から1日毎に頂上を目指したがあと200mを 残して断念 ●岩と雪,109,70/AAJ, 1985,332
- ② 1984 年 夏 Spanish, Catalana 隊 Jordi Magrina 他 4 南西稜 (Schell route のバリエーション) 7月4日 BC=3550 m, 8月5日南西稜のコル 7500 m に登りここから Diamir 側に下ってトラバースし頂上からの大きなクーロワールの脇に C5、8月7日このクーロワールを登って 2人が登頂する (第19登) 帰路は 7500 mのコルのもう一つ南西よりの 7300 m のコルに向いそこでビバークして BC へ ●岩と雪、109、70-71 (J. Magrina) /AAJ、1985、333 (--/-0-)

- 図 1984 年秋 Japanese U-TAN クラブ第二次隊 長谷川恒男 Tsuneo Hasegawa 南壁中央側稜 (70 年 Rupal route) を単独でアタック, 1回目は10月17日 6700 m まで, 2回目は10月31日 C 7650 m で断念 (BC までトレッカー4人を伴う) ●長谷川恒男:「メルクルリンネ」間断なき雪崩の道からの撤退。山と渓谷,584,170-76 及びカラーグラフ 14-15,1985 年2月号/岩と雪,109,71 (長谷川恒男)/AAJ,1985,332/Moun,99,10
- 29 1984 年秋 Japanese 山学同志会隊 大宮 求 Motomu Ohmiya 他 8 10 月 6 日 BC=3970 m, 順応をかねて Ganalo Peak 南西稜を登る。 C3=5450 m より西峰 (6290 m) に10月15日 3人, 17日3人登頂, 10月20日より Nanga Parbat 登攀開始, Ganalo Peak の裾を巻くよう にして Diama Col に向い 11 月 9 日コルの少し 上に C 6=6270 m, 北峰 II (7745 m) の北西稜 に取り付き 27 日 C 7=6280 m, 29 日 6450 m ま でルート工作を終える。しかし12月3日から のアタックも悪天候のため C7まで。11月8 日下降中の瓶田裕巳隊員 Hiromi Kameda が 6050 m 地点で滑落死する ● 滝田よしひろ: 人喰い山ナンガパルバットへの道。上、山と渓 谷, 580, 183-88, 1984年11月号:中583, 193-99, 1985 年1 月号;下, 585, 176-83, 1985 年3月号/岩と雪, 109, 72/AAJ, 1985, 334 ③ 1985 年春 American Tony Lewis 他 5 Rupal 側から南西稜、5月12日 Tap Alp の BC =3600 m 着, 6月12日C3=7000 m, 隊員が 次々と病気で脱落し最後のアタックも6月24 日 6550 m で断念 • 山岳年鑑, '86, 105/ AAJ, 1986, 287-88 (Mark Udall)
- ③ 1985 年春 International 隊 Stefan
 Worner 他9 西面 Diamir 谷 62 年ドイツ隊
 ルート,5月18日BC着,6月に入って断念
 ●山岳年鑑,86,104
- ② 1985 年春 French Bernard Muller, Laurence de la Ferriere 夫妻 (ペア) 西面 62 年ドイツ隊ルート,5月28日BC=4200 m 着,6月7日C3=6900 m,7月4日C4,8日12:30福岡大学隊と一緒に登頂(第20登) ●AJ,1986,288-89 (Bernard Muller) /山岳年鑑,786,105
- 図 1985 年春 Japanese 福岡大学山岳会隊 植松満男 Mitsuo Uematsu 他 13 西面 Diamir 側 62 年ドイツ隊ルート, 5 月 21 日 BC=4100 m, 7 月 4 日 C 5=7600 m, 8 日 2 人がフランス

隊の5分後12:35に登頂(第21登)。なお1977年アメリカ隊の隊員 Bob Broughton と思われる遺体をC2の下で発見 Diama gl. の横に埋めケルンを積んで葬る ●山岳年鑑, 86, 104-05 (植 松 満 男) / AAJ, 1986, 288 (Mitsuo Uematsu)

- 到 1985年夏 Japanese 札幌山岳会隊 清水一行 Kazuyuki Shimizu 他 7 初登ルート、Rakhiot gl. から北東稜, 6月10日BC=4000m,モーレンコップにC5=6900mを設け7月11日7550m地点でクレバスに阻まれて引き返す。4人が帰途C5近くのRakhiot Peak (7070m)に登頂する ●山岳年鑑、'86,104/AAJ, 1986,290/→Rakhiot Peak No.1
- ⑤ 1985 年 夏 Austrian Peter Habeler, Michael Dacher 西壁 78 年 Messner route を計画していたがより安全なドイツ隊ルートに変更し、7月11日2人はポーランド女性 Midowicz-Wolf とポーランド隊の C 4 跡 7400 m でビバークして翌12日登頂(第22登)、7月6日の最初のアタックは荒天のため失敗 ●山岳年鑑、86,105 (J. Nyka) /AAJ, 1986,290
- ⑩ 1985 年夏 Polish Pawel Mularz 他 14 Rupal 側より南東バットレス(82 年 Herrligkoffer 隊南峰 8042 m まで登る), 5月 26日 BC = 3650 m, 7月 11日 C 5 = 7200 m, 12日 7800 m でビバークして 13日 Poles, Jerzy Kukuczka, Zygmunt Andrzej Heinrich と Carlos Carsolio (Mexican), Slavomir Lobodzinski (American) が南東稜を初完登して登頂(第 23登) 7800 m でビバークして BCへ。7月 10日 Piotr Kalmus が C 2 から C 1 へ下降中雪崩で死亡する ●山岳年鑑, 86, 106(J. Nyka)/AAJ, 1986, 290
- ② 1985 年夏 Polish 女性隊 Dobroslawa Midowicz-Wolf 他4 西面 62 年ドイツ隊ルート, 5 月 29 日 Diamir gl. 4200 m = BC, 7 月 5 日 Bazhin Basin に C 4 = 7400 m, 9/10 日雪崩で C 4 は流される。11 日 Midowicz-Wolf が Habeler, Dacher と C 4 跡でビバークして 12 日頂上を目指したが 2 時間遅く出発したため頂稜8075 m で引き返す。 Wanda Rutkiewicz, Anna Czerwinska, Krystyna Palmowska は C 4 を再建し 13 日アタックしたが深い雪と悪天候に阻まれて 7900 m で断念、15 日この 3 人が登頂(第 24 登、女性だけによる初登) ●山岳年鑑、86, 105 (J. Nyka) / AAJ, 1986, 289 (一 9 / Moun, 105, 13

- 図 1985 年夏 Japanese 福岡登高会隊 新貝 勲 Isao Shinkai 他 5 Pasu に登頂後, 南西稜 を目指して Rupal 谷に入り 83 年同隊ルート, BC = 3600 m, 8 月 12 日 C 3 = 7000 m, 14 日 7250 m で断念 ◆山岳年鑑, '86, 105-06 (新貝勲) / AAJ, 1986, 287 (I. Shinkai) / → Pasu No. 2
- 9 1985 年秋 Japanese 高山研究所(イェティ同人)隊 遠藤晴行 Haruyuki Endo 他 3 西面ドイツ・ルート、アルバイン・スタイル、9月11日 BC、21日「鷲の巣」の基部の6050 m でビバーク、22日大氷壁基部の6500 m、そして23日6800 m でビバークしたが翌日も天候回復せずC1へ。28日 BC 撤収 ●山岳年鑑、86、105 (遠藤晴行)
- ⑩ 1985 年夏 International 隊 Doug Scott 他11 Diran, Rakaposhi を終えて Rupal 谷に入 り 8 月 12 日 3600 m に BC を設ける。 Rupal Peak(5970 m)に西面の新ルートを 3 回ビバ ークして登頂後南西稜を 7300 m まで登る ● 山岳年鑑, '86, 106/→Diran No. 8:Rakaposhi No. 6
- ② 1985 年夏 Spanish A. G. Astudillo 南壁, 断念
- ③ 1986 年夏 Japanese サンナビキ同人 (関西学生山岳連盟 OB) 隊 和田城志 Seishi Wada 他 6 南壁中央稜 (70 年 Messner ら初登), 5月24日 Rupal 谷 Tap Alp に BC=3560 m, Wieland 氷田を左斜上して中央稜に達し Werzenbach Couloir を突破して 6月29日 C 4=6700 m, 7月4日頂上岩壁の基部に C 5=7350 mを設け 6日7600 mで引き返す。7月30日と31日のアタックも7750 mで断念、8月3日 BC ●岩と雪、119,95:121、88 (和田城志) /山岳年鑑、87,110 (一ヶ一) / AAJ、1987、294/報告書
- ④ 1986 年夏 Spanish, Valencia 隊 Miguel Gomez 他 8 Diamir 壁通常ルート, Bazhin Basin ~ 83 年 Basques 隊ルート, 7月8日 BC 着, 8月6日最初のアタックは7200 m まで。 15日 Benelux 隊の5人とイタリア, スペイン 両隊の計11人がアタックし, スペイン隊の3

人がイタリア隊の2人と共に登頂する(第25 ●岩と雪, 119, 95 (Hans Lanters) / 山岳年鑑, '87, 109 (J. Nyka, H. Lanters, Jan Vanhees) / AAJ, 1987, 292 (MIguel Gomez) 45 1986 年 夏 Italian, Citta Di Decco 隊 Marco Gunnella 他 4 Diamir 壁通常ルート, 7月20日BC=4200m,8月1日C4=7000 m, 14 日のアタックはスペイン隊と共に7500 m で失敗、翌15日2人がスペイン隊の3人と 共に登頂(第25登) • AAJ, 1987, 293 46 1986 年夏 Benelux 隊 (3 Belgians-1 Luxemburger-1 Netherland) Jan Vanhees Mazeno 山稜の 5000 m のコルまでと Ganalo Peak の 5500 m まで登って順応を終え、Dimair 壁通常 ルートをアルパイン・スタイルで登る。7月7 日 BC=4150 m, 8月2日アタックに出発4850

到達点で断念, 15 日 5 人がイタリア, スペインの両隊とアタックに出発したが 4 人が 7400mで, あと 1 人も頂上直下で引き返す。しかし 16 日このうちの 3 人が登頂する (第 26 登)

● Lanters, Hans: Benelux Nanga Parbat Expedition, 1986。 日J, 43, 153-55, 1985・86/Moun, 111, 10-11/AAJ, 1987, 293 (Hans Lanters)

④ 1986 年夏 Polish Kazimierz Malczyk 他

m, 6000 m, 6800 m とビバークして 6 日 7200 m で断念 BC へ。2 回目 11 日出発 14 日前回の

④ 1986 年夏 Polish Kazimierz Malczyk 他 6 Rupal 側南西稜, 8月4日 Diamir Face route の下に BC, 1週間後 6900 m に C 3, 8月13日より天候悪化,5度 C 3 へ行こうとしたが出来ず断念 ● AAJ, 1987, 294 (Zbigniew Kowalewski)

個 1987 年春 Spanish, Basque 隊 Javier Bermejo 他 3 5月~6月 西壁, C 2=6100 m まで • 山岳年鑑, '88, 107/HCNL, 41, 43 ④ 1987 年夏 Italian, Quota 8000 第 3 次隊 Gianni Calcagno 他 9 西壁アルパイン・スタ イル, 6月20日BC着, C2=6750m, 6月29 日のアタックは Bazhin Basin で深い雪と天候 悪化のため 7300 m で引き返す。7月5日ビバ -ク3回の後3人が登頂 (第27登), また Benoit Chamoux は 4 日 20:30 に BC を出発三人 のトレイルを追い23時間で頂上に達する(第 ヤマケイ・ジャーナル・トピック 28 登) ス:山と渓谷, 630, 82-83, 1988年1月号/ Moun, 117, 8/HCNL, 41, 43/AAJ, 1988, 262-63 (Tullio Vidoni) /岩と雪, 125, 101/ 山岳年鑑, '88, 107-08

⑩ 1987 年 夏 Spanish, Civico-Militar 隊 Santiago Arribas 他 12 西壁 Kinshofer = Schell route, 7月6日BC=4200 m, 8月9日4 人登頂(第29登)第二次隊は7500 mまで ● Moun, 117, 8/HCNL, 41, 43/AAJ, 1988, 263 (S. Arribas) /山岳年鑑、88, 108

⑤ 1987 年夏 Japanese 川崎教員隊 坂原忠 清 Tadakiyo Sakahara 他 6 西壁 Kinshofer= Schell route, 7月28日BC=4500m, 8月9日 Bazhin Gap の下の 7200 m に C 4, さらに仮 C 5 を設けて3度試登の後,8月19日2人登頂 坂原忠清:執念のナンガ・パル (第30登) バット。山と渓谷, 629, 154-57, 1987 年 12 月号/一ヶ一:風雪のディアミール。岩と雪, 126, 64-70, 1988/-/一: 銀鞍の彼方へ。 上, 山と渓谷, 643, 177-83, 1989年2月号, 中, 644, 171-77, 1989年3月号:下, 645, 179-82, 1989 年 4 月号/Moun, 117, 8/ HCNL, 41, 43 / AAJ, 1988, 264 (T. Sakahara) /山岳年鑑, '88, 108-09 (坂原忠 清) /報告書/川崎教員登山隊: 苦節四年ナン ガ・パルバートふたたび、岳人、486、68-69、 1987年12月号/川崎市教員登山隊87:ディア ミール壁の女神はほほ笑んだ、岳人、487、 92-97, 1988年1月号

図 1987 年夏 Japanese アウトドアーズ・ジャパン隊 王田仁 Hitoshi Tamada 他 4 Rupal 側, 南壁中央側稜 (70 年 Messner route), 7月 31 日 BC, 8 月 23 日 C 3 = 雪洞, 24 ~ 26 日 Werzenbach Couloir にルート工作, 9 月 3 日 6550 m 地点で氷雪崩にあい 3 人負傷する。13 日から再度アタック, 19 日 Merkl ice-field を抜けたが 20 日天候悪化のため断念 ●岩と雪, 125, 102/山岳年鑑, '88, 109 (玉田仁) / AAJ, 1988, 264

③ 1987 年春 Australian James Van Gelder Rupal Face, 失敗 ●HCNL, 41, 43, 1988 ④ 1987 年夏 American Mark Hesse 他 3 6月 28日 Tap Alpに BC = 3810 m, アルパイン・スタイルで南壁を登るため 7月 6日 4267 m峰, 7日 5273 m峰, 9~11日 5486 m峰, 13~15日 6096 m峰, 17日から Mazeno Peak で順応をする。しかし雪の状態悪く南西稜(76年オーストリア・ルート)へ転進, 2回の試登の後, 8月 15日 Andrew Lapkass は単独で BCを出発 6日間登りつづけ 7700 m で断念 ●山岳年鑑, '88, 109 (M. Hesse) /AAJ, 1988, 263-64 (一々一)

NGOZ (J) UMBA KANG Mahalangur Himal, Khumbu group

I 峰=7916 m 28°06′21″N, 86°41′05″E II 峰=7743 m 28°06′22″N, 86°42′22″E III 峰=7681 m 28°06′22″N, 86°42′45″E

- ① 1982 年 秋 4 Frenchmen-2 Belgians-3 Sherpas 合同隊 Guy Cousteix (F) 南面より、キャンプを3ツ設け、10月13日深い雪のため7000mで断念 ●岩と雪、95、38/AAJ、1983、232
- ② 1982 年秋 7 Koreans-3 Nepaleses 合同隊 Park Dong-Gyo I 峰, 南面から国境稜線(北東稜), 4 キャンプを設け11月2日 Kim Yong-Han と 2 Sherpas Ang Tsering, Dorje が初登頂する ●岩と雪, 95, 38/AAJ, 1983, 232/Moun, 89, 12
- ③ 1983 年秋 11 Japaneses 福岡登山研究会隊
 3 Nepaleses 合同隊 重藤一美 Kazumi
 Shigefuji Ngozumba Kang I に南面から登り
 Cho Oyu へ縦走する計画であったが順応の失敗
 と悪天候のため Ngozumba Kang 頂上直下の
 7720 m で 10 月 16 日断念 ●岩と雪, 102, 36
 / AAJ, 1984, 243 / Moun, 96, 12 / → Cho
 Oyu No. 5
- ④ 1985 年春 12 Poles-2 Americans 合同隊 Waclaw Otreba 前年春のイギリス隊と同じ Cho Oyu との間のコルから Cho Oyu の登頂を目的に入山, アルバイン・スタイルで2パーティが挑む。5月 14 日東壁からの雪崩が ABC を 襲い隊員に重傷を負わす。ボーランド隊員はこの救助に向かう。残ったアメリカ人ペアは5月20日 7746 m のコルに達し、22 日アタックしたが失敗、キャンプに引返し反対側の Ngozumba Kang I に 登頂する(第2登) AAJ, 1986, 234-35 / Moun, 105, 11 / → Cho Oyu No. 15
- ⑤ 1986 年秋 Japanese 北九州ヒマラヤ同人 隊 白石宣夫 Nobuo Shiraishi 他 7 南面 9 月 1日 BC=5300 m, 27 日 7500 m で時間切れのた め断念, 10 月 2 日 Cho Oyuへ ●山岳年鑑, *87, 64 (山下健夫) / Hima, 18-7, 111/→ Cho Oyu No. 22
- ⑥ 1987 年秋 Yugoslavian, Zagreb 隊 Darko Berljak 他 13 10 月 15 日 Lungsampa gl. のモ レーン上に BC=5200 m, 65 年明治大学隊の南 東壁に対してその左にあるリッジをダイレクト に登り南稜より 11 月 11 日 II 峰に Boris Kovacevic と Branko Puzak が登頂する(第 2

- 登), 13 日 3 人がアタック 7500 m で 1 人断念したが 2 人が登頂 (第 3 登) AAJ, 1988, 207-08 (D. Berljak) / HCNL, 41, 35/岩と雪, 127, 87/山岳年鑑, '88, 67/HJ, 44, 200 (Illustrated Note 1)
- ⑦ 1987/88 年冬 S. Korean Chung Jin-Yang 他8 Cho Oyu とのコルを目指してルートを拓 いたが、Cho Oyu 東稜は困難と見て Cho Oyu を断念し東の Ngozumba Kang I に向い 2月11 日 Yu Wang-Yul と Choi Mi-Ho が冬期初登す る(第 3 登) ● AAJ, 1988, 211-12 (E. Hawley) / 山岳年鑑、88, 66-67/→Cho Oyu No. 36

NILGIRI Nepal Annapurna Himal 北峰=7061 m 28°41′21″N, 83°44′48″E 中央峰=6940 m 28°40′45″N, 83°44′19″E 南峰=6839 m 28°39′15″N, 83°43′58″E 南東峰=6765 m 28°38′56″N, 83°44′12″E

- ① 1981 年春 Japanese ニルギリの会隊 岩 崎元郎 Motoo Iwasaki 他 5 南峰, 4月5日 BC = 4250 m 着, 南壁中央クーロワールに挑 む。最高到達点 4月11日 5750 m 雪崩と落石の 危険が高まってきたため断念 ●岩と雪, 88, 56 (武川俊二) / AAJ, 1982, 235
- ② 1981 年春 Japanese 福岡グレイシャー・クライマーズ・クラブ隊 白石宣夫 Nobuo Shiraishi 他9 北峰,4月3日 BC=3850 m, Tilitso Westo (6492 m) の北稜に取り付き 24日頂上直下に C 3=6200 m を設け 27日同峰に登頂,アルパイン・スタイルで北峰東稜の縦走に挑む。5月7日北峰に日野悦郎 Etsuro Hino,宮崎豊文 Toyofumi Miyazaki と Ang Pasang が登頂(第2登),10日4 Km の稜線を往復し6回のビバークの後 C 3 に帰る ●高尾響:ニルギリ北峰東稜。山岳,77年,103-08,1982/岩と雪,88,55(高尾響)/AAJ,1982,234 (N. Shiraishi)/Moun,80,12-13
- ③ 1981 年秋 Japanese 登攀俱楽部求道心隊 鈴木荘平 Sohei Suzuki 他 2 南峰,南西稜, 9月12日 Horn Khola に BC=4000 m, 10月11 日 C 3=6000 m, 12日 6700 m まで登る。15日 隊長が落石事故で負傷したため断念 ●岩と 雪,88,56(鈴木荘平)/AAJ,1982,235
- ④ 1981 年秋 French Bernard Moreau 他 6 北峰, 北壁をトラバースして北峰西稜に抜けよ うとしたが 10 月 22 日 5950 m で断念 ●

- Moreau, B.: French Himalayan Expedition to Nilgiri North, 1981. HJ, 39, 169-71, 1981・1982/ AAJ, 1982, 234/岩と雪, 88, 56
- ⑤ 1982 年春 S. Korean Kim Ki-Heyg 他 2 中央峰 (79 年日本隊ルート), 4月11日 BC= 4150 m, 21 日アイス・フォールの上 6100 m に C 3, 25 日南東稜より頂稜に出て 3 人全員とシェルバ 2 人が登頂 (第 3 登) ●岩と雪, 95, 46 (Kim Ki-Heyg) / AAJ, 1983, 245 (一ゥ ー)/Moun, 86, 12
- ⑥ 1982 年春 Japanese 石川県勤労者山岳連盟隊 杉下健治 Kenji Sugishita 他 6 北峰南東稜 (Miristi Khola からの新ルート), Tilitso Peak の末端に BC = 4200 m, 5月2日C4=6450 m, 3日6700 m 峰と北峰間の雪稜で引き返す。4日杉下隊長 K. Sugishita, 山口敬次 Keiji Yamaguchi, 池内賀代 Miss Kayo Ikeuchi と Sherpas Dawa Norbu, Pangma が登頂(第3登) ●山岳, 78年, 106-07/岩と雪, 95, 46-47 (杉下健治)/山と仲間, 1982年9月号/AAJ, 1983, 244/Moun, 86, 12
- ⑦ 1982 年秋 British Michael Fowkes 他 1 北峰南東稜, 9月 28日 6160 m まで ●岩と 雪, 95, 47/AAJ, 1983, 245
- ⑧ 1982 年秋 W. German Hans Tischlinger他 14 北峰西稜を計画していたが、BC に入る前に登山中止●岩と雪、95、47
- ⑨ 1983 年 秋 Australian Army 隊 Zacharakis Zaharias 他 7 北峰南東稜, 10月8日 Great Barrier の西端に BC=4050 m を設け, 10月24日3人, 26日5人 (内シェルバ1) が登頂 (第 4, 5 登) Zaharias, Capt Zac.: Australian Army Nilgiri North Expedition, 1983. HJ, 41, 50-54, 1983・1984 / AAJ, 1984, 260 (Z. Zaharias) / Moun, 96, 12/岩と雪, 102, 46
- ⑩ 1984 年 秋 5 Japaneses-4 Slovaks-1 Frenchman 武川俊二 Shunji Takegawa 南峰, Annapurna 北面ルートを登る前に南峰南壁を目指す。10 月 11 日 Nilgiri 北峰東の支峰(6000 m) に 2 人が登頂したが南峰南壁は10 月 23 日 5900 m で断念 ●岩と雪, 109, 56/AAJ, 1985, 291/→Annapurna I No. 18;Tilitso Himal No. 8
- ① 1985 年春 8 Poles-1 W. German Zbigniew Mlynarczyk 北峰, 北面から西稜 (62 年オランダ隊初登ルート), 4 月 28 日 BC, 5 月 17 日からアルバイン・スタイルで3 ビバークしてア

- タックしたが 6400 m で断念 ●山岳年鑑, '86, 62 (J. Nyka) / AAJ, 1986, 246
- ⑩ 1985 年 秋 Polish Women 隊 Danuta Wach 他 9 北峰, 10月21日BC, 春のボー ランド隊と同じルートで11月12日6200mま で ●山岳年鑑, '86, 62/AAJ, 1986, 246
- ③ 1985 年秋 Japanese 山岳同人東風隊 大浜健次 Kenji Ohama 他 5 南峰, 9月12日 BC=4150 m, 南壁中央ルンゼの左の壁を登る。中央雪田の 3 ピッチ手前 5900 m で断念。10月26日中止を決定, 31日 BC 撤収 ●山岳年鑑, *86, 62/AAJ, 1986, 246

NUN 7135 m

- Jammu & Kashimir, Ladakh 34°00′N, 76°02′E
 ① 1981 年春 British, Bristol 隊 Steven
 Berry 他 6 Shafat gl. より入山, 6月12日
 White Needle (6600 m) に登頂, 16日 Nun に
 東稜から南面をへて(78年日本隊ルート)2ビ
 バークして2人登頂, 19日2人, 22日2人登
 頂(第20~22登), さらにZ1 (6400 m)を試
 登する。 Needle, Barry: The Lure of Nun.
 HJ, 38, 119-23, 1980・1981/Berry, Steve: Bristol Nun Kun Expedition, 1981. IM, 11, 21-33, 1983/AAJ, 1982, 264-65 (R. Barry Needle)
 /岩と雪, 90, 52
- ② 1981 年夏 Japanese 京都下京勤労者山岳 会隊 斎藤精一郎 Seiichiro Saito 他 4 西 稜,7月17日 Sentik gl. 末端にBC,8月3日 5600 m で断念 ●岩と雪,88,67 (栗津浩
- ③ 1981 年秋 W. German F. R. Menzel 9月 21日 BC=4850 m, 西壁の基部に C 1=5300 m をおき西壁を狙ったが氷の状態悪く南西稜に転 進,9月18日4人登頂(第23登) ●AAJ, 1982,265 (Norbert Menzel) /岩と雪,88, 67
- ④ 1982 年春 American Prof. Jock Glidden, Paul Stettner 西稜アルパイン・スタイル, 5 月 4 日 BC, さらに 6 ツキャンプを進め, 5 月 23 日 J. Glidden, Paul Stettner が登頂 (第 24 登, 新ルート) Glidden, Jock: High Nun Exped. Direct West Ridge Variation. IM, 11, 112-13, 1983 / AAJ, 1983, 265-66 (J. Glidden) / IM, 11, 110/岩と雪, 95, 56
- ⑤ 1982 年春 Indian Army, Dogra Regimental Contre 隊 Prem Chand 他 15 北稜, 6月10 日 BC, ハイ・キャンプ4 ツ設け6月19日5

- 人登頂(第25登) AAJ, 1983, 266/IM, 11, 110/岩と雪, 97, 11
- ⑥ 1982 年春 台湾 Hiking & Mountaineering Association 隊 Wu Hsia-Hsiung 他 6 Nun 登攀中,7月8日 White Needle に南から東稜をへて3人登頂, Nun は断念,6月25日 BC=4600 m,ハイ・キャンプ4ツ ●IM,11,110,1983
- ⑦ 1982 年春 Swiss Michel Roch 他 5 西面より西稜, 6月24日BC=4200 m, 7月10日C3=6400 mより2人登頂(第26登) IM, 11, 110
- ⑧ 1982 年夏 Japanese 東京山岳協会隊 松本正城 Masaki Matsumoto 他5 北西稜,7月30日BC=4200 m,8月13日北西稜のコルにC2=5930 m,16日C3=6200 m,18日4人で頂上に向い慶野順一 Jun'ichi Keino 隊員を残し3人が登頂(第27登),慶野隊員は疲労凍死する●山岳,78年,119/岩と雪,95,56-57(松本正城)/IM,11,110-11
- ⑨ 1982 年夏 French Pierre Onatzky 他 5 西稜, 8月6日BC=4100 m, 8月16日と18日 に各1人, 19日2人登頂(第28~30登) ● IM, 11, 111
- ⑩ 1982 年夏 French Robert Fargeas 他 14 8月8日 Shafat gl. のモレーン上に BC=4400 m, White Needle に南稜より 8月17日7人, 19日4人登頂, Nun は失敗 ●岩と雪, 97, 11/IM, 11, 111
- ① 1982年秋 French, Terros D'Adventure 隊 Tony Fassy 他 12 9月17日4150 m=BC, 南西稜 5400 m=C1, 大量の降雪と雪崩の危険から断念 ●IM, 11, 111
- ⑩ 1983 年春 Japanese 秋田高校山岳部 OB 会隊 平沢健治 Kenji Hirasawa 他 15 Sentik gl.~西稜, 6月 16日 BC着,7月1日 C3= 5800 m,3日 6050 m まで偵察したが翌日から 激しい風雪となり断念 ●山岳,79年,46/ 岩と雪,102,58 (畠山正昭)/IM,12,165
- (3) 1983 年春 S. Korean, Hyang Ro 山岳会隊 Byung Taek Jung 他3 北稜, 6月 16日 Sentik gl. に BC=4100 m, 7月 10日北稜上に C 4 =6250 m, 19日 2 人登頂(第31登) ●IM, 12, 166, 1983
- 1983年夏 Japanese 日本ヒマラヤ協会隊 飛田和夫 Kazuo Tobita 他6 7月31日 Sentik gl. に BC=4100 m, 8月15日 C 3=6300 m, 16 日南稜を登り南西面をトラバースして西稜に出

- て 3 人が登頂する (第 32 登) ●山岳, 79 年, 46/岩と雪, 102, 58 (角田不二) /IM, 12, 166
- ⑤ 1983 年夏 Spanish, Expedicio Sabadell Himalaya 隊 Ramon Font Pinol 他 6 北稜, 8 月 2 日 BC=4500 m, 16 日 C 4=6350 m, 17 日 7000 m で悪天候のため断念 ●IM, 12, 166
- 1983 年夏 Japanese 福島こまくさ山岳会隊 保坂昭憲 Akinori Hosaka 他6 8月25日 Sentik gl. BC=4100 m着, HAJ 隊と同じルートで9月14日C3=6200 mより5人登頂(第33登) ●岩と雪,102,58-59(保坂昭憲)/報告書
- ① 1983 年秋 W. German Manfred Seabauer 他 8 南西稜, 9月3日BC, 9月16日5人登 頂(第34登) ●IM, 12, 166
- (3) 1983 年秋 Italian, Catores 隊 Peristi Moritz 他10 東稜, 10月6日BC=4200 m, 10月19日C2=5500 mまで ●1M, 12, 166
- ⑩ 1983 年 秋 Polish, Klub Wysokogorski Eydgoszcz 隊 Eugeniusz Temlak 他 7 北 稜, 10月3日BC=4100 m, 10月19日6950 m で荒天となり断念, 6700 m 地点で多分82年8月死亡した日本隊の慶野順一Jun'ichi Keino 隊員とおもわれる遺体を発見する ●IM, 12, 166-67/Moun, 96, 13
- ② 1984 年春 W. German 6月~7月東稜試 登
- ② 1984 年春 12 Americans 6 月~7 月東稜 試登
- ② 1984 年春 Canadian Jon W. Jones 6 月西 稜試登
- ② 1984 年春 Canadian J. C. Pratt 6月~7 月西稜試登
- ② 1984 年夏 Japanese グループ・ド・モレーヌ隊 中村正勝 Masakatsu Nakamura 他 5 西稜, 7月 16日 Sentik gl. 下部の BC=4100 m 着, 30日 C 3=6300 m, 8月 6日 2 人登頂(第35登) ●岩と雪, 109, 68 (中村正勝)
- ② 1984 年夏 Indian Colonel G. V. Gautam 他 20 8月24日, 27日登頂 (第36, 37登) ●AAJ, 1985, 305
- 図 1984 年夏 Spanish A. A. Pacheo 8 月東 稜試登
- ② 1984 年夏 American Jomes Belog 8月~ 9月西稜試登
- 図 1984 年秋 Hungary Orban Pal 8月~9 月北稜試登

- ② 1984 年秋 Swiss K. Honegger 9 月東稜 試登
- ③ 1984 年秋 American Eric Simonson 他 8 西稜, 10 月 7 日 5486 m まで ●岩と雪, 109, 68 (E. Simonson)
- 1984 年秋 W. German Otto Zaha 9月~
 10月 北稜試登
- ② 1985 年春 Indian Daljit Singh 他 13 5 月~6 月東稜試登
- 図 1985 年春 W. German Otto Zaha 他 5 北稜, 5月28日BC, 30日ABC=4810m, 6月 10日C2=6390mを設け, 12日荒天のため 6800mで断念 ●山岳年鑑, '86, 89
- 図 1985 年春 American James Balog 他 4 北稜アルバイン・スタイル, 6月21日BC 着, 25日ABC, 27日5486mにC1を設けた が, 29日から荒天となり7月1日断念,帰国 途中D41 (5813m) に頂上近くまで登る ● 山岳年鑑, '86, 89/AAJ, 1986, 258 (James Balog)
- ⑤ 1985 年夏 French G. Steinmair 他 8 西 稜, 7月14日 4 人登頂 (第 38 登) ●山岳年 鑑, '86, 88
- 985年夏 Japanese 川崎市教員隊 坂原 忠清 Tadakiyo Sakahara 他3 8月3日BC 着,北西稜から西稜に変更,先に入山していた フランス Ehinger 隊の了承を得て行動を開始, 8日 ABC=4800 m, 12 日西稜のコルに C 2= 5800 m, 13 日南西壁基部に C 3=6400 m をお き,15日4人が登頂(第38登) ●山岳年
- 図 1985 年夏 French Bernard Ehinger 他 3 西稜, Tongul に BC=4200 m, 8月17日 C 3= 6300 m より 4 人登頂(第 40 登) ●山岳年 鑑、86,88

鑑, '86, 88-89/報告書

- 1985 年夏 French Jean P. Boyer 他 8 東稜, 8月8日 Shafat gl. Ø BC=4600 m 着, 16日 C 3=6500 m, 19日 3 人登頂 (第41登)
 ●山岳年鑑、'86, 88
- 1985 年秋 Spanish Carles Sole Estalella
 他 12 北西稜, 9月2日BC=4700 m 着, 16日C3=6600 m, 17日3人登頂(第42登)
 山岳年鑑, '86, 89
- ① 1986年夏 Italian Michele D. Palma 単独 アルパイン・スタイルで北西側より試登, BC を出発して3日目の7月15日頂上直下50mに 達したが無許可登山のため引き返す。ついで D
 41 (5813 m) に北面北壁より登頂 ●山岳年

- 鑑, '87, 90 (J. Nyka)
- ④ 1986 年夏 Spanish, Civil Military Group隊 Santiago Arribass Perez 他 7 北稜, 7月17日6人登頂(第43登) ●Hima, 19-2, 28/AAJ, 1987, 267
- ⑩ 1986 年夏 Indian, High Altitude Warfare School, Gulmarg 隊 Lt. Col. Raj Mohan Wahi 他51 8月6日6人,7日9人,8日17人登頂 (第44~46登) ●1M,21,216
- ④ 1986 年秋 Japanese 東洋大学隊 米山英 三 Eizo Yoneyama 他 11 北稜, 8月31日 BC =4200 m, 9月26日北稜上に C 4=6300 m, 10 月1日3人,3日6人登頂(第47,48登), Kun は日数切れのため断念 ●岩と雪,120, 99-100(本多紀幸)/山岳年鑑,87,90(ー ッ一)/AAJ,1987,267
- ④ 1987 年春 French Francois Chantaler 6 月~7月, 登頂 (第 49 登) ● AAJ, 1988, 239
- ④ 1987年夏 Austrian G. Steinmair 7月登 頂 (第50登) ● AAJ, 1988, 239
- 毎 1987 年 夏 Spanish, Catalan 隊 Jesus Belmonte? 北稜, 7月 Jordi Magrinya が単独 で北稜を登り頂上下 150 m まで達したが雪崩の 危険で引き返す ◆AAJ, 1988, 239
- ⑪ 1987 年夏 Polish Waclaw Otreba 他 7 Shafat gl. - 東稜, 5300 m, 6150 m, 6550 m, 6800 m とキャンプを進め8月12日7人 (内女性1)登頂 (第51登) ● Hima, 19-5, 69/ Moun, 119, 10/岩と雪, 127, 90/山岳年鑑, '88, 91/AAJ, 1988, 239 (Jozef Nyka)
- 48 1987 年夏 Spanish Jose Moreno Casanova
 他3 北西稜, 8月15日 Tongol から BC 着, 8月26日 C 3 より3 人登頂(第52登)
 AAJ, 1988, 239/IM, 21, 184
- 1987 年秋 Swiss Matthias Schnyder 西 稜アルパイン・スタイル、4900 m で断念(9月 1日より) ●IM、21、184
- ⑤ 1987 年秋 Polish, Alpinistyczny Klub Ekspbracyjuy Brdoszez 隊 Jan Kwiaton 他 9

NUPTSE 7855 m

Mahalangur Himal, Khumbu group 27°58′02″N, 86°53′14″E

西峰=7784 m, 北西峰=7745 m, 中央峰=7845 m, 東峰=7703 m

- ① 1981 年秋 Scottish Malcolm Duff 他 3 アルパイン・スタイルで西峰 (7784 m) から主峰へ縦走し Western Cwm に下る計画だったが 10 月 10 日西稜 6700 m で断念 ●岩と雪, 88, 42/AAJ, 1982, 219
- ② 1981 年 秋 Canadian Jim Elzinga 他 6 南面から 3 ツのルートを試登する。61 年南面 イギリス隊ルート、その西側のルートから西 稜、それに南西バットレス、どちらも 6400 m まで ●岩と雪、88、42/AAJ、1982、219-20 (Willam March)
- ③ 1982 年秋 Scottish Malcolm Duff 他 2 Tamserku 西稜試登後 10 月 5 日 BC を出発西稜 をアルパイン・スタイルで登り 4 日間で 7100 m に達したが断念 ● Duff, Mal:Riders of the Storm, The West Ridge of Thamserku. AJ, 333, 47-49, 1984 / 岩と雪, 95, 36 / AAJ, 1983, 224
- ④ 1982 年秋 W. German Hans-Burkhard Nix 他4 北壁を目指したが Khumbu Icefall の状態悪く Western Cwn の 6500 m で 10 月 16 日断念 ●岩と雪, 95, 36/AAJ, 1983, 225
- ⑤ 1984 年秋 French Raymond Renaud 他 17 南から、北西稜より北西峰 (7745 m) にハイ・キャンプを 4 ツ設け 10 月 15 日 4 人 (内シェルパ 3=Sherpani の Nima は夫の Lakpa Norbu と Ang Kami に伴われて登頂)、さらに 19、20、21 日にも隊員 7 人とシェルパ 3 人が登頂する (第 2~5 登)、主峰へは行かず ●岩と雪、109、43 (J. Nyka) / AAJ、1985、266/Moun、102、15
- ⑥ 1986 年春 American-British 合同隊 Jeff

Lowe 他 12 Kangtega (6779 m) 登頂後 BC を Lhotse Nup gl. の 5200 m に移し Nuptse の南ビラー (イギリス隊初登ルートと 75 年 Cassin-Messner ramp との間にあるバットレス) に Marc Twight と Jeff Lowe が 5 月 19 日より取り付き 5 月 26 日 6700 m で断念 ● Moun, 111, 11/Hima, 18-3, 46:19-3, 38-39/山岳年鑑、 87, 57 (Jeff Lowe) / AAJ, 1987, 230-32 (---/-)

- ⑦ 1986/87 年冬 American Jeff Lowe, Marc Twight 86 年春にひきつづき南東バットレス (南ビラー)をアルパイン・スタイルで試登, 12 月 31 日 6700 m で断念。春と同じく fixed camps, fixed rope, Sherpasを使用せず ●山岳年鑑, '87, 57 / AAJ, 1987, 232 (M. J. Cheney) / Hima, 19-3, 39 / HCNL, 41, 29
- ⑧ 1987年秋 Italian Enrico Rosso, Fabrizio Manoni 上記と同じ南ビラー、4 ビバークの後10月10日6700mで断念 Moun, 119, 9/AAJ, 1988, 206 (M. J. Cheney & E. Hawley)/IM, 22, 197/山岳年鑑、'88, 62
- ⑨ 1987 年秋 Americans Jim Yoder, Bob Newson 同じ南ピラー。入山が遅れたため10月中旬の大雪に阻まれBCも設営出来ぬまま5640mで断念 ●山岳年鑑, '88, 62/AAJ, 1988, 206 (M. Cheney & E. Hawley) / IM, 22, 197

PASU (PASU DIAR, Peak 55) 7284 m (7294.9 m)

Karakorum, Batura Muztagh, Pasu group 36°28′51″N, 74°36′53″E

- ① 1982 年春 Japanese 諏訪山岳会隊 成田 俊夫 Toshio Narita 他 6 東面 5月 22日 Pasu gl. 左岸に BC=4050 m, 6月 20日 C 4=6600 m, 21日アタックしたが、C 3 で市川寛一 Kan'ichi Ichikawa 隊員が意識不明におちいったため下山救助体制をとる。同隊員は 24 日肺水腫を併発して死亡する ●山岳、78、123-24/岩と雪、95、66-67(成田俊夫)/AAJ、1983、281-83(Toshio Narita)/Moun、88、11
- ② 1985年夏 Japanese 福岡登高会隊 新貝 勲 Isao Shinkai 他5 6月13日 Pasu gl. BC= 4180 m着, Pasu gl. を詰め7月1日 6840 m に C3、天候悪化で一旦 BCへ, 10日行動を再開 し7月12日大石義豊 Yoshitoyo Oishi, 山内耕 二 Koji Yamauchi と HAP のシャンビ・ハーン

とアブドラが Pasu Ⅱ (6842 m) に初登頂し、 7月 14日 西田哲朗 Tetsuro Nishida, 山内耕二 K. Yamauchi, ハーン, アブドラが主峰に登頂 する (第2登), ついで Nanga Parbat へ ●→ Nanga Parbat No. 38/山岳年鑑, '86, 102 (新 貝勲) /AAJ, 1986, 287 (Isao Shinkai)

PAUHUNRI 7125 m

Sikkim Himalaya, Dongkya Range 27°57′13″N, 88°50′53″E

Pauhunri South, 7032 m 27°56′38″N, 88°50′28″E

① 1983 年秋 Indian Army 隊 Capt. A. S. Sadashiva 北西面 Sikkim 領内より 9月 20日 5 人登頂 (第 4 登) ● Bhave, Col. V. Y.: Pauhunri Expedition, 1983. HJ, 40, 154-58, 1982・1983/岩と雪, 103, 80/AAJ, 1984, 225/HCNL, 37, 10

PEAK 29 (NGADI CHULI) 7871 m

Nepal. Manaslu Himal 28°30′13″N, 84°34′09″E ① 1982 年秋 British Army 隊 James Green 他 11 南東稜, 10月23日5915mまで ●岩 と雪, 95, 42/AAJ, 1983, 236

PUMO RI '7161 m

Nepal Mahalangur Himal, Khumbu group 28°00′53″N, 86°49′41″E

① 1981/82 年冬 American Ned Gillette 他 5 12 月 15 日 ABC = 5640 m. 北東稜の側壁 (南東面)より初登ルートの北東稜に出る新ル ートを登る。23 日 6300 m のキャンプよりアタ ック、頂上まで 420 m を残して悪天候のため引 き返す。28 日再度出発北東稜に出た所 6650 m に C 2 を設け 1 月 6 日 James Bridwell, N. Gillette, Ian Reynolds (女性) が冬期初登頂する (第 13 登), このあと Everest 一周に出発, Mingbo La~Barun West Col~Sherpani Col & 6月11日越して Barun 最奥のコルに達し1月 22 日中国との国境につく。4月には22日にラ サを出発 Rongbuk 僧院近くの Everest BC に向 かう。5月2日に Lho La, ついで東 Rongbuk gl. より Lhakpa La, Karp La を経て Kangshung gl. を登り東側の国境に至り5月16日一周を完 成さす ●Gillette, Ned: Once Around Everest. AAJ, 57, 1-7, 1983/レイノルズ;ジレット:極寒 のエベレストひとめぐり。山と渓谷,554, 28-31, 1983年3月号/岩と雪, 95, 36-37 (Jan Reynolds) / AAJ, 1982, 219 (James Bridwell) / Moun, 85, 11

- ② 1982 年秋 French Erik Decamp 他 3 南 稜 (72 年フランス隊ルート) アルパイン・ス タイル, 10 月 18 日 2 人, 19 日 2 人登頂 (第 14, 15 登), 南東稜を下る ●岩と雪, 95, 37 / AAJ, 1983, 230 (Erik Decamp) / IM, 11, 150/Moun, 89, 12
- ③ 1982 年秋 Americans Steve van Meter, Tom Mc Cullough 他 1 西壁アルバイン・ス タイル, 10 月 15 日 5920 m 最終キャンブ地で 断念 ●岩と雪, 95, 37/IM, 11, 150
- ④ 1982/83 年冬 S. korean Nam Sun-Woo 他 2 南稜, 11 月 14 日 BC 着, 12 月 11 日隊 長とシェルバ 1 人が登頂 (第 16 登) 6800 m で ビバークして帰る, 2 次隊は 1 次隊と出会った ところで断念 ●岩と雪, 102, 36 (Kilnam Chon) / AAJ, 1983, 231/Moun, 90, 9
- ⑤ 1983 年春 American Donald McIntyre 他 6 北東稜アルバイン・スタイル, 4月17日 BC=5200 m, 4月29日稜線直下の6435 mで雪崩の危険のため断念 ●岩と雪, 102, 36/ AAJ, 1984, 241 (Donald Mc Intyre)
- ⑥ 1983/84 年冬 American Jeff Lowe, Earl Wiggins 12月6日 BC=5335 m, 南壁右のバットレス。フランス・ルートをアルバイン・スタイルで登る。E. Wiggins が肺水腫になり下山したため J. Lowe は単独で15日バットレスの取り付き5490 m でビバーク, 6250 m, 6585 m とビバークして12月18日登頂(第17登)
 岩と雪、109、45-46(J. Lowe) / AAJ、1984、242(一ヶ一) / Moun、97、10
- ⑦ 1984 年春 1 Australian-1 Englishman-4 Americans-1 Nepalese 合 同 隊 Geoffrey Bartram 北東稜 (81 年冬のアメリカ隊ルートの左・南), 4月16日 BC=5200 m, 5月5日3人,6日4人登頂 (第18,19 登) ●岩と雪,109,46/AAJ,1985,266-68 (Michael Andre) / Moun,99,9
- ⑧ 1984 年秋 S. Korean Kim Ki-Hwan 他 5 (内 American 1, Canadian 1) 北東稜初登ルート, 9月22日C5=6270 mで断念 ●岩と雪, 109, 46/AAJ, 1985, 268
- ⑨ 1984/85 年冬 American Steven Jorgenson
 他 6 南西稜, 12 月 1 日 BC, Richard Wilson
 と Rich Pierce がアルパイン・スタイルで 3 ビバークの後 12 月 13 日登頂する。(第 20 登)。
 しかし 200 m 下ったところで消息を絶ち帰還し

- なかった ●山岳年鑑, '86, 44/AAJ, 1985, 268 (Steven G. Jorgenson) / Moun, 102, 16
- ⑩ 1985 年春 Austlian Arthur Haid 他 6 南西稜, 4月10日より登攀開始, 18日 C 3= 6550 m を設け 4月21日 3人, 23日 3人, 26 日隊長とシェルバ 1人が登頂,全員登頂(第 21~23 登) ●山岳年鑑, 86,44/AAJ, 1986,232 (Arthur Haid)/Moun,105,10
- ① 1985 年春 Spain, Catalan 隊 Pere Rodes 他7 南東壁~6500 m のコルー北東稜, BC= 5260 m, 6250 m にキャンプを一つ設けただけ で5月5日3人登頂(第24登) ●山岳年 鑑, '86, 44/AAJ, 1986, 232 (Jaume Matas) /Moun, 105, 10
- ② 1986 年秋 Japanese 龍鳳登高会隊 光畑 幹夫 Mikio Mitsuhata 他 1 浦山博 Hiroshi Urayama とペアで東稜, 9月20日 BC=5250 m, 10月7日光畑隊長が6050 m 付近で雪崩に より滑落負傷するこのため断念 ●山岳年鑑。 "87, 57-58 (浦山博) / Hima, 18-7, 112 / AAJ, 1987, 236
- ① 1986 年 秋 British-American 合 同 隊 Sandy Allan 他 3 南壁〜南西稜〜西稜, S. Allan と Rick Allen がアルパイン・スタイルで10月14日より南壁中央左のスパーに取り付き5ビバークの後10月19日登頂(第25登)。アメリカ人ペアは6000mで強風のため断念 ◆ Allan, Sandy: Pumori-the Scottish Route. AJ. 337, 48-50, 1988/89 / 山岳年鑑, "87, 57 / Moun, 113, 8 / Hima, 18-11, 173 / AAJ, 1987, 236-38 (Sandy Allan)
- ④ 1986 年秋 2 New Zealanders-1 Australian-1 American John Roberts 南西稜, 10月24日と26日に6550mまで達したが断念 ●山岳年鑑, '87, 57 / Hima, 18-11, 175 / AAJ, 1987, 238 (M. J. Cheney)
- ⑤ 1986/87 年冬 Japanese カモシカ同人隊 高橋和之 Kazuyuki Takahashi 他 3 青田浩 Hiroshi Aota と笹原芳樹 Yoshiki Sasahara のペアが龍鳳会のピラー左手を直上して北東稜に出る新ルートをアルパイン・スタイルで登る。11月30日東壁基部に BC=5400 m, 12月1日より登攀開始 6100 m でピバーク, 2日東壁を抜けて北東稜上「ブモリの宿」 6600 m でピバークし3日登頂(第26登) ●笹原芳樹:ブモリ東壁。岩と雪, 122, 19-21, 1987/岩と雪, 121, 81(笹原芳樹)/山岳年鑑, 87, 58(一

- "—) /Hima, 18-11, 175/AAJ, 1987, 238 (M. J. Cheney) / HCNL, 41, 28 / Moun, 116, 9
- 1986/87 年冬 American Todd Bibler 他
 11月25日 Gorak Shep に BC, 南西稜 12月1日6100 m で断念。上記日本隊ルートへ変更(85年 Catalan ルート), 12月4日6000 m で下ってくる日本隊に会う。パートナーの Michael Dimitri が病気になったため Bibler が単独で12月5日登頂する(第27登) ●山岳年鑑, 87, 58/Hima, 18-11, 175/Moun, 116, 9/HCNL, 41, 28/AAJ, 1987, 238-39 (Todd Bibler)
- ① 1987 年春 Dotch Joost Pielage. Bart Jordans 他 2 南東壁アルパイン・スタイル。壁の状態悪く壁の基部 5500 m で 5 月 7 日断念 ●山岳年鑑, '88, 62 (J. Pielage) / Hima, 19-3, 37/IM, 22, 197/AAJ, 1988, 206-07 (M. J. Cheney & E. Hawley)
- IB 1987 年秋 Japanese 群馬・境町山の会隊 大橋良雄 Yoshio Ohhashi 他 10 南西稜, 9 月 16 日 BC = 5200 m 着, 南稜のコルに C 2 = 6200 m, 10 月 10 日 6800 m = C 4 (雪洞), 12 日 3 人 (内 HAP 1), 13 日 3 人, 14 日 3 人登 頂 (第 28~30 登) ●岩と雪, 126, 94/山岳 年鑑, '88, 63 (大橋良雄) / Moun, 120, 10 / IM, 22, 197 / AAJ, 1988, 207 (M. J. Cheney & E. Hawley)
- 1987年秋 W. German-Italian 合同隊
 Jurgen Knappe 他 3 南西稜, 10月24日3人, 26日1人登頂(第31, 32登)
 Moun, 120, 10/山岳年鑑, '88, 63/IM, 22, 197/AAJ, 1988, 207
- ② 1987 年秋 French 公募隊 Marc Batard 他7 東壁, 10月25日隊長とシェルバ3人が 登頂(第33登) ●Moun, 120, 10/山岳年 鑑, '88, 63/AAJ, 1988, 207 (Marc Batard) /IM, 22, 197

PUTHA HIUNCHULI (DHAULAGIRI VI) 7246 m

Nepal Dhaulagiri Himal 28°44′56″N, 83°08′55″E

① 1982 年 秋 Netherlander-Luxemburger Nicolass van Lookern Campagne 他 6 南稜~南壁 (72, 78, 79年と同じルート), 10月14日3人 (内シェルバ1) 登頂 (第13登) ● 岩と雪, 95, 48/AAJ, 1983, 247/IM, 11,

- 150/Moun. 89, 12
- ② 1984 年春 S. Korean Cho Chung-Sool 他 5 南稜, 3月20日 BC=4200 m, C 3=6600 m より4月1日4人(内シェルバ2)登頂(14登) ●岩と雪,109,57/AAJ,1985,294(Cho Chung-Sool)
- ③ 1984 年秋 Japanese 三重県山岳連盟隊中村金夫 Kaneo Nakamura 他 7 南稜, 9月13日 BC 着, 10月4日 C 3=6900 m より4人(内シェルパ2)登頂(第15登) ●山中保一:プタヒウンチュリ登頂。岳人, 453, 138-41, 1985年3月号/岩と雪, 109, 58/AAJ, 1985, 294

RAKAPOSHI Karakorum Rakaposhi range 主峰=7788 m 36°08′39″N, 74°29′22″E 東峰=7010 m 36°09′N, 74°32′E 中央峰=7290 m 36°09′N, 74°31′E

- ① 1981 年夏 Spain Jordi Magrina I Guell 他9 南西スパー, 7月24日BC=4250 m, 8 月2日ニードルと Monk's Head との間のコル にC2=5750 m, 4日C4=6200 m, 14日6900 mで断念 ●岩と雪, 88, 73/AAJ, 1982, 278 (Jordi Magrina I Guell)
- ② 1983 年夏 French, Club Alpin Belge 隊 Jacques Collaer 他 11 南西稜初登ルート,7月7日 BC=4250 m,ハイ・キャンプを6ツ設け、8月2日7400 mの C 6より4人(内 HAP1)登頂(第4登),8月5日 HAPの Sultan Ullah Baig がC1とC2の間で行方不明となる●岩と雪、102,70 (J. Nyka) / AAJ,1984,301-02 (J. Coliaer) / Moun,95,10/HJ,40,205 (Illustrated Note 10)
- ③ 1984 年 夏 Canadian David Cheesmond 他7 北稜 (79年早稲田大学隊ルート), 6月5 日 BC, Capsule style で7月3日C8=7470 m を設けたが天候悪く断念, 7月7日BCを撤収 したが天候回復のきざしが見えたので11日 BCに戻り今度はアルバイン・スタイルで挑む。5日間で長大な北稜を登り7月17日3人 が登頂する(第5登) ●Cheesmond, David: The North Face of Rakaposhi. AAJ, 59, 53-60, 1985/岩と雪, 109, 80-81 (D. Cheesmond) /Moun, 99, 10
- ④ 1984 年夏 Yugoslavia Janez Skok 他 5 8月 北面にルートを求め偵察中隊員 1 人が滑落 重傷を負ったため 5000 m で断念 ●岩と雪, 109, 81/AAJ, 1985, 324 (Franci Savenc)

- ⑤ 1985 年夏 Austria Edi Koblmuller 他東峰北壁をアルパイン・スタイルで登る。7月30日 ABC=4500 m を出発 5500 m, 6000 m でビバークして8月1日 E. Koblmuller, Fred Pressl, Gerald Fellner, Gerhard Haberl が東峰に初登頂する。下降中にG. Fellner がスリップ, Scott隊の救助もあったが死亡する ●山岳年鑑、'86, 102/→Diran No.7
- ⑥ 1985年夏 International 隊 (イギリス他5ヶ国) Doug Scott 他 登山活動せず。 Diran を終え Rakaposhi の北東稜を目指したが、オーストリア隊が登ってしまったため南面にまわりバグロット谷を遡る。ついで次の目標 Nanga Parbat へ ●山岳年鑑、'86, 102/→Diran No. 8; Nanga Parbat No. 40
- ⑦ 1986 年夏 Dutch AC 隊 Dries Nijsen 他4 北西稜ポーランド・ルート (一部新ルート), 7月15日BC=3700m着C1=4800mより64年アイルランド・ルートの右をダイレクトに登り稜線でポーランド・ルートに合し8月3日C3=6350m,8月15日Ton van den Boogaard と Rudolf de KoningがC3を出発6500m,7100mにビバークして17日に登頂する(第6登) ●岩と雪,121,86 (Robert Eckhardt) / 山岳年鑑,87,106-07 (一ゥー) / AAJ,1987,278 (ーゥー) / Moun,112,10
- ⑧ 1987 年春 Japanese 明治大学隊 山本宗彦 Munehiko Yamamoto 他 2 Minapin gl.~束稜, 5月24日BC=3510 m, 7月1日C4=6200 m, 3日東峰に山本宗彦 M. Yamamoto, 山本篤 Atsushi Yamamoto, 大西宏 Hiroshi Ohnishi が登頂(第2登)主峰は断念 ●山本宗彦:ラカボシ東稜に挑む。岩と雪, 125,50-55, 1987/山岳年鑑, '88, 103 (山本宗彦)/AAJ, 1988, 256
- ⑨ 1987 年春 Yugoslavia Igor Radovic 他 11 北稜 (81 年早稲田大学隊ルート), 6月23日 BC, 28日 C 2=5350 m, 悪天候がつづき7月4日の5700 m を最高到達点として断念 岩と雪, 125, 103 (I. Radovic) / 山岳年鑑, *88, 103-04 (一ヶ一) / AAJ, 1988, 250 (一ヶ一)
- ⑩ 1987 年夏 W. German Hubert Bleicher 他4 7月1日BC=3470 m, 東稜の初登攀を目 指す。7月17日アルバイン・スタイルでアタック, 5150 m で断念, 22日第二次アタック 4400 m, 5700 m に泊まり 5800 m で氷の落下と

雪崩のおそれで断念。悪天候で7月29日BC 撤収 ●AAJ, 1988, 256-58 (H. Bleicher) / 山岳年鑑, '89, 107-08 (--/--)

RAKHIOT PEAK 7074 m

Panjab Himalaya Nanga Parbat group 35°17′N, 74°38′E

① 1985 年夏 Japanese 札幌山岳会隊 清水 一行 Kazuyuki Shimizu 他 7 Nanga Parbat 北 東稜試登中,7月11日 C 5 近くのこの峰に4 人が登頂する ●→Nanga Parbat No. 34

RIMO Karakorum, Rimo Muztagh

I 峰=7385 m 35°21′22″N, 77°22′09″E II 峰=7373 m 35°21′24″N, 77°22′15″E III 餘=7233 m 35°22′32″N, 77°21′38″E

N峰=7168 m 35°22′38″N, 77°23′04″E

① 1984 年 夏 Indian Army Engineer 隊 Captain K. S. Sooch 他 24 7月 26日 South Rimo gl. の舌端に BC=4700 m, 8月 5日同氷河上 5350 m=ABC, 7日 6050 m, 8日 6550 m に ビバークして 9 日西面~南西稜より Rimo IV に アルパイン・スタイルで M. P. Yadev, G. K. Sharma が初登頂し、11日にも 2人が登頂する。また 6000 m 峰 6座に初登頂する ● Sharma, G. K.: Ascents in Rimo Group of Peaks。 HJ, 41, 117-21, 1983・1984/岩と雪, 109, 69/AAJ, 1985, 308;1986, 261

② 1985 年夏 Indo-British 合同隊 Harish Kapadia 他 10 6 月 24 日 North and South Terong gls. と Siab Chushku gl. の合流点に BC =4300 m, Doab Chushku に ABC=5000 m をお き下記の初登頂をする。7月12日 Sundbrar (6300 m Sondhi の西), 13 日 Sondhi (6480 m, Ibex Col の南) にいずれも西面から、また12 日に南稜から Lharimo (6070 m) に, 15 日南 稜から Doab (6045 m) に、16 日 Safina (5975 m) に西稜から初登頂する。また7月11日 Ibex Col から South Rimo gl. に入り Rimo Ⅲ峰 に北東稜から Dave Wilkinson と Jim Fothering ham が初登頂する。7月22日 Chorten Peak (6050 m), Ngabong Terong (6180 m) にも初 登頂, Rimo I 峰には Ibex Col より南西稜を試 登7月9日6900 m まで登る ● Venables, Stephen: Painted Mountains, London, Hodder & Stoughton, 1986 / Venables, Steven: Siachen Sojourn. Mountain, 107, 28-33, 1986 / Kapadia, Harish: Exploring'That Valley'-Terong. HJ, 42, 68-86, 1984・1985/一ゥー: The Siachen Indo-British Expedition 1985. HCNL. 39, 23-25, 1986/岩と雪, 113, 79-80/AAJ, 1986, 261-66 (Stephen Venables)/山岳年鑑, '86, 83-85 (H. Kapadia)

③ 1986 年秋 Indo-International Rimo-Shyok 隊 (6 Indians-3 Australians-1 Englishman-1 New Zealander-1 American) Col Prem Chand South Rimo gl. を遡り8月30日BC=5050 m, Ibex Col をへて南壁を登り10月4日C2=6500 m, 6日6850 m で悪天候、深い雪、雪崩の危険等のため断念 ● Hillary, Peter: Rimo-Mountain on the Silk Road. London, Hodder & Stoughton, 1988 / 岩と雪、123、95 / Moun, 113、9 / Hima、18-9、137 / AAJ、1987、268-69 (Skip Horner) / HCNL、40、21-22:41、42

ROC NOIR (KHANGSAR KANG) 7485 m Nepal Annapurna Himal 28°36′50″N, 83°52′29″E

① 1981 年春 Swedish Tommy Sandbreg 他 9 Annapurna I 峰東稜登攀中, 5月13日2人, 14日3人, 16日2人登頂(第3~5登), 5日には隊長等3名が Roc Noir 直下に達したが許可を得ていなかったので直下5mをトラバースして A I 峰へ ●→ Annapurna I No. 2:Glacier Dome No. 1

② 1984 年秋 Swiss Frank Tschirky 他 5 Annapurna I 峰東稜登攀中 10 月 22 日 4 人登 頂 (第 6 登) ●→Annapurna I No. 15

③ 1986 年 秋 French-Nepalese 合 同 隊 Marc Battard 他 10 Annapurna I 峰東稜を目指す。しかし Roc Noir の7100 m まで ●→ Annapurna I No. 32;Glacier Dome No. 10

SAIPAL 7031 m

Nepal Gurans Himal 29°53′14″N, 81°29′43″E
① 1985 年 秋 Spanish-French 合 同 隊
Joaquim Prunes 他 10 南西壁から西稜へトラバースし西稜より 10月 22日 6人が登頂, ついで南西壁をアルバイン・スタイルで3回のビバークの後24日に2人が登頂西稜を下る。25日Frederic Parera が西稜より単独登頂する(第2~4登) ●山岳年鑑, '86, 66/AAJ, 1986, 252/Moun, 108, 13

② 1987 年 秋 Austrian-German 合 同 隊 Franz Kroll 他 2 Saipal gl. の 4150 m に BC をおき 10 月 17 日~18 日 南西壁に挑み 5700 m で断念, BC の西 Saipal gl. 対岸にある Firn-kopf West (6684 m) に 10 月 25 日南西稜より 3人 (内シェルバ1) が登頂する ●岩と雪, 127, 89 / 山岳年鑑, '88, 77 (F. Kroll) / AAJ, 1988, 225 / HCNL, 41, 35 / IM, 22, 199

SALTORO KANGRI Karakorum Saltoro range

I 峰=7742 m 35°24′01″N, 76°50′55″E II 峰=7705 m 35°24′24″N, 76°50′50″E

- ① 1981 年春 Indian Army 隊 Colonel Narindar Kumar 他 Siachen gl. の舌端に BC, 6月29日 Indira Col (5790 m) に達した他 Turkistan La, Bilafond La, Sia La, P 36 gl. とSouth Dong Dong gl. の間のコルなどへスキーで登る。7月14日 Sia Kangri に登頂。Saltoro Kangri には P 36 gl. より 36 年 J. Hunt 試登ルートを採る。7月14日南東稜直下に C 5=7150 mを設け 15日のアタックは頂上下 120 mで断念。第二次隊は8月1日 C 3 より C 5 に入り 2日4人が登頂(第2登) Kumar, N.: The Indian Army Exp. to the Eastern Karakoram. HJ、39、104-14 / AAJ、1982、268-69(N. Kumar)/岩と雪、90、52:95、57/→Sia Kangri No. 1
- ② 1981 年 W. German Martin Albanus 他 3 II 峰を Kondus 谷側, 南西面より試登, BC = 4420 m, ハイ・キャンプを 3 ツ出し 6500 m まで ●岩と雪, 95, 57 / AAJ, 1982, 269 (Reinhard Frick)
- ③ 1984 年秋 Indian Colonel Prem Chand 他53 10月17日7428 m 峰に西稜より登頂 ●AAJ, 1985, 308/HCNL, 38, 17-18

SARAGHRAR MAIN (W 195) 7349 m

Eastern Hindu Kush 36°32′30″N, 72°06′15″E

- ① 1982 年夏 Japanese 岩手県・水沢山岳会隊 辻山健一郎 Ken'ichiro Tsujiyama 他 6 西面 Rosh Gol gl. より, 6月25日BC=4200m, 7月1日C1=5000mを設けたが悪天候で断念 ●山岳, 78, 124, 1983/岩と雪, 95, 67
- ② 1982 年夏 Spain, Cataluna 隊 Juan Lopez Diaz 他 6 北西峰の II 峰 (7200 m), 7月13 日 Rosh Gol gl. の 4850 m に BC, 南西スパーに 挑む。8月4日 ABC=5250 m を出発 5800 m,

6350 m, 6600 m, 6850 m, 7020 mとビバークして 8 月 9 日 Enrique Lucas, Nil Bohigas, Juan Lopez Diaz が北西峰Ⅱに初登頂する ● Diaz, J. Lopez: Spanish Exp. to Saraghrar, 1982, HJ, 40, 198-204, 1982・1983 / AAJ, 1983, 283 (Juan Lopez Diaz)

SASER KANGRI Karakorum Saser Muztagh I 餘=7672 m 34°52′02″N, 77°45′13″E II 餘=7518 m 34°48′14″N, 77°48′22″E II 餘=7495 m 34°52′31″N, 77°47′16″E IV 餘= 7416 m (Cloud Peak) 34°52′25″N, 77°44′15″E

- ① 1985 年夏 Indian IMF隊 (Major Hukam Singh 他 12) -Japanese 日本ヒマラヤ協会隊 (沖允人 Masato Oki 他 4) 合同隊 Ⅱ峰。8月 6 日 Sakang gl. 末端に BC=4800 m 建設, 20 日 Ⅱ峰とⅢ峰を結ぶ岩稜基部 5900 m に C 2, 27 日 II 峰と Sakang (6750 m) との鞍部の真下, 北面に C4=6650 m を設ける。30日 C3-C2 間で Tsering Angchuk 転落死する。9月4日第 一次隊は7150 mで断念,5日も頂上直下で天 候が悪化し引き返す。7日三度目のアタックで Phu Dorjee, Sonam Wangdu, Tshering Smanla, Sherup Chholdon が頂稜西端のピーク (7518 m. Saser Kangri Ⅱ West と命名) に初登頂す る(インド側は Saser Kangri Ⅱ峰の初登頂と している) • Singh, H.: Indo-Japanese Exped. to Saser Kangri II o HJ, 42, 97-108, 1984 · 1985 / 岩と雪, 113, 80 (H. Singh) :114, 92 (沖允人) /山岳年鑑, '86, 85-6 (-"一)/ヒマラヤ、No. 170/AAJ、1986、 259-61 (Masato Oki) / Hima, 18-6, 93-95 ② 1986 年春 Indo Tibet Border Police (ITBP) 隊 S. P. Chamoli 他 25 Ⅲ 峰。 Shyok 川沿いに進み 4 月 26 日 North Shukpa Kanchang gl. の舌端 4663 m に BC をおく。C3 =5700 m より北西稜を越し西側より Ⅲ峰に 5 月 15 日 Dawa Tsering, Rubgias, Sudki Man, Magan Singh, Sharap Shalden, Tsering Sherpa が初登頂 (C5=6650 m より), 翌 16 日第二次 隊 6 人が第 2 登する。三次隊は断念 ● Chamoli, S. P.: Saser Kangri II, 1986. HJ, 43, 84-91, 1985 · 1986 / 山岳年鑑, '87, 87 / Moun, 110, 11/Hima, 18-4, 56-57/HCNL, 40, 21 /AAJ, 1987, 270 (S. P. Chamoli)
- ③ 1986 年夏 French (Bernard Pujo 他 6) -Indian ITBP (K. C. Mehra 他 5) 合同隊 I 峰。

国境紛争のあおりを受けて東面ルートは不許 可, 西面の Phukpoche gl. と Panamik gl. を偵察 の 後 あ き ら め る ● AAJ, 1987, 269-70 (Bernard Pujo) /岩と雪, 119, 92 (一々一) /山岳年鑑, '87, 87 (一々一) /HCNL, 40, 21

④ 1987 年春 Indo-British Army Joint 隊 (Indian-Dashan K. Khullar 他 35, British-Colonel Ivar Helberg 他 18) I 峰, IV峰。Phukpoche gl. に BC=4950 m, 5月23日 IV 峰南西の 肩に C3=6500 m を設ける。6月6日イギリス 人ペア Martin Bazire と David Howie がここか ら西壁のガリーを登って Ⅳ峰に初登頂、1時間 おくれてインド側隊員3人 Lalit Kumar, Devi Singh, Thakur Das が C 3~南稜より登頂。翌日 3人登頂。6月7日,8日にインド側隊員はⅠ 峰北東稜より Saser Kangri I の西前衛峰まで ルートをのばす。6月25日I峰にC3より7 人、ABC=5800 m より3人計10人(内シェル パ1) が登頂する (第6,7登), また Pt. 6640 mに北西稜より6月13日6人,15日3人,16 日 2 人登頂 • Khullar, D. K. & Steve Bell: The Yellow Goddess, IM, 21, 13-28, 1988/ Hima, 19-4, 55-56 / Moun, 117, 7/岩と 雪, 125, 99/山岳年鑑, '88, 88/HCNL, 41, 40/AAJ, 1988, 240 (D. K. Khullar)

SATOPANTH 7075 m

Uttar Pradesh, Gangotri group 30°50′34″N, 79°12′53″E

- ① 1981 年秋 Japanese アンビヴァレンス・アルバイン・クラブ隊鈴木章 Akira Suzuki 他 1 9月4日 Tapovan に BC=4300 m を建設後 偵察と順応を兼ねて Kharchakund (6612 m) に 80 年登嶺会隊ルートの北稜を 6300 m まで登る (9月14日)。 Satopanth は未踏の南壁を狙ったが、日数、食糧の不足からあきらめ初登ルートの北稜に転進、9月27日北稜基部 5500 m で悪天候のため断念 ●鈴木章:サトバントの南と北。岳人、417、40-43、1982 年3月号/岩と 雪、88、63 (駒宮博男)
- ② 1981 年夏 Leon Lehrer (Holland) 他 1 北稜初登ルート, アルバイン・スタイル, 6200 m, 6500 m にビバークして 8 月 25 日 2人登頂 (第 2 登) ◆ AAJ, 1984, 264-65 (Jozef Nyka)
- ③ 1982 年春 Japanese 高山研究所隊 駒宮博男 Hiroo Komamiya, 草野延孝 Nobutaka

- Kusano (ペア) 北稜アルパイン・スタイル, 4月29日 Nandanb (v) an に BC=4800 m, 5月1日 ABC=Satopanth gl. 5200 m, 4日6850 m で断念 ●山岳, 78, 116/岩と雪, 91, 48;95, 49 (駒宮博男) /1M, 11, 127
- ④ 1982 年春 Italian 5月1日BC, 降雪のためC1地点に達しただけ ●岩と雪, 91, 49 ⑤ 1982 年春 W. German Dr. Ludwig Frederic Herbert Chicken 他 10 5月5日 Nandanban BC着, 隊長病気になり下山。5月 11日 C 1=5200 m を設けたが悪天候のため断
- ⑥ 1982 年秋 German, Naturfreund Augsburger 隊 Otto Zaha 他3 北稜, 8月21日BC = Nandanban 4400 m, 9月4日6000 m に C 3を設け6250 m で断念 ●IM, 11, 127

念 •IM, 11, 127, 1983

- ⑦ 1982 年秋 Japanese 小樽インド・ヒマラヤ登山隊 戸谷薫 Kaoru Toya 他2 北稜,9月2日 BC = Nandanban 4440 m,26日 C2 = 6310 m,29日 6770 m で引き返す。30日 2人登頂(第3登) ●戸谷薫:サトバント登頂。山岳、78年、56-59,1983/岳人、1982年12月号/岩と雪、95、49-50(戸谷薫)/Moun、89、12
- ⑧ 1982 年秋 Japanese 稜朋会隊 杉浦誠 Makoto Sugiura 他 6 南壁, 9月4日BC=Nandanban 4300 m, 順応のため Bhagirathi Ⅱ (6512 m) に 18日と 19日に全員登頂後, Satopanth に向かう。10月2日 C 2=5300 m を設けたが、南壁は落石と雪崩の巣で前進出来ず10日断念 ●山岳, 78, 122/岩と雪, 95, 51/IM, 11, 119
- 9 1983 年春 Japanese 山学同志会-アンビ ヴァレンス・アルパイン・クラブ会ー合同隊 大宮求 Motomou Ohmiya, 鈴木章 Akira Suzuki, 久松宏人 Hiroto Hisamatus 5月6日 BC = Nandanban 4500 m, 順応のため Bhagirathi Ⅱに北面~北東稜より5月15日に登頂し た後 Satopanth に向かう。アルパイン・スタイ ルで 19 日 Sundari gl. の 5200 m, 20 日 Satopanth の北西稜のコル 6100 m に、21 日 6900 m にビバークして5月22日西峰(7045 m)に3 人全員が初登頂する。天候悪化で主峰はあきら める ●大宮求:サトパント西峰初登頂。山 岳, 79年, 40-45, 1984/-/・一:バギラティ [[&サトバント・ヒマラヤ, No. 144, 18-22, 1983/鈴木章:サトパント西峰初登頂。岳人、 435、25-29、カラーグラフ、1983年9月号/久

- 松宏人・鈴木章:シンプル・エクスペディション。クライミングジャーナル 8, 28-31, 1983 /岩と雪, 97, 8:102, 50 (大宮求) / AAJ, 1984, 266/IM, 12, 178
- ⑩ 1983 年春 German, DAV 隊 Hermann Tauber (12 Germans, 3 Itarians, 2 Swiss) 5月 26日 BC=Nandanban 4337 m, 6月 3日北東稜 6000 m に C 2,8日のアタックは失敗したが10日イタリア人 2人が登頂(第4登) ●岩と雪,102,50/AAJ,1984,265 (Hermann Tauber)/IM,12,188
- ① 1983 年夏 German, Wolfratshauses Jubilaums 隊 Thomas Srtobl 他 4 北稜, 7月3日BC=Nandanban 4400 m, 14日北東稜のコルに C 3=6000 m, 15日5人登頂(第5登) Strobl, T: Satopanth. HJ, 40, 175-76, 1982・1983 / 岩と雪, 102, 51 / AAJ, 1984, 265 (Thomas Strobl)
- ② 1983 年夏 Austrian Jorg Weber 他 5 北面からアルパイン・スタイル, 8月21日BC = Nandanban, 24日 Vasuki Tal に ABC, C1 = 5100 m で断念 ●岩と雪, 102, 51/IM, 12, 189
- ① 1983年夏 Japanese 婆娑羅衆隊 関久雄 Hisao Seki 他 10 (内女性 6) 北稜, 7月31 日 BC = Nandanban 着,8月16日C3=6300 m,23日3人,24日5人(内女性 4,女性初登)が登頂(第6,7登) ● Seki, Hisao: Five Times of Good Luck. HJ,41,170-73,1983・1984/AAJ,1984,265-66/IM,12,190/岩と雪,102,50-51 (関久雄)
- ① 1983 年秋 Japanese 目黒勤労者山岳会隊 高橋晴夫 Haruo Takahasi 他2 北稜,9月13 日 BC=4370 m,21 日 Sundal gl. にC1=5850 m,9月30日C2=6500 mより3人登頂(第8 登) ●岩と雪,102,51/AAJ,1984,266
- 1983年秋 Hungarian Peter Dekany 他 6 南壁~東稜アルパイン・スタイル, 10月4日 Nandanban に BC, 20 日東稜上に C 2=6400 m, 21日 C 3=6700 m, 南壁中央をトラバース, 激しい降雪のため 6800 m のクレバスで3日間停滞, 雪崩の危険が増したため 25 日撤退する。22日 C 2 から下降中 Laszlo Jankovics が滑落死する ●岩と雪, 102, 51 (P. Dekiny)/AAJ, 1985, 296/IM, 12, 189-90
- 16 1984 年春 Polish Piotr Mlotecki 南壁, 4 月~6 月試登
- ① 1984 年春 Austrian Dieter Blumer 他 北

- 東稜, BC=4400 m, 北東稜の基部に C 2=6100 m を設け, 5月 11 日は 6950 m で悪天候のため 引き返したが, 12 日 2 人登頂, また 16 日には 1 人が 6800 m で断念したが 1 人登頂 (第 9, 10 登) AAJ, 1985, 296
- 1984年春 W. German Herbert Streibel他 北東稜,6月16日5人(内シェルバ1)登頂 (第11登) ● AAJ, 1985, 296 (Cestmir Lukes)
- 19 1984 年春 W. German Guntef Schulz 南壁, 6月~7月試登
- ② 1984 年 秋 Dutch Joost Pielage, Hans Lanters 北稜アルパイン・スタイル, 9月27日 Shivling (6543 m) にアルパイン・スタイルで西稜より登頂後, 10月3日 Vasuki Tal のABC着, 10月6日6400 mで断念 ●岩と雪, 109, 60 (J. Pleage)
- ② 1984 年秋 Japanese 東京西部労山隊 山中芳樹 Yoshiki Yamanaka 他 4 9月13日 Nandanban 着, 順応と偵察を兼ね北稜を10月4日6500 m まで登る。南壁から西稜に転じ10月21日 C 2=5900 m を設け25日主稜直下6500 m まで達したが吹雪となり断念 ●岩と雪, 109, 60 (山中芳樹)
- ② 1984 年秋 台湾 Wu Chin-Hslung 北 稜, 10月~11月試登
- ② 1985年夏 Franco-Italian隊 (Italian=Cesare Cesa Bianchi 他 6, French=Erik Decamp 他 6) 8月13日北稜より5人登頂(第12登),8月19,20,21日 Kedar Dome に登頂,24日 Bhagirathi Ⅱに東面より北稜を登り通常ルートを下る ●山岳年鑑, '86,72/AAJ,1986,255 (Erik Decamp)
- ② 1985 年秋 British Jerry Hadwin 他 3 西峰 (6504 m) を目指して8月下旬BCを設け 9月5800 m まで登る ●Hima, 17-12, 187
- 図 1986 年春 Indian, Giri Premi (Pune) 隊 Dr. Minoo Mehta 他 2 北稜, 5月21日6000 m の C 2 で雪崩により隊長と Nandu Paghe それに HAP 1 人が行方不明となる。また隊員 1名が病死する ●山岳年鑑, '87, 79/岩と雪, 118, 84 / AAJ, 1987, 259 (Kamal K. Guha) / Moun, 110, 11;111, 11 / Hima, 18-2, 26;18-7, 102;18-10, 154
- 図 1986 年春 Polish Ryszard Kolakowski 他8 南壁アルパイン・スタイル, 5月23日 BC = Nandanban 4300 m, 26日 Swachand gl. 上, 南壁の下に ABC = 5000 m, 6月9日 R.

Kolakowski と Tomasz Kopys が登攀開始, 南壁右よりをほぼダイレクトに頂上に抜けるラインを登り 6200 m, 6800 m にピバークして完登6月12日登頂(第13登)通常ルートの北面を下る ●岩と雪, 118, 84 (J. Nyka) /山岳年鑑, '87, 78-79 (一〃一) / Moun, 111, 11/AAJ, 1987, 259-61 (R. Kolakowski) / HCNL, 40, 16/Hima, 18-5, 77

- ② 1986 年夏 Spanish Antonio Masia 他 4 北稜,7月悪天候のため6400mで断念
- 28 1986 年夏 French, Altitude Extreme 隊
 Claude Jaccoux 北稜, 7月27日登攀開始, 8月18日9人(内女性2)登頂(第14登)
 ◆ AAJ, 1987, 261 (Claude Jaccoux)
- 29 1986 年夏 Italian Renato Moro 他 北 稜, 8月17日9人, 18日8人登頂(第15, 16 登)
- 到 1986 年秋 Polish, Klub Wysokogorski Rzeszow 隊 Jerzy Wala 他 12 北稜, Nandanban に BC, 6300 m に C 2 を設け 10 月 22 日 3 人登頂 (第 17 登), 翌 23 日は 6800 m で断念
 ●山岳年鑑, '87, 79 / AAJ, 1987, 261 (J. Nyka) / HCNL, 40, 16
- 1986 年秋 Swiss Grafkurt Rudolf 他 4 北稜, ボーランド隊と試登し 5400 m に達したが rock shelf で阻まれる。翌日それを乗り越したが断念, 隊長だけが 10 月 23 日登頂(第 18 登) ●1M, 21, 215
- ② 1986 年秋 Indian, Giri Premi (Pune) 隊 Nandu Page 他3 9月~10月,春の隊の遺体 捜索が目的 発見する
- ③ 1987 年夏 Spanish Rafael Fuentes Raspall 他 1 北稜, 7月6日BC = Nandanban 4440 m, 16日C1=5200 m, 18日6500 m で断念 ●1M, 21, 194
- ④ 1987年夏 Trekking International, Italy 隊 Giampiero Di Federio 他 6 8 月 7 日 BC = Vasuki Tal 4900 m, ABC とハイ・キャンプ 2 ツを設け 8 月 16 日 2 人登頂 AAJ, 1988, 228/IM, 21, 194-95
- ⑤ 1987 年夏 Dutch (Netherlands) Frans Matthijs Taselaar 他 2 北稜, 8月16日BC を Vasuki Tal と Nandanban に, 21日ABC=5400mを設ける。雪の状態が悪くて C 1=6200mを設けられず断念 ●IM, 21, 195
- 9 1987 年 秋 Swiss-Austrian 合 同 隊 Wolfgang Stefan 他 8 Shivling 西稜試登後 10 月 5 日 Vasuki Lake にキャンプ, 翌日 Sato-

panth の北の氷河にキャンプ, C2 は北稜のコル 6000 m, C4=6400 m, 10月9日2人登頂
●AAJ, 1988, 234 (Wolfgang Stefan) / IM,
21, 195

③ 1987 年 W. German 隊 登頂

SABOIA KANGRI (SUMMA RI) 7263 m

Karakorum, Baltoro Muztagh, K 2 group 35°51′59″N, 76°26′59″E

① 1982 年春 Swiss-Czechs 合同隊 Cestmir Lukes 他3 東壁,6月6日BC=Godwin Austen gl. と Savoia gl. の合流点 5000 m に建設。 ABC を Savoia gl. 5400 m におき6月20日C1=6200 m ここよりアルバイン・スタイル3ビバークして東壁 (Czech Pillar) 6600 m で断念 ● 岩と雪,95,65 (Zdenek Lukes) / AAJ,1983,276 (Cestmir Lukes) / HJ,41,212 (Illustrated Note 7)

SHARTSE (Shartse II, Junction Peak) 7459 m

Nepal, Mahalangur Himal, Khumb group 27°57′56″N, 86°59′00″E

(Shartse, Peak 38, 7591 m, 27°57′21″N, 86°57′56″E)

① 1984年 S. Korean, KAGA-Nepalese 合同隊 Lee Yong-Ho 他8 (内ネ3) 西より南稜, 4月13日BC=5350m着 Lhotse SharとPeak 38の下を通り4月19日C1=5600m, 29日南稜上にC3=6450mを設ける。5月6日Dae Pyo-Yoon, Hyo Kyun-Kwak, Shrpa Nima WangchuがC6=7050mを設け7250mにビバークして5月8日登頂(第2登) ● Lee Yong-Ho: Shartse Expedition, 1984. HJ, 41, 143-45, 1983・1984/AAJ, 1985, 256-57 (Lee Yong-Ho)/岩と書, 109, 42

SHISHA PANGMA (XIXABANGMA, GOSAINTHAN) 8046 m

Tibet, Jugal & Langtang Himal 28°21'07"N, 85°46'55"E

周辺の峰

NYANANG RI = 7071 m, $28^{\circ}18'53"$ N, $85^{\circ}47'53"$ E

PHOLA GANGCHEN (Molamenqing) 7661 m, 28°21'17"N, 85°48'45"

PORONG RI=7284 m, 28°23'40"N, 85°43'15"E PUNGPA RI = 7446 m, 1.5 Km southwest of

Shisha Pangma

- ① 1981 年春 Japanese 女子登攀クラブ隊 田部井淳子 Junko Tabei 他8 北東面初登ルート、3月31日 BC=5100 m、4月30日 C6=7700 mより田部井淳子隊長と中国人協力員2名(この2人は頂上直下3 mまで)の3人が登頂(第5登、女性初) ●落合誓子:『女たちの山」。山と渓谷、昭和57年/田部井淳子:私ひとりのシシャパンマ。山と渓谷、531、154-157、1981年8月号/北村節子:麗峰シシャパンマに立つ。山と渓谷、531、29-31(カラーグラフ)、1981年8月号/岩と雪、83、24:88、23(田部井淳子)/AAJ、1982、287(Mrs. Junko Tabei)
- ② 1981 年春 New Zealand Austin Brookes 他 10 BC = Yambu Kangala gl. 3800 m, Shisha Pangma West (Molamenqing = Phola Gangchen) に北面~西面より5月14日 Bruce Farmer, Dick Price がC5=7100 mを出発して 初登頂,16日2人,20日4人が登頂する ● 岩と雪,88,23/AAJ,1982,288 (Austin Brookes)
- ③ 1981 年春 Italian-W. German 合同隊 Reinhold Messner 他 7 北東面,日本隊と同じルート,5月28日 R. Messner と Friedl Mutschlechner が無酸素で 7000 m のキャンプより頂上を往復する(第6登) ●メスナー,ラインホルト:『生きた,還った』。6章,105-11,横川文雄訳,東京新聞社,1987/岩と雪,88,23/AAJ,1982,287;1983,294/Moun,80,13
- ④ 1981 年秋 American Gerry Roach 北東面, 9月は大量の降雪, 10月に入ってからは強風のために雪崩の危険が増したため7200 mで断念 ●岩と雪, 88, 23/AAJ, 1982, 287-88 (Gerald A. Roach)
- ⑤ 1981 年秋 American Luis Reichardt 他 4 北東面, Qomolangma 東壁を断念したチームの うちの L. Reichardt, James Morrissey 他数人が 通常ルートをアルパイン・スタイルで試み 10 月 24 日 C 4=7150 m を設けたが翌日から天候 悪化し 11 月 1 日断念 ●岩と雪, 88, 23 (H. A. Carter) /→Everest No. 5
- ⑥ 1982年春 British Doug Scott 他5 (内女性1) 南西壁アルパイン・スタイル、4月24日 Nyanang Phu gl. 5015 m に BC、5月3日 Nyanang Ri の下に ABC をおき4~7日に Nyanang Ri の頂上直下迄往復、さらに Shisha

Pangma の南西の肩 Pungpa Ri, 7445 m に南西 壁のクーロワールから南稜に出て頂上の下 150 mで2度目のビバークをして5月19日 Roger Baxter-Jones, Alexander Mac Intyre, Douglas Scott が初登頂する。この3人が5月22日より 主峰南西壁にアルパイン・スタイルで挑む。5 月28日南東稜に出て登頂(第7登)東峰まで 行き南東稜 7590 m でピバークし 7300 m 付近よ り南西壁側を下って氷河におりたつ ●Scott, Doug & Alec Mac Intyre: The Shishapangma Expedition. Seattle. The Mountaineers. 1984; London, Granada Publishing, 1984 / Scott. Doug: Shishapangma's Southwest Face. AAJ, 25, 35-39, 1983 / - * - : The British Xixabangma Expedition, 1982. HJ, 40, 29-32, 1982 · 1983 / Brook, Elaine: Land of the Snow Lion. London, Jonathan Cape, 1987/岩と雪, 95, 24 (Doug Scott) / Moun, 86, 11:91, 44 (- " —)

① 1982 年春 Japanese 大分県山岳連盟隊

- 伊東亨 Toru Ito 他 12 Porong Ri 北東稜, 5 月 15 日 BC=5000 m, 5 月 9 日 C 5=6900 m よ りアタック東峰 (7280 m) を越えた所で悪天候 となり断念しC5を撤収する。そのため第二次 隊の江藤幸夫 Yukioh Etoh, 和田実 Minoru Wada の 2 人は C 4=6700 m より アタックし5 月17日主峰に初登頂する。下山中6700m付近 で和田隊員が Porong Ri gl. 側へ滑落 18~20 日 捜索したが発見出来なかった ●梅木秀徳:ポ ーロン・リ登頂。山岳, 78年, 29-37, 1983/ 岩と雪, 95, 25 (伊東亨) / AAJ, 1983, 295 ⑧ 1982 年秋 Japanese 高山研究所隊 原真 Makoto Hara 他 6 北東稜アルパイン・スタ イル、9月6日BC=5100m、19日ABC=5700 m. 9月26日からのアタックは10月2日7400 m, 第二次は6日7650m, 第三次は7日7700 mまで、そして10月7日に出発した3人が10 日登頂, さらに12日3人登頂全員登頂を果た す (第8,9登) ●原真・加藤幹敏: 『ドキ ュメント速攻登山』。東京新聞出版局, 1984/ 原真:悪天候に阻まれた速攻登山。岳人, 427, 26-33, 1983 年 1 月号/山岳, 78, 127-28, 1983/岩と雪, 95, 24/AAJ, 1983, 294
- ⑨ 1983年春 W. German-Swiss 合同隊 Sigi
 Hupfauer 他 12 北東面通常ルート, 3月29日BC=5000m, 4月27日C4=7350m, 29日主峰に3人(第10登)中央峰に1人登頂, 28

日 Fritz Luchsinger が肺水腫になり 6900 m 付近で死亡する ●岩と雪, 102, 26-27 (Sigi Hupfauer) / AAJ, 1984, 314 (- ルー)

⑩ 1983 年秋 American Glenn Porzak 他 10 北東面通常ルート, 9月1日 BC, キャンプを 4 ツ設け 9月30日3人登頂(第11登) ● Porzak, Glenn: Shisha Pangma-First American Ascent. AAJ, 26, 19-23, 1984/岩と雪, 102, 27 /Moun, 96, 13

 ① 1984年春 American Joseph Murphy 他8 北東稜通常ルート,4月15日BC=5490m,C 6=7680mより5月6日4人,8日2人登頂 (第12,13登) ●岩と雪,109,35-36 (Joseph Murphy) / AAJ,1985,339 (一///--)

12 1985 年春 Austrian, ザルップルグ公募隊 Marcus Schmuck 北東稜, BC=5000 m, 酸素ポーターなしで C 4=7150 m より 5 月10, 12, 19 日計 11 人登頂 (第 14~16 登), Oswald Gassler は頂上からスキー初滑降をする● 山岳年鑑、 '86, 28 / AAJ, 1986, 299 (Marcus Schmuck)

13 1985 年春 Italian 公募隊 Renat Moro 5
 月 16 日 2 人登頂(第 17 登) ◆ AAJ, 1986,
 299

1985年秋 Swiss-Austrian Markus Itten
 他8 北東稜通常ルート,9月7日BC=5100m,5800mのABCよりアルバイン・スタイルで9月12日出発,14日3人登頂(第18登)
 ● 山岳年鑑,86,28 / AAJ,1986,299

● 山岳年鑑, '86, 28 / AAJ, 1986, 29 (Oswald Oelz) / Moun, 108, 10

⑮ 1986 年 夏 Italian 公 募 隊 Trekking International Alberto Re 他 14 北東面通常ルート、キャンプを 3 ツ設け 8 月 28 日 7750 m で断念 ●岩と雪、120、92/山岳年鑑、87、47 / Moun、112、10 / AAJ、1987、305 (Renato Moro) / Hima、19-3、35-36

1986 年 秋 French-Japanese-Austrians guided 公募隊 Claude Jaccoux 北東面通常ルート,6900mより9月10日3人,19日1人,20日2人登頂(第19~21登) ●岩と雪,120,92/山岳年鑑,'87,47/Moun,112,10/Hima,19-3,36/AAJ,1987,305 (Renato Moro)

団 1987 年春 American, Colorado 隊 Dr. Richard D. Dietz 他 4 北東面通常ルート, 4月12日 BC=4900 m 着, 4月24日断念 ●山岳年鑑, 89, 48/AAJ, 1988, 279 (Richard

Dietz)

 1987年春 New Zealand Mike Perry 他5 北東面通常ルート,5月16日2人,20日2人 (内1人は Maori)登頂(第22,23登)●
 AAJ,1988,279-280(X. Equskitza)/山岳年鑑:89,48

19 1987 年夏 Italian 公募隊 Trekking International Oreste Forno 他 6 北東面通常ルート, 9月10日C1=6400mまで ●山岳年鑑, '88, 51 / AAJ, 1988, 280 (Xavier Equskitza) / HCNL, 41, 46 (一/2一)

20 1987 年秋 Polish 国際隊 Jerzy Kukuczka 他 12 8月22日 Yebokangal gl. に BC = 5800 m, 29 H J. Kukuczka と Artur Hajzer が Yebokangal (7365 m) に初登頂する。2人は9月16 日より Shisha Pangma の未踏の西稜にアルパイ ン・スタイルで挑む。7300 m, 7900 m でビバ ークして 18 日未踏の西峰 (7950 m) を越えて 主峰に登頂(第25登)頂上直下でビバークし 北東稜通常ルートを下る。一方通常ルートに向 かった5人(内女性1)は同日C3=7400mよ り登頂 (第24登), さらに Alan Hinkes, Stevn Untch のペアは北壁中央のクーロワールに向い 7500 m でビバークして 19 日登頂 (第 26 登) 通常ルートを下る • Kukuczka, Jerzy: Shisha Pangma, My Fourteenth 8000 er. AAJ, 63, 31-38, 1989/岩と雪, 126, 91/山岳年鑑, '88, 50/ Moun, 118, 5/HCNL, 41, 46/AAJ, 1988, 280 (Jozef Nyka) / AJ, 337, 241, 1988 · 89 ② 1987 年秋 Austro-Swiss-German 公募隊 Stefan Worner 他8 北東面通常ルート, 9月

18 日ポーランド隊と共に 4 人登頂 (第 24 登) ● Moun, 118, 5 / AAJ, 1988, 280 (Xavier Equskitza) / HCNL, 41, 46 / 山岳年鑑, '88, 51

② 1987 年秋 Italian 公募隊 Trekking International Beppe Tenti 北東面通常ルート, 8月 20日~9月25日 登頂成功 (第27登)

図 1987 年秋 Hungary Sandor Nagy, Peter Decany 他 7 北東面通常ルート, 9月7日 BC=5000 m, C3=7400 mより10月1日2人登頂, 3日のアタックは悪天候で中止, 8日4人登頂(第28, 29登) ●岩と雪, 127, 90/山岳年鑑, '88, 51 (P. Decany) / Moun, 120, 10 / HCNL, 41, 46 (J. Nyka) / AJ, 337, 240 (-〃一) / AAJ, 1988, 280-282 (Sandor Nagy)

24 1987 年秋 British, Expedition Jade Ven-

ture 隊 Lt. Col. Henry Day 他 16 9月21日 東面の Phola gl. の舌端に BC, こちら側からダ イレクトに東壁に取り付くのを断念、Pungpa Ri の南東フェース経由の迂回ルートへ転進, 10月16日 Pungpa Ri と Nyanang Ri とのコル に C 3=6900 m, 25 日 2 人がアルパイン・スタ イルで Pungpa Ri に登頂 (82 年 Scott route, 第2登), 2人は翌日 Shisha Pangma を目指し 南東稜 7650 m でビバークし、7700 m で断念 • Hughes, Luke: Xixabangma 1987-Exped. Jade Venture. AJ, 337, 63-70, 1988/89 / Osmaston, Henry: Sun, Snow and Science on Xixabangma. AJ, 337, 71-76, 1988/89 / Day, Lt Col M. W. H. : British Xixabangma Expedition, 1987. HJ, 44, 24-31, 1986/87 / Moun, 119, 8 / IM, 21, 178-79 / HCNL, 41, 46 / 岩と雪, 126, 91;127, 90 / 山岳年鑑, '88, 51;'89, 48 / AAJ, 1988, 282-83 (Stephen Venables) ;283 (Lindsay Griffin)

SIA KANGRI Karakorum, Siachen Muztagh, Sia group

I 峰=北峰, 7422 m 35°39′51″N, 76°45′43″E II 峰=東峰, 7325 m Ⅲ峰=中央峰, 7273 m, IV峰=西峰, 7315 m

- ① 1981 年夏 Indian Army 隊 Col. Narindar Kumar 他 Siachen gl. ~ Kondus gl. を隔てて Conway Saddle と対するコル (6280 m) に7月3日C3, Sia Kangri 西面にC4を設け7月13日西峰に4人登頂(第3登), 翌14日主峰に5人登頂(第3登) ●→Saltoro Kangri No. 1
- ② 1985 年春 Swiss, Max Eiselin 公募隊 Fredy Graf 他 21 Conway Saddle から 6月 6日 2 人がスキーで中央峰に登頂 (第 3 登), 7日主峰にもスキーで 5 人が登頂 (第 4 登), 10日スキーで西峰に 2 人, 中央峰に 1 人登頂 (ともに第 4 登) ●→Gasherbrum I No. 13
- ③ 1985 年夏 Indian Army 隊 Maj. M. Dutt7月31 日登頂(第5登) 詳細不明
- ④ 1986 年春 Indian, Bihar Regiment 隊 Maj. P. S. Balahara 他 6月20日登頂 (第6 登) ●Hima, 18-5, 73
- ⑤ 1986 年春 American (Leo Le Bon 他 6) —Indian (K. Cherian 他 7) 合同隊 Siachen gl. 舌端に 6 月 9 日 BC = 3540 m を, 同氷河を遡り 5800 m に ABC をおく。北東からのルートを試 みていたアメリカ側は 6 月 26 日 Indira Col 5776 m にキャンプを設け, Turkestan La にも

達したが印パ戦争のあおりを受け引き揚げる。 一方南西面ルートを目指していたインド側は Conway Saddle に C 7 をおく。パキスタン軍か ら砲撃を受けたが被害なく南西稜より 6 月 28 日 3 人, 29 日 4 人が登頂する。(第7,8登) ● Cherian, Major. K. V: Sia Kangri, 1986. HJ, 43,80-83,1985・1986/岩と雪,119,92 (Leo Le Bon) /山岳年鑑, '87,87 (一ヶ一) / AAJ, 1987,270 (一ヶ一) / Hima, 18-5, 73-74:18-9,137-38 (H. Adams Catrer)

SKYAN KANGRI 7544 m

Karakorum, Baltoro Muztagh K 2 group 35°55′18″N, 76°34′06″E

① 1987 年夏 International 隊 Doug Scott
 他 5 K 2 東壁のための順応をかね東稜 6500 m
 地点まで往復する ●→K 2 No. 30

SPANTIK 7027 m

Karakorum, Rakaposhi range 36°03′28″N, 74°58′45″E

- ① 1984 年夏 Dutch (Nederlandse) Jan Bongnaar 他 6 (内女性 3) 南東稜~南西稜, 7月8日 BC = Chogolungma gl. 4300 m, Chogo と Lungma の間のコルから 20日 Lungma の頂近く 6400 m に C 3, 22日5人(内女性 2), 25日3人登頂(第6, 7登) ●岩と雪, 109, 79 (Jan Bongnaar) / AAJ, 1985, 326 (-∞)
- ② 1987 年夏 British Anthony Saunders 他 5 北西ピラー (Golden Pillar) アルバイン・スタイル, 7月 14 日 BC=Suja Bassa 4000 m, 付近の小ピークで順応の後, 8月 5 日から A. Saunders と Mick Fowler がアルバイン・スタイルで北西ピラーに挑み 11 日登頂 (第8登), 頂上の西約 2 Km にある雪稜を下り 2 日後 BC につく Fowler, Mick:The Golden Pillar of Spantik. Moun, 118, 20-27, 1987 / Saunders, A. V.: The Golden Pillar. HJ, 44, 135-41, 1986・1987 / 一ゥー:The Golden Pillar: AJ, 337, 1-6, 1988-89 / Moun, 117, 8 / HCNL, 41, 45 / 山岳年鑑, '88, 103 (A. Saunders)

TENT PEAK (KIRAT CHULI) 7365 m

Sikkim, Kangchenjunga Himal 27°47′10″N, 88°11′55″E

(NEPAL PEAK = 7180 m, $27^{\circ}46'37''\text{N}$,

88°10'30"E)

① 1985 年秋 British Services (Major Michael Kefford) -Royal Nepal Army (Major Gaurav S. J. B. Rana) 合同隊 17人 Nepal Peak より Tent Peak への縦走が目的。Nepal Peak の下の氷河上に BC=5500 m, 10月14日 C 2=6450 m を設け、15日 Nepal Peak 南稜 6735 m で断念 ● Kefford、Major M.: Kirat Chuli、1985、HJ. 43、112-14、1985、1986/山岳年鑑、"86、36/AAJ、1986、217/Moun、108、11/Hima、17-12、192

② 1986 年秋 French-Nepalese 合同隊 D. Hembise 他 8 (内ネパール 3) Nepal Peak 南稜から Tent Peak への縦走を目的に入山。9 月末 Pengpema 5000 m=BC, 10 月 21 日 Nepal Peak 南稜 6650 m で断念 ●山岳年鑑, '87, 50/AAJ, 1987, 222 (Dominique Hembise)

TILITSO HIMAL 7134 m

Nepal, Annapurna Himal 28°40′58″N, 83°48′50″E

- ① 1981 年春 Japanese 福岡グレイシャー・ クライマーズ・クラブ隊 白石宣夫 Nobuo Shiraishi 他 9 Tilitso 西峰から Nilgiri 北峰へ の縦走が目的。4月3日BC, 27日 Tilitso West (6492 m) に北稜より2人登頂。 Nilgiri 東稜縦走隊が西峰に5月3日登頂, 帰路11日 に再び登頂する ●→Nilgiri No. 2
- ② 1981/82 年冬 Nepalese, Sherpa 隊 Dawa Gyalzen Sherpa 他 2 北面, 北稜アルバイン・スタイル, 1月17日 Lamphu Dome の上に BC = 4400 m, 21日 Tilitso Lake 上部の C1 = 5130 m を出発, 24日 Dawa Gyalzen Sherpa, Gyalzen Sherpa, Sarey Tshering Sherpa の 3人が冬期初登頂する(第6登) ●岩と雪, 95, 45-46 / AAJ, 1983, 243-44 (Sarey Tshering Sherpa) / Moun, 85, 11-12
- ③ 1982 年春 Nepalese Royal Army 隊 Lieutenant Colonel Gopal Singh Bhora (陸軍10,シェルバ5) 北稜,4月30日7人,5月2日6人登頂(第7,8登) ●岩と雪,95,46/AAJ,1983,244/Moun,86,12
- ④ 1982 年秋 German AC, Mountain & Ski School 隊 Gunther Harter 他13 北東支稜よ り北稜 (80 年スイス隊ルート), 10 月 11 日 BC=Tilitso Lake 4900 m, 15 日 C 2=6300 m, 17 日 5 人登頂 (第 9 登) ●岩と雪, 95, 46 /AAJ, 1983, 244 (Gunter Sturm) / Moun,

89, 12

- ⑤ 1983/84 年冬 Korean Alpine Guide Association 隊 Lee Yong-Ho 他 3 北面から北稜アルパイン・スタイル、テント1回、ビバーク4回して12月11日2人登頂(第10登) ●岩と雪、109、56 / AAJ、1984、259-60 / Moun、96、12
- ⑥ 1984 年 Japanese 寺 島 彰 Akira Terasima 高山湖沼の学術調査に Tilitso 湖へ
 ◆寺島彰: ヒマラヤの遠き湖「ティリッオ」。 山と渓谷、594、24-27、1985 年 9 月号
- ⑦ 1984 年秋 French-Spanish-Belgian 合同 隊 Emmanuel Schmutz 他 33 北東側稜より 北稜アルバイン・スタイル, 10 月 中旬 BC 着 ハイ・キャンプを 2 ツ設け 6600 m まで ●岩 と雪, 109, 56 / AAJ, 1985, 291 (Michael J. Cheney)
- ⑧ 1984 年 秋 5 Japaneses-4 Slovaks-1 Frenchman 武川俊二 Shunji Takegawa 南壁を3回アタック、悪天候で失敗 ●→Annapurna I No. 18;Nilgiri No. 10
- ⑨ 1984/85 年冬 Canadian Stephen Adamson他 1 北稜 5800 m まで ●山岳年鑑, '86, 62 / AAJ, 1985, 291
- ⑩ 1985 年 秋 Spaniard Jose Luis Garcia Sanchez 他 7 北面より北東稜, 10月5日BC = 5200 m, 日数がなくなったのでアルバイン・スタイルに切り替える。22日強風と深雪のため 6000 m で引き返す。第二次 26日 6750 m で断念 Sanchez, J. L. G.: Tilicho Peak. HJ, 43, 127-28, 1985・1986/山岳年鑑, 87, 73-74 (J. L. Garcia Sanchez) / AAJ, 1986, 246
- ① 1986 年春 W. Greman Hans Huhn 他 15 4月4日BCの手前 Mesokanta La の西側 4570 m 付近で雪崩に巻き込まれ Rudolf Springmann と Herman Ebert が死亡、このため登山活動を断念 Annapurna 一周のトレックに変更する●岩と雪、117、79/山岳年鑑、87、73/AAJ、1987、249 (M. J. Cheney) / Hima、18-1、16
- ① 1987 年春 Spanish Jordi Colomer 他 4 北東側稜〜北稜, 3月28日凍った Tilitso Lake を渡って BC=4910 m, 2日後5100 m に ABC を設け7日よりフランス隊ルートを登る。8日 北稜6100 m に C1, 9日頂上下100 m, 7050 m で悪天候のため断念 ● AAJ, 1988, 222 (J. Colomer) / 山岳年鑑, '88, 73 (-//-) / Moun, 119, 9/HCNL, 41, 31/IM, 22, 199

(3) 1987 年秋 Swiss Bruno Zaugg, Marco Battaglia 北東側稜, 10月5日5800 mまで (BC についてから2日目) ● AAJ, 1988, 222 (M. J. Cheney & E. Hawley) / 山岳年鑑, '88, 73/IM, 22, 199

TIRICH MIR Eastern Hindu Kush

Main = Wala No. 30 = 7708 m 36°15′21″N, 71°50′32″E

東峰 = Wala No. 31 = 7691 m 36°15′30″N, 71°50′20″E

- ① 1982 年 夏 Swiss Marrus Itten 他 7 1967 年 Czech route (Upper Tirich gl.~Dir Gol Zom との間のコルに出るルート), 6月 21日 BC=4500 m, 7月 11日 C 6=7200 m, 13日 4人が C 6 に登ったが 3人が C 5 に下り 14日 Anton Knecht が単独登頂する (第 14 登), HAP なし ●岩と雪, 95, 67 (J. Nyka) / AAJ, 1983, 289 (M. Itten) / Moun, 90, 10② 1982 年夏 American Robert Wilson 他 7上記スイス隊と同じルート, west saddle に C 4を設け 8月 10日 4人登頂 (第 15 登) ●岩と雪, 95, 67 (H. A. Carter) / AAJ, 1983, 289-90 (Robert A. Wilson)
- ③ 1983 年夏 Polish Ryszard Warecki 他 6 South Barum gl. ~ South Col 6500 m ~ 南稜(71 年日本山岳会石川支部隊ルート)に合流する新ルート,7月24日 BC = South Barum gl. 4400 m, 8月2日 S. Col に C 2 = 6500 m, 11日 Rafal Cholda と Artur Hajzer が C 2 を出発,南稜7000 m でビバークしノルウェー・ルートに合し12日登頂(第16登)7000 m でもう一度ビバークして BC へ。第二次隊は South Col 直下で雪崩によって 1 人負傷したため断念 Warecki, Ryszard:1983 Polish Tirich Mir Expedition. HJ, 41, 199-201, 1983・84/岩と雪,102, 71(J. Nyka)/AAJ,1984,307-08(R. Warecki)
- ④ 1984 年 夏 British, Old Oundelian 隊 Jonathan Lee 他 8 Upper Tirich gl. ~西稜, 8 月 2 日 BC = 5120 m, 17 日 Ghul Lasht Zom に登頂。8月 24 日 C 4 = 6860 m, 28 日 7000 m で断念 ●岩と雪, 109, 82 (M. Parrish) / HJ, 42, 233 (Illustrated Note No. 10)
- ⑤ 1986 年夏 Italian, Gervasutti Memorial 隊
 Franco Ribetti 他 4 東峰北壁を目指したが、
 7月17日ティリッチ・ゴルムに入ったズングラングラン付近で自動車が川に転落し隊員の

Dr. Alessandro Nacamuli と連絡官が死亡した ため遠征を中止する ●岩と雪, 119, 95 (F. Ribetti) / 山岳年鑑, '87, 108 (一〃一) / AAJ, 1987, 295

- ⑥ 1986 年秋 British Steve Callen 他 7 西 稜, ハイキャンプを 4 ツ設け 6800 m までルート工作を終えたが 9 月上旬に降雪がつづいたた め断念, Dirgol Zom に北面〜東稜で 8 月 27 日 2 人, 2 日後に 3 人が登頂 ●山岳年鑑, '87, 108 / AAJ, 1987, 294-95 (L. Griffin) / Moun, 112, 11/HCNL, 41, 26
- ⑦ 1986 年秋 W. German Siegfried Ludwig他4 イギリス隊の C 1=5400 m の少し下で断念 AAJ, 1987, 295

TIRICH MIR WEST and NORTH Eastern Hindu Kush

西峰主峰=Wala No. 46=7487 m 36°15′48″N, 71°49′E

II 峰 = Wala No. 47 = 7450 m $36^{\circ}16'$ N, $71^{\circ}48'40''$ E

III 峰 = Wala No. 48 = 7400 m 36°16′20″N, 71°48′15″E

IV $\mathbf{i}\mathbf{k}$ = Wala No. 49 = 7338 m 36°16′18″N, 71°48′E

- 北峰=Wala No. 51=6732 m 36°17′N, 71°48′E
 ① 1982 年夏 Spanish, Catalunya 隊 Ramon Estiu 他 4 7月18日 Upper Tirich gl. 右岸モレーン上に BC=4700 m, 8月4日 Tirich Mir と西峰 I との間のコルに C 4=7200 m, 5日西峰 I (7487 m) に 2 人登頂(第4登) ●岩と雪, 97, 13/AAJ, 1983, 290 (Ramon Estiu)
- ② 1985 年夏 Nederlandse G. C. van Sprang 他3 7月14日 BC=4750 m 着, 21日 West IV を偵察, 23日 Ghul Lasht Zom South (6400 m) に登頂後, 7月27日北峰の北西フェースの下でビバーク。北峰北西壁に挑む。第二セラック上のクレバスでビバーク, 29日地震に襲われたが無事, 頂稜上, 頂上から100 m ほど下でビバークして30日頂上に立ち(第2登)初登ルートの北稜を下り5100 m ビバークの後 BCへ。8月6日及び15日に主目標のWest IV峰の北壁に2回挑んだが悪天候のため北西壁中間部のバルコニー直下の6100 m までで断念 ●山岳年鑑、86, 103 (G. C. van Sprang) /AAJ, 1986, 292 (一ヶ一)
- ③ 1985 年夏 Italian Gianni Calcagno 他 20 West I 登攀の順応のために Dirgol Zom(6778

m) に新ルートより 8月6, 9, 10 日に登頂したが、Elio Fontaniv が C 2=6300 m に帰ってから倒れ心臓疾患で死亡このため主目標の West I 峰 は 断 念 ● 山 岳 年 鑑、 '86, 104 (G. Calcagno) / AAJ, 1986, 292-93

TRISUL Uttar Pradesh, Garhwar Himalaya, Nanda Devi group

- I 峰, 7120 m 30°18′46″N, 79°46′38″E II 峰, 6690 m 30°17′37″N, 79°46′36″E
- ① 1981 年春 Indian, 西ベンガル登山協会女性隊 Lipika Ghosh 他 Trisul gl. に入り 6月4日 BC=5197 m, 最初のアタックは 5500 m, 6100 m, 6550 m とキャンプを進め 8日悪天候のため頂上下 230 m で断念。二回目は 5800 m, 6700 m にキャンプして 6月15日 2人(内HAP1)登頂(第31登) ●岩と雪, 89, 49(Lipika Ghosh) / AAJ, 1982, 245 (-∞)/Moun, 83, 10
- ② 1981 年春 W. German Anton Freudig 他 1 友人が帰国後 Freudig が単独で Nandakini 谷より西壁を登る (途中まで 76 年 Yugoslavs route), 5月21日BCを出発C3より26日登 頂(第32登) ●岩と雪,90,50/AAJ, 1982,245-46 (A. Freudig)
- ③ 1981 年 German, DAV Mountain & Ski School 隊 Franz Kellner 他 16 14 人が通常 ルートから登頂(第 33 登) ● AAJ, 1982, 246
- ④ 1981年 French Claud Jacoux 他 頂上から北稜をスキー滑降 (34 登) ●岩と雪, 88, 62
- ⑤ 1981 年秋 Japanese 仙台山岳会隊 坂野 宏三 Kozo Sakano 他 6 西壁ユーゴスラヴィア隊ルート,9月4日 BC=4430 m,22 日西壁 右手リッジ (南西リッジと仮称) 上にC3=6330 m,27 日南稜上のC4 予定地 6850 m まで登ったが悪天候のためC4 建設を断念 BCに下る。30 日より登攀再開10月2日C4を設け翌3日に4人が登頂(第35登) ●岩と雪,88,62 (坂野宏三) / AAJ,1982,246 / Moun,83,10
- ⑥ 1982 年 Australian Tim Mac Cartney Snape 他 8 Changabangを断念後 Trisul に転 進, 6400 m まで登る ● IM, 11, 132-34, 1983
- ⑦ 1982 年春 German, DAV 隊 Guenther Kaempte 他 17 北稜, C 2=6340 m より 6 月

- 26 日 9 人, 27 日 7 人とシェルパ 2 人登頂 (第 36, 37 登) ● IM, 11, 134
- ⑧ 1982 年夏 Spanish Lorenzo Arribas Mir 他4 東面,8月9日BC=4600m,スキー・ア ルパイン・スタイル,8月16日C4=6300m まで ●1M,11,132
- ⑨ 1982 年 夏 Indian, Ordnance Factory Trekkers, Ishapor 隊 Samir Kumar Guha 他 7 8月12日 Upper Tridang に BC, キャンプ を 3 ツ設け8月19日6人(内シェルバ2)登 頂(38登) ●1M, 11, 132
- ⑩ 1982 年秋 Italian, The Trekking International, Turin 隊 Alberto Re 他 26 北東面より, スキー使用, 6460 m の C 3 より 9 月 22 日 4 人, 10 月 7 日 7 人登頂 (39, 40 登) IM, 11, 134
- ① 1982 年秋 W. German Dr. Claus Peter Zoller, Dr. Guenter Unbescheid 南面, 10月10 日 BC=4600 m, 22日 C 1=5350 m で多量の降 雪のため断念 ●IM, 11, 132
- ⑩ 1983 年春 Spanish, Club Alpino Eldense 隊 Juan M. Maestre Carbonell 他 7 Sanctuary Wall の外側,南面より,6月28日 BC=Ghat-Home Kund 4720 m,7月7日 C 2= 6240 m,13日1隊員がスリップして負傷する。失敗 ●1M,12,194,1983
- ③ 1984 年春 Spanish Alfred Pastor 5月~ 6月 南面より試登
- 1984 年秋 Kurt Jurgen Plank 9月~10 月 南面より試登
- 1985年春 W. German Ludwing Nube 他2 5月24日南西面 5150 m に C 1 を設けたが 隊長が高山病にかかり連絡官と共に下山したため中止 ●山岳年鑑, '86, 67
- ⑤ 1986年 Spanish Gonzalo Suarez 他2 8 月 Nandakini 谷より入山, BC=4300 m, C 2= 5950 m 西面 6350 m で断念 ● AAJ, 1987, 258 (Gonzalo Suarez)
- ⑰ 1987 年春 Yugoslav Lado Vidmar 他 5 西壁 (Ales Kunaver route) 5 月 15 日 BC = 3500 m, 5 月 28 日出発 6400 m, 6900 m でビバークして 5 月 30 日 6 人全員登頂 (第 41 登), Vlasta Kunaver と Sandi Marincic は頂上からパラパントで BC まで飛び、L. Vidmar. Vanja Matijevec, Slavko Frantar, Janez Kastelec のあと4人は Trisul Ⅱ (6690 m), Ⅲ (6400 m)を縦走して BC に下る。なお高所順応中 3 人がNanda Ghunti (6309 m)の東稜を初登する ●

Kunaver, V.: Trisul's Ales Kunaver Memorial Route. AAJ, 30:62, 37-40, 1988/岩と雪, 124, 96/Moun, 117, 7/Hima, 19-4, 60-61 /HCNL, 41, 37/山岳年鑑, '88, 80 (V. Kunaver)

(8) 1987 年夏 Spanish Javier Saenz 他 5 ハイキャンプを2ツ設け7月21日3人, 27日 2人登頂(第42, 43登), Jaime Izquierdo はC 2=6000 m から BC=4050 m までパラパントで 飛ぶ ●山岳年鑑, '88, 80/AAJ, 1988, 226/HCNL, 41, 37

TSERIM KANG (JICHUDRAKE) 7012 m

Bhutan, Chomolhari range 28°05'N, 89°50'E 1983 年春 Japanese 女子登攀クラブ隊 田部井淳子 Junko Tabei 他13 東稜, リシン 谷を詰め北東壁直下の大きな湖の岸に BC= 4300 m を設ける。5月10日第三岩峰の頂点に C3=5300 m を設ける。第五岩峰へのコルを見 下ろす所を最高到達点として固定ロープの不足 から 11 日断念する。5月 20 日 Sepchu Kang (5200 m) に 4 名とブータン人 2 名が初登頂 し,22日11人(内ブータン人2)が登頂する ●田部井淳子:初めてのブータン登山。山岳, 80年, 78-80, 1985/江口政博·倉松由子: "手つかずのヒマラヤ"ブータンの山へ。山と 渓谷, 562, 25-31, 1983·8/山岳, 79, 47-48 /岩と雪, 97, 7;102, 49 (田中晶子) / AAJ, 1984, 224 (Junko Tabei) / 集英社

② 1983 年春 Austrian Eduard Ratheiser 他 9 南西稜, BC=4300 m, 5月15日南西稜の頭にC3=6100 m, 頂稜 6500 m にピバークして5月17日南峰 (6790 m) に Albert Egger, Sepp Mayerl, Toni Ponholzer, Alois Stuckler, Werner Sucher が初登頂する ● AAJ, 1984, 224-25 (Eduard Ratheiser) /岩と雪, 102, 49

「LEE」, 1983年9月号

- ③ 1984 年春 Japanese 日本ヒマラヤ協会隊 八木原圀明 Kuniaki Yagihara 他 8 東稜,5 月4日 BC=4500 m,13日東稜 5600 m に C 2, 17日のアタックは失敗。第二次隊 5 人は 6320 m でピバークして 5 月 20日南峰に第 2 登する ●八木原圀明:開かれた未知の頂「ジチュ・ダ ケ」。山と渓谷,577,13-17,1984 年 9 月号/ 岩と雪,109,59 (八木原 圀 明) / AAJ, 1986,210 (Kuniaki Yagihara)
- ④ 1984 年 秋 Italian Arturo Bergamaschi 他 12 東稜, 8月 30 日東稜取り付きの 4250 m

に BC, 9月2日 C 1=5350 m, 11日 5900 m まで登る。15日 Giorgio Corradini と Tiziano Nannuzzi が雪稜の崩壊で東壁側に転落行方不明になる ●山岳年鑑, '86, 35 / AAJ, 1985, 244-46 (A. Bergamaschi) / HCNL, 39, 3

YALUNG KANG (KANGCH WEST) 8505 m Nepal, Kangchenjunga Himal 27°42′15″N, 88°08′25″E

- ① 1981 年春 Japanese 日本ヒマラヤ協会隊 山森欣一 Kin'ichi Yamamori 他 21 主峰~西 峰の縦走を目的に入山,55 年イギリス隊ルートにしたがい4月14日 Great Shelf の突端にC 4=7300 m を設ける。ここから主峰隊と西峰隊 にわかれる。西峰隊はC5=8250 mより5月9 日5人が登頂(第6登) ●→Kangchenjunga No.1
- ② 1981 年春 American Chris Chandler, Cherie Bremerkamp (ペア) 北壁, 3月29日 BC=Pangpema 5150 m, (80 年山学同志会隊ル ート), 4月29日C3=6500m, 5月7日6900 m でビバークして北稜に抜け9日7400 m, 10 日 11 日 7600 m でビバーク天候回復の見込みな く12日C3に戻る。17日再び7400mの雪洞 に入り 18 日 7900 m, 19 日 8000 m まで達した が断念 • Chandler, Chris & Cherie Bremerkamp : Yalungkang; A Two Person Attempt. HJ, 38, 26-30, 1980 · 1981/- *-&-"—: Yalungkang. Moun, 88, 32-37, 1982/—" -&- / −:二人の挑戦。岩と雪,86, 54-60, 1982/岩と雪, 84, 28;88, 34 (Chris Chandler) / AAJ, 1982, 196-98 (- "-) / Moun, 80, 12
- ③ 1983 年秋 Swiss Denis Bertholet 他 8 目標を主峰に変更, 10月21日主峰に登頂 ● →Kangchenjunga No. 9
- ④ 1984 年秋 Polish Tadeusz Karolczak 他 9 (内スペイン 2) 南壁南ピラー,酸素シェルパなし、9月8日 BC=Yalung gl. 5200 m, 75年オーストリア・西ドイツ隊ルートと 73 年京都大学隊ルートの間の岩のピラーを登る。20日取り付きに C 2=6700 m, 10月6日 C 4=7800 m, 7日 Karolczak と Wojciech Wroz が南ピラーを初登攀して登頂(第7登)南東クーロワール (75年ルート)を下る。10月10日 2人登頂(第8登)同じコースを下る HJ, 41, 196 (Illustrated Note 1) / 岩と雪, 109,

- 40 (W. Wroz) / AAJ, 1985, 251 (Jozef Nyka) / Moun, 102, 13
- ⑥ 1985 年春 Yugoslavia Tone Skaria 他 14 4月6日 BC=Pangpema 5050 m 着, 北壁に 80 年山学同志会隊のアイス・ビルディングから取り付き 83 年ドイツ隊ルートに合して大テラスから東稜に出て 4月22日 Borut Bergant と Tomo Cesen が登頂(第12登)下降中 Bergant が滑落行方不明になる Skarja, T.: First Ascent of Yalung Kang from the North. HJ, 42, 154-6, 1984/一ゥー: "Jalung Kang". Borec, Ljubljana, 1987/シュカリャ, T.: クロニクル。岩と雪, 113, 73-74, 1985/AAJ, 1986, 213-14 (Tone Skaria)/Moun, 105, 10
- ⑦ 1987 年秋 American Magda King 他 4 南東面通常ルート、8月30日BC=5400 m 着、 キャンプを 4 ツ設け 10月12日大雪のため 8100 m で断念 ●山岳年鑑、788、55/AAJ、 1988、188-90 (Magda King) / Moun、120、 11/IM、22、199、1988

YAZGHIL DOME Karakorum, Hispar Muztagh, Yazghil group

South=7559 m 36°18′N, 75°15′E North=7324 m

① 1983 年 夏 Italian Arturo Bergamaschi 他 19 7月 10日 Kunyan gl. に BC=4500 m を おき 80 年ポーランド隊ルートを登り 24日 Disteghil Sar East と Yazghil Dome South からの尾根の合点に C 4=6900 m を設けその日の午後3人が Yazghil Dome South を往復する(第 2登), 26日 C 3=6450 m より南峰に 2人登頂(第 3 登) 7月 28日 Cristiano Casolari, Dr. Aldo Poli, Luigi Rampini の 3人が南峰の北西面をトラバースして北峰とのコルに達し、Casolari はそこから北峰を往復(初登頂),他の 2人は新ルートの北東稜から南峰に登頂(第 4登)西稜を下り C 4 に戻る ●→Disteghil Sar No. 2

YUKSHIN GARDAN SAR 7530 m

Karakorum, Hispar Muztagh, Kanjut group 36°15'N, 75°23'E

- ① 1981 年春 Japanese 神代高校 OB 会隊 大竹重信 Shigenobu Ohtake 他 5 BC = Khunyang gl. 4350 m, 同氷河を東に遡り Upper Yazghil gl. へ越すコルの手前に 7月3日 C1= 5200 m コルを越えた地点に 17日 C2=5850 m, そして 27日 Yukshin Gardan Sar の南西に C3=6300 m を設け、28日 6800 m で断念、31 日C2に戻る ●岩と雪、88、73 (藤野政浩) /AAJ、1982、277-78 (Masahiro Fujino)
- ② 1984 年春 5 Austrians-3 Pakistanis 合同隊 Rudolf Wurzer 5月28日 Yazghil gl. にBC, 同氷河を遡りC5=6700 mより南西壁に挑み二回の失敗の後、6月26日 Walter Bergmayr, Willi Brandecker, Reinhold Streif, Willi Bauerの4人が初登頂する。帰途7200 mでビバークしてC5に戻る Wurzer, Rudolf: First Ascent of Yukshin Garden Sar. HJ, 41, 191-92, 1983・84 / 岩と雪, 109, 79 (R. Wurzer) / AAJ, 1985, 322 (一ヶ一) / Moun, 105, 13
- ③ 1984 年春 6 Japaneses 東洋大学隊-5 Pakistanis 合同隊 大滝憲司 Kenji Ohtaki 5 月30日BC=3780m,6月16日北稜上にC3= 6400 m, 30 日 6550 m で断念, 南西面に転進, Upper Yazghil gl. よりアルパイン・スタイルで 挑む。7月6日 ABC=4100 m を出発 5900 m, 6150 m, 6600 m と進み 11 日時間切れで 7020 m で, 12 日も 7200 m で断念, 17 日再度 ABC を 出発 21 日 6600 m のコルに最終キャンプを設け 23 日 5 人が登頂 (第 2 登) ●鈴木章:ユク シン・ガルダン・サール登頂。岳人, 449, 28-33, カラーグラフ, 1984年11月号/岩と 雪, 109, 79-80 (半沢哲永) / AAJ, 1985, 324 (Akira Suzuki) / Moun, 99, 11;105, 13 ④ 1984 年夏 Japanese 弘前大学隊 舘岡博 Hiroshi Tateoka 他9 Hispar gl. より Kunyan Chhish North 北稜のコルを越して Upper Yazghil gl. に入る。オーストリア隊、東洋大学隊 と同じ南西面。7月22日までに頂上手前の岩 峰肩までルート工作を終えていたが北稜を断念 した東洋大学隊に第2登の優先権を譲り7月 25 日 3 人, 26 日 2 人登頂 (第 3, 4 登) ●岩 と雪, 109, 80/AAJ, 1985, 324/Moun, 105, 13
- ⑤ 1986 年夏 Spanish Alejandro Arranz 他

3 西面初登ルート,6月11日BC=4000 m,C 5=6500 m より3ビバークして7月9日3人登 頂(第5登) さらに2回ビバークしてC5へ ●岩と雪,121,86-88 (Alejandro Arranz) / 山岳年鑑,87,106 (-∞-) /AAJ,1987, 288 (-∞-) /Moun,113,9

YUTMARU SAR 7330 m

Karakorum, Hispar Muztagh Kanjit group 36°14'N, 75°22'E

① 1981 年夏 French Claude Jager 他 南 東稜試登後, 西稜に向かう。Kanjut-Yutmaru コルを目指しスパーを登ったが断念 ●AAJ, 1982, 277 (Claude Jager)

〈補〉

GANG BENCHEN (KANGPENQING) 7211

Tibet, Langtang Himal 28°33'30"N, 85°32'15"E ① 1982 年 Japanese 京都大学学士山岳会隊 近藤良夫 Yoshio Kondo 他 12 3月27日北面 に BC=4650 m. 4月4日東面の広大な氷雪原 42 ABC = 5700 m, 15 H C 2 = 6200 m, 17 H7100 m にデポを作る。20 日頂上下 20 m で断念 したが21日デポ地のC3より森本陸世Rikuyo Morimoto, 松林公藏 Kozo Matsubayashi, 牛田 一成 Kazunari Ushida, 幸島司郎 Shiro Koshima, 森戸隆男 Takao Morito, 中川潔 Kiyoshi Nakagawa, 人見五郎 Goro Hitomi, 近 藤裕司 Yuji Kondo が初登頂する。22 日 3人が 第2登する,4月27日~5月3日学術調査 ● 京都大学学士山岳会編:『カンペンチン』。毎 日新聞社、1983/森本陸世:カンペンチン。山 岳,78年21-28,1983/永田秀樹:チベットを ゆく京都大学学士山岳会。岳人, 421, 33-, 1982年7月号/岩と雪, 95, 25 (牛田一成) /AAJ, 1983, 294-95 (Yoshio Kondo)





トレッキングからエクスペディションまで。



アルパインツアーはヒマラヤからカラコルム、 ヨーロッパアルプス、アラスカ、カナダ、USA、南極、 アンデス、パタゴニア、ニュージーランド、中国、 アフリカ、北極圏その他の山岳地帯・辺境地帯への 主催ツアーやインフォメーションを用意しております。 もちろん日本国内の山旅も企画しております。 トレッキングのパッケージはもとより登山隊のための

航空便や地上手配などに関し、私達は豊富な知識と経験をもとに ご相談に応じることができます。ぜひ、お問合せ下さい。

運輸大臣登録一般旅行業第490号/日本旅行業協会正会員/ロイヤルネパール航空代理店



アルパノフ ツア サードフ はず金2

- 東 京/〒105 東京都港区新橋2-2-2(川志満ビル7階)
- 大 阪/〒541 大阪市中央区備後町4-2-5(東洋ビル4階)
- 名古屋/〒450 名古屋市中村区名駅3-23-6(第2千福ビル8階)
- 福 岡/〒810 福岡市中央区舞鶴1-2-8(セントラルビル 5階)
- ↑ 03(503)1911(代表)
- 06(227)5194(代表)
- ☎052(581)3211(代表)
- ☎092(715)1557(代表)

山岳関係図書案内

企画·編集 現 金価格ー H 本山 95 岳会 700



覆刻

日本山 岳

会

250円

現金価格-80、

本アルプス 全四巻 本 -山嶽志 風 論 高頭 志賀重昻 小島烏水

日本アルプスと秩父巡 行 有恒 禮 田部

アルペン行

鹿子木員信

黑部

浴谷

冠松次郎

研究と随想

大島亮吉

山と雪の日記 瀬と鬼怒沼 岩・アルプス 藤木九三 板倉勝宣

武田久吉

スウィス日記 イランド 辻村伊助 辻村伊助

北の山 氷河と萬年雪の山 伊藤秀五郎 水

山岳省察

今西錦司

日本アルプス登山と探検ウォルター・ウェスト in the Japanese Alps Mountaineering and Exploration

別巻山の憶ひ出全二巻 木暮理太郎 新装增補版

日本山岳会「會報」覆刻合本 第一号~第一〇〇号●特別資料 覆刻日本の山岳名著解題 日本山岳会編

新選

覆刻

岳

全 谷 文晁

信州鎗嶽畧縁起 多賀嶽再興記 Ш 播隆上人 播隆上人

山岳紀行六種(私家版) 乙酉掌記 松浦武 79

> 山 写真・ にたの

重治

富士案内 歐洲山水奇勝 野中 全二巻 高 岡島北海

山水無盡藏 全二卷 鹿子木員信 小島烏水 河口 魅

۲

白頭山 山岳美觀 山岳美觀 本本 澤に逝ける人々東京帝國大學山の會編 マラヤ行 尾崎喜八 吉江喬松

『新選覆刻日本の山岳名著解題』 別卷山岳礼拝(新編集) 山に描く ●解題書 Playground of the Far East ナンダ・ コット登攀 足立源一郎 中村清太郎 ウォルター・ウェストン 竹節作太

ルピニストの手記

小島烏水

7

IJ

I

追

想

京都帝國大學白 大島亮吉

頭山遠征

播隆上人筆 日本山岳会 ●特別資料 鎗ヶ嶽繪圖 會報』第一〇一号~第二〇〇号

図説百科

岳

N・ディーレンファース/T・ヒーベラー

日本語版監修

すくまとめたスタンダード 岳の全体像を多角的にわ は L 図版類をもとに、 600枚におよぶ美術 め、 西堀栄三郎・宮下啓三 かつ科学的に貴重な 地球上 かり ウー 0

B4変型判·上製函入·310頁 —

8,540

円

基本図書)である。

田

背景を通して描い 様な人々との ストG・L・マ ま還らぬ人となった若きアルピニ 第三次遠征時に の英国隊の一 世紀余り 前、 出会いや英国 ロリー 員に選ばれ、 頂上を目 I サ た追想記。 の素顔 I L 指 ス 回の社会 を、 1 L したま その 初 多

四六判・292頁

I,

54

5円

日本山岳会編

■内容見本呈

修館書店

〒101 東京都千代田区神田錦町3-24 振替/東京9-40504 電話294・2221〈大代表〉

軽く、コンパクトなテントのことなら

ARAI TENT

㈱アライテント

〒175 東京都板橋区赤塚5-13-7 Tel.03(939)6481

未知なる地平を求めて!



しい旅が始まる。

わたしたちは、新しい旅を追求し続けています。 たとえば、

天山山脈トレッキング パミール・トレッキング シベリア・アムール河下り 極北の旅ベルフォヤンスク カムチャッカ半島トレッキング ソ連の大地、シベリアの原野が わたしたちの冒険の舞台です。



運輸大臣登録一般旅行業代理店業第4860号

イーストコーポレーション株式会社 〒160 東京都新宿区西新宿7-5-6 ダイカンプラザ756館607号

☎03(361)0470代

営業時間 9:30-18:30





日本総発売元/株)キャラバン

本社/〒170 東京都豊島区巣鴨1-25-7 ☎03(944)2331(代) 大阪☎06(386)0451 札幌☎011(822)8664 福岡☎092(472)0981

アルテ米

お湯を注いで15分、 ホカホカのご飯ができあがり

姉妹品 アルファ赤飯

装備を へらせ 時間を かせげ



お求めは全国有名スポーツ用品店で……



尾西食品株式会社

東京都港区三田4-15-36 メゾン・ド・聖坂内 TEL 03-452-4020 FAX 03-456-3783 大阪市淀川区新高1-15-41 TEL 06-391-5995 FAX 06-396-6156

飼料・肥料配合プラントのコンサルタント

飼料・肥料製造用諸機械及び部 品の販売・関連機器の斡旋取扱

> 株式会社橋エンジニアリング 名古屋市中区橋一丁目27番8号 〒460 ☎名古屋052(321)1501(代)

旅するあなたのサポート隊

パッケージツアー・グループ・トレッキングは**あ遊旅行**が、割引航空券・個人旅行・個人山行は、**キャラパンデスタ**が、皆様のお手伝いをいたします。

秘境の地へ 世界の山々へ







~ 地球の果てまでお手伝い ~ 個人旅行・航空券手配の専門相談室

キャラバンデスタ 03-237-8384



話をいたします。 社員が、皆様のお世 マンズ連絡事務所の ネバールではカト

トレッキング部門は、JAI・HIMAL TREK-KINGが、一般観光部門は SAIYU・TRAVELがそれぞれ皆様のお手伝いをいたします。スタッフは日本語も話せますので、お気軽にご利用下さい。



シルクロード・秘境旅行・トレッキング・海外登山のバイオニア

運輸大臣登録一般旅行業第607号



株式 一 造 旅 行

社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル5 F つ03(237)1391代

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町 6-4 北川ビル 5 F ☎06(367)1391他

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-4 矢野ビル2F (航空寿専門相談室) ☎03(237)8384

信頼されて60年

山とスキー用品専門店



山友社 **たかは こ**

四谷本店 〒160四谷1-20相田ビル TEL (351)7432·1912

新宿駅ビル山友社 〒160マ イ シ ティ 5 番 街 TEL (352)6 5 6 4



叫と山スキ_の専門店

クレッターザック キスリング 夏冬用テント

カナダ、カウチン・ オリジナルセーター



草花や動物、神秘の原生林―山容・民俗・自然を美 たち、季節ごと時間ごとに変容する山々、 山なみを、心のふるさと、としている山ろくの人 息づく

しいカラー写真と解説で多面的に紹介。 信濃毎日新聞社編集局編 A B 判 176 P 定価2575円〒86円

北アルプス・松本平の里の山 91座

補訂版

今井建樹ほか

定価2400円

奥原弘人

の

植

松田行雄・土田勝義

峰の植

定価2266円

谷

植

戸隠・妙高山群 中央・南アルブス、 上信越高原、 霧ヶ峰・八ヶ岳、 佐久の山、 木曽、 東北信 南信の里の の里 0) 1U1 104 Ш 96 座

信濃毎日新聞社編 B 5 判 各巻定価4017円〒30円

信州の山野に野生している一三○○種を収録した決定版カラー図鑑。 A 5 判 定価3800円〒36円

奥原弘人・千村速男

定価2678円

植

勝義

定価2575円

植

奥原弘人著

志 信州 高原 の散策に

行田哲夫写真集

定価3605円

]最適

(消費税込み)

植

ヶ岳の植物 定価2266円 定価2472円 定価2266円 定価1648円

土田勝義

地

植

植物

と植

丸山利雄

信濃毎日新聞社

定価2266円

長野市南県町657 TEL 0262-36-3377 FAX 0262-36-3393

カサスの名峰

エルブルース・ベゼンギ・パミール 登山とトレッキング



Saller Contract

ヨーロッパ随一のエルブルース山(5,633m)を始め シハラ、ジャンギダウなど高峰が連なる大コーカ サス山脈。また、プーシキン、トルストイなど多く の詩人を酔わせた大自然の山脈です。

(モデルブラン)

- ■ヨーロッパ最高峰エルブルース登頂(14~21日間) モスクワで各国の人と合流し、カフカスのふもとピャチゴルス
- クを経て、エルブルース山をめざします。 ■パミール登頂(20~30日間)
- モスクワ経由で、ベースキャンプへ。ソ連領、7000m級のレー ニン峰やコミュニズム峰などでキャンプ。
- ■コーカサス・ベゼンギ登山とトレッキング(14日~21日)
- ◆その他、バイカル湖付近の登山や、各山でのトレッキングなどもうけたまわります。
- ★ゴールデンウィーク特別企画(平成3年4月27日出~5月6日月) コーカサス山スキーツアー(リーダー同行)
- ★(予告)夏季特別企画(平成3年7月20日出~8月3日出) エルブルース山登頂ツアー15日間(リーダー同行)

今すぐ詳しい 資料のご請求を

11番小屋(B.C)4,200m

☎03-238-9101æ

熱射強いので要注意

慰日ソ旅行社



ニッチ

"グリーンの表紙に衣替え"

⑤ 金剛山 墓城·岩湧山

◎六甲·摩耶

63 比良連山

Ø 大峰·吉野

89 大山·蒜山

69 阿蘇山

Ø 大台ヶ原 大杉谷

59 赤目·青山 室生寺

⑤ 鈴鹿連峰 御在所·伊吹

定評ある著者陣容!

全56卷 定価各620円

※登山・ハイキングシリーズにはこれだけの仲間が揃っています。

- ① 北アルプス
- ② 立山・剣 黒部渓谷 ③ 黑部・白馬 鹿島槍

- ⑤ 槍・穂高 アルプス銀座 ② 伊豆半島 大島
- ⑥ 上高地 乘鞍岳
- ⑦ 御岳 木曽路
- ⑧ 中央アルプス
- ⑨ 南アルブス北部
- (1) 南アルブス南部
- ① 入笠山 守屋山·高遠
- (2)八ヶ岳 蓼科山
- ③ 繋ヶ峰 白樺湖・蓼科山
- (4)美ヶ原 霧ヶ峰
- ⑥ 軽井沢 妙義山
- ⑥ 浅間·菅平
- ① 志賀高原 草津白根
- 19 加賀白山 白川鄉
- ② 奥武蔵 武甲·雲取
- ② 鬼多摩 大菩薩
- ② 康秩父

- ② 陣馬·高星 秋川溪谷
- 29 丹沢山塊
- 図富士・五湖 三ッ峠
- 図 箱根 熱海·湯河原

- 28 三浦半島 鎌倉
- 29 房総半島
- 図 奥日光 奥鬼怒
- ③尾瀬 銀山湖
- 60 谷川岳
- 33 苗場·島甲 清津峡
- 図 越後三山 奥只見·巻機山
- 39 那須·塩原 鬼怒川
- 36 磐梯·吾妻 安達太良
- ③ 蔵王連峰
- 38 飯豐·朝日
- ◎ 八幡平 岩手山・駒ヶ岳
- @ 大雪山 層雲峡·然別湖
- @ 東海自然歩道 I
- № 東海自然歩道[[
- @ 東海自然歩道皿

义 星の

とカ 朗 ラ 著

1,010円

地総白 図ペ簱 ・シ史

全改訂! 日本登山図集

総集篇

第 | 線級の登山家総執筆

A4版 216頁 5色×2色 定価5,800円

書店にてごらん下さい。



地図の

本社 東京都千代田区西神田2-2-15 東京 03 (3261)5126

大阪市中央区南船場2-11-23 支店

大阪 06 (252)7421

本社の山と旅の

*定価はすべて消費税込みです。

関東百山 車窓の山旅・中央線から見える山 日の山中央線私の山旅 浅野孝一·打田鍈一·楠目高明·横山厚夫 横山厚夫 山村正光 100の山へのガイド・エッセイ A5変型判/定価1750円 A5変型判/定価1960円 A5変型判/定価1850円

展望の山旅 藤本一美·田代博 山から見る山、町から見る山 A5変型判/定価1960円

カメラの山旅ー 藤本一美·田代博 A5変型判/定価2000円 山の写真とカメラハイクにカ月ー 10ヨーロッパ・アルフス のスイス

A5変型判/定価1850円

続・展望の山旅

ブルーガイド海外版

A5変型判/定価3910円 砂三コージーランド のアラスカ

定価1150円

定価1030円

黄色いテント

田淵行男

雲取山に生きる

山登りは道草くいながら

本多勝一

A5判/定価1850円

新井信太郎 A5変型判/定価1750円

甲斐の山旅・甲州百山

富士の見える山小屋

花の山旅・日本アルプス 新妻喜永 A5変型判/定価2200円

イタリヤところどころ一、美術散歩 西本晃二 四六判/定価1650円

工藤隆雄

A5変型判/定価1900円

蜂谷緑·小俣光雄·山村正光 A5変型判/定価1900円

型ヒマラヤ・トレッキング
定価 1420円 定価1300円 定価1300円

●ご注文はもよりの書店へお願いします。品切れの場合でも、書店へご依頼になれば取り寄せてくれます。

●書店に遠<ご不便の方は小社に送料(冊数に関係な<一律210円)を加算してご送金下さればお送りします。(前金制・切手代用 〒104 東京都中央区銀座1-3-9/振替東京1-326

豊かな

生活環境を築きあげる……

(建 材)

- カーテンウォール
- サッシ・ドア
- ●改装サッシ
- ●省エネルギーサッシ
- クリーンルーム設備・関連製品
- 空気膜構造用製品
- 各種間仕切

(機器)

- ■工業用フィルター
- ●水処理装置
- 熱交換器
- フィンチューブ
- ●真空装置
- 精密金型

(電 機)

- ●電気洗濯機
- ●衣類乾燥機
- ウォータークーラ
- ●冷凍・冷蔵ショーケース
- ●各種ショーケース
- 業務用冷蔵庫
- 産業用保冷庫

幻日本建鐵株式会社

取締役相談役 早川種三 東京都千代田区大手町2-6-2 〒 100 TEL東京(03) 270-6511(大代表)



白水社

101東京都千代田区 神田小川町3-24 (電話03-291-7811)

ブナの山々

一東北の山からのメッセージー

根深 誠(日本山岳会会員/日本自然保護協会会員)

北田紘一(八幡平の葛根田ブナ原生林を守る会)典村清明(白神山地のブナ原生林を守る会事務局長)

文个了有的(白种山地V/// 水土标》) 0 云中初间D

著 深野稔生(仙台YMCA山岳会会長)

原 敬一(葉山の自然を守る会代表)

奥田 博(東北山岳写真集団/高山の原生林を守る会会員) 東北の山々にひっそり残る静謐なブナの森、「リゾート法」 がブルトーザーとともに侵入し、ブナ、水、空気、そ して人までも破壊する。東北六県の自然保護の現場か ら送る生のレポート! 四六判 定価1800円

鎌田孝一著(白神山地のブナ原生林を守る会理事長)

G 白神山地に生きる 四六判 定価1648円

菊屋奈良義著(日本自然保護協会評議員

|然にドキドキ 四六判 定価1400円

高木仁三郎著(原子力資料情報室代表)
いま自然をどうみるか

四六判 定価1700円

(各定価は税込)

「アルプ」に寄せた二十一年の軌跡! 移り住んだ土地の自然と習俗を訪ねる 故郷の思い出を語り、わが息子を連れて山に行き、

珠玉の随想集! 風景と山上に憩う精神の逍遙を見事に紡ぎ出した 永遠の蒼穹を映す氷河期の水面のような、心に映る 北原節子 著 A5判上製カバー装■定価2800円(税込 口絵写真—三宅 修・三宅 (12月中旬発売

串田孫一 著 口絵写真―三宅 修ほか

A5判上製カバー装■予価2800円

●野の鳥を背景に展開する山小屋暮しの静かな日々

呈・内容見本

第三巻

銀山

平をとりまく山々

□報 告 告

第二巻

[現代語訳]

手塚宗求 著 序文・色川大吉/写真・宮崎 学 A5判上製カバー装■定価2800円(税込)

ころぼっくる小屋経営

●山小屋に住み、花を見ては想起する人間のドラマノ

織された。

学問と産業開発の両面より、それぞれの専門家

北魚沼郡長の発企による銀山探検隊が組

明治三十四年、

手塚宗求 著

序文・串田孫一/写真・三宅 修 A5判上製カバー装■定価2800円(税込)

が第二巻。

まま復刻したのが第一巻。わかりやすい現代文にしたもの 「銀山平探検記」となって結実したのであった。これをその 三二名、案内人と人夫を含む総勢五八名。その際の記録が

第三巻には諸家の貴重な周辺登山紀行を集録。

湖底に沈んだ銀山への鎮魂となす!

文 〒101東京都千代田区三崎町3-10-10会03(238)0181

> 第 第 第

|部…湖底に眠るありし日の銀山 部…山々へのいざない 部…銀山平をとりまく山々

4

監修

小島六郎 第 巻 後

刻 版 価=28、000円(税込

銀山平探検記





MASERALL MAGAZITÉ SNA 装式ベースボール・マガジン社 〒101東京都千代田区三崎町3-10-10☎03(238)0181

の山河…

、探検記録とともに景観が甦る!

■造本・体裁

第二巻・第三巻=A4判変型上製カバー装 第一巻=背三綴り(225×153"-)マット入り

(287×2-0)。)豪華貼箱入り

よりよきテントの最高峰をめざす吉田テント!

1978年 植村直己北極点単独旅行

1978年 日本大学北極点遠征隊

1981年 植村直己冬期エベレスト登山隊

1981年 明治大学エベレスト登山隊

1981年 早稲田大学K2登山隊

1984年 第26次南極観測隊

1985年 和泉雅子北極点遠征隊

1985年 第27次南極観測隊

1987年 風間深志北極点遠征隊

1988年 日本テレビ、チョモランマ、報道隊

1989年 和泉雅子北極点遠征隊 1989年 大韓民国北極点遠征隊

OSHIDA TENT

小さな店の大きな自信!

株式会社

ヨシダテント

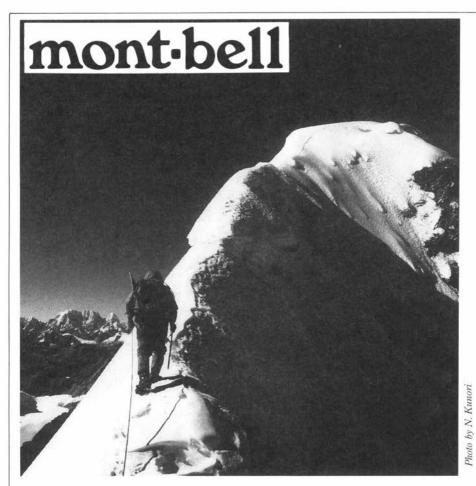
〒167 東京都杉並区桃井1-3-3 ☎03(3399)2548·FAX03(3395)4655



中川武

バッジ・タイ止・ループタイ・美術造型看板

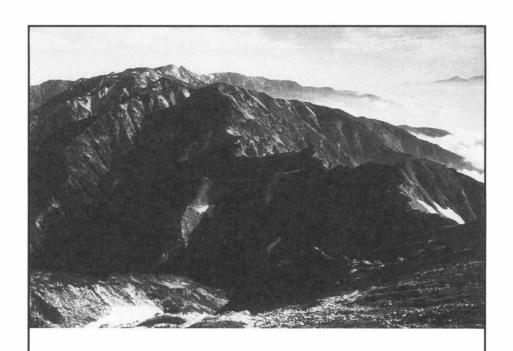
〒102 東京都干代田区1番町4 〒A X 03-262-0525



Alpine Clothing



ゼロポイントは、高所登山や極地速征用 のギア、パック、クロージングをライン ップしたエキスパートのためのブラン 私達モンベルのアルパイン クロージングは、デザイン や機能を追求し、苛酷な自 然条件下でも人間の能力を 最大限に発揮できるよう、 常に改善を加え、作り続け られているのです。



読者と自然を結んで67年!

●山登りの話題と情報を満載した月刊誌

山台溪谷

毎月15日発売/定価700円

●海外・国内の登攀活動を展望する



奇数月1日発売/定価880円

●直接購読のご案内●

「山と溪谷」一カ年分8400円(送料は無料,特大号値上げ分サービス)「岩と雪」一カ年分5280円(送料は無料,6冊)振替または現金書留で「山と溪谷○月号より」「岩と雪○号より」と指

振替または現金書留で'山と溪谷○月号より」'岩と雪○号より」と指 定のうえ住所・氏名を明記して本社営業部あてお送り下さい。



壶105 東京都港区芝大門1-1-33/☎03(436)4055•FAX03(433)4057/振替•東京8-60249



東京都千代田区神田駿河台2の1 振替 口座 東京8-24723

山稜の読書家 島田 巽 4,017円 山・人・本

島田 巽 2,472円

山なみ帖 小谷隆一 3,296円

わが登高行 上巻 3,914円 三田幸夫 下巻 4,635円

静かなる山 正編 1,751円 川崎精雄ほか 続編 1,854円

登山史の周辺 山崎安治 3,914円

登山史の発掘 山崎安治 2,575円

快晴の山 織内信彦 2,575円

森林・草原・氷河 加藤泰安 2,575円

山に忘れたパイプ 藤島敏男 3.296円

忘れえぬ山の人びと 望月達夫 1,957円

折々の川 望月達夫 1,957円

山を見る日 川崎精雄 2,987円

山は満員 渡辺公平 2,266円

すこし昔の話 初見一雄 1,236円

我がスキーシュプール 麻生武治 3,502円

北の山続編 伊藤秀五郎 2,781円

詩集山の風物誌 伊藤秀五郎 1,442円

蕗子旬抄 朝比奈菊雄 3,914円

乾いた樹氷 雨宮淳三詩集 3,296円 原野から見た山 坂本直行 4,326円

わたしの草と木の絵本 坂本直行 1,236円

雪原の足あと 画文集 坂本直行 3.914円

坂本直行 淡彩画絵はがき 2集、3集 各309円 4集 412円

山旅の足音 渡辺兵力 1,442円

ランタン紀行 エーデルワイス・クラブ 1,545円

エーデルワイスの詩 坂倉登喜子 3,914円

カンチェンジュンガ縦走 カンチェ登山隊 5.150円

ナンダ・デヴィ縦走1976 ナンダデヴィ登山隊 4,017円

マナスル1974 日本女子マナスル隊 3,502円

遙かなる未踏の尾根 日本山岳会東海支部 4,944円

グリンデルヴァルトの山案内人 ブラーヴァン 3.914円

続ブータン感傷旅行 小方全弘 1.545円

山 岳 日本山岳会 62年~81年,84年 (1989年) 2,060~3,605円 山岳総索引 1,030円

低山高蹤

神谷恭遺稿と追悼 2.987円

山ひとすじ

中村謙遺稿と追悼 3,502円

青空と輝く残雪の山々 山田、横山共著 1,339円

藤山山歴

望月、岡田共著 1,545円

日本の山登り記 木南金太郎 1,545円

(価格はいずれも税込)

ALPINE CLUB.

Menu.

La Croûte au Pot Crème Santé

Saumon, Sauce Fines Herbes

Culotte de Bœuf Braisée à l'Imperial
Pommes Macaire
Petits Pois à la Française

Bombe Glacée Pralinée

Fromage

Oddenino's for mouth Commerce of May, 1919.

編集後記

明るいものではありません。

*ヒマラヤ・アドベンチャー・トラストがいよいよ日本でも動き始
*ヒマラヤ・アドベンチャー・トラストがいよいよ日本でも動き始
*ヒマラヤ・アドベンチャー・トラストがいよいよ日本でも動き始

*ハイ・グレードのアルビニズムの話題のように派手ではありませ、ハイ・グレードのアルビニズムの話題のように派手ではありませ、おれます。調査・執筆にあたられた方々の永年のご努力に敬意を思われます。調査・執筆にあたられた方々の永年のご努力に敬意を思われます。調査・執筆にあたられた方々の永年のご努力に敬意を思われます。調査・執筆にあたられた方々の永年のご努力に敬意を思われます。調査・執筆にあたられた方々の永年のご努力に敬意を思われます。

い事情によるもので、ご了承下さい。
*継続企画で中断しているものがあります。さまざまのやむを得な

ご苦労にも感謝します。 申しあげます。前号にひきつづいてお骨折り願った編集委員諸氏の申しあげます。前号にひきつづいてお骨折り願った編集委員諸氏のをはじめ、資料、医療、図書の各委員会のご協力を得ました。御礼*今号の編集では、自然保護、高所登山研究、信濃支部(赤羽氏)

て、これにて失礼いたします。よき山登りを!*それではみなさん、次号からの「山岳」にもご支援をお願い-

大森)

山岳 第八十五年 (通巻一四三号)

九九〇年十二月一日発行

価三五〇〇円

灣日本山岳会

■話 東京二六一局四四三三番サンビュウハイツ四番町サンビュウハイツ四番町東京都千代田区四番町五―四

発行人 山田二郎 二郎

編集人 大森久雄

印刷所

株式会社

技

報

振替口座 東京八一二四七二三番電 話 東京二九一局九四四二番東京都千代田区神田駿河台二一一発売所 株式会社 茗 渓 堂

を禁じます。

A A

大好きな自然を、ゆっくりと楽しみたい

TLAS TREK



ビギナーのための冒険旅行から、未知の魅力を 秘めた国々へ、そしてエクスペディションまで、 それぞれのニーズにお応えし、新しいユニーク な手づくりの旅をコーディネイトします。

Manaslu



Everest Nanda Devi







Kangchenjunga

Qomolangma/Sagalmatha

☆格安航空券、世界各地へのパッケージツアー(ルック等)も取扱っております。

※まことに残念ですが、全ての情報はここに載せられませんので、ご要望は直接お問い合わせ下さい。 詳細パンフレットをご請求下さい。ご氏名、ご住所、お電話番号を明記し、お申込み下さい。お電話でも結構です。

類アトラストレック なんでも相談 ☎03-341-0030

〒160 東京都新宿区三栄町3番地

日本通運株式会社・東京海上火災保険株式会社代理店 運輸大臣登録一般旅行業代理店業第5084号

The Journal of
The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. 85

1990